秋田叢書
別集

菅江真澄集

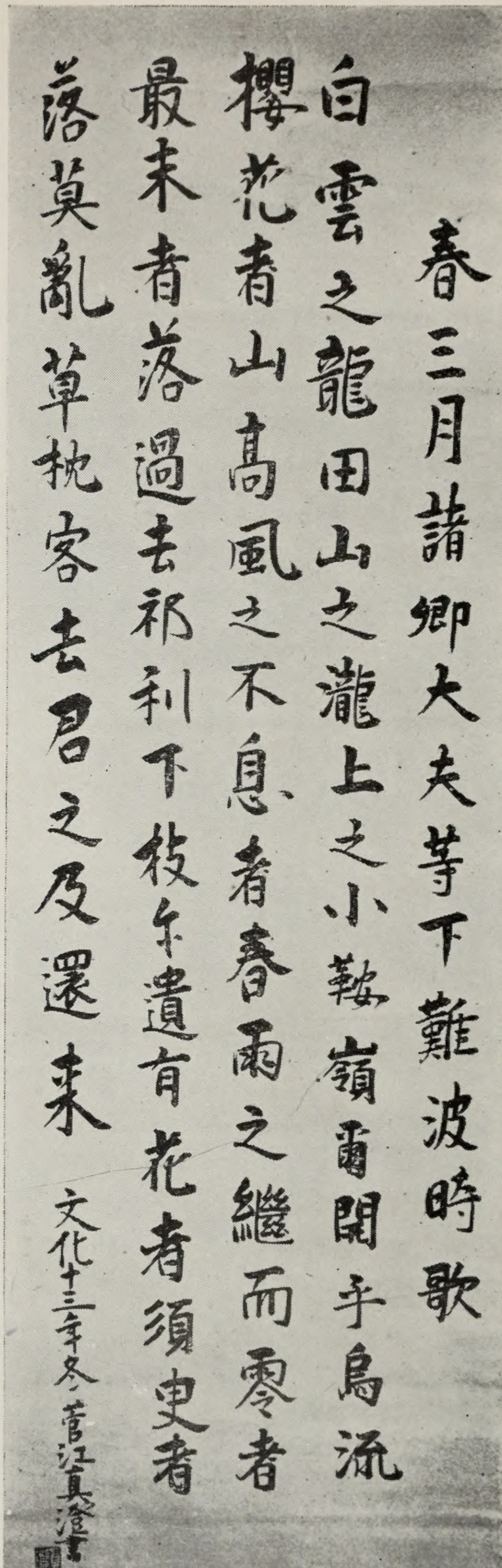
第一

菅江眞澄翁自畫像

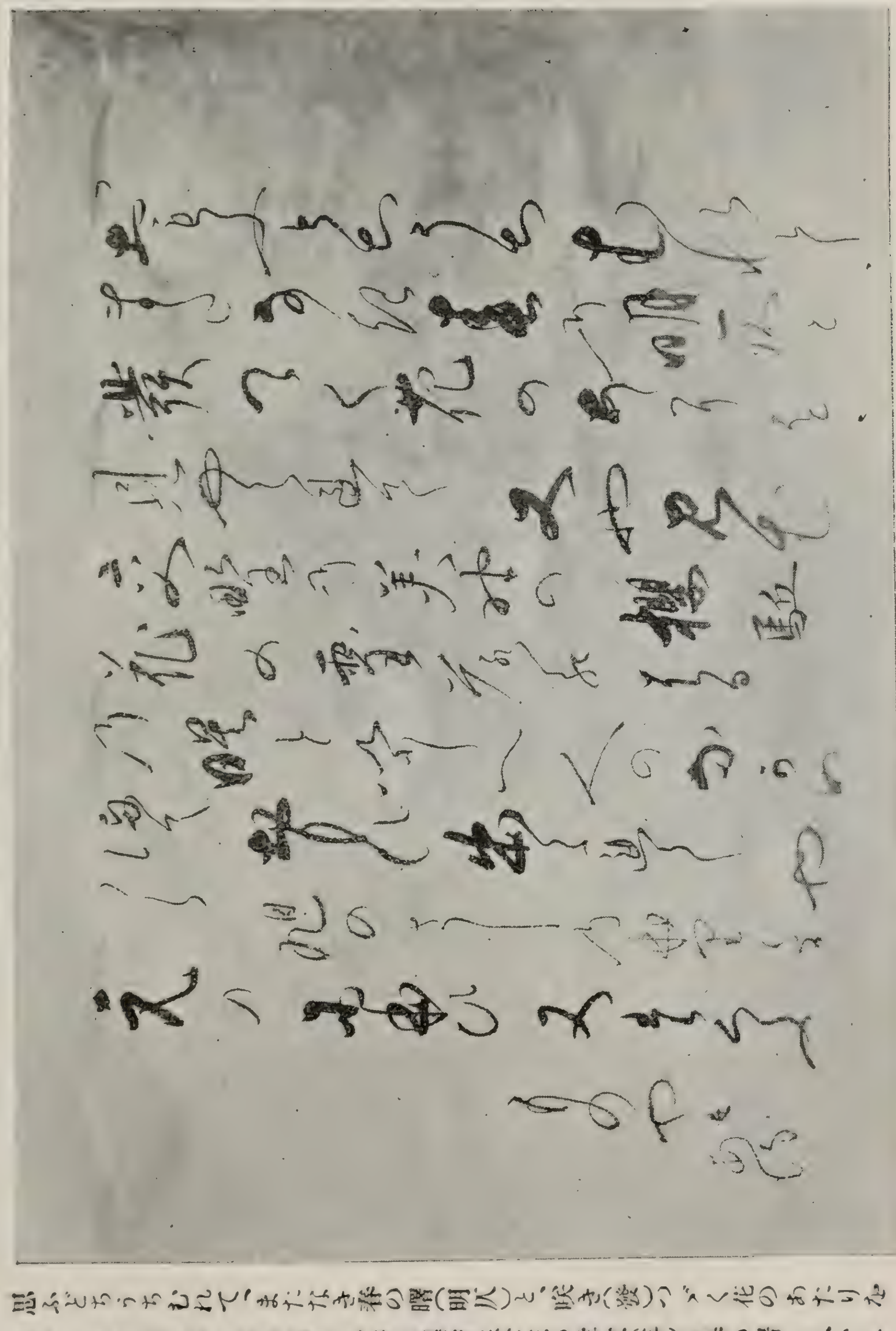


翁が秋田縣仙北郡板見内村出原氏に滯留中、其厚遇に感じて、鏡に對しながら己が像を寫生して同家に與へたものである——故午山高橋軍平氏藏

菅江眞澄翁遺墨（其一）



歌詞は萬葉集第九に收められたる讀人不知の歌である——秋田縣平鹿郡八澤木村大友武三郎氏所藏



秋田縣北秋田郡大館町栗盛敎育團所藏

思ふどちうちむれて、またなき春の曙（明仄）と、咲き（發）つゞく花のあたりを見やられて「又や見む交野のみ野の櫻狩（駈花の雪散（落）る春の曙」と、いにしへ人のながめまでおもひ出られて、やはら旭のさしのぼりたる空のにほひ、又たぐふものやはある。

卷頭言

東北地方は一般に古文獻が鮮いが、中にも、我が秋田縣地方は特に文獻の遺存するものが稀れで、殊に歷史の著錄や地誌の記述は全く缺けて居るから、鄕土を研究しようとする人々は非常に困る。然るに幸ひな事には、今より百四十六年前、天明の四年に菅江眞澄といふ旅人が我が縣地に這入つて來た。彼は實に根氣よく其の旅日記を書き續け、その中に地方の沿革、風俗、口碑傳說等を詳しく記して置いたのであつた。其の後津輕、仙臺、南部、蝦夷島に遊んだ彼は、到る處その地方の風俗、地誌等を說いた詳細なる旅日記を書き續けたが、更にまた秋田に來て、後には藩侯の委囑を受けて秋田六郡の鄕土硏究を企て、山本、秋田二郡を「花の出羽道」、河邊、仙北二郡を「月の伊底波路」、平鹿、雄勝二郡を「雪のいではぢ」と名づけ其の編纂を始め、平鹿の部十四卷を完結し、仙北の部は第二十五卷まで進行し、雄勝の部は半ば材料を揃へたまゝ、事業半ばに文政十二年七月、七十六歲で仙北郡角館町に病卒した。其の墓は南秋田郡寺內村にある。

此の菅江眞澄といふのは本人の自稱した假名であつて、本名は白井英二秀雄といひ、三河國豐橋附近の人といふ。但し其の生家や、故鄕を去つて旅に生涯を送つた動機等はまだ分明しない。斯くして翁自身に就いては案外不明の點のみ多いが、その旅行せる信州、越後及び羽州、さては津輕、南部、

仙臺、蝦夷島の一部は總じて古文獻の少ない地方丈けに、それ丈け翁の此の旅日記によりて、鄕土硏究上の、乃至地誌的な、考古學的な貴重な資料を供せられる事は莫大である。特に我が秋田縣は其の最たるものである。のみならず秋田は翁の終焉の地であるから、我々は翁に對して、他國の人、さすらひの旅人としてのみ考へる事の出來ない深大な敬慕と親しみとを禁じ得ないのである。それで昭和三年翁の百年忌に當り、墓前祭を行つて感謝の意を捧げたいとは我々同人の希望であつた。尙ほ又、此の機會に際して翁の著錄を出版したいといふ事も同人の念願であつたのである。幸ひ秋田考古會主催の下に、翁の百年祭は極めて盛大に營まれた。然し、其の著錄の刊行事業は未だ著手の運びに至らなかつた。

もと〳〵我が秋田叢書刊行會は、先づ以て翁の著錄を刊行せんとする希望を有したのみならず、その事が本會の重要目的の一でもあつたのである。此事は叢書刊行の前に、旣に幾度か新聞によりて發表宣揚した通りである。けれども、翁の著錄刊行には特殊な困難を伴ふのである。それは繪畫の非常に多い爲めで、若し又此の繪畫を除き去るとすれば、其の著錄の價値は半減するといふ結果になる。どうしても此の繪畫をも生かさねばならない。斯うした困難は、本會に對して異常な決心を要求するものであつた。幸に江湖の御聲援によつて、今第一卷の刊行を見るに至つたのは衷心より悅びに耐へない處である。同人一同庶みて翁が在天の靈に加護を祈り、且つは江湖の同情によりて此の難事業を

完了する事を得て、有終の美を濟さん事を祈る次第である。

秋田叢書刊行會

編輯同人識

昭和五年六月

編輯顧問　文學博士　喜田貞吉
石井忠利
編輯及校訂　沼田平治
細谷則理
大山順造
深澤多市
題　簽　赤星藍城
代　者　者　深澤多市
校字及印刷監督　國本善治

秋田叢書別集 菅江眞澄集第一 目次

解題

十曲湖　一巻

此の書は、古くから眞澄翁が佐竹家への獻本中にありと傳へられて居つたが、實物はなかつた。又「伊豆園茶話」に引用せる翁の著書目錄中にもない。然るに明治四十三年七月、老農石川理紀之助翁が仙北郡中を巡講せし途次にや、西明寺村齋藤高英氏の許に此の書があるを發見し、而して横手町にて謄寫したものがもとゝなつて流布されるやうになつた。既刊の「鹿角志」にも「南部叢書」にも收錄されて居るが、ともに繪は除かれて居る。

本集に收錄せるは是等の轉寫本によらず、齋藤高英氏の相續者齋藤貞一氏の厚意により、眞澄翁自筆の原本を臺本として成つたもので、繪も亦、總て該原本に挿入せる翁自筆のものを直接撮影製版したものである。此の點厚く齋藤氏に謝意を表する。

翁が十和田湖を遊覽せるは、此の紀行に月日を明記しあるに拘はらず、其の年がないので明かでない。南部叢書には、『恐らく享和二年以後、秋田領の人となつてからのものであらうと思はれる。』と書いて居る。何れ研究の進行と共に明確となるであらう。

十和田湖は今や天下の名勝地として公認せられ、國立公園に指定せらるゝの議ありと聞く。此の時に際り、百餘年以前に眞澄翁の實觀したる紀行文と、其の細密な繪とを併せて本叢書によりて公表するに至れるは、文獻保存以外にも、尙ほ深い意義を有するものでなければならぬ。

◇

恩荷奴金風　一巻

本書は、文化元年甲子八月十四日、翁が十五日の明月を八龍湖畔に賞せんとして、久保田の宿所應供寺を出發した事に筆を起して天王、船越の名所を眺め、殊に天王の神事を丹念に描いて居る。斯くて寒風山の雄姿を望みつゝ涌元村に入り、此の二十五日には金川の羽立に到著して、更に船川を經て赤神山日積寺に參詣し、漢武帝の故事や秦徐福の事などを遙かに追想した。そこから引き返して拂戸村、福米澤村を過ぎ、九月二十一日には能代湊町の醫師照井象賢の庭の菊を賞でゝ居る。此の日記は、此の年の冬能代にありて記したる旨を序に記して居る。翁此の年五十一歳。

恩荷能春風　一巻

文化七年庚午三月、五城目なる谷地中を出て能代に入り、更に葦埼を經て、雄鹿の浦つたひして赤

神山に登り眞山光飯寺に詣つ。尋で三の目潟や十文字野の碑などを探り、阿倍兼季の舊城跡を語り、五月中旬北浦に出づるまでの紀行文である。五十七歳の年である。

小鹿の鈴風　一卷

前書に續く日記で、此の年の五月北浦を出發して、處々の山田に聞ゆる田植歌や五月飯の俗習などに興を惹かれ、北畠の浦に到つては玄慧法印を偲ぶ事良久しく、鹽戸の浦に日を經て宮嶋などの奇景を圖し、斯くて七月中旬に至るまでの日記である。

牡鹿の嶋風　一卷

同年七月、鹽戸の浦を出て加茂、青砂の風光を賞し、更に島巡りして大棧橋、小棧橋の奇巖に興じつゝ潮瀨より赤神、赤城の靈窟を探り、處々の風景、土俗等を寫しつゝ門前村に宿るまでの紀行文である。

牡鹿乃寒かぜ　一卷

前書についで七月十八日門前村を立ち、九月二十七日には脇本村の邊にて大地震に遭ふ。茲で大地

震前後の情感を描寫し、更に寒風山の東麓を廻つて此の年を送り、翌文化八年正月には色々と男鹿の土俗を探り、殊に生身剝の奇習を寫し、二月朔の記を以て今の潟西村の邊に筆を擱く。

以上五册の男鹿紀行錄の自筆原本は、今佐竹侯爵家に珍藏されて居る。本集に收錄したものは、侯爵家の御厚志に依つて、各その原本に據つたものである。

男鹿半島の風景雄大なることは夙に天下に知られて居る。古來其の風景を敍述し描寫したる文人墨客も少くない。眞澄翁も今より百餘年前此の地に遊び、天來の靈筆を以て文に繪に、之を揮灑して此の五卷となしたものである。若し本卷を繙いて男鹿に遊ばゝ、蓋し得る處甚大なるものあるべし。豈只萬丈の巖頭に踞して大洋を望み、幽邃の靈窟に龍腮を撫するの壯快のみならんや。

昭和五年六月　　編輯同人

凡例

一　本卷に輯錄した六種の遊覽紀行文は全部眞澄翁自筆の原本を臺本とし、尙校正の時も一々該原本と嚴密な對校を經たものである。挿繪も勿論、右原本所載の、翁の自筆になる畫を其まゝ撮影したものである。

一　各書の題號は原本表紙の題簽に據つた。表紙題簽の失なはれたものは序文、又は本文中に明記された其書の題號を用ひた。此の場合、表紙の題號とは用字に於て相違して居るのが普通のやうであるが、これも亦已むを得ない事である。

一　中扉の次に挿入した寫眞は各原本の表紙、及び內容の一部である。「十曲湖」の題簽は極く薄い杉の板を用ひて居る。「恩荷奴金風」「恩荷能春風」「牡鹿乃寒かぜ」の表紙は蕗摺である。共に、如何にも眞澄らしい意匠である。「小鹿の鈴風」「牡鹿の嶋風」は表紙が剝脫して居るので、前書は序文を、後書は本文の第一頁を顯はした。

一　本文欄外の小標題は、地名、人名、傳說、土俗、方言、其他の記事を探索する上に便利な樣に、適宜編者に於て揭記したもので勿論原本には無い。唯編者の不明が、此の小標題の妥當を失して著者菅江翁の原意を害ね、又讀者に對して御迷惑を及ぼすなきやを懼るものである。冀くは讀者諸氏

の御垂示に依つて、再版の節に萬全を期したいと思ふ。尚ほ原本の頭註は、これに一々「天註」と附記して該當箇處の本文中に挿入した。

一　前記の外、體裁は出來る丈け原本の儘にと努めたが、然し日附は、原本の追込みになつて居る處も全部別行とした。

一　原本の句讀點は非常に多い處もあり、全く用ひない處もあり區々であるが、これは編者に於て適宜整理したものである。のみならず、假名の連續に依つて容易に意味の解し難いと思はれる場合、古語や俗語、方言等を用ひた爲めに紛らはしい意味を生じ易いと思はれる場合、其外老婆心ながら、多過ぎる程の句讀點を用ひた場合も少くない。此點も讀者諸氏の御諒承を願ひたい。

一　漢字は非常に廣汎に多種多様の字を驅使して居る。口繪第三頁の「明仄(曙)」「發(咲)つゝく」「櫻駈(狩)」「落(散)る」等の如く、類似音のもの、或は意味の類似したものを用ひた場合が非常に多い。殊に名詞、及び地名にさへ此種の用法が多いので私達を當惑させる。例へば土崎の崎を碕、埼、㟢、岬等も記し、稲荷を稲成、稲生、飯形など、諏訪を諏方、須和、栖羽、洲輪など、不動を無動などもあるの類で、これ等は全部原本の儘に殘した。一體、翁は同字を繰返して用ふる事を好まないらしい。で、「谷地中」が次の行には「屋池仲」とあつて私達を面喰はしたりする類は非常に多い。

一　假名の同字が重つた場合も「ゝ」を用ひない事が多いが、其場合同型の假名は決して重ねない。必

らず一方には變體假名が用ひられて居る。本書に於て變體假名は襲用しないが、唯「ゝ」を用ひた場合と否とは原本に從つた。

一　翁の字に誤りもある。丈(丈)步(歩)頼(頼)賊(賊)恊(協)等の類は、筆記に於ては特に問題とすべき程のものではないだらうが、綱(綱)佀(侶)祇(祇)姫(姫)筯(筋)霄、宵(宵)等の誤用や、戌、戍、戊及び己、已、巳の混用の類は訂正し、其他賓(賓)茡(苧)𠮟(叫)杇(朽)穀、穀(穀)邉(邊)等の類は、俗用及俗字の類で全くの誤りではないが、これを括弧内に訂正した。又嚴密に原本の字を襲用したものは綿と緜、岡と崗、畫と画、劍と劔、草と艸、稻と禾、語と話、巖と嵒と岩等の類である。

一　尙は眞澄翁獨特の用法に依つたものもある。又翁の造字もある。これは誤用であり誤字であるに相違ないが、然し、決して捨てられないものである。それは嵩(たけ)、汻(なぎ)、嵮(いたゞき)、澳(おき)等の類で、「䶩(ぢい)」も姥から考へついたであらう造字である。これ等は皆原形の儘を保存した。

一　「亊」は事、異、毎、殊、言等の外に、琴、今年(とし)、誠(まこと)、尊(みこと)等殆んど凡ゆる場合の「こと」と續く箇所に適用して居るが、これは一樣に假名の「こと」に訂正した。

一　又、翁はアイヌ語を盛に引用する。「蝦夷迺天布利」には夷語の自作歌がある位だ。「ナイは澤の夷語で……」と、翁の記錄には隨所に見られる。處で、「十曲湖」の漢詩の作者に「毛馬澤爲憲」、同書銚子瀧の漢詩作者に「毛馬皐爲憲」とある。皐は澤と同義同音の場合がある。澤は夷語の「ナイ」であ

る。で、毛馬澤も毛馬皐も等しく毛馬內を現はしたもので、毛馬澤、毛馬皐と、「內」に代へて澤、皐を記したのは翁に相違ない。これは可成り特異な例であるが、翁の文章には時々此種のものが見られる。

一　振假名は原本通りで、故らに增減は加へない。唯原本の振假名は全部片假名であるが、アイヌ語と神名の外はこれを平假名に替へ、假名遣はもとの儘に殘した。

一　濁點の有無も專ら原本に據つたが、原本には、連濁の場合は特に漢字に濁點を施してある場合が往々ある。しかし、これは踏襲しない。

一　以上は極く大要を述べたに過ぎない。特に漢字の取扱ひに就ては僅かの例を擧げたのみで、却て誤解を招く虞がありはせぬかとも思はれるが、今の場合寔に已むを得ない事である。何卒御諒察を乞ふ。尙ほ續刊のものも、總て此の例に準ずるものである事を御承知願ひたい。

十曲湖

道の奥の國五戸の郡十曲の湖に三熊の神をうつし、また難藏法師のみたまを青龍權現と齋ふ。この山にまうづるに、鹿角の縣毛布の郡の人は白澤越へせり。これを萱埜峠峁（はっか）といふ。いたりてはかつのはつかといふ。五戸の郡より根の口とて奥瀬の源にいたる路あり。すち〳〵いと多し。狹布の郡の坑山を經ていたるなかめことによけん。熊野の御祠のしりよりめぐりて、わら履ぬぎかへ、ふみあらたむる處あたりに、地藏尊のみかたしろとおほしくて、石をきさみたるは難藏のすかたをうつせり。そのほとりの木々に、天燈くだり龍燈のぼるといふ。うへも西湖中飛聖火懸照樹上如燈火と、西湖游覽志といふふみにいへり。

毛馬内より十和田へ

志留祁河

小袖が澤

武田舊館址

葉月のこよひ、いつこにふしまちの月は見てむ。十和田やまにかねてのほらまくおもひしかは、さちにいさなへる人のありて毛馬内をたちて、里のはしよりめてにさし出たる埼あり、湯坂といふ。そこにむかし溫濤(でゆ)のありたりしか、なへにふり埋れて絕へうせ、いまの大湯の泉涌出たりし物話のあり。そのころよりや湯田の堰の名に流れて、今もしかりと。志留祁河を渡る。此川上はふたせの水にして、川くまにむかし長者の舘ありて、朝飯夕飯の鍋の數あらふに、いつも水のさゝ濁りて、汁氣あるてふことよりいひそめたる名也。水上に長者窪とて村そありける。又河をへたてゝあらそひし世に、手裡劔うちやりしをもて川の名におへりともいひあらかへり。向ふ坂にのほりて、めてに見やるを小袖か澤といふ。かの長者の世に住み榮へつるとき、いろ〳〵のきぬともを、ところせきまて掛ほしたるか、木々の花、紅葉と日に照りかゝよふを、木こり、艸かりらも見あさむまで、めをおさろかしたるとか。坂本より兵助稻荷の森のあたりまでを西町とて、武田由岐衣のかまへられし舊舘の址

あり。こは慶長のころほひ、三戸の君にくたりたりしむかしかたりを聞しは、このあたりのことにこそあなれ。みな田畠となれと、なにくれといふ字に殘りぬ。萬谷（まんや）、荒川のやかたを弓手になして、牛馬（うしま）長根の尾ひとつ越れは彌五兵衛初立（はたち）といふ村あり。武田の館ありしころは、西町の檢斷たりしその人こゝに來り、田畑作りて、きうそうもひろうさかへて、しか村とはなりて、今はもはらうしまながねと山の名をよべり。子坂村をへて鳥越といふやかたあり。

病を避る禱

家の門ことに注連を張り、あるは地獄茨といふものを引はへ、葦の長根をもひき渡して皂角子、くれのをもさしそへて、はた芻靈（くさひこかた）をさゝやかにふたつ作りて、つるきをもたせ、蕃椒を角とし、めおの鬼となすらへ、疫癘（えのやまふ）を避るのはらひつものにこそ。

門のとにうはらあしなはひきはへてえやはゑやみの神や入へき。

和田たれとかいふやとに日高うついて、人をまちて夕つかたになりぬ。

ねくらとふ秋のむら鳥越へ渡る羽風にはるゝ峯のうす霧。

かくてこのもとに泊りぬ。

高寺山

二十日。つとめて、こゝにて會ひなんと契りおける松尾なにかし來けり。さらはとて屋戸を出づ。高寺山の麓に、大なる櫻の立おほひて馬櫪神のほぐらあり。此山の岨に千手觀世音の堂たてり。それにも櫻のいや茂れり。いつらも花のよけんと。花輪の里近きに花軒と

牧野平

尾垂邊山

七瀧の明神

いふ村のあり。そこにも高寺とて、山のさまもことならすして、おなし名の、おなし山のあるよしを行人のかたる。石つみの社あり、幸の神といふ。

さちいのる陸の神に幣とれは袖にこほるゝ木々のしたつゆ。

朱鷺といふ村の妻手に見へたり。弓手に杜あり、馬櫪神を祭る。としふる多茂木のうれはみな枯れくちて、ことに木も大らかのむらたちなり。乾の方に牧野平といふあり。武田の舘在りしとき、遠つおやより馬あまたはなちて、奥の十三牧のひとつ。今は九牧十二野といふ。この藤原の牧ありつるゆへ、しか馬の神を正徳、明應のころや建りとなん。その馬や野飼せし牛を、高岡にのほりて一めに見渡せる處とて、越へ來し山をうしうまなかねとはいふとなん。やゝ祖神（馬の神をいふ）平をへて、雨土平よりひたんに於多流弊といふ山のつと峙へたり。ときとをやまの赤銅、尾垂邊山の赤銅とて、もゝとせのむかしは、ほり得しなと牛追ふ子らかいふ。山坂下りて藤原といふ村のあり。こゝをいさゝかゆけば、みちよりはめてに近う杉のいや生ひ茂れる中に、七級におつる瀧あり。麓に七瀧明神といふ神のおましませり。みねを長瀧山とて觀世音の堂あり。村もむかしはありつるよし。その七瀧の神は、おほひなるをろちにてすめるとなん。此嶺に鷹居場といふ處あり。火碌石を產す。文理ありてよき白玉なり。瀧はいとおもしろし。

春はさそおちも寄りなんいやたかき花の藤原はなのたきなみ。
生ひしける山のふちはらいはかねにまつはりかゝる瀧のしら糸。

行〳〵て鷹ノ巣の平あり。横羽の茂りといふになりて弓手の溪深く、砂子澤といふやかたのふたつ、川のべに見へたり。

城が倉

この山川をしはしさかのほれば、城か倉とて、高き巖の左右の川ぎしに峙へたてり。將軍義家、そこにたむろさせたまひつといひ傳ふ。

熊坂の展望

熊坂の峠に休らへば、南に岩手山、乾に津刈の郡の岩樹山、坤に出羽の杜良山など、八重の高山を越へて雲の中に、それかあらぬかとそあらはれたる。德兵衞平といふ處をへて、七本夜須といふも過て、しけり〳〵てふ處を十一茂りへて、級の木長嶺に至りぬれば、十和田の湖のいとよくそ見やられたる。小國千町、十和田千町とて、世にもともまれなる眞木のたつあら山中なり。したつかたに、湖の磯山近く鉛ふく坑場あり。

湖面の島々

水海の面には大鞍嶋とて、形はしつくらに似ていと大に、鯨の潮にうけるがごとく、それに連りて茜か碕あり。まはにの赤きてふことを忌るのりとて、色ある山ともはらいふ。そか前に中嶋とて、間離か嶋を、しほかまの浦なる寺の砌よりのそみ見たらんにいやまされり。胄嶋、果報島、又の名を戎嶋ともいふか、鴛鴦の浮ひたらんやうに、なへて島〳〵には五葉の松、もみ、いたや、さくらなとひし〳〵と生ひましりたりといふか、はや木々の梢けしきはみて、はつしほめける色のいふべうもあらぬなかめ

なり。御門松とて鴉鳥の大さに、はる〳〵と遠沖にふたつみつ、波うちかくろひたゝよへる嶋の見へたり。九曲おりはてて、松尾のはらから小笠原なとかたらひ、駒か嶺政福のともらひに入てかたりくれたり。高坂より臨たらんさは、けしきも又ことかはりて見ところ多し。

三四日雨にふりこめられて、けふなん、とに出れば礒をうすつき、石かね碎音の聞へたり。

草節鉛

青金は草節鉛とやいはん。いとよげにそ見へたる。

稲荷山にて

廿六日。湖のきしに在る稲荷山にのほれば、ひんかしに鎧嶋あり。茜か埼もおなし。艮に大倉嶋、辰にくはほうしま、寅に御門松、戸來嶽はいと高う辰にあたりて山〳〵しけし。わきておもしろかりけるは此島ともにして、茜箇碕ことにあやし。

　花紅葉えやは及はんちりやらてとはに色ある山の明くれ。

時うつるまて見やりぬ。

石膏、山皂莢、あけび

はつかまり九日。ふりつゝくこのころの雨も、けふなんはれて空のいとよけなれは、かねほる子らかあないして、巨滿賀禰なにかしとともに大倉のやとりを出つ。山に石膏あり、理石にたくへんものか。あし引の山橘の實よりも赤きか、なにくれともみづる梢にましりぬ。山皂莢といふ。闌天竹にや。出様珊瑚のいと多ければ、かつらをたぐり、このれをよち、枝

をたはめて採りくふほどに雨のふりくれば、猿か岬といふ處にかけ渡したる杣家戸といふに入て、此雨はるゝをやまたんと休らへは、木の實むれはむ猿のこゝかしこに聞へたり。

　つま木こるをのか名たゝる山ふかく木々にあさるの聲かすかなり。

いさゝかの晴れまを得て、湖のへたのみをつたひ山にのほり、ふし木を渡り、いはかねをたとりて抱回の崎を經て、

鹿角破欠

鹿角破欠といふ處になりて木の中に鳥居の建り。大湯の里をへて白澤越へする人は、此筋よりこゝに至り散供うちして、うけひきたまふや、たまはぬやのうらひせる淵あり。

鹿角海

奥の海、中の海、鹿角海とて、おなし水海を島〳〵にへたてられ、曲にへだてられて、しか三の名そありける。こゝを鹿角海とて、しほ瀬見たらんにひとしう海の面のいとひろく、むかふ岸、末しら雲と霧とにへたてられて見へす。

　ふりしきる雨にをくらく水海のそことなかめも波のうき霧。

しはしのほとに、さと晴れ渡るけしきことなり。

　つまこふる小鹿の角のつかのまも海のなかめのえやはすつへき。

桂平

中の平といふ處をわけて、桂平とて、いや高き桂のいくちもとといふことをしらす、行末のはる〳〵しうこかねの色に染わたし、風かくはしう吹渡り、はら〳〵と散りかゝる風情ことに、たくふかたやはある。

休屋

解除川

難藏法師の傳説

雲と見し桂の林紅葉して月も色ある山にすむらし。

休屋とて、夏のころ人あまたまうづるときは、こゝらの人こゝにまろねし、あるはいもゐにこもれるなど、あつきわり板葺きに、大なるやすの木の皮もて壁しろさし、間廣げに作りて、三四そ草の中にならひたる。細くよこたふ流れを解除川とて、手あらひくちそゝき、身もきよまはりぬ。五七戸よりの道あり。そのすち〳〵の口には、くろ木もて作れる鷄栖を數しらず立かさね、こなたの杉むらの數の神門を入りて、このなみたつ榾の下路もへて堂あり。青龍大權現といふ額あり。此そひらに六の小祠あり、六はしらのかんたちを齋ふ。むかし、みかしほのはりまの國なる書寫山の麓に、ほくゑ經をあけくれすんしける法の師あり。名を難藏といふ。いつまでもながらふ命ありて慈尊の御世にあひ奉らまく、泊瀬寺にこもりひたいのりに經よみしかは、常陸の國と出羽の國とのあはひに水湖あり、それにいたれと。こや、陸奥と常陸とを、三國傳記といふふみにはかいあやまれり。まさしき夢の、みさがのあるにまかせて水海のへたにいたり、ひたふるにほくゑ經を、くひ物をたちてよみしをりから、かたはらの石の上にかほよき女の來て、この經を聽くことひねもす夜もすからなり。難藏おもふに、わかおほひなる願ひをさまたげなんと、あやしの姫のいで來てわざはひをなすにこそあらめと、めもふれすしてみときやうにたましひをこめて、身しろきもせず心

つゆもみたれず行ふを、しはしさて女のいふやう。やつかれは、この水にすむをろちなり。あはれねがはくば、そこにいてましして經よみたうひてと。法師おもふに、われ觀音薩陲のをしへのまに〳〵此湖にいたりて、此女におちんや。又これもをしへにやと、こゝろつよさもたゆみけるいろを見て女の又いふ。この湖に八頭の蛇、そのたけ八ひろにあまれるが、やつかれを妾としてすめること久し。まさに今に來なん。おひやかし追ひやらひたうひてよ。わは、君に身をまかせてこゝにすままく、といふ。法師、そのをろちのいくはくのちからあるとも、吾か賴むみほとけのちから、のりのちからをそへたうびなば、なしかは我に及んと、八まきのみのりをかうへにいたゝき、あめつちををろがみ、待つるほどに大濤の中にあらはれ、まかゞろく、いろこをさかだて、齒を鳴らしてひとのみにしてんとよりく。難藏たちまち九頭のをろちと身をかへて、はたひろと化り、十曲にわたかまりて居たり。かくてためらひ、左右より喰ひかゝり嚙あひ、牛の吼る聲して山谷にひゞきとよめき、かんときするがごとく、ふたつのをろちの眼のかゝよふ光は、電のさと照れるかことし。さはかりひろき水の面も血の海と染渡り、岩根木の末も、ほとばしる血にあやなしたり。さりければ、今し世かけて朱なるをきらふ山ののりあり。八頭のをろち、すべなうにけいなんとすれば、その水尾に大松の生ひふたがりて尙たゝかふ。かくて八頭のをろち、からうして鬩田の湖に

一說南草坊

またぎ八郎太郎

しそきぬとなんいひ傳ふ。御門松とて、遠き洋べにちいさき嶋の二三見ゆ。これや、その生ひふたかりし松にこそあらめ。その島のあたりへは、筏士もゆめのることあたはじとなん。三國傳記には猶つはらにそかゝれたる。この鹿角の里にいふ、南草坊とて、吾田多良山のほとりより出て都にすきやうし、みろくぶちの出ませる世を經まくつねにおもひ、三熊野にこもり、まさしき夢のさとしありて、百足のわらのふみものゝ、やりたらんこころに栖むへしと。かくて、淤久世山の湖にいたりて履のふみつきたりしかば、こゝそわかすむへかりける處とてをれり。それよりさきつむかしに、草城の庄柴内の鄕に八郎太郎といふ級剣あり。（天註――むかし田獵を禁制しける山に、しのびしのびに入て狩りしけるを木こり、級の皮剝ぎすとこたへぬ。さりけるときよりも狩人をなべてまだはぎといふ。万多波起のはぶき詞そ滿太企なる。後の世に又鬼ともかいなせり。みちのおく、いてはの人、級(しな)をよびてまだといひ、狩人をもはらまたぎとそいひならせる）人とともに奥瀨山に入ぬ。こゝ人はひねもす獵にありき、我ひとりのみ木こり、飯かしくを事として、湖にいたりて水汲むに、春日に解る氷のひまに、岩魚といふ魚の大なるか二三鰭ふり居たるを、ほしさにくひて、うまさ物に似す。いてとて、殘りつる二も、とり來てあぶりくらひぬ。かくて身は、おきのゐて燒かごとにのんど燥て、笥の水もひたに飲みつくせと、さらにかはきやむへうもあらねば、汀にのそみてたゝのみにのみてのちは、身の大にいと重く、心つねならず躋りたるを、獵師等の皈り來て見おとろきて、こはいかに誰ぞとこふ。八郎太郎なり。いかゞして身はしかり、こゝちはいかに

倚異説南藏

靑龍權現

おほゆるぞ、ものにあひつるかとゝへば、なみたをはら〳〵となかしてしか〳〵のよし。われかゝらば、人にいてまぢらはんことかたし。親、つま、はらからにも、かく身のなりゆきをかたり聞せたへ。この蓑笠を記念のしるしとて投やり、今を世のかきりなりといひ捨て高岸よりとひ入て、はるかなる沖に風たち波起りて、獅子頭のことなる八の頭をもたげて、又木等に名殘とてあらはれてしづみ、湖は泙たりとなん。形見の螻羽蓑てふものは、やれくちて、その家の末の子かもてりといふ。亦三戸の郡科町の龍現寺のほとりに、大滿坊といふそみかくだあり。きの熊野へ、三十まり三たびのまうでしてとしころのねかひもみちて、名を南藏とあらためしよしもいひ、あるは杜岡の鄕なる永福寺の僧侶、いまだこの寺の五戸郡に在たりしときのことゝなん（天註——森岡の盛岡寶山永福寺は新儀の眞言にて、大和の國初瀨の小池坊の流れにて、むかしは五戸の七崎よりうつせり。いまも永福寺村といひ、そこに觀世音の堂あり。これを永福寺ともいへり。）、まち〳〵にいへり。南僧をろちと化り、八郎太郎を追ひしぞけて此湖のあるじとなりて、今は靑龍權現とあかめ奉りては、あらぶるこゝろのましまさず、靈驗揭焉なることのみぞ多かりける。ねかひある人は、さゝやかに劔を鍛せて奉り、わらんしをはしめ、なへてのふみものをちいさやかにくろがねにて作りて、堂のめぐりにあまたおけり。人々、蠟燭にみあかしして奉り、いやしぬかづく。春の土用より夏の土用をかけて、奥瀨の村なる別當とて、奥瀨藏人なにかしに仕ふ折枝要右衛門といふ人こゝにいもゐして、みな月の

七の忌言葉　願かけの松　散供打　紙線散供

十五日は、うはそこ集ひ祭りすとなん。この十曲の湖の神にまうづるに、七の忌辭あり。舟を木欖といひ、柴を小木といひ、茜をいろあるといひ、長きをのべたといひ、丹砂の山をくろ山、くろだけ、くろくらなどいひ、八をばやつと呼び、蛇を尾すびりといふ。舟を入なんことをいめり。船木こるも、丸木舟作るもきつといひなし、八郎、柴内に生れしとて柴をいはず、茜か崎は色ある山、鰻鱺魚の七尋八尋なるもすめれは、長きといふもゆめ〳〵いはす。かくて奥の院といふ處にいたる。石に倶利佉羅明王をきざみて建り。こゝより湖をのそめは、ふかさいくそはくならん、つと高うさし出たる岩の上に、五葉のとしふる松の立たり。下つ枝を、左の手して左にわがねぬれば、おもふおもひのかなふとて、みなむすひからしぬ。木の根にすがりてましらのつたふやうに、さばかり深きところにからくしておりはてゝ、石たゝみのこときふし岩の上に居ならひて、散供打とて錢米を紙につゝみ、こゝろに神をいたゝきまつりふたりと投るに、うけひきたまふは、つとみなそこにひき入るやうにしつみ、うけたまはぬは、いとおもけなるも、さゝなみにいさなはれて沖に浮き出つ。紙線散供とて紙よりをして、つとねんしうち入るゝに、此かうよりの、きとうち立てしつむことすみやかなり。ねかふことかなはぬは、いくたひもうき流ぬ。これもて、なにくれとうらひして、おなし木の根を力とよちのほり得て、こたひはめてにことみちをわけて、これは何神、かれは風

果報島

葉廣の紅葉

休屋の一夜

山言葉

穴と、多かる窟ここに名をおふせていへり。こゝをやはら過て白洲の磯回にいづ。いと近う恵美須嶋、大黒嶋とてならひつらなる。これに錢を投やり島に入れは、果報さづくことてひたうちにうちぬ。さりければ果寶嶋の名もありき。嶋に剔牙松むら〳〵と生ひ、かにはさくらのやゝ紅葉して、めてにこゝをいさゝか離れて、鎧嶋、兜島なとおしならひたるは、画なと見るにひとし。此あたりは中嶋とて、遠きなかめには、はなたの帯を引たるやうに見へたれと、島にかく入ては、そのすかたともおもほへず。靈椹、雁翅檜、淡伯、石闘椽、交讓木なとの中に、葉ひろといふ木のもみちは、蛙手もえやはをよふへき。淺き山よりは木々の色いとをそしなどなかめたゝすみ、いろこきぐみを袖にこき入など日のやゝおちぬれは、休屋に、菌探るを業ひとして近き麓の村より來宿り、夜をかさねてあれば、はや山より皈來ん、そこに行てこよひは明なんとやすみ屋になりて、けふりたつ軒をたつねてとへば、人々みな相知れる山賤らにて、よねあり、みそ、しほもてり。いざ解てやとりねとて、めやすげにいへば、くつぬきやりて飯かしぎ、をのれらが採り得たる丁蕈、天花蕈などを烹て、巨多太起、加起刀利と聞しらぬ詞あり。これも忌たるすちにやとおもへば、此茸採どものおもの業には、雪つもれば山に獵して熊、獼猴、山羊をうつ又鬼らにて、それらがつかふ山詞といふものにて、汁匙をこだゝき、飯匙をかつとりとぞいひける。夜もすがら、香蕈を級の皮につらぬい

てかけあぶりぬ。ふしなんと、わらのかますてふものを枕とし、布もて、いと重くあつ〳〵とさしたる裯といふものを借りきて、みや木のやうなるたき木をつみ重ね焚すてて寐たり。いとませばき舍なれは、火のみちて寒さ露もしらすて、やゝとはしらみぬ。

休屋を出て

三十日。つとめて、とみなることとて、ありつる茸かり人も麓へ行とて、みなとも出たつ。夜經の雨に軒の雫いとふかし。門の柱にかいつく。

あるじなき宿のわかれもしかすかに袖こそぬらせ軒のしたつゆ。

桂堆(かつらたひ)もやゝなから斗分いてて、ゆみての坡(ひら)の、まはにあるを黒倉といみ詞にとなへつゝ、鹿角味峁(つのはつか)になりて淵にのぞみて、又かうよりうちそせりける。けふの空こゝちよけに晴れて、根の口の山もはつかの雲もなう、世牟多南、花部山(はなぶやま)のうへに、津輕の郡にさかふ耕田の嶽、これや黄金花咲く小田なる山もいと近う、岫のいやかさなりて、濤とつらなれるは湖のはてにや。

湖水の動物

この水に田螺(たにし)、大蟹多く、鰻鱺は七ひろ八ひろにあまりて蛇魚てふものにや。鯢魚、鯿魚あり。はた四尋、五尋の身の色藍色、腹赤き、形は地壥虫(ゐもり)のごときもの、をりとしては背をもたけぬるは鯨のごとし。龍䲈魚にや、監龍とやいへらんものか。冬は湖のいつもなから斗氷るを、またぎら、かちぎひき渡るに、形は海狗のごとく黒毛生たる、犬よりも大にして、さいたつ犬を追ひ來るを火箭して頭を射たれば、つとみなそこに入ぬとなん。いかなる獸

月夜蕈　湖の周圍　山都　大倉の本山

にや。水の面に、船の通ひたらんあとなる舟筋のやうに見へたるは、もの丶行たるあとゝそおほゆる。うなぎ、龍蟠魚のおほきやかなるが、いくらもうきありくにや。ふし木、立木の朽たるに鹿皮茵（かのかはたけ）、剝蕈（むきたけ）、味蕈（あぢたけ／しなたけ）のなかに、月夜蕈とていと大にひし〳〵と生ひたり。こは毒の多かるものにこそあなれ。高きによちて遠かたを見やれは、卯の方に松倉山、血柏（おつこ）が岳、巽に打破（ぶつこはれ）澤の女鯉（めこひ）瀧、五十曲山の白絲の瀧、根の口の瀧、白澤の瀧なといふおもしろき處あり、三本ッ楓樹（いたや）てふあやしき山ありきなと、なへて此湖をおしめぐらば、三四日、山泊してゆかざれば行ことあたはじ。もとも、さかしき山のみちたにもあらじ。山都なともすめるにや。十とせのむかしならん、獦人（またぎ）、犬を引ていたり、雪の中に大窾のあるを穴熊ありとよろこび、まつ犬を追ひ入れば、此犬身をふるはしてとに迯けいづ。こは熊にてはあらし、こともの丶すむならんと、木を伐り籠てふものを組みてふたぎ、烟をくゆらしければ、熊の大さなる山猫といふもの丶いて來しを、鉾（たて）してつきとめたることあり。見たりし人は、身の毛もいよたちたりしなと語りつ丶、かへさの道はいとはやく、御門桂とて、としふりたてるその大木ある坂中にた丶すみて、遠近なかめ渡して、

しら雲もみねも百重の水遠くめくるとわたの海のひろけん。

かくて大倉の本山といふ坑場につきたり。こ丶なる縣の人々、あるは、こと國の人となさ

のふしおけるくしのながめも、むかしよりいと多しときけど、いまたしらす。聞しるそのあらましをひたんにのす。

十曲湖　　　　毛馬澤　爲憲

白雲繚繞萬重山　碧水浸空月影閑　請見青龍頷下璧
天燈競照赤山間。

其二

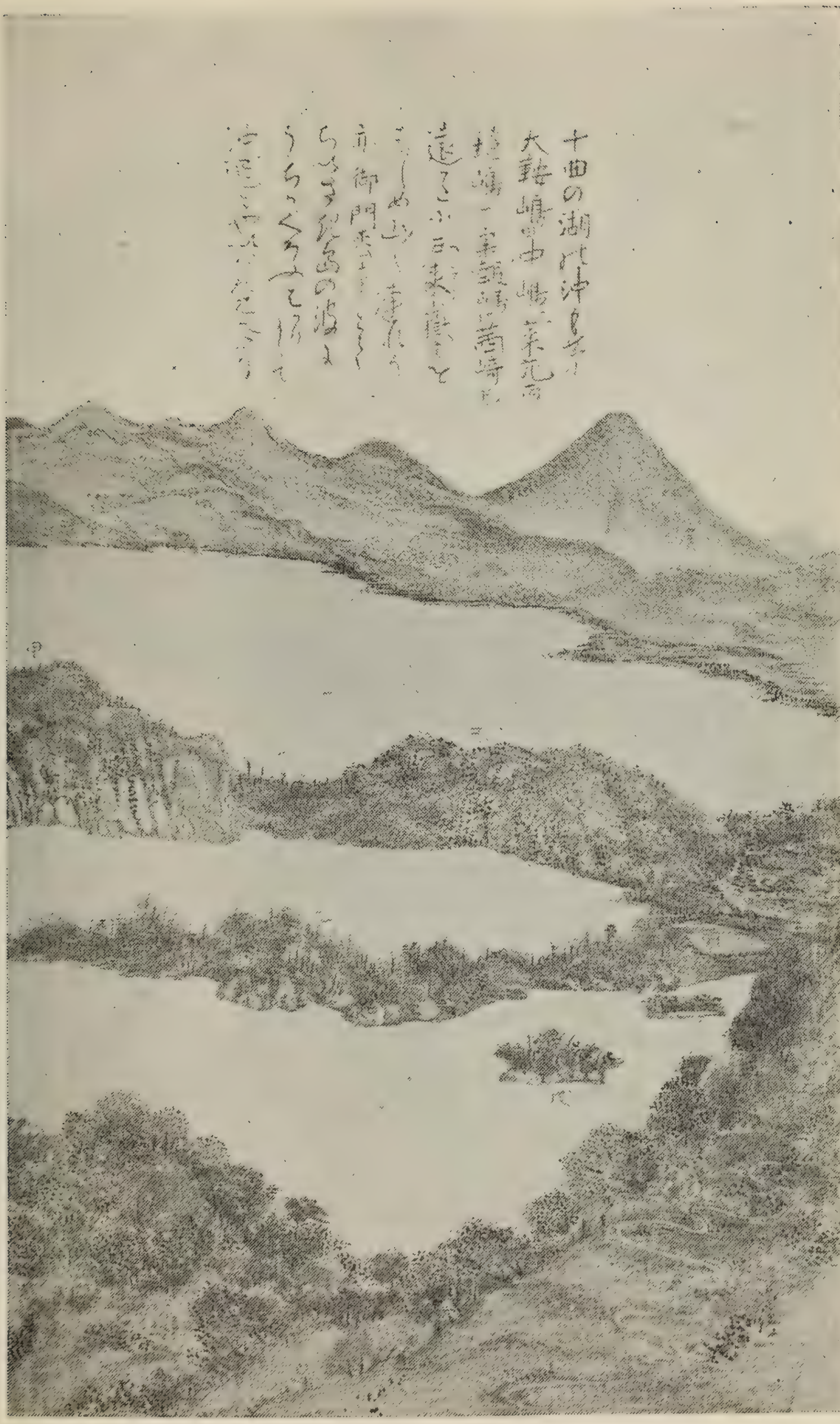
湖水風波靜　遙天一片青　把杯將極目　日暮雨冥冥。



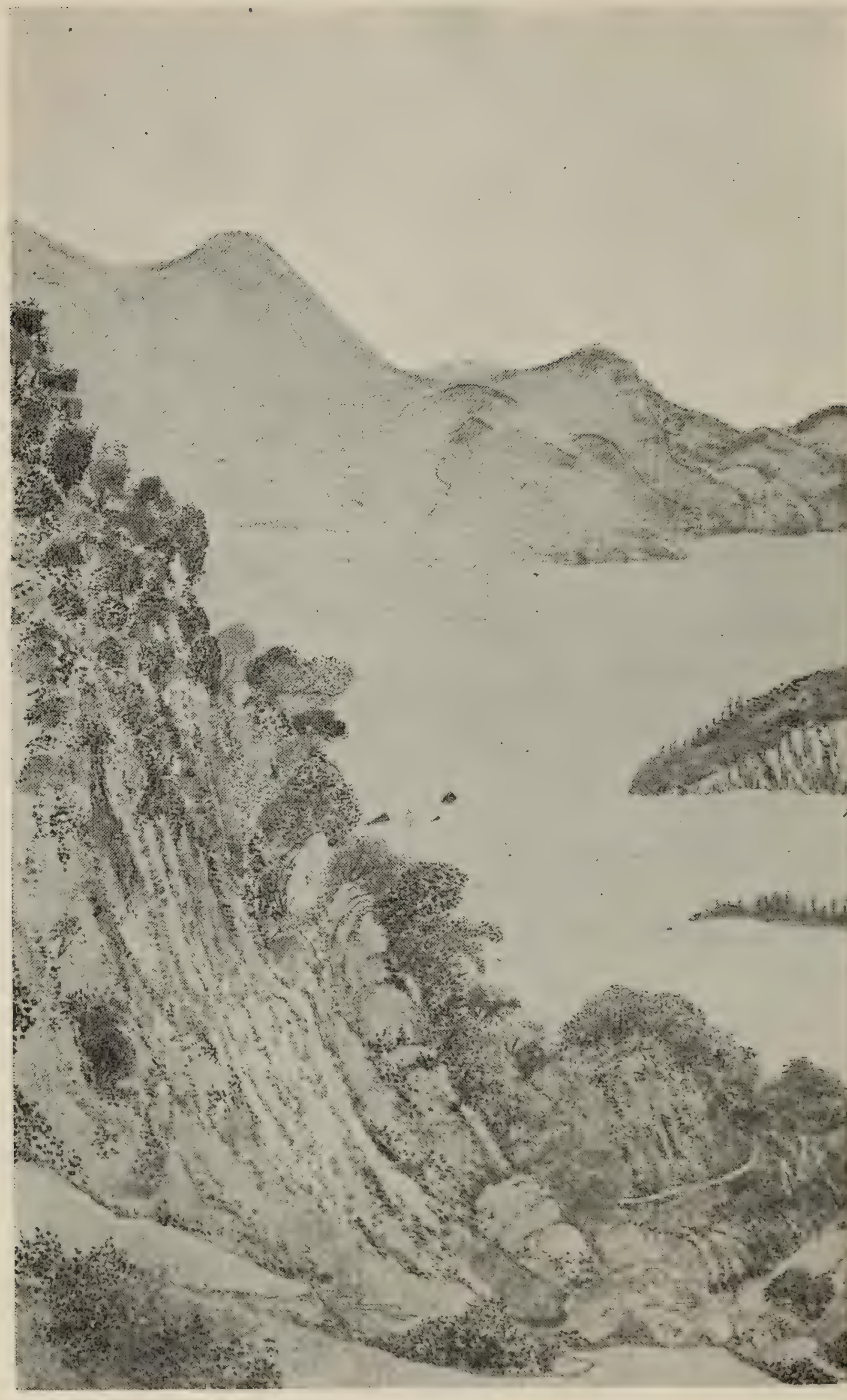


十曲湖





十曲湖







十曲湖


群杉明神の
大湯の
湯の薬師佛
下湯 河原の湯
集宮村
大圓寺



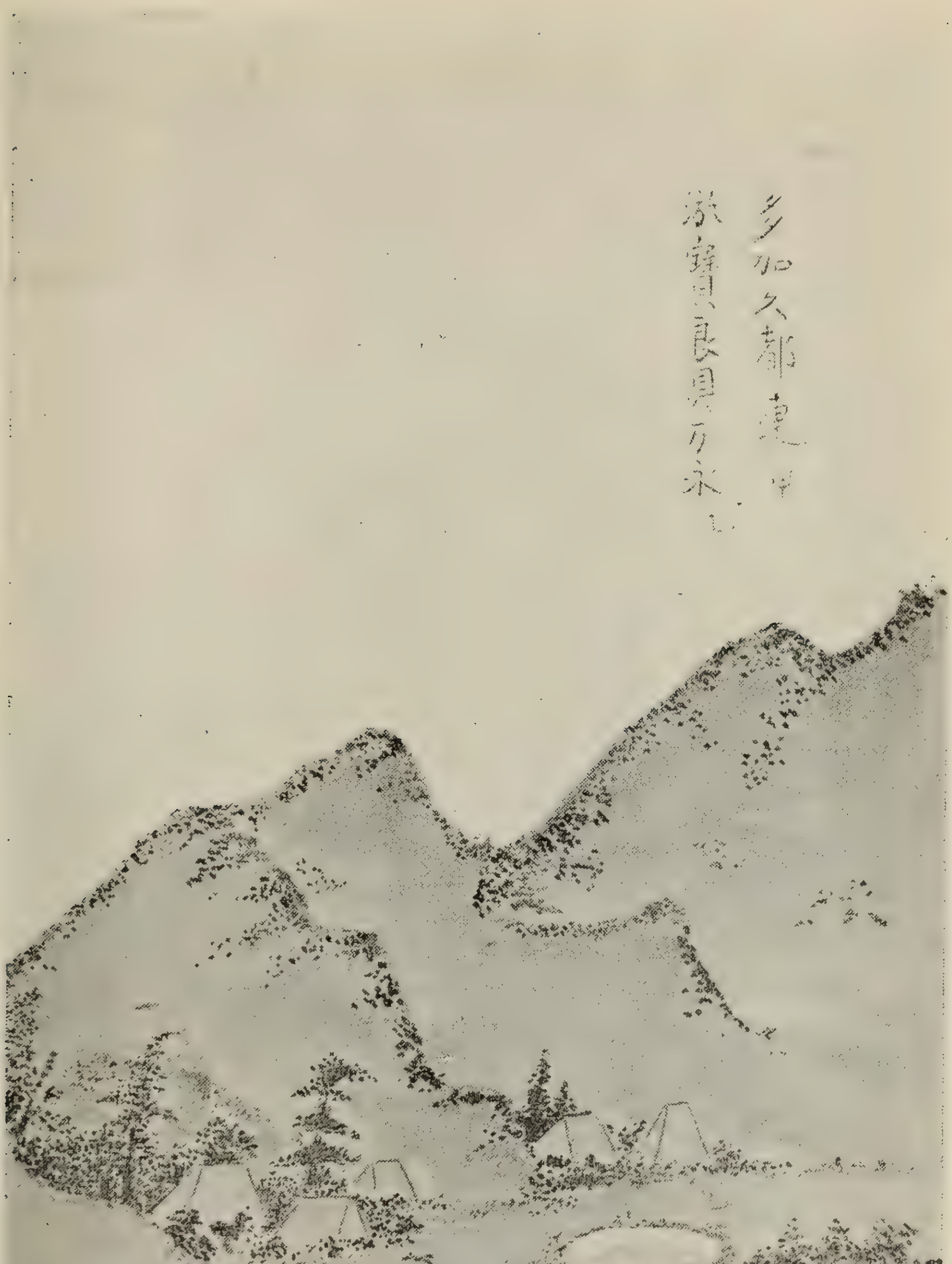
十曲湖


扇平



十曲湖

元



十曲湖




白澤邑の加夜乃波通賀
三寶荒神社

十曲湖







十曲湖



十曲湖



毛



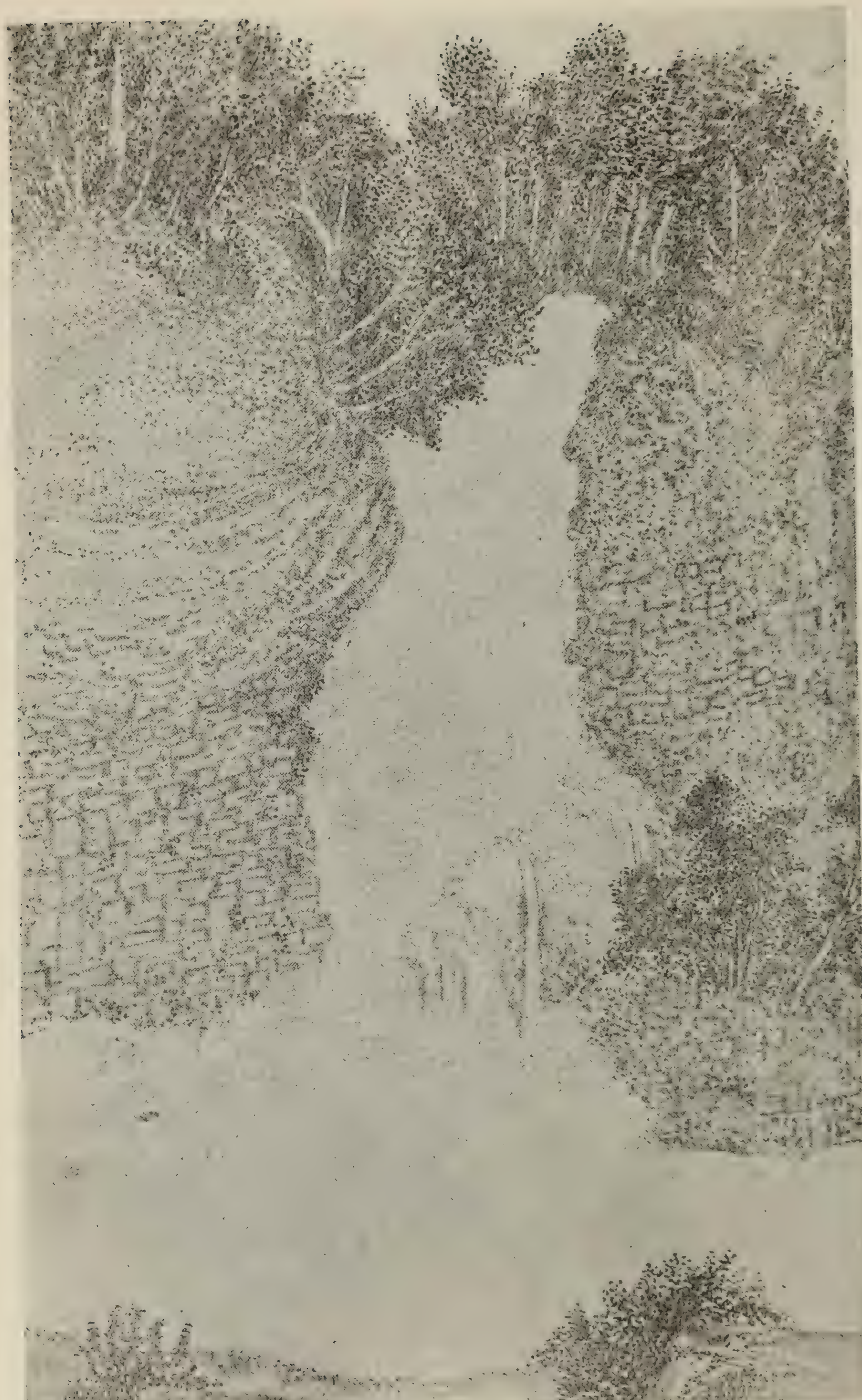


十曲湖

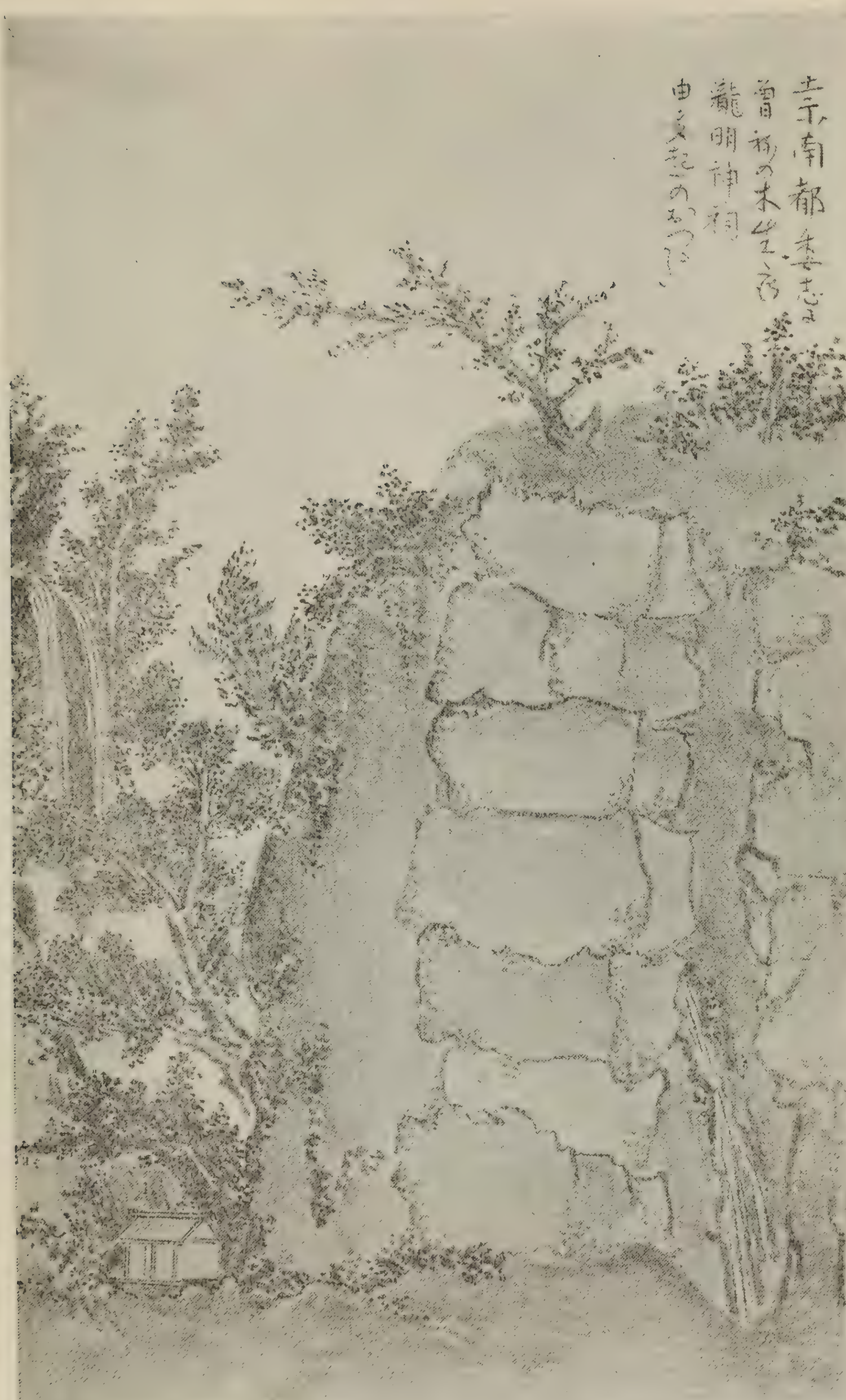





銚子瀑布

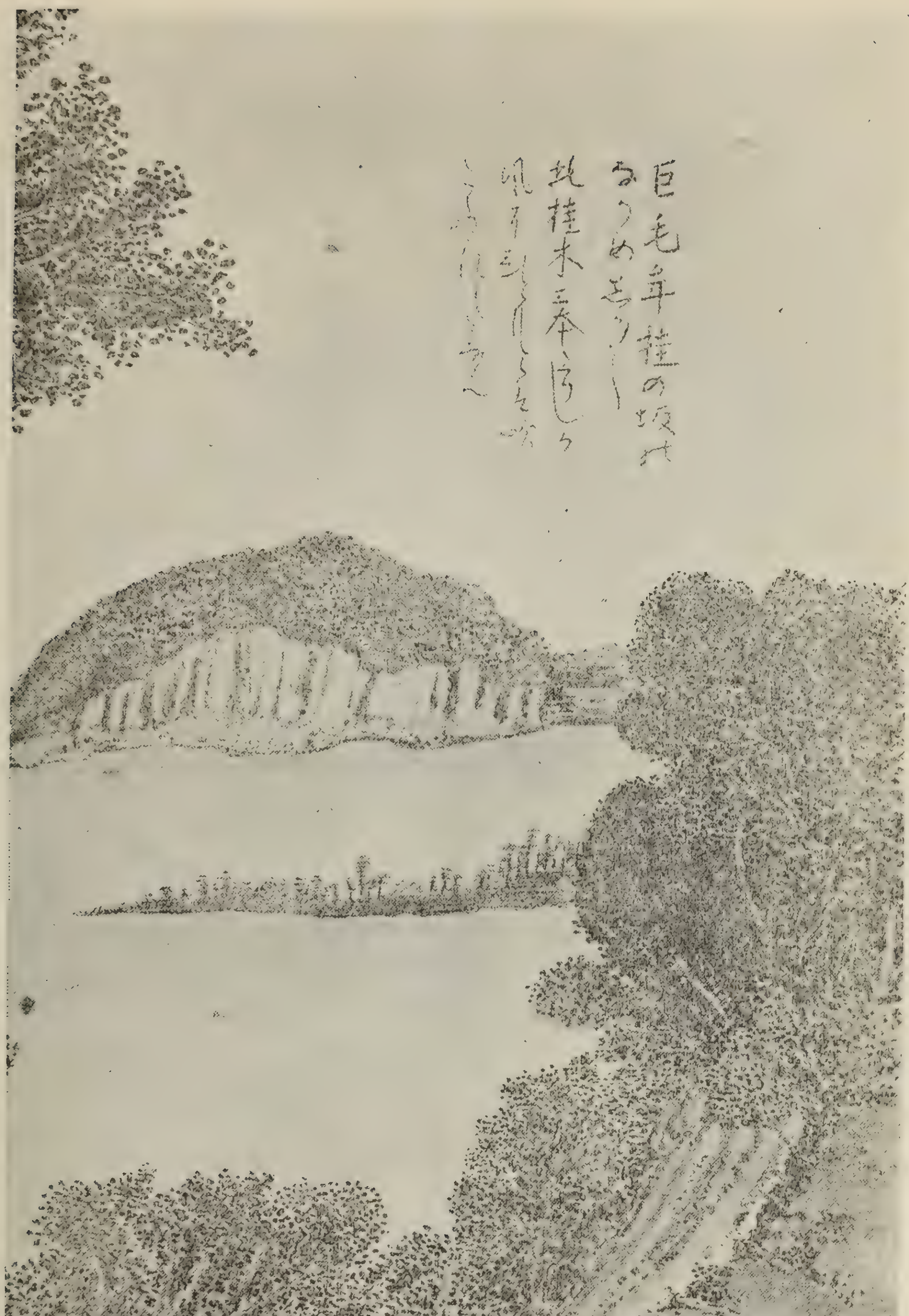


十曲湖

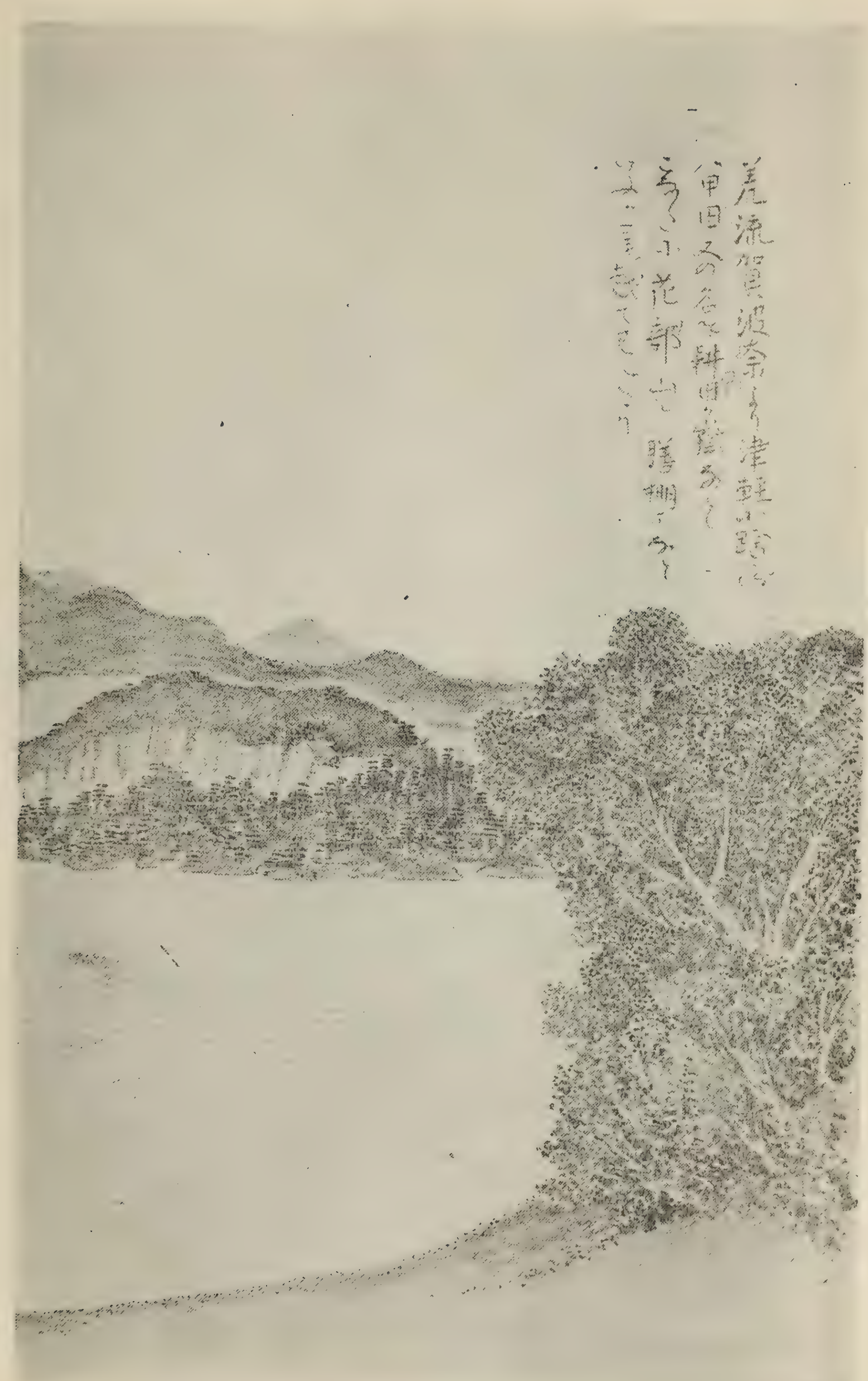


十曲湖









十曲湖

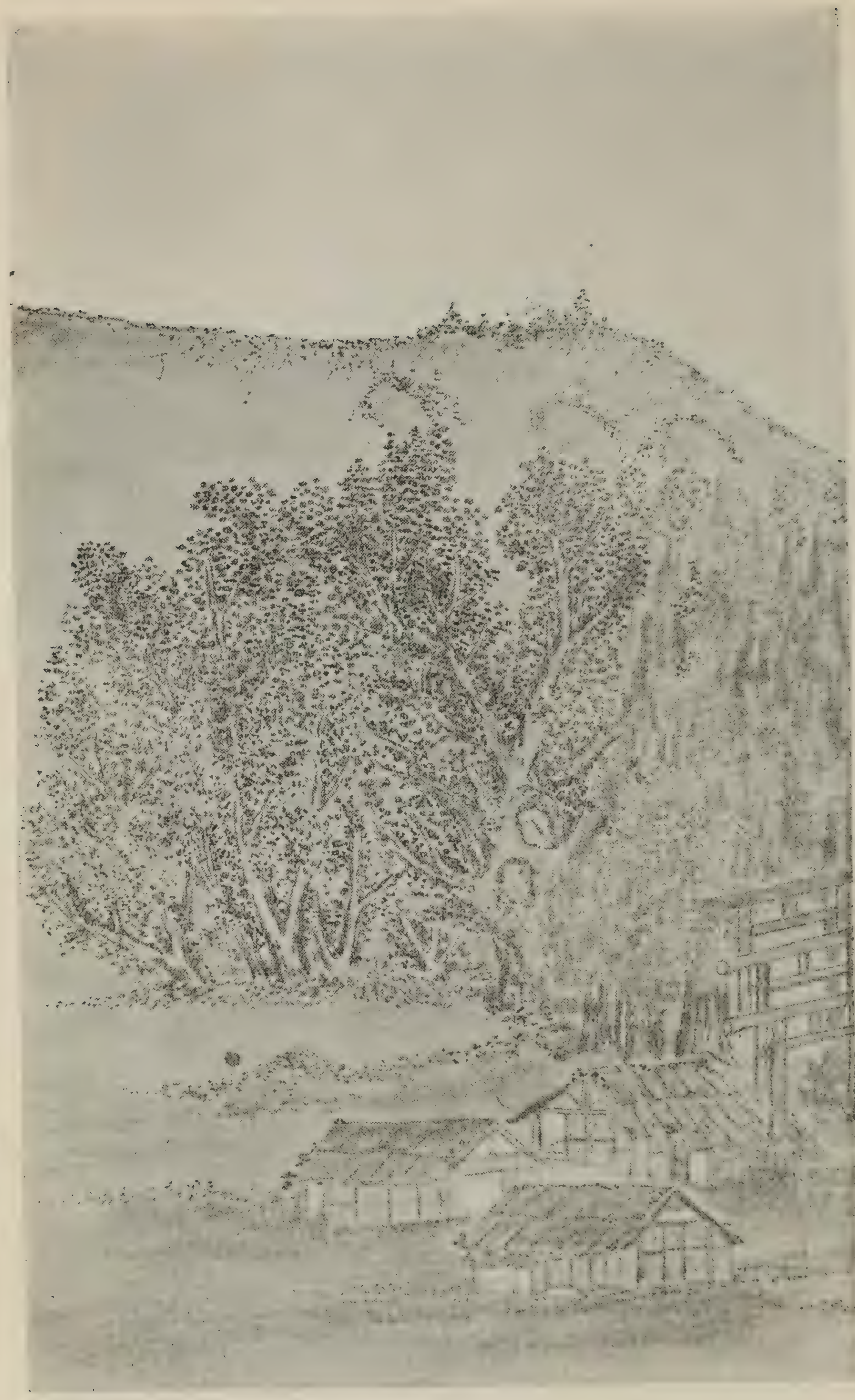




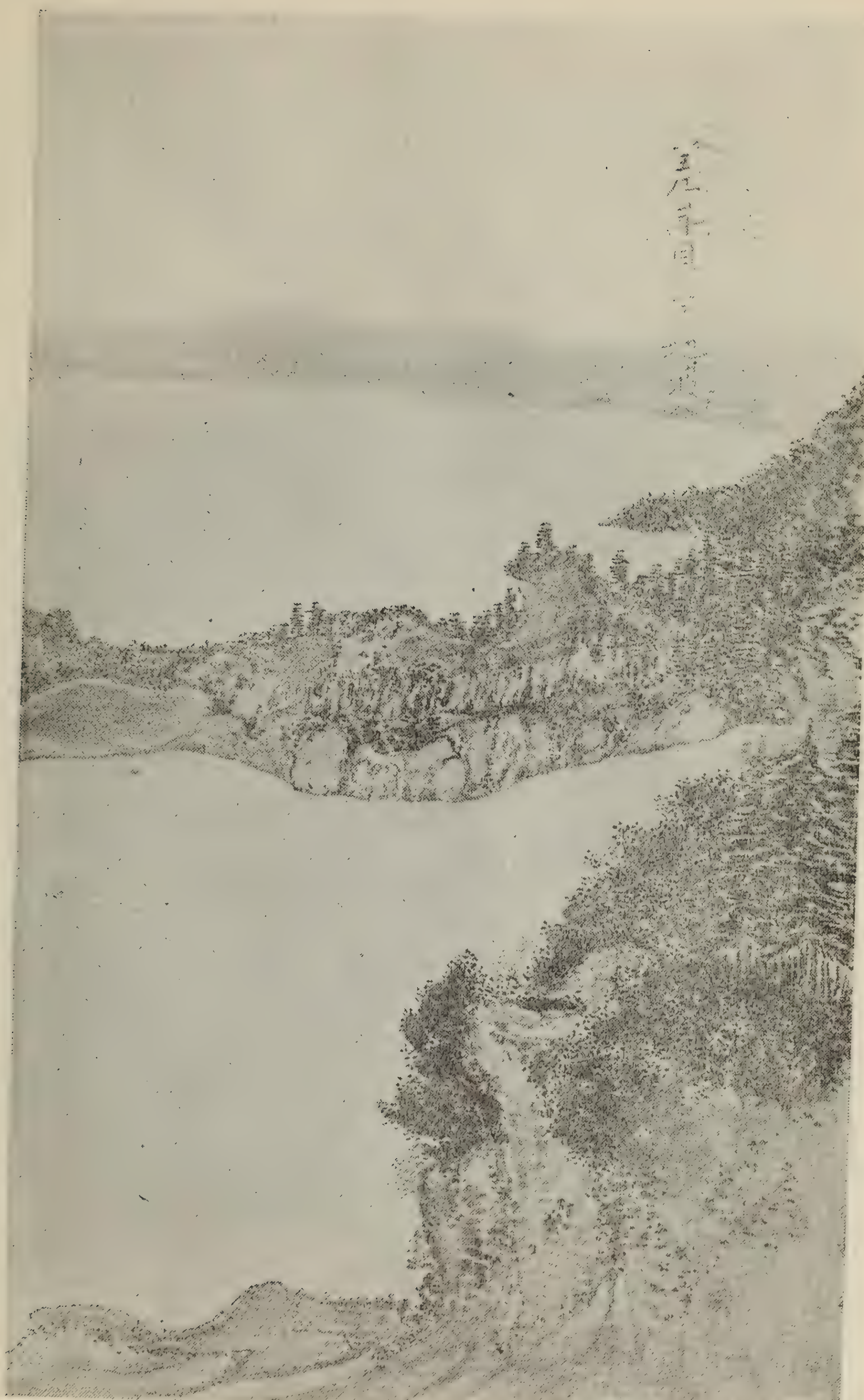


十曲湖



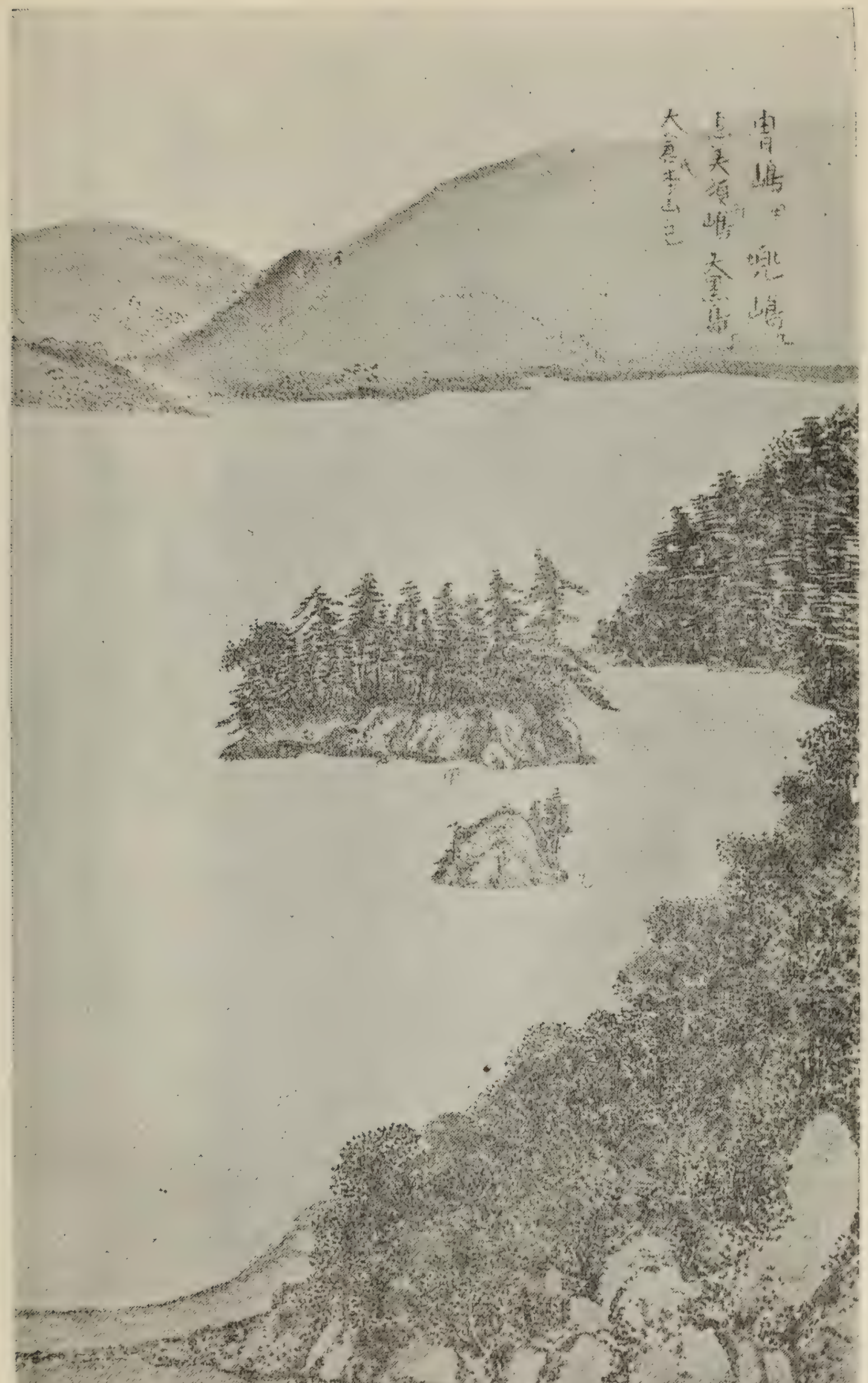


十田湖





十曲湖


青嶋
兜嶋
恵美須嶋
大黒嶋
大悲寺山



十曲湖

なか月の朔のあした。駒かね氏ともに大倉の舎をたちて、おなしすちをわけ出る。やま〳〵のなかめことに、二月の花よりもなとすんしつゝ山路はる〳〵とへて、こたひは朱鶴の村にかゝりて、こまかねのもとに、一夜二夜はなといへれはふしぬ。とりのかけろといふころ、ひんかしの山に鹿の鳴しを、

汝れもしか別るゝときとをのへよりこゑ吹さそふ軒の松風。

このぬしのもとに日を經て、

八日。雨ふれと時戸尾の村をたつ。めてに大森、長澤なといふやかたあり。弓手に茂田地といふやかたあり。高清水の村にいづ。むかし、成田豊後とて司ありしとか。こゝに大同〳〵と、しこ名呼ぶ家のあり。まことは成田善兵衛といふ。それが遠つおやは、似田鳥といふ處よりこの山里に來て栖めり。その家の壁、柱なとは、もゝとせのむかしにあらため作りなしたりしかと、やばらはそのいにしへのまゝにかはらしとなん。波太芒尾花逆葺黑木もて作れる家はよろつ代までに。」といふ歌のこゝろに、うへもかなへり。長者窪、長土呂、葦名澤なとのやかたをしたつかたに見なして、師走長根にかゝり溫泉坂を越へて、やはら毛馬内になりて青山のやとにつきたり。

大湯

堀内村熊野権現の由來

瀧の明神

池の尾神

おなしなか月の十九日。夜經の雨も辰はかりにはれて、けふなん箒畑といふ山里にまかり銚子瀑見にいなん、いさとて、とふらひ來ける福本與正とともに毛馬内の里を出て、大湯の湯桁のやかたも過て、大溫泉町といへるところより弓手の大橋を渡りて、川にそひて篠淵、しのだひをわくるに、流れをへたてて堀內、折戶といふやかたともは、四角嶽の麓のやうにおほゆ。神龜のむかし、三石六斗の桑の實を土毛として奈良の都にたてまつりし、山田の長者のもとに在りつる松若麿の行衛をたつねて、山田のゆかりなる小池左衛門といふ人此堀內に來しかは、こゝの長者にかもんといふあり。小池をねもころにもてなし、酒さかなもとめて、しゐそしなとしけるをりしも、小池こゝちのれいならすとてふしぬ。日をへていよゝ重りかに見得しを、いかゝしてんとあるしこゝろもなやましくくれけるに、夫の旅路おぼつかなくその妻したひ來りて、このよしを聞おとろくほともあらで、小池身まかれりける。その死むくろを、へんぐゐのとり去りぬ。孀、やかて身を淵に投ぬ。さりけれは、小池左衛門かなきたまを齋ひて熊野權現といひ、女のなきたまを瀧の神と祭る。家に殘りたりし綾姬このよしを聞て、ともにとて池にとひ入ぬ。これをも池の尾神と齋ひ、今は辨財天をおけり

箒畠

熊の膽

銚子瀧まで

となん。しかいふものかたりは、桂清水の觀世音由來記につはらに見得たり。いまも熊野の社、瀧乃明神の杜やあらん。そのあたり折戸山、なへて秋の色ふかし。

男鹿なく柴の折戸も紅葉してそことわれんあきの山里。

かく見やりつつ下經久利、上經栗、高岸をつたふ。やま〳〵、なこりなうもみづる色の水におちて、なかめことにおもしろし。赤川といふやかたをへて箒畠につきたり。此一村は、たもぎといふ木の灰を染物の屋戸に貨り、亦西郡といふ柴の灰を紫屋に賣き、巨差不奈といふ木をこりてふみものを作り、これを市路にあきなふを業とし、雪ふれば山に入て、もはら狩りすといふ。成田正吉といふもとにいたれば、法のわざやゝはてしとて人さはにありて、なにくれと語りもて夕つかたになれは、みなすひつのもとにあつまりて、むかしいまのことゝいふ中に、獵得しときこころみるに、鼻白の熊は琥珀膽なり、皆黑の熊は漆的なり、月輪はことにして鈴膽、茄子膽、出樣珊瑚膽なと、たくひもとも多かるなど夜語に更たり。

廿一日。つとめてはゝきはたを出て、左に扇平の村、岩野目、杭森、梨子の木長根なと河へたに見つゝ、

里の名のあふきたゝむと山幾重いろとり渡る秋の川波。

土澤村、小倉の林、二の渡の村を見やり、やけやま、三階なとのあたりも過て、高崖村、太樂

銚子の瀧

前村をへて集魚淵の水の中あやうけに渡り、はる〳〵と行は三寶荒神の祠あり。なかむかしまで、大檀那佐藤庄司としるしたる棟札ありしか、野火にやけたりしものがたりあり。こゝを萱野破峠とて、十曲權現にまうづる山口にして鷄栖立り。白澤村になりぬ。尙分入れば止り瀧とて、高からねと水こゝしう落て、のそむもおそろしき瀑布なり。又、中瀧とて遠う見やり、しはしへて、大瀧澤とて弓手におもしろき瀧あり。かくてその瀧のもとになりぬれは、大雪の崩れかゝりて峯よりおつるかごとく、わきて、このころの雨にみかさいやまさりて、匝、提の口なとより水をこぼすかことし。さりけれは銚子の瀑布とはいふとなん。世にことに、めつらしかりける瀧にこそ。

　いはかねのとゝろくはかりわきかへり雪か雲かとかゝる瀧なみ。

此瀧のかたはらに七ッ石とて累りたる。そのもとよりいさゝか溫濤の涌き出て、しはし弓手に分入れば、溫泉の澤とてさゝやかの瀧のおちたり。この飛泉見に來つる人々の詠めたりしをかいのせぬ。

銚子瀑　　東都源尙

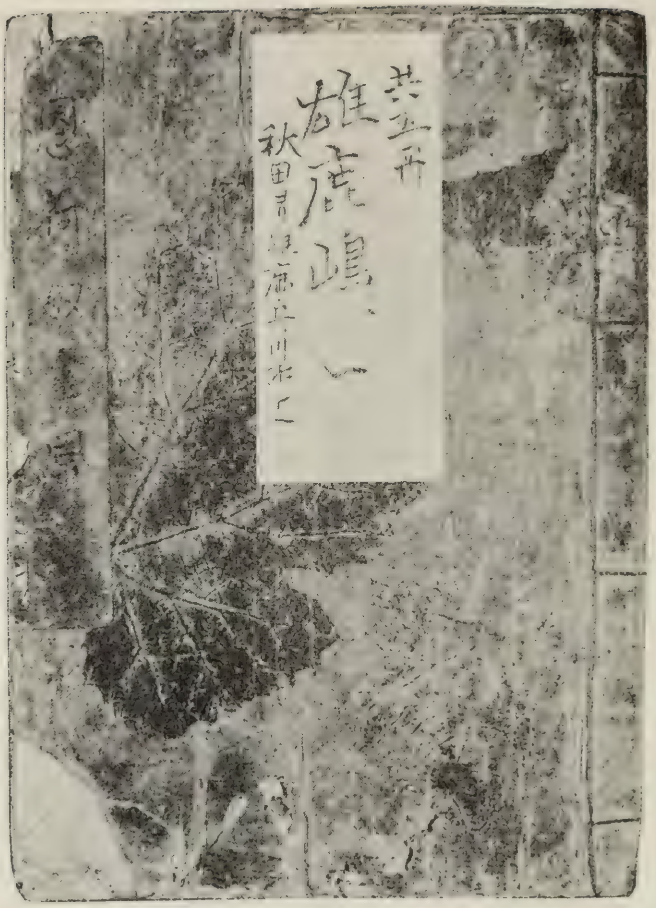
霧散懸崖瀑布明　風吹流沫玉瑩々　鬼工從寄深山裡
誤喚人間銚子名。

毛馬皐　爲　憲

百丈水簾落絕巔　浪波灑練疊風烟　嶂間六月寒雲起

疑是飛瀧下半天。

恩荷奴金風


共五冊
雄鹿鳴 一

この牡鹿の秋風といふ一まきのうちには、はつ竹のかみ、まかみふるくしいなたひめのかん世のてふりをまねひのかんわさ、緒方の橋、琴の海、婦弓山、藤原魚名卿の後、あるは蘇武のふる堆、武帝の廟なとありつとものかたり、あるは、うみ山をうつしなしたる圖(かた)すら、かたほなる筆のまに〳〵かいのせてつとゝはなしつ。

文化元年乃冬

淳代に在りてしるす。

このもなかの月を、八龍の湖(天註──八郎湳とくにうともはらいへり。やまたの大蛇をいはひまつりて八龍の神と唱へ、それをよこなはりて浦の名に喚ふにや。)に行見まくのこゝろほりに、葉月の十四日、久寶多なる布金山應供寺をけふなんたちつるに、あるし湛然上人とにさし出て、いさはや飯りこなさねもころに聞へ給ふ。かくて、五十嵐なにかしの屋戸にしはしとてかたらふまに日のかたふきて、土埼のみなとべにくら〱になりて、矢守阪(天註──矢守氏むかしこゝに栖家あり、慶長のころ小祠を建り、さりければ矢守稲荷といふ。此ぬし萬治に身まかれりとなん。)のほとりに鈴虫の聲あはれに聞へて、

(天註──世にもはらいふ鈴虫は、いにしへ歌にながめける松虫の事也」松風のりん〱とたかきにたくふものと人すてにいへり。)

汝れもさそあすのこよひを月よゝし夜よしとこゝに松むしのなく。

群雲のひまもる月の海に照りておもしろし。むかし人はこゝを麻裳ノ浦、面の湊ともいひたるよしを話る。(天註──貢を御物成といひける辭あり。そのくにつものをつみもてくだる舟多ければ、おもの成川ちふ事をはふきて御物川とやいふらん。さりければ海を御物の浦、面湊なともいふか。」逆田の浦を袖の浦、袖の湊といふにたくへて御裳の浦名もありけるものか。)

行水の面のみなとにかそへ見んあすのもなかに來よる月なみ。

やはら筯守なにかしのもとにやとつきぬ。

北野（立野の牧）

十五日。こよひの月の、大海原と淡海とに照るかげのいかならん。いつらや〱をとりまさりのあはれもと、こゝろすゝろにうかれたち、雄鹿の嶋山の秋も、かねて見なんとうら波のより〱こゝろにかゝれは、面の港をつとめて出たち、穀町のやかたを弓手に見なして、通ひなれたる榎のちまたより馬手に入ぬ。（天註――榎のとしふり立るちまたに、はたとせのむかし一丈斗なる柱頭に狐をきたみ立しか、このころまて三さかはかり出しか、としことに砂に吹埋れて今は榎もはつか斗のこれり。）此あたりのなへての名を北野といふ。遠きむかしは野馬のいと多かりつる處となん、立野の牧はこゝをさしていひつるにや。もとも津輕のほとりなる瀧の澤を、まほの名は立野澤にて、舘野のうまきともはらいへど、「みちのくの飽田の山は秋霧のたちのゝこまも近つきぬらし。」といふ、いにしへ人のなかめをかゝなへ思へは、秋田山は杜良が岳にして、今も水田の代とて寘に在り。立野は、此嵩に近きよしをよみくはゝりしもうへならんか。此野原をはる〱と過れは、飾摩のかちやうの布を抱へもて、ぬかぐろに十字かいたる乳兒おひたる女ふたり、天神まうてしなんとてさいたつ。

出戸村

出戸といふ村に來けり。（天註――淳代の湊の近くして出戸てふ村の名の聞へ、はた陸奥南倍路にもところ〲此名あり。出戸、いと出處といふ辭にして、いつらの國にもありなんかし。）弓手の方の木の茂る中に、萱葺たるかん社の軒と、鷄栖との見へていちしろけん。あれはやあしこ〱と、女とも

の、あしとくはせてそのすちに入ぬ。

乙女子かあさてとりかけ手向らしわけてきた野の野路の神籬

菅神社由來

こは延文のむかし、杏（マヽ）稲葉といふ人の、菅大臣のおほんそのきれをもて埋み、みかたしろをもする奉りしより、みやとところをさたむとはいへれと、つたへきく、そのむかしに、こと處に菅大臣のみかたしろありしかと、春ことに野火かゝりやかれしかは、此北野より今新關の浦にうつして、この浦に石の室あり。石のみかたしろは、笏に代て扇をなんもろ手してもたまへり。新關の浦人はさらにこと姓（うぢ）はあらて、みな菅原をもて家とせり。そのゆへをしらす。延文の物語もゆへあれと、にひせきの浦やまほの神垣ならん。さりけれと、いさしらぬひの筑紫の神のみたまをあかめ齋ひまつらは、おほんめくみの、いつらをいつらとやいはん。

伊賀

伊賀といふやかたに至る。こゝより湖海（みつうみ）のへたをつたふ。小舟、こゝらこぎ出てひきつらなれり。潮湍（しほせ）の浪も、この浦の水門にうち入りく。こは、さらにしほならぬ湖水（うみ）ともさためかたく、くにうど、もはら潟（かた）といひもて渡るもうべならんかし。

天王村

雄湍の橋

天王といふ村につく。むかし、こゝを千福川の流れて渟代に落ぬ。この渡を緒形といひ、雄潟とも記（しる）せり。あるは男鹿戸なともかいなせしか。そのころは雄湍の橋とて亘り二百間の橋ありて、遠つ淡海に名たゝりし濱名のはしにもをさくをとるましかりしを、大濤の寄り來て、小墾田の板田

の橋のことにうち壊れうせて、いまは殘りし桁たにもあらず。近き世まて橋柱のくち殘りたるかありし、岸の礎なとも、水の底にはつか斗見へしと語る。その浪のさはぎに、千福川、土避の湊に落入り潮もうち入て、今は四百間があはひを舟渡りせり。

舟越と天王

むかしより、向ふ岸べに舟越の屋形やありつ。正月の雉子の追鳥かりのころ、せこのものよばふにまきらはしとて、この浦より、あなたの岸にうつりて住つきし人を舟越しと名附、こなたの人を天王と、をそりみもかへりみす呼れしかもとも始にて、何しかり。

牛頭天王社

おほん神も、いにしへは御名を御衣寶刀の社といひ、中ごろは登宇古の宮ともとなへ、水のあふれ來ては、こゝかしこに四度まで御社をうつし、もゝとせのむかしに今のみやところにはうつし奉る。さりければ古社とて、その字、緒方の渡のへたに殘りぬと人の話りぬ。かくて社にまうてぬ。かゝるかん籬のうちに、かしこくもそのいにしへ、素戔嗚尊を、郡司小野良實の齋ひまつり給ふたるみやところにして、副川の社といひ、流る水を添河とその世にはいひ渡りしかと、人しらで、いま鷹岡山にその神のみやしろをは建つとなん。ほぐらのうちに、いとふるき假面ひとつ、横笛一管、こと神寶もいくくさとなうありたりしを、みな灰となりぬなと。

天王社神事

かんわさは水無月の七日にありて、やまたの大蛇をむけたひらき給ふの、かんよのいにしへぶりをまねびて、脚摩乳、手摩乳のみわざあり。まづ、正月の朔の日をはしめとして七日まで、神主、頭人等もろ

味噌搗神事

酒部屋

箸削の神事

ともにいみやこもりして、二月のはつかまり五日といふには、味噌搗の神事といふことのありて美曾なんついて、その高さ尺はかり、その亘り八寸ばかりなる、三ッの檜桶にこれを盈りてけり。頭人のきうざうとものいと多ければ、曲桶の四五六七にてまれもりて、これをがつきの薦とて、はなかつみやうの菰あみて包み、しらゆふとり掛て神垣の内に埋め、しるしの幣を立おき、かくて五月の二十日あまり四日にしも日のなりぬれば、二人の頭人の家のうちに、八間の假庋のごとくにふたまの借廬を作り、青萱をもて葺き、そのめぐりをも萱もてゆひくへかこひ、しりくへ繩を曳めくらし一口槽を置く。これを酒戸舍といふ。此さかとののうちには、荒薦、食薦しきかさねて、いつくしうくぼつき、たかつき、ひらか、やひらて、いはひへにみちならべ、廿日餘五日、つとめてその埋みつる味噌筒を掘り出し、さすきやまにもていたり、かみぬし、ふとのりことといひはらひ、手摩乳のえたちにあたりたる女、それかひとりして納む。いまひとつの酒殿は船越のやかたに在りて、脚摩乳の男これに入て、神わざはおなし。廿日餘八日は、箸削の神事とて杉筯をかいけづり、おなしきはつかまり七日の日には、柏採りの神事ありて山の槲葉をとりつ。けふより、なべて水無月の七日まで夜ゝ毎のいのりあり、これを身堅固のいのりといふ。水無月の一日より七日の神事まで、神ぬし、頭人、みやしろのうちにいもゐして日ことのみかぐらあり。おなしき六日には竹伐りの

竹剪の神事

七種の神供

神輿の行列

牛乘り

神事といふあり。みやつこ涌本村にいたり、萎竹五本を剪て、潮にうち洒きてもて來けり。むかしは箭竹の神事と唱へたりしかど、竹生のあらんかたをこゝにもとめ、かしこにもとめわつらはしかりければ、生花の城のあるじ、阿倍五郎友季の脇元に竹を植させ給ひしころ、きりそめしときゆ初竹といひしかもとゝして、今の世かけても初竹の神事とはいへり。おなしき七日のかみわざには、白のむし飯を手間甕とて檜の曲桶に盛り、ひとりが首に二桶をつらねかけて、四人して八の弦桶をもてり。これなん八醞の酒になずらふるにやあらん。白蒸飯、槲葉二枚を重ねゆひて七把、水麻菜七把、蕎麥の嫩苗七把、味噌七桶、嫩菜大豆七把、杉箸七雙、みなこと〳〵に弦桶に入れて廣前にもちづる。このなゝくさの由加物を、神ぬしとりてさゝげ奉る。かくて、頭人の家へは七度半の使をそたてる。こや、淡海の國なる蓮花の頭にも、しかせりけるためしもありたりしとなん。御神樂のはしまりて、「彌雲たついつも八重籬をくり返し唄ひて、やはらねりてふことのはしまりぬ。亂れがみの荒雄等五人、大幡を母衣おひたるかごとにおひ立ていさむ。眞菰しきとて、かつみの薦をうち投〳〵てありく、こは莚道にやたぐふ。黑の犢牛に乘りたる男、烏帽子、かりきぬによそひ、顏はかのへいちうかごと墨もてぬりて、とが矢たばさみ、おほ弓をよこたへ、十握の劒をさげはき、はなぐりにいつさかの木の綱をつけて、これを曳男編笠を着て、五人の頭人等牛人の前後左

御指棒

蜘蛛舞神事

右をかくみたり。此牛のりこそ、可畏くも素戔嗚のみことにたくへ奉りたれ。山棚、隆車に花を餝りたるは、ちやぐら舞とて綵木二人り、廣鉾二人してうちなぎたゝかひ、棒持ふたりおなしさまにうちあふ。そのふりことに、はやしは太皷二人、笛二人、神子二人、獅子頭に笛、調拍子（天註――蜘蛛舞のほうしに、をろちたび〳〵と笛つゝみをうちならすとなん。）、はた頭人の男童等は大紋烏帽子して四人、みな、かの玉頚をうなかしてもてり。かくて神輿なり、かよ丁のじにんこれをかゝげり。このみこしのうちには、まがみふるくし稲田比賣を湯津のつま櫛にとりなし、その御髻に挿したまふのみわさなり。はつ竹の五もとを菅縄にゆひもて、これにゆふつけて、みこしをおほふまでにさしかさして、呉竹のきぬかさを見たらんにひとし。御指棒とて、むさか、なゝさかのおほにぎてをふりもくるほふりあり。かみぬし、けふをせにとよそひたてり。淡海の面には小船を紡ひて、舟越の浦人等捞ぎ出る。舟の中にも屋形山のありて、いとにきはゝしう。神女ひとり、ほふりみたりそ乗たるいまひとつの舟の艫舳には、ふとくなかやかの柱ふたもとを立て、それに、みさかばかりの横木をゆひそへて、艫のはしらには白木綿一反を巻き、舳のはしらをは赤き木綿ひとむらをもてこれをまき、そのふたつ柱のなからの横木に掛て、二筋のわら綱をひき延へたり。身を朱の衣にて纒ひ、紅のうでぬきてふものをさし、あゆひ、したうづもみながらあけの木綿して、頭には、赤白の麻苧の絲をふりみだらしてとり

頭つもり式

かけ鬘とし、面には黒き網をもて假面として、二筋のわらつなの上につとのほりて、八丘八谷の間をはひわたり、やばらの酒を得るか如く、此水海のふかき渉の、わたなかにてのけさまに反り〱、舟やかたもこきづる。八岐の大蛇のふるまひなりけり。これを、ところ人は蜘蛛舞といふ。うべも、さゝかにのくものすがくに似たり。此蛛舞をひとたびし初れば、それが代りの人の出くまで、身はやゝ老てしも、はた、こと里遠うむこかねとなりつとも、かならずこの神事には來て、蜘蛛舞せでやはあらさなるのためし也。くもまひもはつれば、あか、しろのふたむらの木緜は、くもまひせし男のむくひとて、むらぎみよりたうひけるとなん。神輿は、松柏の生ふるふるみやしろのもとにたちやすらはし、牛のそひらには十握のつるきを今やぬき、箭を投て、大虵を平給ひてんの簸の河上にいたりませしまねひもやはらはつれば、蛛舞すら身をかへて上下すかたによそひたち、舟よりおりて入まじり、ねりちふことはしまりぬ。これを見るとて、こゝらの小舟にこゝらの人の乘たるが、蜘蛛舞の止みぬれば、くもの子のちりたらんやうに、さはかりひろき淡海の面を四方にこき別れていぬ。八日には、なゆ竹を社にをさめて祓禊ひせり。此夜、此いつもとの竹のもとを失りて、ふとまにのうらひのありて、來んとしの頭人五人をたれかれとさだむるに、夜更人さたまれるころ、かのいつもとの竹をそれ〱にわかち、あたれる五人の頭人の門にさしおき、御頭人のあた

れりとゆくりなう戸を押て呼ふ。家こぞり起出て、やかのうちとをはらひ、潮もてきよむ。これや、淡海の國多賀の社なる牛の頭、あるはおなし近江の栗本の印岐志呂の社、あるは尾張の國熱田の宮の阪樹の頭を、神のまに〱か〻なへもて、その門に榊葉を折ておし立るにそひさしかりける。八の玉甕のむし飯を社にふかくをさめ置て、十二月の十日あまり三日にこれを見れは、みな糀となりぬ。この糀をもて、神ぬしのもとにて濁れる酒を醸し、おなしき十七日神に手酬け奉りてのちは、あたる新頭のあるし、古頭の人とらをはしめ、をとな、肝煎のえたち、村長うち集ひて此神酒を飲て、とよのあかりをなんせり。

味噌埋の事

世にことなる事は味噌埋のことなり。神事の過ぬれば味噌のあちはひたかひて、くらふことのあたはじとなん。足名槌の男、良き美曾にてさふらふ也といへば、手名槌の老婆ことあげしていふ、九十日みそなりと。きさらきの二十五日よりして、さつきの廿五日までの日數をそいへる。

手名槌、足名槌

船越の埼なる八龍の社に八岐の大蛇を齋ひ、葦崎の老婆御前とて手摩乳を齋ひ、三鞍鼻の老公殿の窟には脚摩乳を祭ひまつるとなん、しかいひ傳ふる。その左受岐、さかどのゝうちに、手名槌になすらふるの老女のありけるも、又ことさすきの贄殿のうちに、足名槌にたぐふ翁のありて、なにくれとをとりまかなふ。かく、をくなと、をんなをして、遠きかんよのいにしへぶりをまねて、いまし世までも怠らすそせりける神わざの、又たぐふかたやはあらんか

し。」

湖上夜景

神ぬし鎌田筑前なる人とかたらひて、やはら暮れはつるをまちて、小舟をやとひ此淡海(みつうみ)の岸べをこぎつれば、月は、まゆすみのことき太平山のあたりよりつとさしのほりて、水みとりに、いさこあけらかに照り、遠近の水のくまわもなこりなう見やられて、見ぬもろこしの、その水海やいかならん。かゝるなかめとは、いつらやなといひわたり、舟をたゞよはせて遊ふ。まさしきことにはあらさなれと、此湖水を、むかし琴の海といひし物語あり。あふみの湖(うみ)の形、琵琶のすかたせりといふにやたくふらんかし。岸遠う、雁のひとつらよこたふが雲とかゝれど、さすかに月のくまともならて過行なと、なさけことにたくふへきかたやはある。

琴の海

なれもさそこゝろひかれて琴の海や緒滷の月に鴈そ鳴なる。

夜の網漁

汐瀬の波もうち入りて、江川(天註―江河といふ浦の名たらんを、もはら伊賀とそいひならはせる。)の崎のいと近うなるまてこかれありくに、こゝかしこのくまより、さゝやかなる舟とものいくらともなうさし出て、はたはたとふなばたをうちてこきめぐらすは、白目ちふ、なよしを追ひとるあひきぞせりける。みち入るしほにひかれて流れ藻のいと多かれば、かちびきのわさにては、いをのいさゝかもかゝらじ、かはかりはとりつとて、なよし、このしろなと、かたまに入て水を出て、舟につとと

ひのりて泉郎の見せつ。かく更るまで舟さゝせて、尙あきたらず見ありき、月をよみして樂しとうたふ、あるしのなさけそうれしかりける。

水晴てそこのこひちもなか空をひたしてすめるもち月のかけ。

いつまてかありてあきたらんと、かまだの屋戸に來て、ふしつかぬにとりは鳴たり。

十六日。こよひの月も、この水海の面に見なんと人にいさなはれ、かちよりして鹽口といふ浦にいたり、かたりくれて、舟さしおろしてのりつ。（天註——むかしは此あたりよりも潮のさし入しにてや、しほくちの名そありける。）きしにとる小蝦（えび）煎（に）るほどやためらひて、月は杜良（もりよし）の岳の雲のなかよりあらはれ出て、葭田、大碕のうら〳〵、浪のよるともさらにわいためなう、きしべの山のかげおちたるあたりの水くらかりて、さゞら波のたちくなるは、魚のなころにそありける。この中に、月はこかねの光して小波たちうこきぬ。

水の面にみちのく山のかけならて月のこかねの花そちり來る。

遠かたを見やれば木のかけにやあらんか、はた高葦の穗波にやあらんか、海市めけるすかたのしたりければ、

つゆ霜の沖のたかさのそれと見んこのいさよひの月のそらめに。

宵うち過るころ天王の村につきぬ。

鯨長根

八龍權現社

飯村

小山田莊左衛門物語

十七日。雨雲の空に、たちまちの月をおもひ明て、ひとひ、ふつかとおなしやとに日を經て、

二十日。晴れたれば、鯨長根といふに舟して渡り、脇本の浦のあら海の浪遠う、舟越の浦の、湖海(みづうみ)のきしにつゞいていと近う、遠近の浦のながめことに、夕ぐれかけてこぎ皈り來(く)。

廿一日。寒風山にのほらんと、おもふとち、緒方の渡して舟越の浦やかたに至り、八龍の祉にまうてぬ。この祠は世にいふ、八郎といふ人蛇(をろち)と化(な)りて、みかしほのはりまがた書瀉寺のほとりに栖む難藏法師か、ほくゑきやうをよみてをとめと契り、嬬(つま)あらかひにまけてこの水海に入りつと。美作の國にも、ちうざんかうやと申神おはします。かうやはくちなは、中さんは猿丸にてなんおはすると兎路物語にも聞へしごと、この水海の神も、くちなはにてましませり。膽吹山の麓に、大蛇をまつるの社ありつとおぼへたり。此寒風山の麓、湖のへたに八龍權現とて大虵をなん齋ひたり、かんわざは二月十六日、湖の氷けちてそありける。この神籬の群松を遠う見れば、洲埼のいとなかやかにさし出てことに、よそめおもしろきところ也。かくて野路を行て飯村といふあり。淺埜長矩のきみほろび給ふたるころ、大石良雄、小山田莊左衛門に、かねよき刀もとめことて、こかね二百兩をあたへしかば、こはさちなる事と、きたなきこゝろのほりして、いづことなうおちのびて、元祿の末のころこの村に栖つきければ、大野九郎右衛門かゆかり誰れといふも、小山田をたつね來けり。小山田が末の子

大倉村

安藤友季舊城址

岩倉の八英の梅

まちうごゝなりて、今もこゝに莊左衛門とて尙あり。大野のきうざうの末の子なん、小田嶋とて此くぬちにあるてふ、ところ人の語りき。あらたに堀りたる池の坡にのほりて、百川、足澤、飯森なとの村を遠近に見てたゝすむ。櫻庭なにかし、山本なにがし、鎌田なにかしがいふ、大倉村にすむ吉田にあないさすべしとて、大倉のやかたに來て、吉田のやとにしはしは休らひて出たち、山路にさしかゝりて觀音菩薩の堂あり。弓手に遠からず田屋野澤といふ村の見へ、馬手に近う毘沙門澤のやかたの見へたり、こゝなん生鼻の碕につゞいて、そのそびらのかたの磯山なり。このをひばなこそ、むかし安藤五郎友季の對城のありたりし跡なれ。浪にうち碎かれて、はつかに殘りたるやうに見ゆれど、いと間ひろし。そのころ家の子あまたすめりしといふ、舘のあとはところ／＼に在り。山王の祠、不動明王の堂、むかし齋ひしにや。岩倉といふ岡に、八英の梅とて、としふる一樹のあり。品字梅にたくふのものか。いつもやよひのころほひは、野はら、山谷おしなへて、匂ひかくばしう風に吹いさなふとなん。こは、越吳の國蒲原の郡なる兒嶋の村、あるは仙臺のきみ政宗、ひとの國に渡りたゝかひして、加藤、小西におしならひていさおしすくなからず。そのかへさ、ふるさとへのつととて、朝鮮のくにつもの松と梅とをとりもておはして、松嶋寺に植給ひて、「まつしまの松の齡も此寺の末榮へなん年はふるとも。」とながめ給ふたるよし。その松のかたはらに、

寒風山（妻戀山、羽吹風山）

九重の石塔

八英の梅なん今も尙ありき。そのころほひならんか、後水尾のみかとめて給ふのあまり、花香樹の名をそたうはりてけるとなん。この梅は、高志の國と、はた道奧の國と二木のみ名たゝるやうにのみ聞へて、さらにこと處には聞へもしらぬを、かゝる岩倉の崗邊なとに、かく年ふり立る大木の生ひたらんとは、あにおもひきや。友季の在りし世に、太平城の榮へたらんころに、宮奴なとの栖家の跡たらんと語る人あり。梅のもとにあふき見れば、木の二もと三もと生ひたる下に、健甕の神を祭るほくらのあり。のほりてぬさとらまく、はや梅の下つ枝のはつしほめけるに、

　たれ植て八のはな英春はさそ秋はもみちの色を見すらん。

此あたりはみな寒風山のそかひなれど、こと山のやうにそおもはれたる。山の形（すがた）は、近江の伊吹山の面影あり。いにしへ、此寒風山を妻戀山といひ、又羽吹風（はぶかぜ）山とも名をいひしものかたりあり。よちのほりぬれば、八尺（やさか）にあまる九層（こゝのかさね）の石の塔あり。としふりし事いくそばくならん、苺八重むしたり。此塔のかたはらにふしたる、近き世の石に彫（きざみ）たる梵字すら仄に見へたり。此塔や、淡海の國の石塔寺なるものにひとしう、かの阿育王のほどこせる八萬四千字のうちにて、三河入道寂照上人の、もろこし物語の塔のたくひにや。石塔寺の外には、いつこに在りつとも得しらさりしは是にてもやあらんか。しかそのいはれを、ふるきふ

寂照上人　山上の展望　石倉、隱鄕　新玉の池の物語

みにもかいのせ聞へたりき。（天註——一條院の御宇大江定基は三議左大辨濟光卿の息男也。定基三河の守に任せられ、國政の間に赤坂のうまやなる力壽といふ女と契れり。此女の身まかりしかば家を出て寂照といふ。日吉の楞嚴院の惠心先德の室に入てまねひ、長保五年の秋八月廿五日宋の國に渡、清冷山にいたり大聖文殊を拜む。かの山の麓に居り圓通大師といふ。寂照の辭に「茅屋無人扶病起、香爐有火向西眠、笙歌遙聞孤雲上、聖衆來迎落日前。」かくて圓通大師その國にして身まかりたまふとなん。此上人聞へける阿育王の塔の物語、三國傳記につはらなり。）谷そこに臨むに、野はらのこゝき處を經の町といふ名あり、いかなるよしやあらん。弓手の谷に岩山のあり、そのあたりの水もなく、おちくぼなる處を舊球(ふるたま)の池といひ、蛇の通ひしといふ岩岑あり。この寒風山の麓は淡海(みつうみ)潮海(しほみ)の水めぐりて、膽吹の岳に登り左に無毛山(けなしやま)、右に潮津(しほつ)、貝津、山本山(やまもとやま)など見渡したらんがことにて、三千世界まなこのうちにつきなんと、こゝにもおなしうなかめまほしき處にこそあらめ。いさとて、路もなき峯より眞下りにおり來てめくれば、石倉(いしくら)といひ隱鄕(かくれさと)といひて、こゝらの大岩ともの、山の如くおち重る處あり。此中に窟のごとき穴あり。いさ入て見なんとて、みな頭のみをさし入てのぞき、あな、うちのくらき事よといひて、われ入なんといふ人もなけむ。いつこにもいふ穴居のあとなとにや。硯水とて、その形して空生水のありき。路をはつか斗行ば、新玉の池といふありて葦生ひ茂り、水鳥群り、いつのころにかあらん、玉姬といふが池水に身をしづめて、そのなきたまのこりてや、きしへの葦(あし)の穗にあらはれて、かほよき女の衣(きぬ)のあらはひをし、布さらし居を山賤らなとは見しことありつと、あやしのもの話りのありけり。それかのゝさらしの板とて、ふたひらうきたゝへて水艸のな

かに在り。いにしへより今も尚朽やらぬことゝいふも、又あやしかりき。皈りなんとて、祖(さう)神平(ぜんたひ)とて馬櫪神の鳥居ある野路にて、吉田といふ二人りを別て雨の一むらすれは、

身はぬれてなれもなかまし小雄鹿のつま乞山にかゝるむら雨。

田屋野澤の乾元寺

田屋野澤のやかたに來る。その世にや榮へけん、乾元寺といふ年の號聞(な)へたる寺のありき。後二條院の御代にや建給ふらんかし。此寺も、今は名のみとちいさき庵となりて、五郎友季の木主(しるし)あり。その君の世そしのはれたる。日のくら／＼になりて、たどる／＼雄猪鼻(をるはな)山(やま)を分て、菅大臣のほぐらのこなたにをり來て、脇本の浦やかたに出て屋はみな灯とれり。空くらく、こゝろあてに人の行しりについて濱路を遠う、舟越にしはしは休らひて月の出るを待て、なにかしの宿のしりより、舟にて湖を撈れ渡る面白さ。更て、天王のやかたなる鎌田のもとにつく。

舟越

廿四日。あるし鎌田利高のぬしとともに、ふたゝひ緒潟の渡して、小鹿の浦／＼見なんと出たつ。このあたりは、暮て見ざりしところ／＼なと語りもて舟越に入ぬ。うちとの神の群松の中にあり。羽黑の神の祠は、山高からすしてあり。嬬乭山(つまこひ)の尾より續き湖のへた也。入江に鷺、白鳥むれておかし。

琴の海つゝいつ筋の尾上よりおなししらへに通ふまつ風。

涌元の浦
海藏山大龍寺
温泉の社
生岬の太平城址
友季と實季

と、うちなかめて涌元の浦にいたり、神ぬし伊東大和といふ人のもとに休らひぬ。此やとのしりに、初竹（やたけ）の神ノ事（わざ）に採りつかふたかむらのあり、五郎友季の殖置れし。此あたりは、そのむかしたゝかひのちまた、軍のにはたりし處と語り、いまし世の豐さをほぎたり。

植おきし君はそれともしらま弓やたけこゝろもなひく世のなか。

こゝの海藏山大龍寺に、龍毛をもて作れりといふ拂子なん、遠つみおやのせしよりとり傳ふとか。しか龍毛、龍髮とて世に多く、ところ〳〵に見たり。竹生嶋のみたからのうちに在るてふ、七難の陰毛（そゝけ）といふものにたくふにこそあらめ。温泉の社といふあり。遠きむかし、いよのゆげたのことくなへにふりうこもちて、今は温濤（いでゆ）の絶へにき。うべ涌元の名そしられたる。やはら生（を）ひ岬（はな）にのぼる。こゝに在りたりといふ太平城のおほらかに、阿陪友季のあるしたりしころは、いらかをならへて、やかとものいと多かりつる礎のあとは、くさむらことに埋れたり。浪にうち破られて、やゝなからはかり殘るといへど、いまたにいと間ひろし。友季、あかゆかりながら城介實季を討なんのこゝろふかく、實季も又、五郎友季をほろぼしなんのこゝろほりして、そのなかのむつひなうとし月をふるに、雄猪鼻の井の水の涸（かれ）はてたるはいかに、なにのさとしならんと人みなあきれたるほともなう、浪の寄りくかと聞ば、ときのこゑ高う、かなつゝみにとよめかし、實季ゆくりなういくさを出し大平城をとり

かくみぬ。友季、せんすへ浪のぬれ衣ほしもあへず、のかれ出ぬ。城に火をはなちてもとむれと、さらにあらさなれば、しほとゝもに實季のいくさはひきしそけり。甲斐の國より來て友季に仕へ、小鹿の村ぎみの長たる森本有全といふものありて、吾君を命にかへて家（や）にふかく隱しおけるを、友季の行衞たつねいたし、からめ來るへし。もし、それがゆかりのめこたりとも、かくしおきたらんものあらば、ちか隣までおなしつみにけいすべしと、めくらしふみをかいながしてければ、雄鹿の浦人等をぢまどひて、うたへやしたりけむ。友季、虜となりて死のはぢを見てんよりはと、腹かいきりて死けり。盛本有全もつみせらるべけれと、忠のほとをおもはれて國の界を避られしかは、甲斐のわがふる郷へ皈りきとなん。さりけれど森本が末の、舟越の浦に、名屋治右衞門といひてそれなりともいへり。慶長七年のこととなん。此大平城は、もと實季の栖みて面の湊にうつられしとなん。むかしいやまひ齋（まつ）りし天満宮の神垣に入、ぬさむけぬかづく。いつの世に植けん細葉の海榴とて、としいやふり名たゝる木のあり。實季も友季も、この御神をあさな夕いのりいやまひ、しるしありといひ、事としては、うらひなとせしひろ前といふ。

森本有全

天満宮の祠

　生ひ茂る細葉の椿ふとまにのうらなみかけて八千代經ぬらし。

雄猪鼻の名

と、なかめてまかん出ぬ。この高岸を沖の方よりのぞめは、碎け落たるところ〳〵にまはに

のあらはれて、千まちはかりもよこほりふして、そのさま、たけり猪のすがたせり。うへも、雄猪鼻てふ名のこゝによくおへり。水涸れたりし井はまだのこりて、あしこにありてなど人のいへり。遠浪しろう、鳥海山は黒き笠をふせたらんやうに見へ、飛嶋、青嶋などは奥陪(おきべ)の雲にへたてられて、うなの上にたゞよへるがごとく、太平山は眞面(まほ)にむかへり。さるゆへもて、太平城の名をや此生花(をひはな)の城に附たらんこそそしられたる。むかひ見る杜良(もりよし)の嶽は蝦夷の淤巨斯黎(をこしり)のごとく、姫筒岳(ひめがたけ)は科野の國黒媛(ひめ)山に似たり。近き森山、及鷹岡山など峯に尾にひきつらなりて、水海、しほせの沖もせにそさし出たる。日もかたふきなんころ、比詰(ひづめ)といふ山里に知る人あり、いざたまへ、ことし餅参らせんとて人のいさなへば、この老花(をひはな)の坂をことみちへ入ぬ。梢けしきはみておもしろき山路也。

のりて行駒のひつめもこゝろせよちしほはつしほ峯のもみち葉。

比詰

この山里に、比詰五郎のいはれもやあらんかし。しかいへる村の名は、陸奥、出羽にもとも多し。二井山といふ奥山里のあり。馬生野目、荷澤などいふやかたの、木の立る中よりこゝかしこにあらはれたり。なにかしといふあるしのもとについて、ゆふさりのものくひはつれば、屋戸のくまに集りて衣うつ。

山賤の露分衣けふほしてこよひはやとにきぬた擣らし。

火臺（ひで）とうだして松の火あか〳〵と照らし、そのめぐりに女ども居ならび、ふときいとして、てゝらやうのものをあつ〳〵とさしぬ。壁にきり〳〵すの、さむけなる聲を枕かみに聞て、

　なれもかくつゝれさせてふこゑそへて麻苧のいとの長き夜を鳴く。

やはら更たり。

火臺

廿五日。朝霧ふかうこめたるさむかぜやまの麓をたどりて、金川ノ羽立（かねかははだち）とてちいさき一村に出て、左に雄猪鼻の崎、右に金河の浦を見やる。東泉寺といふか、杉群のうちにやねのみそ、波よるきしに見へたる風情ことなり。此かね川も、小橋よりして船川の浦に至る。風の三郎の社あり。かのかざかんのまつりある、みつの柏をなぐる宮居をやうつしまつらん。舊（ふる）舘とてあとあり。城介實季につかへし、舟川左近といふぬしの栖みつるよし。いつも、かんな月はかり澳に神鳴りひらめけは、是なん魚集（いはつめ）といひ、けふ漁待（こりまつ）とて、霹靂魚（はたはた）のより〳〵をかぞなへて網曳せり。そのころは荒る磯回にひし〳〵と魚舍（なや）たてならへて、其漁（いさり）の海士の酋長を村君といふは、もともふるきためしにして、松前の鮭のあびき、津輕の大口魚（たら）の鰭囓（ひれく）ふ泉郎にもありき。（天註―ひとつ舟にあまたの泉郎のりて、おのれ〳〵が網をたき、誰れかれと魚をましへおくに鱈の十二鰭とて輪尾、舌尾、高砂などあり。その尾とちを囓み、歯形付てしるしとせり。それなくふとはいへり。）としことに、神空にあれにあれぬ。かゝるこゝろをもて世に、はたゝがみ、鰰雷（はたはたかみ）と

金川の羽立

船川の浦

鰰漁

鰰雷

ぶりこ
増川の浦
稚兒の廟
頭殿八幡宮

やいへらんかし。この魚のはらめる子をしほり出し、これを雷子といふ。そのぶりこちふものに、牡神魚の腹なる白子てふものをしぼりかけて、うなの潮水をうち洒けば玉のごとくかたまれり。それを廿はかり繩につらぬいて、念珠のかたちして、その名をつなぎ不離子といふ。磯べの岩間、あるは藻くずの中に附たるをかいあげて拾ひ、おなじさまにつなきぶりこともせり。又おしきふりこちふものあり。松前の凝餅子のごとく、土佐滑紫菜のことし。是を繩につなぎて賣る。此神魚の漁は、岩楯、八森などをはじめ、此船川、北の浦にこそわきてにきはゝしからめ。「雪の鰐田路」といふ日記にものせたれは、つはらにはいはじ。比良澤といふ浦をへて、箕嶋、大嶋といふ巖の見ゆ。やかて増川の浦につく。小増川といふに寺の見へたり。此あたりに千鳥、しは鳴うちむれり。浦人の云、鵆もそれ〳〵に品の多かるものにて、鳴聲もおなしからすなど、けにこゝろある海士の物語そせりける。

鳴千鳥しほせの浪もたちそへてなかめいやます川のへの宿。

礒邊に、榎一もと生ひふしたるしたに舊塚のありて、稚兒の廟といふ。その齢八十あまりたりし君を、こゝにしかかくしまつる。その御衣と太刀なとをひめてける祠を、頭殿八幡宮と齋ひ奉る。その堆のほとりより、みやつこか掘出したるとて黑塗の木履あり。はた、くさくさのかたある硯あり、その裏に宮君麿としるし、左に八月七日幼少之時戯書とかいて歌一首

尾名川　臺嶋　中山の椿　椿の名所

とあれど、その歌こそ見へね、そのかたはらに「幾年形見筆之跡不覺染筆拭涙巾者乎」とぞありける。これをもてながめによみなさば、「いくとせのかたみなるらんふでのあとおもはす袖のぬれもこそすれ。」しか此こゝろかなひなんや。さすらへ給し君にてもやあらん、そのよしをしらじとなん。大塔の宮といへる人あれど、まほとも得こそおもほへね。この八幡の社は、享徳四年四月のころ、安藤太郎平泰春の建られしとなん。しはし浦つたひして尾名川のやかたに來けり。堂ありて、圓仁の作らせ給ふといふ十王のかたしろをおけり。臺嶋の浦といふを見やる、おもしろし。こゝに王餘魚の形なせる岩あり。この浦輪にも、水江の浦嶋か子の物語を、木曾路なる寐覺の床、あるは津苅の小浦、大浦にひとしう、海士の子がもはらいへり。山の九曲を、なから下りなんのなかめいとよし。椿の浦といふ、そこに中山とてちいさき磯山あり。それにこと木はまれに、椿のいと多く生ひしげれり。津輕の郡に在る比良内の田澤といふ浦にも、磯山のふたつまて、こと木はさらに一もともあらで椿のいや生ひしけりて、花の盛なるころは朝日夕日のさしかぎろひ、浪も紅に染渡りておもしろきところあり。おなし津刈の、深浦の湊に近き弊奈志の崎の寺嶋のこなたにも、椿碕とて、大岩のいと高く立るあら磯の岩山あり、椿權現とて神の在す。そこにもむかし椿の多かりしかど、一とせ雪のふかゝりし年に、鹿のむれあさりて此椿の葉をはみ枯して、年ふる木は、やゝ七

陰陽門の神

椿村所々

雙六の浦

土毛黒海苔

もと八もと斗浪かゝる岩のあひに生ひ立、さゝやかなる椿はいと多し。此出羽の八森山に近き浦を椿とて、むかし、磯山かげに椿のひし〳〵と生ひたりし物語あり。こと國にもおなし名そ多かる。三崎山のごとく、椿は海邊に生ふてふものにや。海石榴のから名も聞へたり。伊勢の國なる椿明神といふ神の在にひとしう、みな神といはふ。此中山も、陰陽門(めをと)の神とていやまひまつれり。そこに水渟の岩あり、苔の深うむしたる石の墓誌めけるものありて、おきつきのことし。さりけれど、のぼりまうつればたちまちにはやち吹おこり、雨のいやふり、海のいつもあれにあれぬれば、いつくしう浦ののりありて、人ののほらん事かたし。弊奈志の浦にもさはいへど、たなつものをさまればよちのほりまうで、はた、多かる葛葉を苅りて馬艸とせりけるためしもありつれど、此浦には、ゆめゆるさゞるならはしとなん。中山のきしにいと清き泉のありて、行かひの人むすはぬはなし。路のかたはらに石の堂のありて、あやしの佛そおはしませる、是をも圓仁の作らせ給ふと語る。村はしに白岩とかいひて、頭茸(まゆたけ)のなりいつるがこときたき大岩のたてり。雨と潮(しほ)とに沾れて色の青はみて、こゝに見ゆてふ。深浦の布子の灣(ま)より入りなん碕にも、おなしさまにいふ、おなしすかたなせる巖のありき。雙六の浦といふに來(き)つ。そのむかし、泉郎(あま)のとまやど四五六ありてぞ、いひそめたる浦の名なりとなん。うちむかふいはむらを花江の碕といふ。此あたりに在る御幣嶋の黒紫(くろの)

小濱の浦
魚名卿後胤

栞とて、冬ふかく採りて、此浦の土毛として村君奉るとなん。いつらもなかめいとおもしろし。尚、花江の崎の見やらるゝにおもひ續きたり。

　綿つみの神のかさしかしらにきてなみの花枝は折るとしもなし。

岩のはさまを通ふ路あり。めての、大岩を穿うかちたらんやうなる處に、片ひさしかけて堂として、西の國の寺めくりのぼさちたちを置たり。かくて小濱の浦にいたる。村長義右衞門といふは佐藤を姓として、寶龜九年のころ内大臣たりし、藤原魚名卿の後胤たりしよしをいへり。近き山かけのやかたに百川といふあり。そのころ參議藤原百川なと、おなしう光仁のみかとにつかへ奉りし人とらさおもへば、そのゆへもやあらんかと、ふとおもひそゐはしたる。くれ近うなれは、こゝに泊りをさだむ。

廿六日。つとめて、雨風つよけれは出たちなんことのやすからて、外のみをあふぎつゝ海の面もくれ渡りぬ。波あれて、夜とともに寐られねば、

　風あらき浦の小濱のなみまくらうちもねられす明む此夜は。

やはら、ひまのしらみたり。

廿七日。つとめて雨風のをやみなう、夜へよりは吹もまさりぬべうこゝちぞせられたるに、あさらけき鱸つり來て、これなんゆふべのまさなごとにせんなど、なさけ〳〵しうなに

蔓藻と衣祇須

琵琶の面

鹽湍の岬

龍藏か瀧

門前の浦

くれと聞へて、此軒のした浪のうちよする蔓藻ちふ、弓弦のこゝき、から名は海髪とかいふもの、はた、衣祇須とて石花菜にたくふものを汁くささせり。

海士ころも八重のしほ風浪越へきすゝきつる雄の着つるものうさ。

とおもひやられたり。ひるつかた晴間のあれば、此あまばれにとて、軒の小坂をのほり琵琶の面といふ磯におりつ。岩のすがたもなへてならず、離磯より波のうちかくるか、さと散りてはきよるなど、又たぐひなう見そやられたる。琵琶の眼とは、四の緒琴に似たる巖のあれば、それがこゝの名におへりとなん。岩毎に作りなすとも得やは及ぶべう。波は、しらぎぬをちむらはかりも風の吹しくやうに、千鳥は冬の空かと聲さむく汐に鳴たり。

むら衝浪の緒すけてひく琵琶のめててや汝れも寄せ皈り鳴く。

荷磯つたひして行に、目をおとろかしたるは鹽湍の岬也。葦にもこと葉にも、なか〱のなかめにこそあらめ。海越に見やれは、御寺の切檣、あるは堂の軒端なとも、はつか斗、木の茂りたる中に見へたり。磯の巖はみな高濤にうちかくろひ、うちあらはれたるなとおかし。夕風にしぶかれて落るを龍藏か瀧といふとか。見る〱、あやうげに海に臨たる岩面をふみて、山越のみちして往來の筋に出れば、門前といふ浦になりぬ。袖垣に衣打かけてほしたる。

泉郎もさそからきしほせの沾れ衣ほしてこよひや礁うつらん。

本山永禪院

開基圓仁

赤神山日積寺

姿見の井

五社

小橋を渡りてかやぶきの堂ひとつあり、なにのおましにてや。飽海郡の落伏(をちぶし)寺、陸奥の黑石寺にひとしう、そのつからなれる石をたゝみて御坂とせり。これも一夜のほどに、鬼の集りて築(つく)るといふものかたりあり。つたへきく、景行天皇の御代庚辰の十とせのころほひ、淡海の竹生嶋におなしう、涌出たりし山とそいふめる。紀の國熊埜をうつして新宮、本宮になずらへ、金胎ふたつの峯として今眞山、本山といふ。圓仁大師、仁明帝承和四年のころ唐に渡り、その國の宣宗皇帝の大中のとし皈り、文德帝仁壽のとし、此山に行ひたまふて天台ののりをもはらとし、赤神山日積寺永禪院といひ、近き世となりては眞言にうつりきとなん。そのむかしには自寂院、仙壽院、印象院、圓月院、照光院、泉光院なとの寺々も多かりしかと、いまは吉祥院、長樂寺のみそ殘りける。大門の二王は雲慶の作れり。はたいふ、石塚季滿、女川景季、元龜のころ門にすりを加へられたり。樓のおほがねは明德三年に鑄けり。多寶塔は元德三年に、秋田咸季の家のこ高季の建り。食堂いかめしう、蓮生る池の面になからばかりさしいたして作り、中嶋のさゝやかなるに辨財天女の小祠ありて、松生立るなと風情ことなり。藥師佛、不動尊、地藏大士、普賢、十一面菩薩、釋迦佛、千手ほさち、あるは、うちとの御神垣あり。坂はる〲とのほれば姿見の井とてあり。この水鏡くもりて、まほならぬ形のうつれる人は、命の長からさるの水のうらとひそありける。五社とてならび、いつはしらの

神を齋ひまつる。この五のかんみやしろはみな萱葺にして、その作りなせるふりすら、いまし世のさまとはことにして、いにしへをしのふ。ふるき櫟栗（うつはりふせ）に、建武二年には阿倍咸季、はた貞和六年のころは（マヽ）　應安五年に高季のすりそ加へられたりける。赤神山は漢武帝の廟たるよしをいひつたふ。かゝなへておもふに、あかくにの開化の帝、山外のくに卒川の宮におましましけるころ武帝祚をふみたまひ、としの號（な）のかはりて建元とあらたまる。さりければ、漢の建元のはしめよりはふたもゝとせを歴て、景行の帝やあれ給ふらんかしとおもふ。もとも、景行の帝の御代になんひらけし山に武帝のいたり給ふや、仙のちゝはおはし給ふの帝にてといへど、あやしう、そのゆへのうたかはしかりき。やつかれおもへらく、あかみかとの養老のとしの始しはす丁巳のとし、渤海國の人、鐵利國の人、なへて一千百あまりも、あか國の帝のみいつくしみをしたひ奉りて來けるを、出羽の國に置て、衣糧（きぬかて）をたうはりて還し給ふとなん。ちゝあまり入りみちてすめりし、渤海、鐵利の人とらなとの齋りし神にや。はた、おなしこの山なかに、崇神の帝の御代ならんか、五百（いほ）まりの童をいざなひ亂れを避（のかれ）んため、不死の藥採り來（こ）んとて來りし秦の徐福か甕とてあり。又大保田といふ村には、天漢元年に匈奴にいにし蘇武の堆あり。越の國にもろこし船の來るころはひ、つぬかあらひとの來り、任那（みまな）人もそのくにつものを貢せしなと、ことくにうどもいたりいた

齶田浦神とは此赤神か

蝦夷恩荷

大社ともいひしか

西明寺道崇の歌

れば、そのくにの人さら、そのみたまをいはひまつりしものにや。この神垣こそ、齊明帝四とせの夏戊午の四月（うつき）はかり、阿陪臣比羅夫、もゝやそまりのふないくさを率て蝦蛦を伐せ賜ふ。齶田、渟代のふたつの郡の蝦夷等、をそりをちてしたかひ奉らんさまをす。さりければこゝにたゝかひをとゝめて、船をあいだの浦につなきたまふ。齶田のゑみし恩荷（おが）すゝみて誓（ちかごと）していふ。みいくさのために弓矢をもたらず。やつこらがひとゝなり、ものゝしゝむらを食ふかゆへにもてり。みいくさにむかひて弓箭を儲けたらましかは、齶田の浦の神知りなんと、きよくあきらかなるまこゝろをまをして、帝につかへまつらまくといふ。よて恩荷に授るに小乙上をもてし、渟代、津輕の二郡のみやつこをさため給ふなとのふることをおもへは、この雄鹿や、恩荷の栖家せし浦にて、その名殘りなん。齶田の浦の神しりなんとちかごとせしは、この赤神にてやあらんか。（天註——此齶田の浦の神といふを七倉の天神なりといひ、はた渟代の浦落合といふ所にむかし神あり。そこなん海となれり。今その神を八幡とて住吉の社のかんざれにて在す。此御神をもいひ、赤雄鹿の赤神をもいへらんものか。いつらをさためなん。）渡嶋、今いふ松前のひんかしの浦に、白神といふあら鹽の潮の彌百路（やほぢ）に神在しませるも、赤神、白神とならび給ふのふたはしらにや。（天註——松前の東にしら神、西に赤神といふ浦のありてその神在す。）はた、あつまかゞみにいふ、維平、小鹿の大社、山毛、左ッ田（天註——山毛は山矢をかいあやまれるにや。山谷とて志加渡の浦にならひてあり。左ッ田は猿田とて鹿渡の浦の山陰に在り。）のほとりに馳せむかひて防き戰ふなとかい聞へたれば、此みやところを大社ともいひしにや。西明寺の道崇入道も至り給ふにや、「鹿な

らて通ふみちなきあらいその雄鹿のちしまそあはれなりけり。」はた、「小鹿鳴浦のとまやの夕けふり戀しき人のかけやへたてん。」此ふたくすを、こゝになかめ給ひしといひつたふ。

霧澤越

女はまうつる事を峯にゆるさず、霧澤越へといふ處より通ふ。むかし秋田城介信秀の母助安尼（天註――助安の栖るにや、楡山のほとりに御庵清水あり。助安を訛りていふにや。城介との、母の住しあとゝいへり。）この麓にて月のさはりありて、「心信は胸に佛のあるなるに霧たちへたつよこあひの道。」紀の伏拜（ふしをがみ）のいはれにひとし。そのころより、「霧澤を横會越へともいふとなん。

漢武帝駕鹿車圖

日積寺の庫にをさめつたふる寶物（みたから）いと多かるか中に、漢武帝の、鹿の車に駕（の）りて雲の中にとゝろかし、ひだんの轅のもとより西王母、ひとつの桃をたなこゝろにのせてさゝげもてり。五色の仙鼠、みくるまの四方にたちむれり。御せる鹿の怜角てふものを靈芝のさまに画（かけ）り。武帝仙となりて、その國をしぞきてこゝにとひ來ませりといひ、五（いつはしら）頭の鬼神をしたがへいさなひ賜ふが、五のかはぼりと化（な）れりとはいへり。さりけれと仙鼠を伏翼といひ、あるは蝙蝠といひ、又鹿を麋鹿といひもて、呂久のころのあればとて福祿のふたつになすらへ、もろこし人は吉利、字眼なとほぎごとして、壽像のたくひにはかならず鹿と蝠との圖（かた）を画（かい）て、或、吉祥草の意をもて靈芝なともかきそふるならはしは、吾國人（あがくにうど）の、鶴龜松竹の画祝ひとしてけるにひとし。いろとりなせるそのくさ〳〵の伏翼は、五色の雲車にやたくふらんものか。

裏書と画書

この画の裏書に、　以前表補繪　寛文年中に小

笠原氏、根田治部輔俊興、別當永禪院法印慧廣代。　奉表具寄進寶永元年甲子八月。　願主柏氏丹波圓　同氏金兵衞通　別當法印宥徳代」とありて、その匣の葢にかいなしたるは、羽州之西有大嶋。名小鹿本山。其形突兀而出海中。斷岸千尺如雙劍。倚天瀑布萬仭。似廬山。弄機藥草肥兩勝熊野峯頭。仙客成群怪葛城岳巓。可謂扶桑之絶景矣。昔年方士奏之。漢武帝幸于此。是則赤神權現也。今歳癸卯中夏之望。予從客遊彼佳山伏臨于滄溟。仰乘于涼風縱一葦之所如到于華嶽之大麓攝衣踞虎豹進歩。登虬龍止舍于本坊而奉拜權現之尊影。至信有餘欲寄進此神器也。經數日而金木漆膠之工終成矣。爰當山三十六世大阿闍梨法印圓明。予之俗緣師兄也。拜牌文以感慨彌深。因玆巳忘固陋賦小律一章而書此器蓋而已。　伏乞　照覽。　漢武乘車飛霓仙。　延齡妙藥滿山巓。　圓仁如在赤神祭。　鎭護國家垂愛憐。　寛文三年癸卯十一月吉日小笠原氏」とありて、「根田治部輔俊興記之」とぞありける。　はた、空海、圓仁の画せ給ひしといふ金胎の曼陀羅なとありて、見るへきものいと多かれと、ふたゝひ來て眞山の峯にのほり、また見ぬ山ぐまもわけ、また見ぬうら〱も見なんものとこゝろに契て、皈さは山坂のくら〱になりて、小濱の浦のやかたにつきたり。　更て雨しきり。

小濱

廿八日。　小雨そほふれと馬にて出たちて、見しところ〱もけふは雨の色にかきくれて、ことさらおかしきかたもありき。　日くれ近うなりて涌本の浦に來て、伊東大和の屋戸につき

涌本の浦

岩清水

浦田の賀喜石村

大保田村

蘇武塚

て泊りつ。

廿九日。こゝの山のとかけ、分見し寒風の麓に岩清水とて、いと面白の泉のありと聞て人々とともに見に至るに、いしたゝみのごとに、さゝやかながら水の清らかにして岸に岩あり。此岩のわれたるひまより見れば、うちに蛇のすめり。八蠣蛇(みつをろち)といふものにや。夏は、そのすかたを見し人もありつなど語り、休らひて來れは賀喜石といふ村あり。なへての名は浦田とぞいふなる。人の家の軒近く、路のかたはらに大石のふたつあり。この石の面に、ぬかりみちをふみ入たらんやうして、をさなき足形の付たり。手形もありたりしかと、石の碎れて、あしがたのみひとつ殘りつといふ。陸奥の宮城の郡の母子石にやゝ似たり。路はつかはかりも行は、大保田といふ村のあり。ちいさき庵のやはらの裏に、千佛像(ちゝのほとけ)をひしくと魚鱗(いろこ)のごとく重ねたるは、さゝやかのみほとけをもて葺たらん庵かと人見けん。めてに佛舍あり。此堂に、めてたきあみたほとけのひとはしらを置(おけ)り。宋人陳和卿なとや作りなしたらんか。あかくにうとの作るさまごもおもほへず。しか此堂の下には石のからうづの埋みありて、漢の子卿か戸をふかくかくせりといふ。郷人(さとびと)は、蘇武大臣とあやしく尊めり。ゆへをとへば、そのよしこそしらね五十とせのむかし、この堂なんあらため造り建るとて此村の人とら集りて、此したに、蘇武どのゝ骨のまことに埋みありけるものか、いざ見てんとて

蘇武（子卿）

鉏とり、鍬たてて掘あばきひらき見たりしかば、いと太くつや／＼としたる骨多く、そか中に、牙杖(やうじ)の如くさゝやかに細き骨すら、鐵筯(かなひばし)の重さそしたるなど、人々のなかにとしたかきか話る。蘇武字は子卿、そのいにしへ匈奴にとりかくまれ、書を係帛(きぬ)にかいて雁の足につけてはなつ。みかど上林にみかりし給ふに、この雁を得たまひて、武は澤中にありとしろしめしてかへさせ給ふ。以始元六年春至京師詔武奉一大牢、謁武帝園廟拜爲典屬國秩中二千石、賜錢二百公田二頃宅一區、とぞありける。蘇武、匈奴に在りて十とせあまり九とせを歷て、始元のころみやこにいたりしなどあれは、たくひなきそらごとゝは誰れもみなおもへど、

雄鹿と蘇武

恩荷(なが)の嶋山(しまやま)に武帝の廟ありて、その近となりなる寒風山の麓なる大保田村に、蘇武屋布(やしき)、蘇武墳とてありけるも、そのゆへもやあらん。此事のもともあやしければ、澁谷地(そやち)てふここなるをなど、たゞ一言(ひとこと)にいひけちて、はとうち笑ふ人の多かれど、あやしといふもさらなり。

飯森村

さりけれど、よしもあるへきことか。飯森のやかたあり。此村の寶泉寺は圓仁のひらき給ひて、むかしは天台の法り行ひたりしか、今は（マヽ）　の流をくむと、門の石に彫りて往かふ人にしらしむ。日は西の杉群にかたふけは、いさとて山路をへて涌本に至る。

三十日。けふはとて、こゝをたち出て船腰にいたり、岡田の渡りしてひるつかた天王の浦につきて、又鎌田のやとにいたる。



思荷奴金風



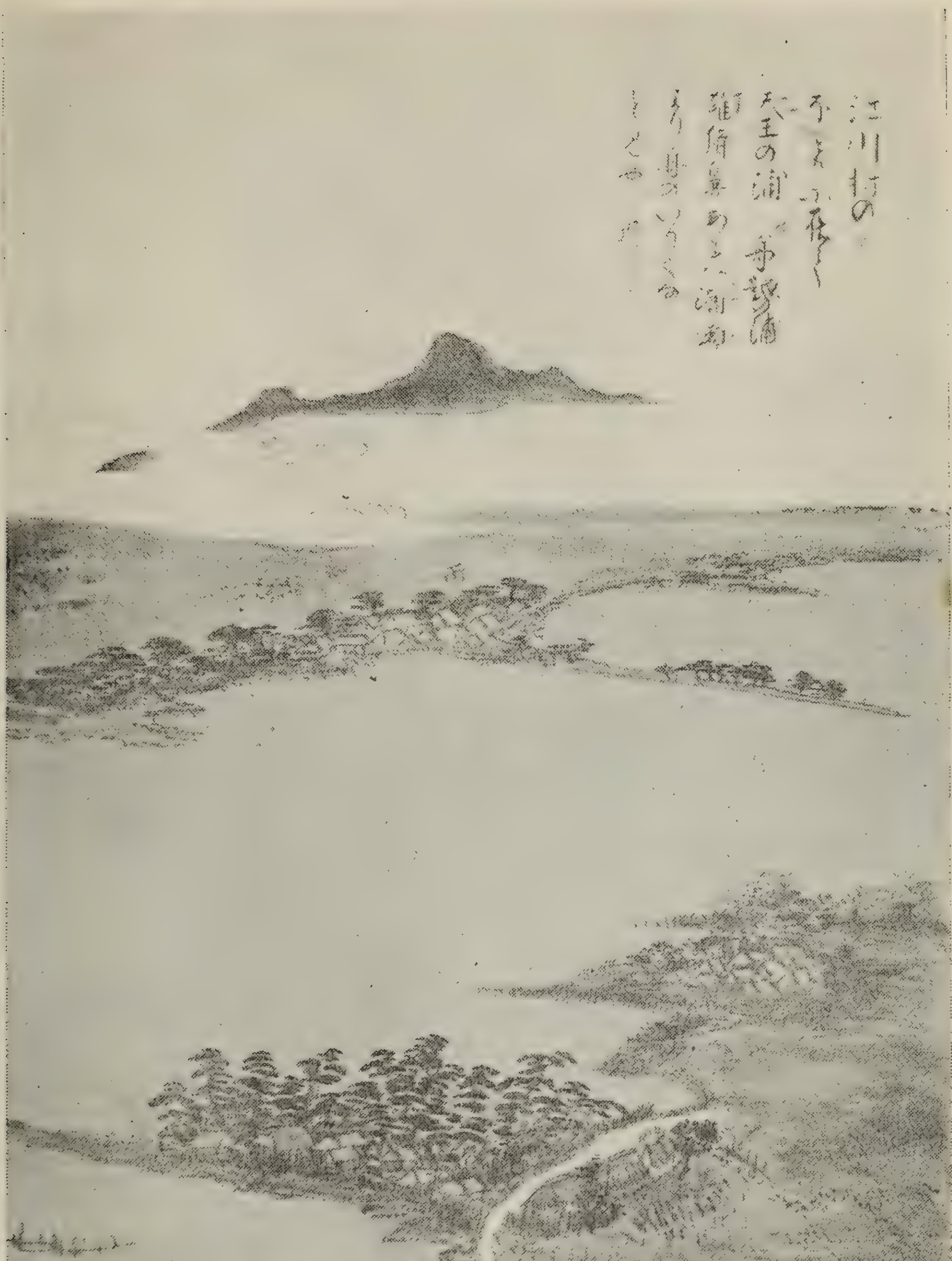


恩荷奴金風



恩荷奴金風











恩荷奴金風





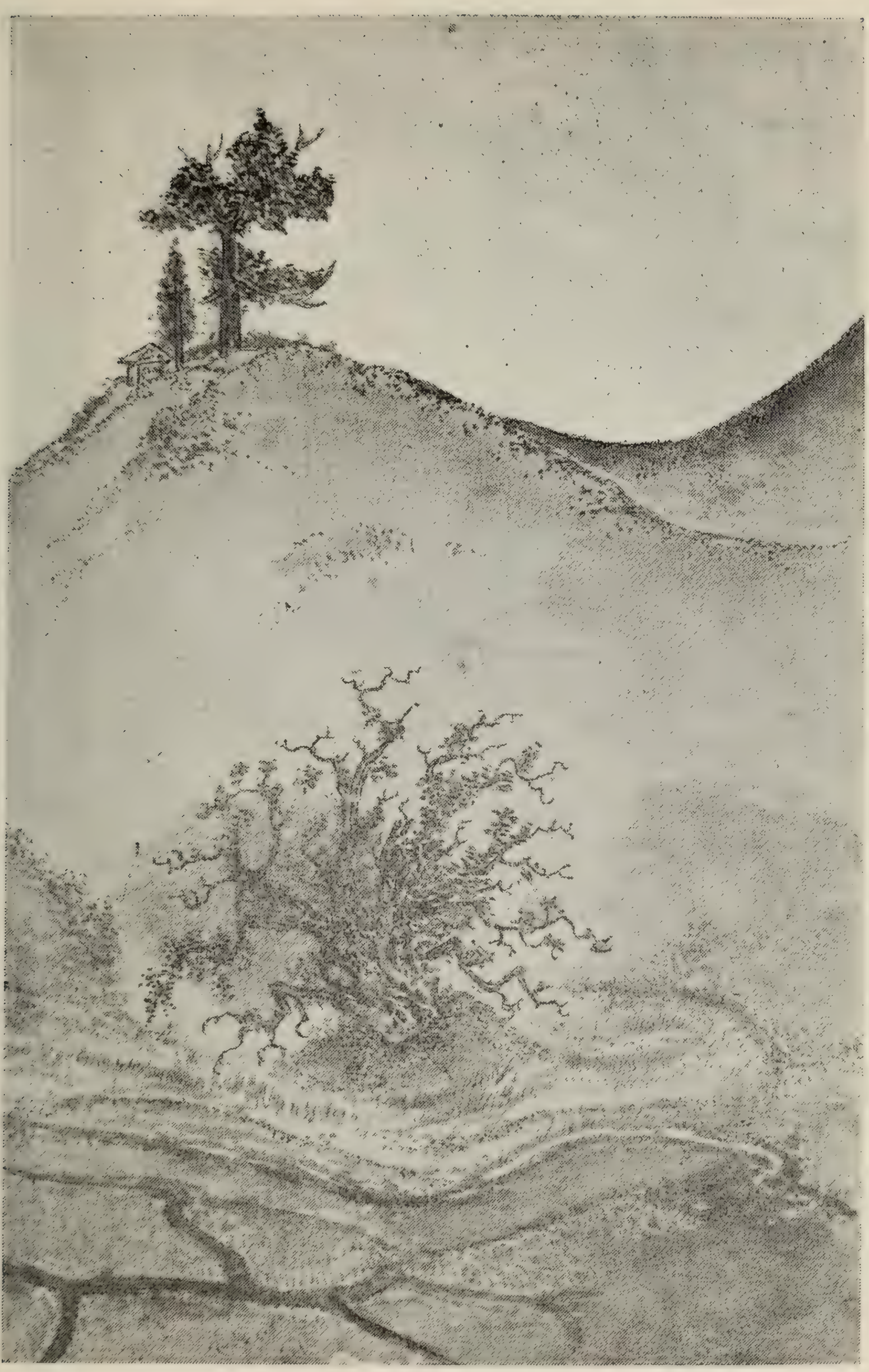


恩荷奴金風









恩荷奴金風











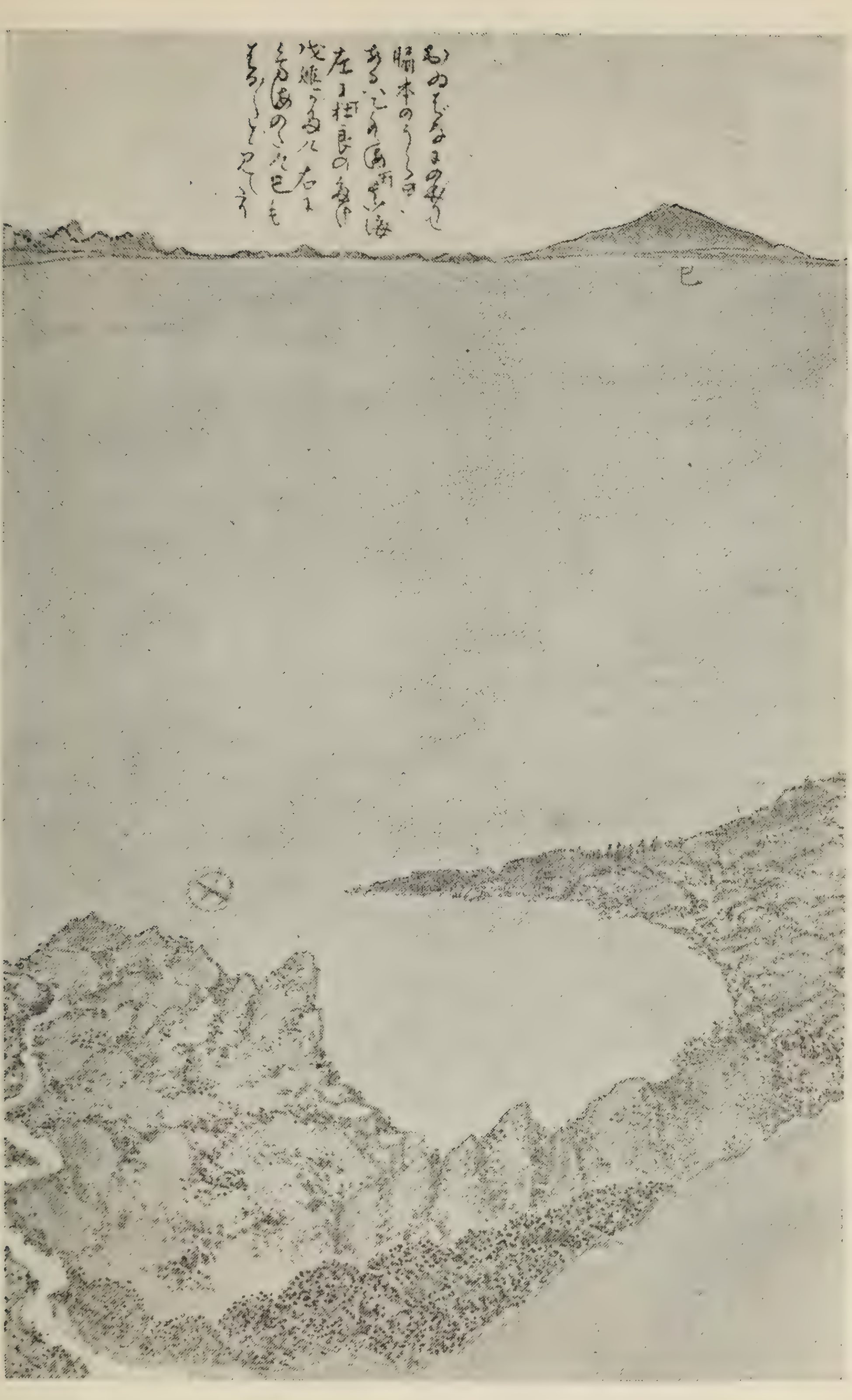
恩荷奴金風



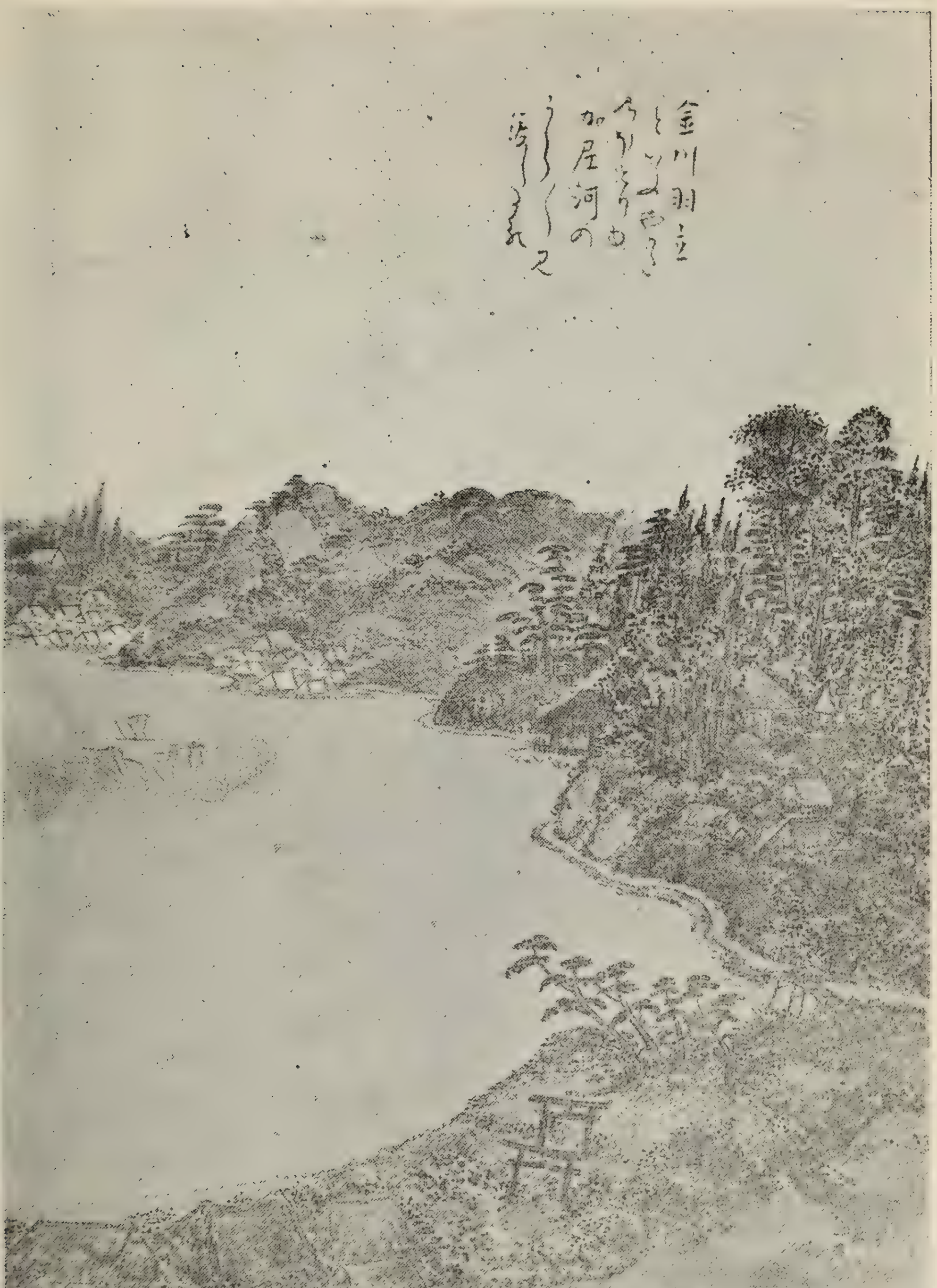










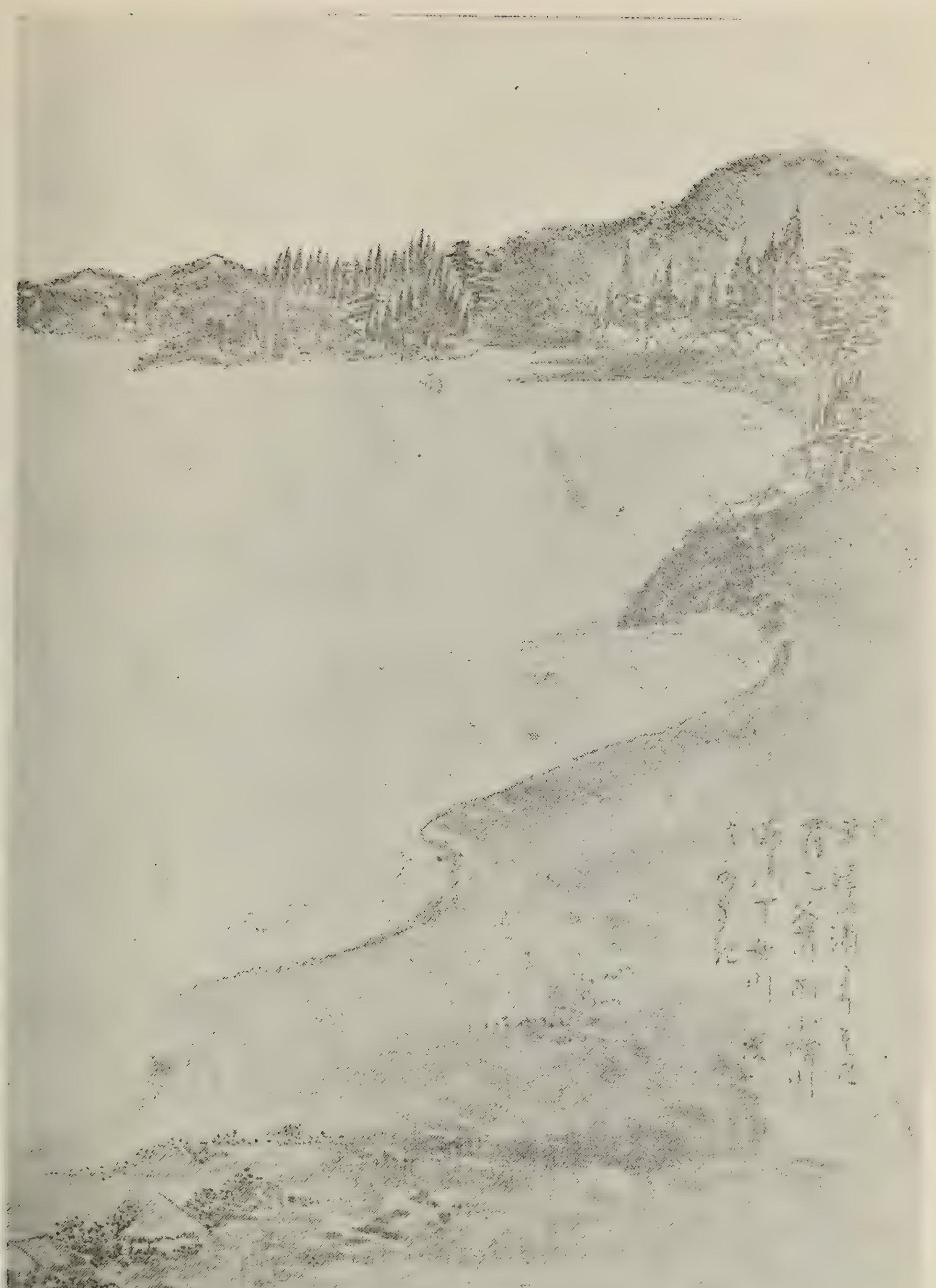








思荷奴金風









恩荷奴金鳳



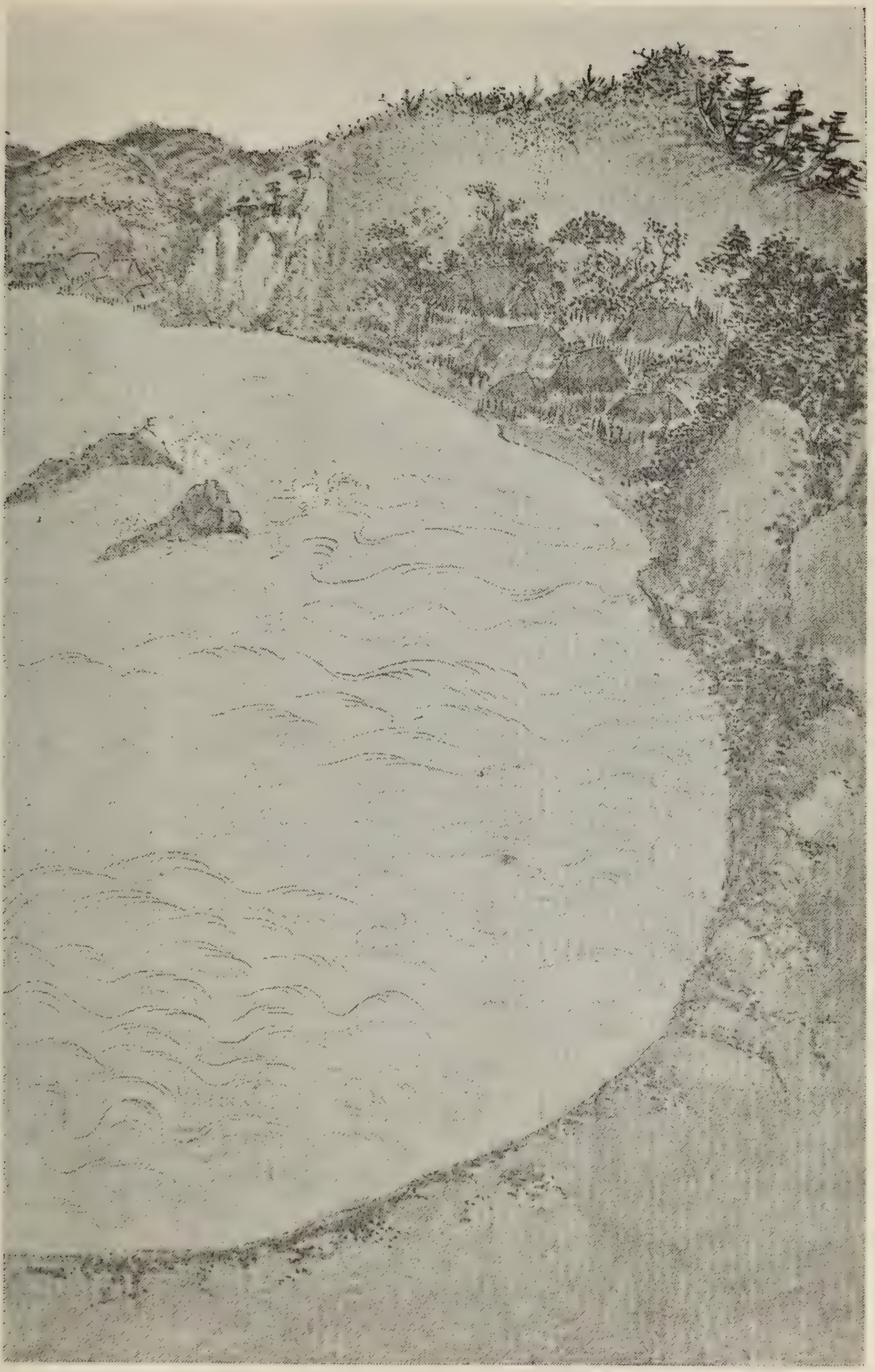
恩荷奴金風




此岩ハ都波企の浦



思荷奴金風





思荷奴金風

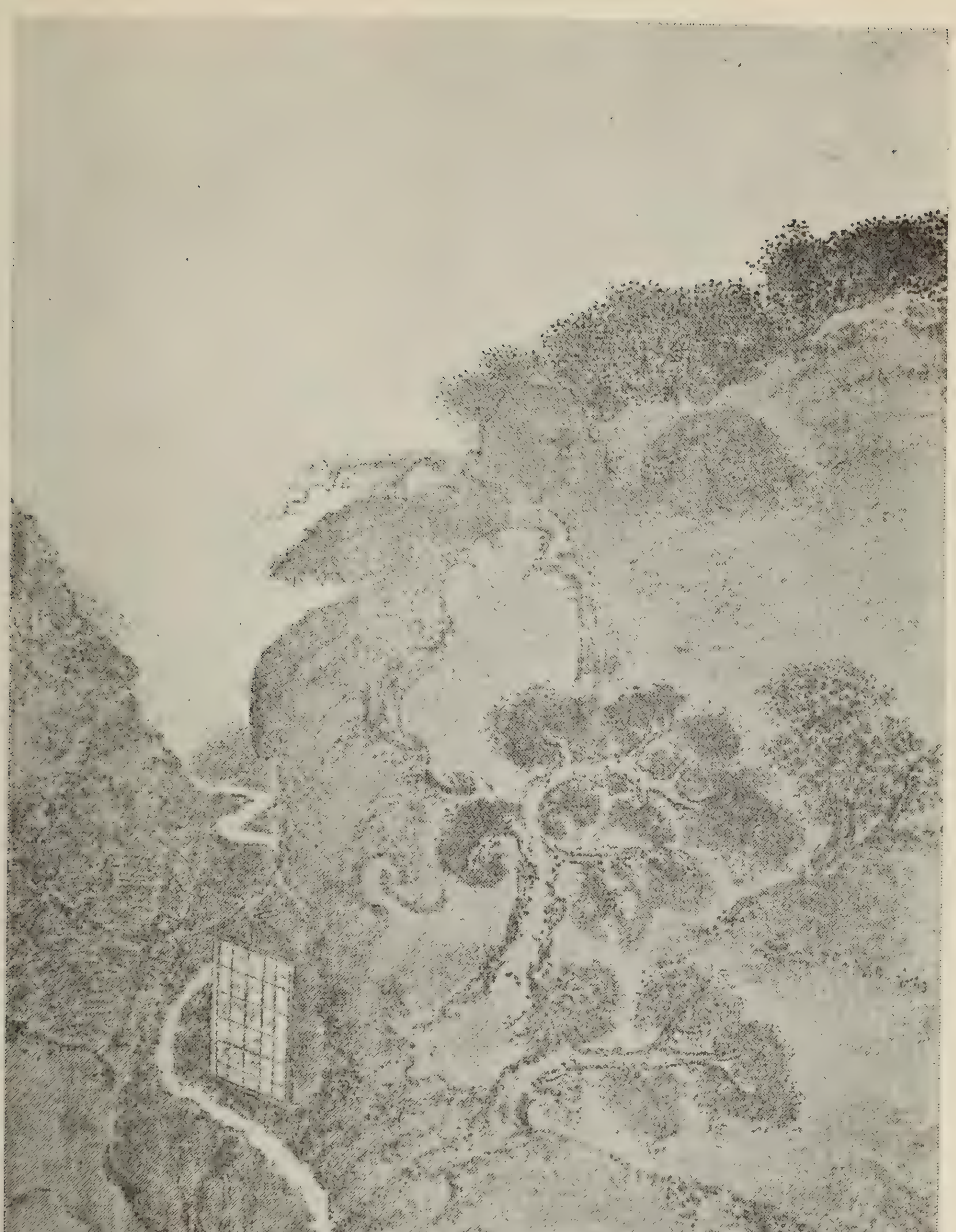


思荷奴金風















思満奴金風



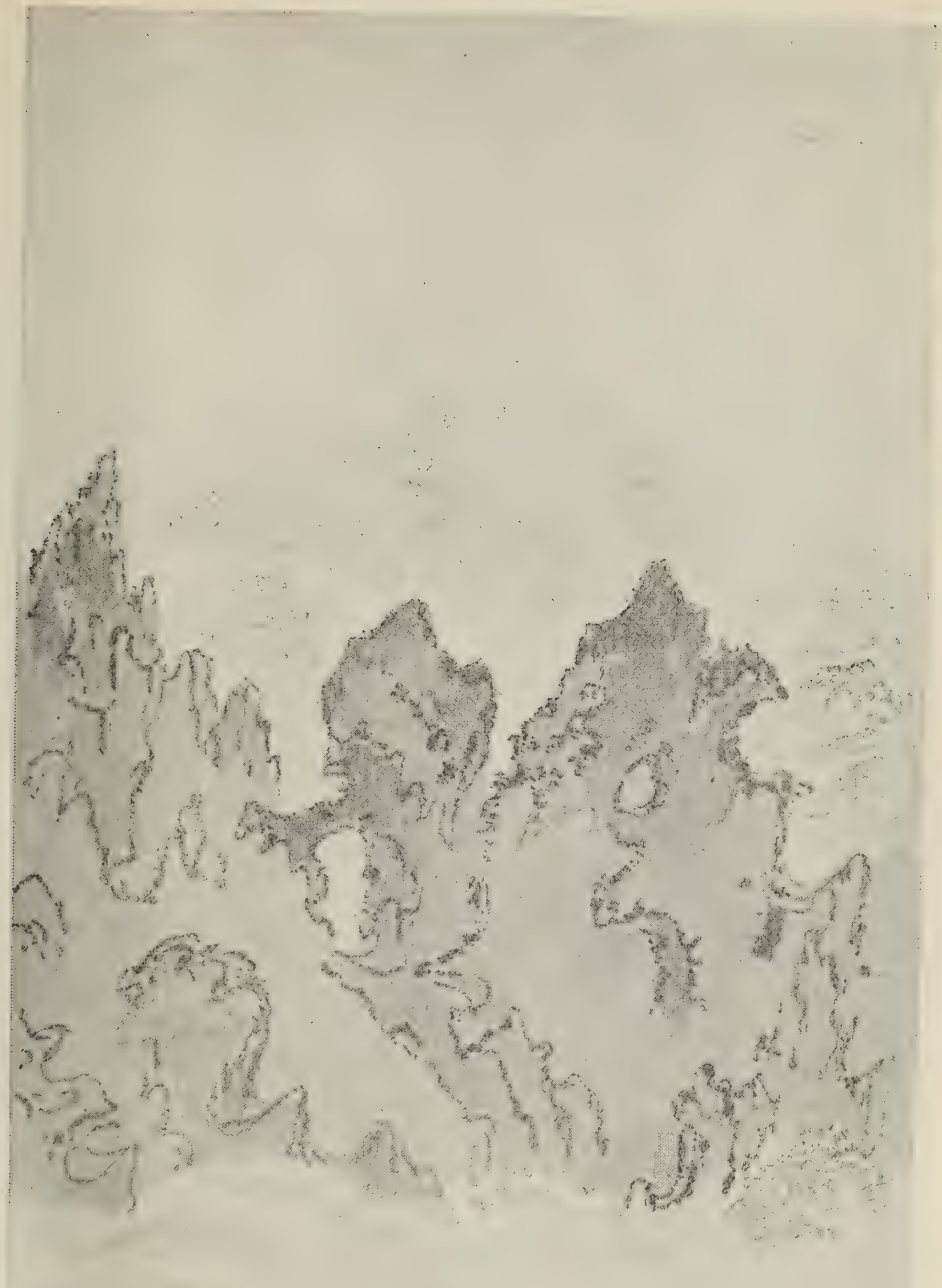
思荷奴金風





恩荷奴金風





恩銜奴金風





思荷奴金鳳















恩荷奴金風





拂戸村

加藤久三郎

穂新、穂架

根木

なかつきの五日。天王の浦なる鎌田の屋戸をたちづれば、あるしも、餘波にしはしとて送りせられけれはうれしう、ともに雄滷の渡りをして舟腰に來つゝ、ふたゝびとて加萬多を別れて、をがたの湖のあたりの野路をひとりわけて、拂戸の浦やかたにいたる。この村の加藤久三郎は、城介實季のしるよししたまふのころも家ふるき邑君にて、慶長のむかし、それが遠つおやよりの名をつたへし勘助にたうはりしとて、今も傳ふ實季のふみあり。「ふつと舟越有やうそのいて入候ふつと村之者申分をきゝわけ候前々のことくに有やう可致者也　慶長六年四月五日實季」とありて、花押そありける。そのほかはおなし月日に、秋田右近、大高又兵衞の手にて、おなしさまに國字してかけり。時もいま、田ごとに穂新、穂架てふものを、くろまちともいはず、ところせきまでおし立ならべたるが、はる〳〵とそうち見やられたる。水海の沖遠う、雨のかゝるやと見るかうちに一通りふり來れは、稲苅る乙女ら、あなかまと、ふりもてさはぎ立まとふ。

　おしね刈る袖やぬるらん浪遠く日かけのこりてかゝるむら雨。

此あたりの谷地とて、野良めけるところをいづことなう、根木とて杉の埋れ木、あるは、まきさく檜の妻手やうのもの、あるは槻、けや木、根こしてうもれたるをも掘り得て薪とし、はた、よきみや木もまれにはほりづれば柱とし、そぎたともせりけるとなん。遠きむかし、なへの

漢來木

福川村

角間埼

いたくふりて妻弖山（つまこひ）などのゆりこぼたれて、としふるこゝらの木どもの、しかつちのそこに埋れてそありけると人のいへり。うへも、千福より出る御物川（おものかは）のこゝに流れ、渟代の浦に落て海に入にし、むかしの河路もそことしられたり。此浦人のいふ。漢來木といふもの、まれ〳〵に薪（ねき）にまちりて掘つる事のあり。これなん沉水香ともいはゝいひてん。その音のたかきものにてなど、語り連て別れたり。こは、君か代に阿武隈川の埋木も、はた、埋木の心もしらず名取川、などなかめ給ふも、玉匣はこねの山の神代杉てふものも、みちのく田名部の掘（ほり）木（き）ちふものも、みなたくひのおなしうして、くにちふ國に多かるものか。福川村に來けり。つりするこゝらの小舟は、きしの柳のちりたるやうにいとちいさく、見る〳〵行ば、さとはやちの吹來て湖の面におち渡るは、さゝ浪や滋賀の根おろしのおちしきるにたぐへつへう。峯をあふぎ、ふしてむかへば、三倉（みくら）の岬（はな）も、「遙なる三上の嶽をめにかけて幾瀬渡りぬ八洲の川波」と、すんじたゝすみて、

眞帆かた帆見るまに過ぬ行袖もいや寒風の山おろしして。

角間埼といふやかたを經たり。なへて此あたりはつまこひやま、いまいふさむかぜのふもとをのみめぐり〳〵て、大方（おほかた）の淡海（みつうみ）をつたふ。やかた〳〵のしりには竹生（たかむら）しげうふしなびきたるに、木々はみな、はつしほのけしきばみて浦〳〵のながめいとよきに、森山と高岡山

とのあはひの雲間より、杜良が嶽のいや高う、よこほりふせるやま／＼はいくはくといふことをしらず、この大方の水海のへたに、みなひきつらなりてそ見ゆる。そのやま／＼のかげの、水の面におちかさなりていとおもしろう、風情ことなり。

鵜ノ木村

鵜の樹の村について、雨のいたくふり來れは泊もとめつ。人々とひ來て語る。此やかたのをさたる大淵なにかしのもとに、實季よりたうはりたる、みきやう書をそもたる。もともふりたる家にてと人のいふ。此大淵は、さるかうの笛いとよく吹きこへて、　君よりもおほんかつけものありつとか。

鮎川の瀧の頭

六日。こゝに近き鮎川といふ村の山なかに、瀧の頭といふおもしろのところあり。いさたまへ見せ申さんと、大淵のあるし、誰れかれ、なゝたりやたり野路をはる／＼と行ば、大岩の、峯より尾より谷そこまておち重りたる麓に、さゝやかの堂の有りて阿遮羅明王の在せり。棟札に、別當箱井村尊重とあり。をがみとのはいさゝか下つかたに、ふたまはかりなるを石の上に建つれは、こゝらの石間を水のくゝり、堂のした、をかみとのゝ板敷の下を、沸き なかれ出る音のすさましう聞へて、

　ぬさとりてはらへは拂ふこゝちしてたきちなかるゝ山河の水。

寒風山後背

こゝも、寒風山のそひらなる山のなからまでに、こゝらの大石の重りたるは、三野の國赤坂山によちのぼり見たらんにひとし。この石の多かるあはひごとに、藤山吹の生ひしげり、は

ひまつはりて、ことくさは多からず。春の末つかた、夏のはしめかけて花の眞盛のころは、紫の雲かあらぬか、こかね花吹みちのく山に分入るおもひすとなん。人々岩づらをふみよぢ、黒葡萄や採らん、出樣珊瑚をやとらんと、かつらをたぐり返しなと、あなあつとて衣ぬぎ水むすびて、をかみとのに入ては板じきふみならし、唄ひ戯れて醉ぬ。いさ飯なんとて岩群つたひ、みねにのぼり山脚にくだりて、尙多かる石ともの中に碁盤石とて、方なる大石の面のみがきなせるがごとく、ひちりめのごときかたまで、をのづからそなはりてあり。こは、仙人の來て圍碁ものしてけるところにてなと、かたりもて人々見たゝすむ。

碁盤石

　こゝに來てつま木こる雄かをのゝえもくちぬはかりに見つゝかたらふ。

日のくら〱になりて、卯の木のもとに皈り來つ。

九日。大淵のやとにいたれば、砌に嶋築り石立ならべ、山路の奥よりなかるゝ水を立岩の面にひきおとし、此瀧波の池の岸べに落かゝりぬ。

大淵氏にて

　咲菊の露もひとつにおち瀧つむすはゝ千代もふへき池水。

こゝに語りてけふをくれたり。

十日。大淵のもとをたち出るとて、甕に菊をさしたるを見つゝ、あるしのやとにかいのこしぬ。

堂村

本内村

福米澤村
瀧の本の管紘坊

きくの香の袖にのこりてたひ衣あかてきなれしやとはわすれし。

ほともなう堂村といふに來る。永源寺の扁額は大應和尙のかけりとか、いとめでたし。此寺の庭のくまに、康永三年孝子としるして、なもあみだほとけのいしぶみのあり。こは、こゝの山より掘出しとか。うへも四百とせのそのむかし、光明院の御世をしのふにあまれり。この石のうらなる所に、「雲折〱人を休ふ月見かな」といふ句を書て、はせをの翁のしるしとそせりけるは大淵氏なり。むけにきだみなして、こゝろなげにおもほゆれど、しかこの句堆をこゝろさし建んとて、ゆくりなうさかしもとめけるとなん。さりければ、いづらも世に光る時を得たらんものならんかし。松の木澤の一里堆は、いにしへの往復（ゆきかひ）のすちのしるしにや。本内の村にかゝる。坂中に櫻木いと多くありて、梢もみちたる紅ふかし。きさらきの花やはをよぶ、春も、とはまほしと行がてに過る。遠きむかしは蝦夷人やすみつらん。本内（ほんない）はポンナヰにして、ポンとはちいさやかなることをいひ、はた、ナヰは澤てふ蝦夷人の辭也。昔はすめらんかし。うべも、さゝやかにめくりたる澤こそ山のあはひに見へたれ。かくて福米澤（ふくめ）のやかたに來けり。むかし、こゝのやかたの山おくの瀧のもとにすみて、名を瀧の本の管紘坊とて、けうのけんさのありき。このうはそこ、かなたくみにまねひて飛泉に身をきよめ、百日のほと潔齋（いもゐ）をして鐵幢（かなはた）といふものを三ひら作りて、そのかなばたに三はしらのお

土鼻羽立　野石村　宮澤村　五明光村　漬柴

ほん神達の御名を鐫りて、熊野の社にをさめぬ。その社には、行基僧正の作れりといふあみたほとけの、朽木のごとくにておはしませり。ありしかなばたなん、今のこりてたゝ一ひらそありける。みつもゝとせのむかしの事となん語りつたふ。土鼻羽立、亦の名を獅子岬ともいふ。家(や)は七八はかり湖のへたにそありける。野路を經ぬれは野石(のいし)といふ村のありて、倘行に、ちまたのありて山路のあり。汐海のへたを行道あり。こゝの支村に猿河といふやかたのあり。そこに槌を神といはひ祭る祠のあり。そのよしやいかならん、とはまほし。過來つる加久万崎よりこの野石のあたりまては、さらにあら海の漁りも、水海のあひきもわさとはせで、田畑をもはらむねと佃りて世のすきはひとしつれば、あけくれ露のいとなう、なにくれとそは〳〵しうそ見へたる。行〳〵宮澤の松原あり、風情おかしう。こゝにみやしろのありて、五十鈴川のなかれをうつし奉るとなん。大平(おほだひ)の谷地(やち)とてひろ野をくれば、弓手に潮海、馬手に水海を見つゝ五味井子といふ浦あり。五明光といふ人あり。むかし、あぐたまじりの雜魚(ざこ)漁りけるより、それかもとゝして塵魚子(ごみいをこ)てふ事そはじめなる。子(こ)てふ文字を附ていふは方言(くにぶり)にして、くしなとこのめる人なとの、呉苗湖ともうつしもかゝば書てん。かの、さがみの金澤に在る能見堂のたくひにこそあなれ。村に入れば、水のみわたの長くうちめくりたるに卯津木を苅束ね、薦(こも)に包み、それに綱を付て引延(は)へて、湖の岸べにたゞへは

蘆埼の浦
義經の粟券
鈴木宗因

していくらも〳〵おけり。こは、雁爪のいたくかだみ入りたるを二三日、あるは四五日を經てひきあくること、みそ、よそよりもて、もゝあまりもつらねひく。是をわさにそせりける。これなん、こゝにては漬柴といへり。いはゆる、かの柴附にことならず。此あたりはみな、はせをの翁のいふ、小蝦さこを升てはかりてうる人の長にこそあらめ。かくて老泊をへて大谷池の野良ゆきて、蘆埼の浦になりぬ。姨御前の社といふあり。これなん手摩乳と申、三鞍鼻のいはやとの中に在るを、夫殿と唱へて脚摩槌の神を齋ひ奉れは、此浦より水をへたてて向ひおましましけるとなん。此浦はもとふりたる所にて、門馬莊兵衞といふものゝ宿に上祖より在りつ、九郎判官義經の蝦夷の嶋渡りし給ふに、みちのかてとぼしう借りおはしまし、粟の券てふものをもたりしといふ。そのゆへは、いまた牛若麿と聞へ給ひしとき、鞍馬山にまねびてけるをりしも、鈴木宗因といふものゝ、おなしあげまきのふみはらはにて、ともにまねびて、ふるさとなれば出羽の飽田、此葦崎に皈て住けるをとふらひ、よしみもとめて、むさし坊ともなひ來て泊りて、日を經給ひたりしよしをいひ傳ふ。その宗因か舊塚は、こゝの太郎作といふ泉郞のせんざいに在り。宗因てふ名は代々もて傳ふにや。ちかきころも鈴木宗因とて、手なとつたなからぬ人もありき。近き世に在りし宗因はその人にして、つみにしつみつるとか。塚なる小祠は、いつれの世の宗因にてや靈を祭ふらん。野路を

大口村
濱田
蓮沼
あらで

行て潮海のへたに出て、大口といふやかたあり。こゝに、もがさの地藏菩薩とて石佛のおはしませり。もかさいまたせさる童をつれ來て、このみほとけの前より、いしなこひとつを借りもてきて、是に小石いくらもそへて復(かへ)し、かへりまをしすとなん。濱田といふに暮て、彌三郎といふぬしかもとに宿かりて休らふ。男とも、ひるはひねもす遠き田つらに刈り暮て、その稻を馬におふせてもてはこふとて、夜の、うち更るまでもしと〱と蹄の音、馬揺ふこゑの、あとまくらに聞へたり。

浪遠く夜るはよるとていねつけぬはまたのおしね刈るのいとなさ。

人さたまれるころより雨のふりつ。

十一日。左にひなたながね、右に大曲のやかた、あるは萱刈(かやかり)澤のやかたを見つゝ、蓮沼といふ淡海(あつうみ)のごとき大池のへたに出たり。名にいふその艸はさらに見へず、勝又の池のこゝちそしたりけるよと、ひとりこちて、あないする男の髯の眞黒に、口のむく〱としたるを、しかいふ君がとうち戯れゝば、此男もほゝゑみて、荷葉はあしこに生ひたり。見たまへ、山の人とて、あやしのものゝ來てかけわたしたる土橋のあり、といふ。葦生ひたる中にかくろひたるあたりは、鴨の群れあさるを、けふるきせるをさしのへて、あれとてをしゆ。此野路は、さらにことくさのあらて、西王母賛(あらで)といふくさのみいや生ひて、青きむしろをふみ行こゝち

黒岡
福田村
淺内村
賀須

せり。此草を秣に刈る童あり、濱田かる女あり。

あけまきか露のいとまもあらて刈りおしね刈なり里のをとめ子。

成會の村をめてに、ゆみてのかたに遠からす黒岡といふやかたのあり。その岡邊には石弩のいと多く、柳葉、鬼面、鳥舌のたくひをいたすと語る。妻丐山の麓に出るにひとし。やはら大路を福田の村に來て、石丁を淺内の湖のへたに見なして、あなおもしろのところにこそあなれと見たゞすめば、あない、うんしかほつくりて、なにがこゝやおもしろからん。風のみはげしう、夜はさらにいねもつかれず。捨たる村にてなと語りつゝ、寒川といふやかたになりぬ。

秋もはや夜さむ河風身にしみて里にふしうきほとそしらるゝ。

と、くちつからあないにいひやりつ。内淺内といふ村へ行みちあり。はた淺内といふ村あり。行〱淺内のやかたになりぬ。こゝにも名たゝる湖のあり、へたをめくりて村々の見ゆ。此あたりは柴折り、つま木伐る山もなう、賀須といふつちくれのこときものを掘りあげて、日に乾て是を焚ぬ。河洲てふことをやいへらんかし。平鹿の郡の田村根子のたくひにして、みちのおく津輕の猿毛、あるは越後の谷地綿、近江の宇仁、須久母のたくひにして、尾張、三河路に在る岩木てふものとはいさゝかことにして、もろこしの、土薪てふものにたぐ

ふにこそあらめ。河戸川のやかたをへて、棒箇崎、長碕なといふ村を遠かたに見やり、大道に出て、出戸村より雨のいたくふりつれば、ぬれ〳〵て能代に至る。さば、いはし、すゝきよばふ、いをあき人におしまじりて、はつたけ〳〵、ぐみや〳〵と胡頽子あまた乙女らかうりありく。うべも、くみの木の原あり。いまた日のたかう伊藤ノ祐友のやとについて、あな久しとて語もて暮たり。

十二日。つとめて雨ふりにふりぬ。あるしの親宗因の翁、このころ病にふして、なにくれとこゝろすゝろにありきなと、あるしの聞へたり。

十三日。三とせのさきつとしの冬のころ、相かたらひて別れたる、相澤光武のもとにとふらひてかたらひ、

雪に別れ花におもひつこの三とせ月にわすれぬ人をこそとへ。

やはらくれたる圓居に、

これも又折こそまとへこよひ見る月の霜おくしらきくの花。

かくて更たり。

十九日。伊藤宗因の翁の、いにし十三日の夜身まかりける。けふ七日の手向とて、歌よみ、くし作りけると聞て祐友のもとへ、

能代にて

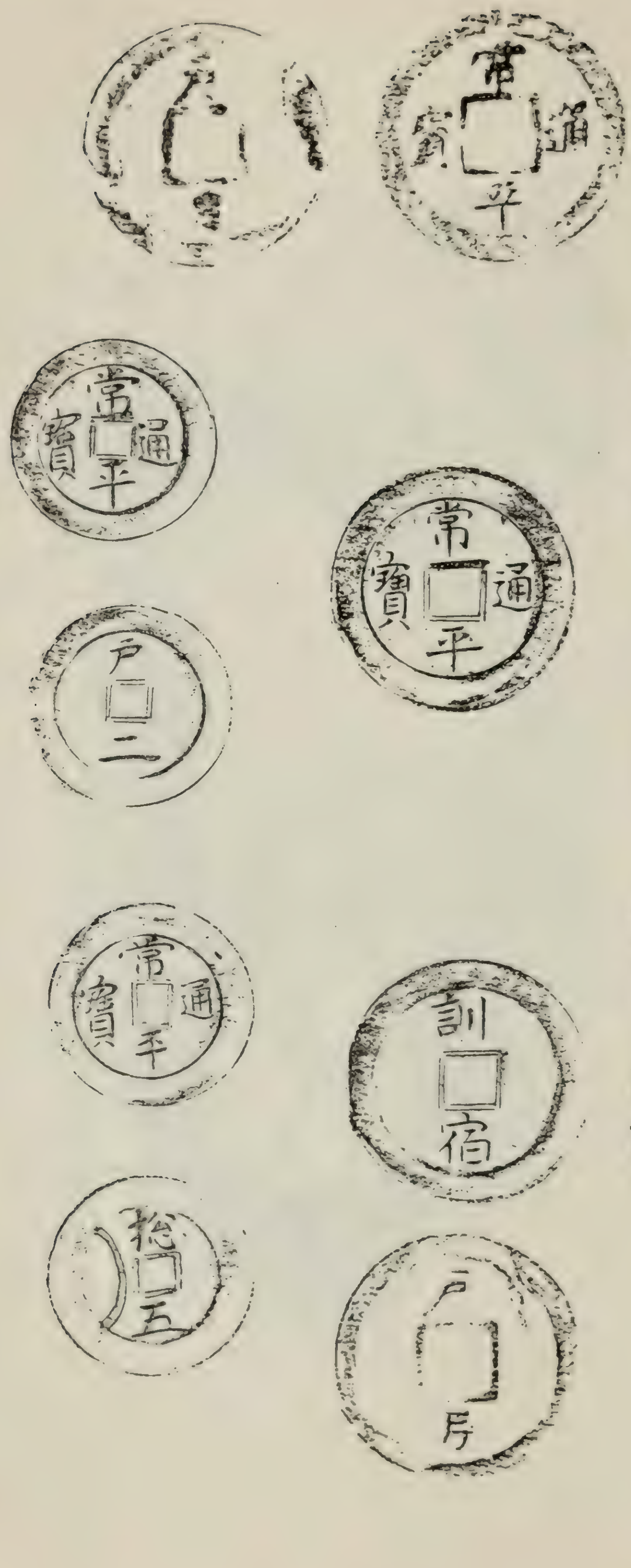
いとはやも老木の落葉冬またてしくるゝ袖をおもひこそやれ。

かくそいひやる。

廿一日。くすし照井象賢の庭の菊の盛りなるを、相澤光武にいさなはれて見に至る。嫩より生ひたてし初霜といふ名のなつかしう。

おきまさふ色こそあらねきくか枝の花のはつしも千代もふるへき。

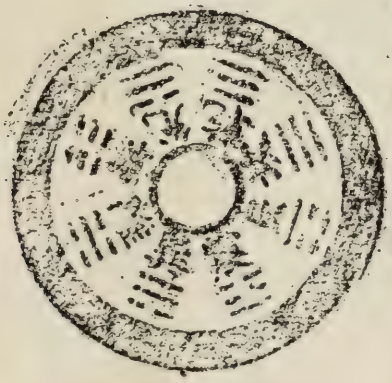
享和のころ雄鹿の嶼かにしの浦に寄來る舟のいたく
おもき家の梁ありて公に奉りしかちよき透達なる章の錢
多かりとなむところ〳〵にみえしなる常平通寶なり

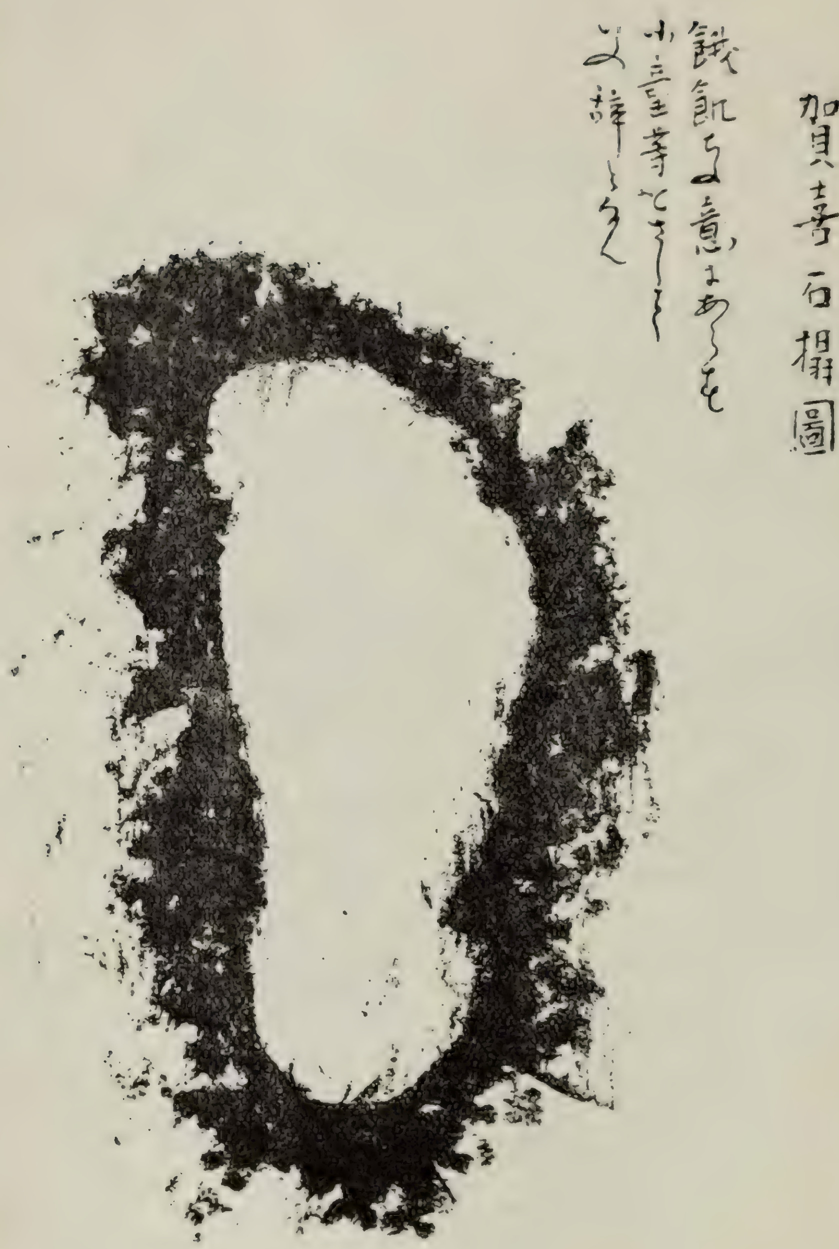


道巽の林子平の書る三國通覧よりその國常行の銭
と常平通寳といふ小錢十當二ともあり、けるそれをも
朝鮮の孔方にしてその字の無きもあれあまたやある
まろく大錢と得てそれのかたをゑさんておきぬ



雷霆殺鬼降精
斬妖辟　邪永保
神清奉
太上老君急々如律令勅

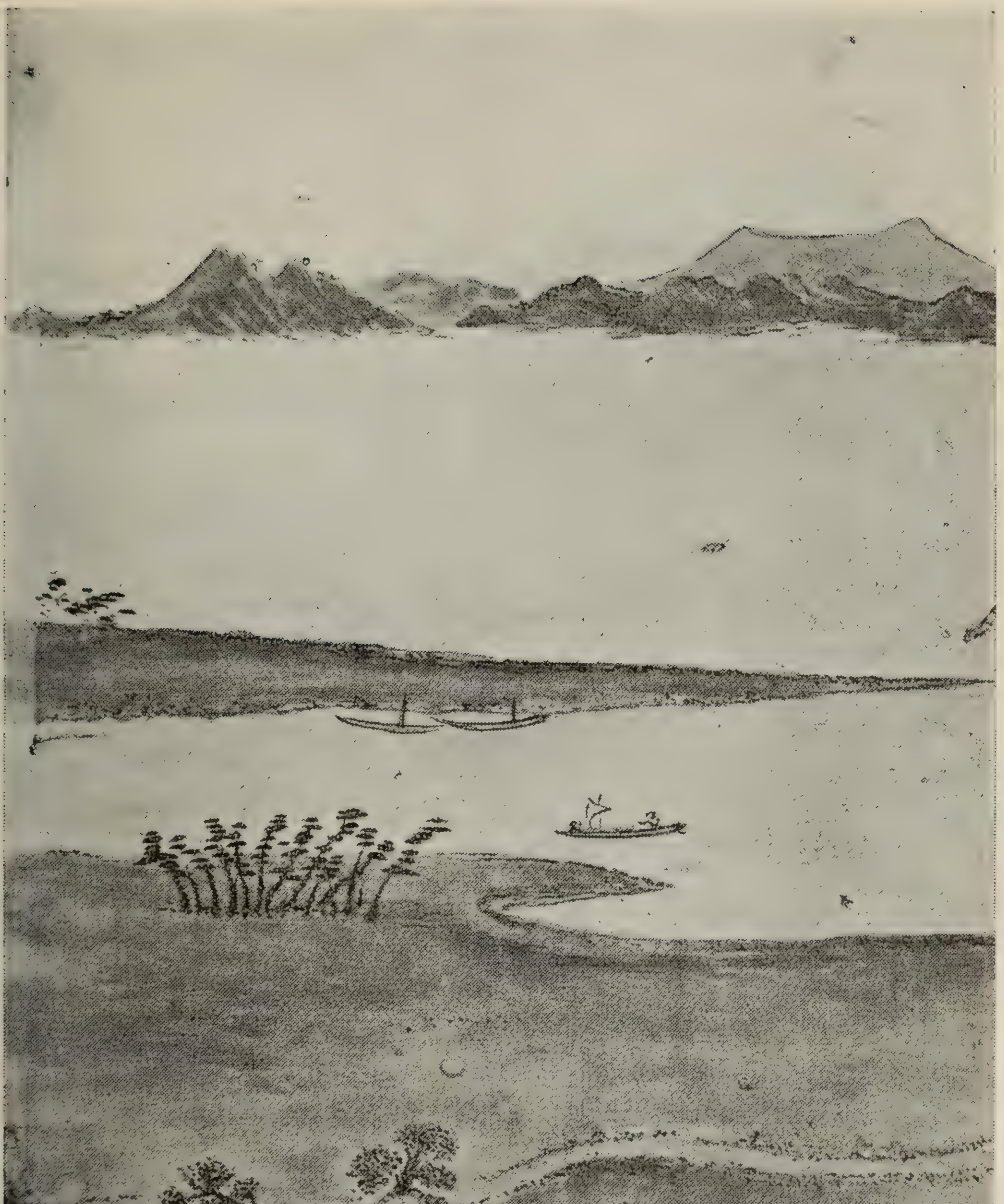



加賀喜石搨圖





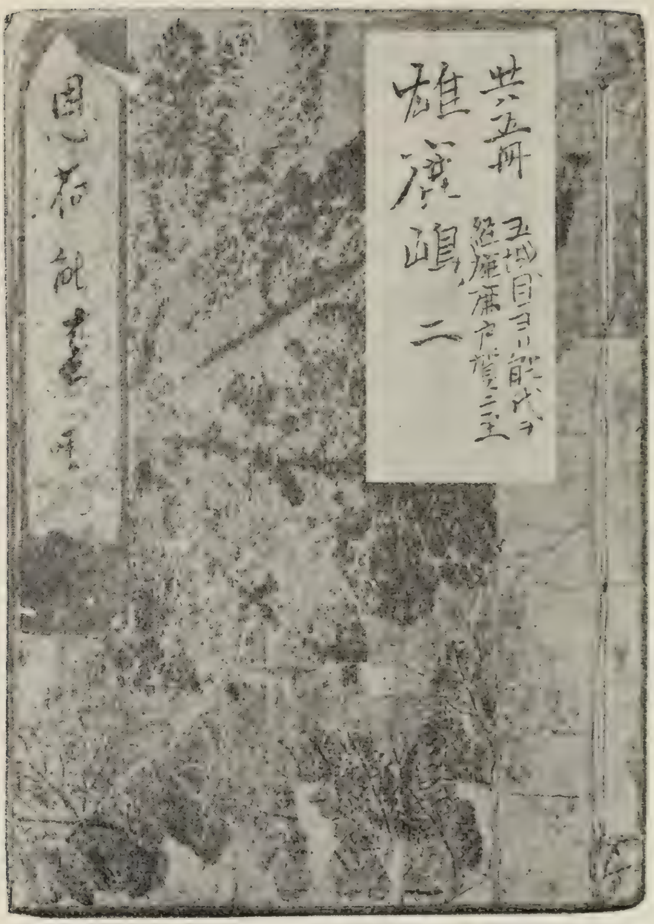
恩荷奴金風





恩荷奴金風

恩荷能春風



雄鹿乃春風

此一卷は、文化七とせといふとしの庚午のやよひばかり、秋田の郡五城ノ目ノ縣谷地中といふ處よりして、脚摩乳の神の窟に入り、手摩乳の神垣にぬさとりむけ、渟代の湊に至り、ふたゝび葦椅をへて、雄鹿の浦つたひして槌神のほぐらに幣とり、赤神の在す涌出（今本山といへり）と花折山（今眞山といへり）なゝどを分て、麓なる水口の瀧を見つゝ三の湖、また十文字野の碑、あるは阿倍兼季の城のふる跡を經て卯月の初花櫻をかりくらし、むかしいふ北の郡の浦〳〵をめぐり〳〵て、小鹿の鈴風といふ日記に書續きたり。

三河國乙見なる　菅江の麻須美

彌生二十日
谷地中より

鶯の初聲も、きのふけふ山路より聞しか、いつこも梅のまた咲やらて、やよひのなからも霜のいとふかう冴へ復り、遠山は、去年、ことしの雪の上にいやふりそへて、このめ春ともおもほへて、此二十日はかり、椿花發（さく）八千仲の宿を出て小池のやかたに至り、梅そのも見なんと、こそよりとひなつさひし齋藤なにかしのもとに在りて、ひとひ、ふつかと日を經て、那舍帒（やしやふくろ）にかゝり眞阪越へ來て、路を左に大糠、小糠の杜を馬手にわけて、脚摩乳の窟に入てぬさとりむけ、ぬかつきて、淡海のへたつたひしてこゝの櫻、かしこの櫻と、いまた咲得ぬ花の梢をかそへて

天瀨川

天瀨川渡り、行つるゝ齋藤の翁にいさなはれて、そのゆかりなる兒玉なにかしのもとに、一夜をとてたひねしたり。

河尻

廿一日。葦埼の浦見にいたらまく舟たのみつれど、誰れも漁りにいとなう、たよりすへきかたもあらざなれば、すべもなう鯉川の浦、山矢、鹿の渡、濱村を過て、新屋布（あらやしき）の小徑よりして、めてに牡丹、二ッ森、安度路九（あぎろく）なといふ屋形〳〵の見へて、河尻の渡りせり。左に久米岡、右

伊勢詣の家

馬靈祭りか

大口の浦

足埼媼御前社

に泉八丘ちふ村ともの見へて、綱舟拷りつきぬ。鶏栖たてる森かけを行て、鵜川の邑に來けり。あるやかの庭の面に、にぎていつもとをおし立、注連ひきはへ、ゆふとりかけて、四乳のわら沓を屋戸のかたに鼻をむけて、あなうらの心に小石を左右にのせて、それに水うちきよめぬ。これや、庭中の阿須波の神に、小柴さし齋ひ祭りしいにしへふりのたくひにして、やとのあるじの、かん風の伊勢の、うちとの宮まふてしけるのしるしとなん。里なかの橋ひとつを亘れば、馬のしら骨、馬の頭はたあまりも積かさねて、路のかたはらに、汝是畜生皈依發菩提心としるし、あるは、一佛成道観見法界草木國土悉皆成佛の札をさせり。馬のみたままつるにや。鳳來院といふ禪林、松杉ふかう茂りたる岡べに在り。成就院とかいふうはそこの庵も、神垣も、この寺のしりにつらなれり。大曲、濱田を經て大口といふ浦近う、地藏菩薩の堂松原のなかに、庵とともにならびて見ゆ。村に入て砂山にのほり、遠近のなかめことにやよけん。かくて足埼に至る。こゝに媼御前と祭るは手摩乳の神にして、湖の面をはるはるとへたてて、脚摩乳のいはやとにむかひ給へり。鶏をなんいみしうきらはせ給ふ神達とて、家鶏さらに飼ふためしなきは天瀬川の浦にひとし。はた吾妻藤ちふものと、婋苞といふものをいめり。鶏卵をふかく包みもても、その人ゆくりなう災に會へりなと、ものとかめしたまふ神とて、みな恐れかしこみ奉る。神籬近き田面に、たねまくなと人のたち群れ、おほ

みたからのいとなうそ見へたる。

浦人の佃る稲田もかいなてゝはくゝみたまへ手無槌の神。

追網

日もかたふけは、この浦やかたに宿かる。追網といふことして夜もすからひきありく舟に、胴木といふものをよこたへ、それを槌してうちおとろかせん料に、魚追ふ音のまくらかみに聞へて夢もむすはす。

音絶すとるや魚槌(なつち)のうつゝとも夢ともわかてあけぬ春の夜。

水海の明かた、いふへうもあらす。

くもりなき玉の緒琴の湖(うみ)遠くひきわかれ行波のよこ雲。

廿二日。とくあし埼をたちて、高岸に登て馬の上よりふりかへり見れば、寒風山の遠う霞なから、雪のところ〳〵に星をなせり。

花の色にさく吹渡れ峯も尾もまた寒風に残るしら雪。

大森の木の根の神

やはら高山といふ麓を弓手になして、あら海の濱つたひ釜屋の浦も過て、海邊はる〳〵と來つゝ大森のかうかのはらに、さゝやかの鳥居を立て木の根を祭る。ゆゑをとへば、去年なん、出戸の村人眼疾(やめ)るか行まよひ、こゝの水もてひたにあらひつれは、いさゝか溫湯(いでゆ)のかほりありとて人のさはに來集り、やまふどの汲もていたり、己〳〵か宿にて、ゆひかせなとし

淳代

るしあるちふ。掘出し木の根は湯の神となん。淳代になりつ。伊東なにかし井眠の翁、この冬よりいたづきありて、ことしのむつきの九日あけなんほりに、むそち六の齢はかなう亡人とはなれるとか。この四とせ五とせ、なりむつひたる友垣の、世はかくのことなるものかと靈棚にむかへば、寂法慧然とあるのりの名も見るにしのひず。はたこゝの人々、なきたまに手酬してけるながめどもの多かるを見る〳〵、

　世になきをしたへる友の手向艸なみたのつゆのかゝらぬはなし。

此ぬし、木くさの花を好き、命にかけて土かひ水そゝき、庭もせに植て春秋を樂しとくれて、世はかつむなしう。この花とものやゝひもとくを、曉の月の朧にうちなかめつゝ、

　植置し人はよもつにあり明の月よりにほふ庭のはつ花。

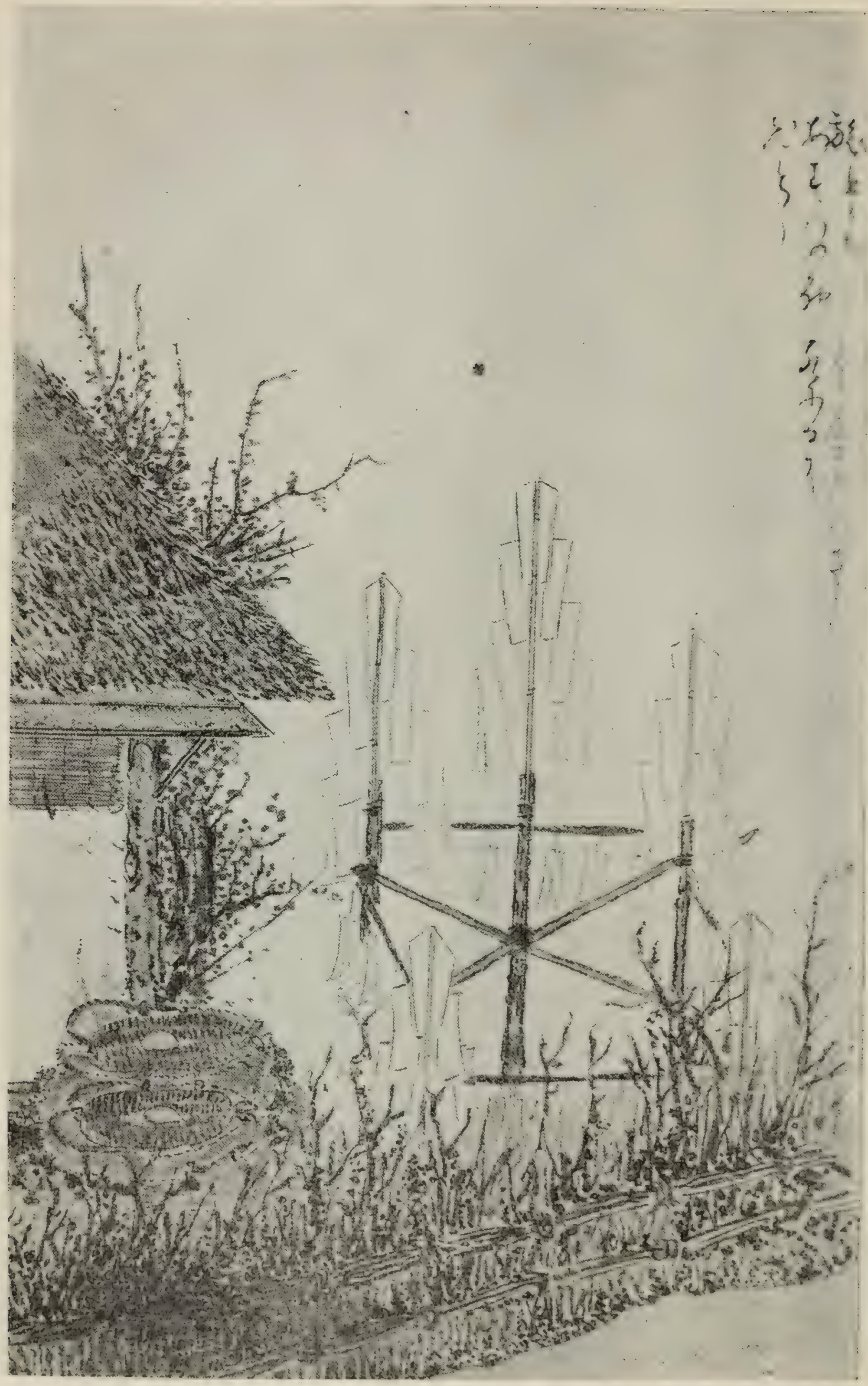
こゝを立て一とせのほとにさへ、亡人の數そ多かる。

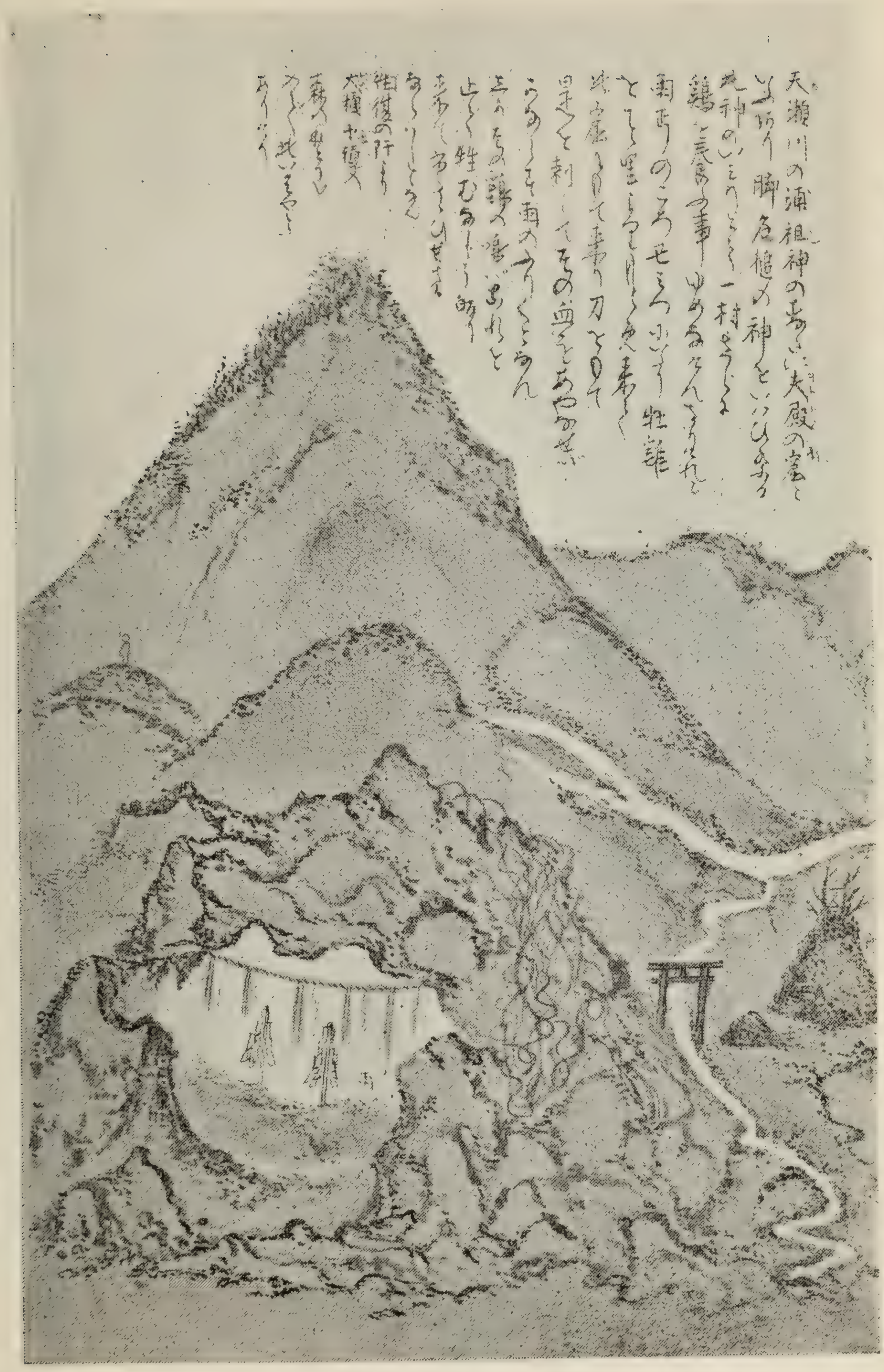
法然上人忌

廿五日。かの牛のり、尋阿みた佛のすめれし西福寺に、法然上人六百年にあたらせ給ふとて、けふに七日の法の行ひもみちぬ。この上人に、光照菩薩、光照佛、花頂尊者、通圓國師、天下上人、無極道心者、慧光大師、圓光大師、東漸大師、慧成大師と、後白河院よりはしめ代々のみかと、代々にたうはりし御名ともの其數そ多かる。けふなん流れ灌頂といふ事して、なきたまの名ともをしるしたる卒堵婆に火をかけて、水に投入て流し、法の師あまたふなゝかに

みすきやうして、やはらはてぬれは、そこにむれたる人さらとよめきて、みなくらくに皈り來けり。

恩荷能春風







恩荷能春風





恩荷能春風





恩荷ノ能春風



恩荷能春風





恩荷能春風



花を愛でつゝ（淳代より蘆崎）

廿六日。淳代をたち出なんほりに、こゝにいふ芳野櫻の、いまをまさかりに雲かあらぬかと、かしこの柳、松、杉なとのなかよりあらはれたるを、うち見つゝ行かてに、

かくはかり咲けるものか洲人の芳野吉見てよしと殖けん。

やはら出戸、長崎を經て河戸川に入ぬ。誰やとの梅も咲にさいて、鶯の囀りも盛りなり。

梅か枝のした行川門河波のよるへの里にうくひすの鳴。

田面の路をたとる〳〵來て、淺内といふ一村に、紅梅の、柴垣のとまて枝さし出て匂ふあり。

色ふかく梅咲屋戸はあさなあさないを安からし鶯のこゑ。

湖のこときおほきやかの沼あり。岸べの村を寒川といふ。

春霞なかるゝ水も長閑きになと寒河の波やたつらん。

ほとなう穀丁といふ處に來けり。

岨畑のなたねの花のうすくこく蝶の羽色もわからさりけり。

梅の、ところ〳〵に咲たる郷を福田といへり。しはしへて芝生に休らひ、

里近き梅のした風なへてふく田面のとかにもゆる苗代。

成合といふ村より、谷地（やち）とて水ある野原を行に、一瓣蓮のいと多くて、ところ〳〵いまたに雪の殘るかことし。「恩荷の金風（あきかぜ）」にもかいのせたる橋沼のへたつたひ、萱刈澤、大曲りをよ

蘆崎
大谷地
犬戻り
猿川の槌神
谷地中
琴河の櫻

そに、濱田の邑はしに出て大口にかゝり、見しすちをわけてふたゝひ蘆崎に來る。こゝにやどりしてより四五日あまりを經たるに、柳深く染渡り、櫻もやかて咲ぬべうけしきはみてそ見ゆる。こよひもこの宿に明なん。

廿七日。つとめて足崎を馬にて出たつ。

けふにさく浦山櫻ちると見てきし邊はなみの花さきにけり。

大谷池（おほやち）に來る。鈴樹宗因の祠もる鈴木太郎兵衞かやとは、はつかなるはにふながら、近き世まてとみ榮へし物語をせり。丸山をめてになし海へたに出たり。こゝのあひき、かしこのあひきとて、高網ちふものに人うちむれり。犬戻りてふ處あり。弓手は廿尋（はたひろ）と高う浪に迫りたるは、高志の親しらす、子しらずにたくふらんものか。さと浪のうちよれは、引しそきたる間を馬とくはせて、猿川といふ浦やかたにのほりて、うちとの神垣あり。又日吉の神の祠あり。この神のみかたしろは朽たる木の根のことく、槌に似たれば槌八幡とも人のいへり。槌神のひろ前を岨つたひして、野に出て鷲長根といふ。近く池水の面を見渡せば、左に橋本、右に高屋なといふ處の、木の中に花の咲たるなといふへうもあらす。松ふかう茂りたる、谷地中（やちなか）といふ浦やかたに日高うつきぬ。例ならねは、加藤なにかしのもとに宿つく。

廿八日。けふもこゝに在りて、琴河といふ山里の花見にとて、熊野澤なといふ邊の野良行

濱間口

相川

て、木曾といふさゝやかの村遠う見ゆ。

行春を惜みななきそうくひすよ木ことかはらす花は咲けり。

此山里は寒風山の北邊の麓にして、しけ山のなかに在り。高岡にのほれば、弓手に杜良の岳雪白く見ゆ。遠近の山〳〵の花、見へみ見へすみおもしろきなかめ也。

琴川のきし邊の櫻咲にけりみねのまつ風吹なしらへそ。

夕附行ころ谷地中に皈りく。

廿九日より、風のこゝちして出たゝす。近きあたりの花見つゝ日を經て卯月となれば、花の日毎に咲まさりて尙見る〳〵ありて、

七日。こゝちよけなれは馬にてこゝを出て、安土田（あんでん）（あつちだ）の浦をへて濱間口といふやかたあり。軒はの山より桃、梨、杏、しりなる山もなへて櫻の咲わたり、海士の刈る、みるめ樂しきところとそ見やられたる。濱路は猫貝、提貝、的貝など、くに辭していふ貝津もの多かる中に、櫻貝も莫名菜（なのりそ）、海腸（つろも）にましりたるもおかし。

波の花ちりしくあとにさくら貝春の色見る浦の樂しさ。

むかしいかなる君かすめりし跡とて、城長根といふ處のありと、馬ひきの話る。相川といふ流あり。こゝなん眞山、本山赤神山の、ふたつの峯を出る山川の落會とて、合川とこそいふ

なれ。むかしは染川ともいひわたりしとか。

　さくら咲きしへの波も染川のそめてそ花の色になかるゝ。

赤神山

北の浦いと近し。此會河より、坤をさして赤神山に登りなん。村を出て幸の神、白坂なといふも越へ來て、大持坂、赤坂を經て、北の浦の花も遠からす弓手にうち見つゝ、かくて眞山の麓になりぬ。村あり、眞山(しん)といふ。寺あり、眞山光飯寺(はう)といふ。

眞山光飯寺

この弓手より入るに、摩訶般若堂、金剛童子堂あり。此堂のやなうらを、一萬三千の地藏のかたしろをもて葺たり。藥師堂、神樂殿、赤鬼(あかき)堂、此堂には水無月のかんわさに、かよ丁、こゝに神輿をかき入れ奉るといふ。門はとしふりこほれうせて、大なる二王を藥師佛の堂に、しりくへ繩八重に引わたして立たり。八幡の神のみやところは杉の中に見へたり。神樂殿あり。おのつからなれる石をならへたる坂をはる／＼とのほれば、嗽水と札させる井あり。赤神山といふ額うちたる大なる堂あり。奥には十一面菩薩をひめて齋ふを、赤神山客人大權現と唱ふ。

赤神の由來

こは、漢武帝のみたまを祭るは本山にひとし。この阿迦神に仕ふ紅雀、未顯、逆面の鬼の山(かみ)にすめりといへり。いはゆる監魔、總王のかみ、鞍馬山に在り。近きみちのくの嵓樹が岳に、萬字、錫杖とて二頭(ふたはしら)の鬼神(あらふるかみ)あり。もろこしのひんかしの海に在る度索山といふ嶌に、荼鬱壘といふ神の在して、災をほどこす鬼達(かんたち)を禦き、黎民(おほみたから)のために害(さはり)を除きぬる事ありて、これをか

しこみいたゝきまつるのあまり、驅儺神のかたしろを制(つく)り、はた顱項のみたりの子か、みはしらの鬼神(かみ)と化(な)り水にすみ、里にすみ、家にすめるのたくひにや。そのむかし、ことくにうごあまた、あかすめろぎの、おほんいつくしみをしたひたてまつり來りけるを、このいてはの國に置せ給ふことのありき。そのくにうごなどの、武帝の靈やまつらん。此寺のふみには、武内宿禰この山によちて、神仙武帝に會へりとしるせり。かくて赤神の堂の前を經て行く\/、みちのかたはらごとにさゝやかの石地藏を建て、大峯道といふことをきだみて示す。嗽水と名のる泉あり。このしたつかたに屛風岩、かね山澤、たゝらなどといひて、瀧おち櫻咲たり。箸木坂（天註——此坂を箸い木といふ。（恐）山のはし堆のごとく筋あるちふ。）のぼりて八王子といふ峯あり。虛空藏菩薩を置りとはいへと、石の地藏大士也。うちむかふ方を坂東長根といふ、こき紫の躑躅の花咲たり。久數利といふ蝦夷の磯山より出しとて、松前の福山に梅とあらそひ咲りとて、みちしるべとは名附たりし。その花にことならず。こと山に見さるつゝじ也。櫻は、こきも、うすきも紅の雲となびき、白きは雪の殘るかと見る\/、移託(いたく)杉、犬子石といふあり。女の登り得ざる峯を、巫女の犬をつれ來けるが、くゑして木となり、石とはなれりとなん、あないの語る。麓の舞殿のほとりより弓手に分て、女の行通ふ霧澤越といふ山路の、うは坂といふそ見ゆる。眞山の奥か奥たる藥師の峯にいたる。あはれたる堂の內に、石(いし)佛の藥師すゑり。雪を

赤神山頂

ふみて武奈峠も過て、吉牟土利坂とてさかしきを、からくして木の根にすがり、あるは手をつきてのぼる。こゝなん褌腰ちふ嶺にこそあらめ。いや茂りたる眞木のあら山中にして、雪はまたところ〴〵に消殘て風いと寒し。こは本山の高峯にして丹髮(あかがみ)の嶽也。石を積て圍み、うちに藥師如來の堂あり。こゝを眞下りにゆかば毛無山にかゝり、越なん虛空藏長根なと見亘(わた)し、此峠より皈りなんとたゝずみ〴〵、こゝの櫻、かしこの花とうち見やり、

　峯の雲ふもとの雲とさくら花なかめにあかしあか神の山。

大峽ひとつ出てひんかしは、杜良の岳と、森山と、寒風山とひとつにみね重りて、八龍湖(みつうみ)のなから斗をふたきたり。戸賀の浦屋形、根太嶋、あるは畠ヶ崎の水嶼、一の女瀨なとそよく見やられたる。山のとかげより、鹿の多く笹原をかいならして群れ去る、たかうなやはみなん。

鹿多し

此山は、ことけものはあらねど鹿のみいと多くすみて、田畑のものはみつくすとて、秋は田ごとに繩綱をはれど、女鹿は網の目うちくゞりて稻はむを、あないのうれへ話る。うへも牡鹿の名ぞしられたる。あない櫻を折り、さゝ竹てふたかうなを採り、あるは支連を掘りぬ。藥は甘遂、少辛いと多し。夕つかた眞山の村にやゝ皈り來て、闞金七といふかもとに宿つく。

老女夜籠り

こよひは、近きやかた〴〵の老女あまた來集りて、藥師の前に夜籠をし、ねぶちをとなへ、更ては唄うたひ踊りせりけるとて、堂の板敷を、よもすからしとゝふみならして明たり。

八日。けふは、うらふれありて出たゝす。

疱瘡の禁厭

九日。あしたより雨のふりにふりて、けふもおなし山里に在り。このあたりは、疱瘡もなかにして門のとに根を立て、わらふだを笠とし、わらんしかさねゆひて、蕃椒を二ッさしはさめり。こは、しかいろよきもかさをねかふのためとか。疱瘡の神には、日に三度のもの日毎に奉り、又茨ふたもとに蕗臺を奉れり。うばらの實の、秋はこゝに色朱けん、そのいろをやねがふ。やまふぢきの塔は、なにのねかひにて手向にやしけん。馬柵の柱に、あやしげなる

馬神に祈る

神門をかいて家ごとに見へたり。それのよしをとへば、二とせ馬にはじめて鍼せし、その馬の血して、馬のくすしが馬の鬣をきり、あるは藁もても、しか鳥居を画て馬櫪神に奉るといふ。

十日。つとめて手洗ふとていたれば、木をはりて、山の泉をはる〳〵とひきれて、花のちり流來るを、

むすふ手につたふかけ樋のやま櫻花はこすゑにあらし吹らし。

光飯寺寶物

山おろしいと寒く吹ぬ。光飯寺偏照院に至れば、寺のみたからをとて示せり。不動尊、矜迦羅、制吒伽の童子は明澤の筆也。空海自筆の壽像ふりたり。出山の釋迦佛は雪舟のかけり。もろこし人のかけるさかふちの画、石摺の不動は圓仁の筆のあと、高野大師の口、あし、手し

てかい給ふを、五筆の心經とて一まきとせり。亦弘法大師の、紺紙に銀泥してかいたまふといふ「妙法蓮華經弘傳序　唐終南山釋道宣幽　第一之二」とあり。光明皇后の筆とて、「大般若經　初分母品第卅三之二」とあり。蜀錦のきれに、あらら仙人の圍碁にむかへるのかたあり。龍王の面あり。いみしうひめて、帝のとよりさくらしむ。こは雨丐の時は、かみぬしこの面かけて舞ひ、雨止さるときは、あまあげの面をかけり。その面是なりと、丹ぬりたる、はな高を出せり。さゝやかの塔の中に、鳳鳴石にてきたみたるといふ雪の山人、とほしき栗にやせ給ふの姿、爪石、雷杖なとあるかなかに、蓮花石とて、蕗臺の化石とおぼしくてめつらし。龔あり。西王母の桃の核とて、ふりたる那子をとうだしぬ。阿倍の貞任のもてりといふ軍配扇あり、もともふりたり、しか〳〵。此寺の砌のくまにおほかねかけたり。

鐘銘

羽州秋田郡　小鹿嶋　赤神新山光飯寺
當院主　三位法印賴賢
奉冶鑄撞鐘
根本願主　權小僧都敎辨
大勸進聖檀那　權律師　源春
康安二年壬寅六月朔日」とそありける。まことに四百とせのむかしをしのふ。この村に

畑山利平

畑山利平といふあり。かのぬしの上祖は重忠卿の末にて、近きころまて、よきつるぎ太刀の

鷄飼はず

矢次澤

水口村

蟻塚長根

人頭澤

いつさかあまりなると、しづ鞍なとの殘りたるを、つるぎはうせて、鞍は公に奉るともいへり。かゝる山里は、神のいめりとて家鷄(かけ)さらになし。加茂、湯の尻、相河なとの浦〳〵も、此山より出なかるゝ川筋なれば、その水飮つる鷄(とり)はかならす死せりとて、みな畜(か)ふ屋戸もなけんとか。

十一日。眞山を出て野原山坂を經て、よき瀧のあるてふものかたりを聞て、いて行なんと杂呂治の野良、折リ亘リの坂を越へ、矢次(やつぎ)といふ澤あり。この奧にむかし柵のありて、そのあたりは戰ひのちまたなりしよし。さるゆゑにて、箭次の名も聞へたるものか。水口といふ村に來つゝ、善八といふあるじのもとに休らひて暮れたり。

十二日。あるしの翁あないして、山矢の坂をこゆ。いと高きにのほれば、北の浦、野村、湯の尻なとのやかた〳〵もひきつらなりて見ゆ。大平(おほたひ)といふひろ野に、埒ひろくゆひまはし陣屋たてり。そのさもらひもまひろげ也。しはし行ば、蟻塚なかねといふあり。こは、あらそひの後に鉾(やり)の多く折れくちたるを埋し名にて、鑓壟(やりつか)にこそあらめてふ。人つべ澤といふあり。人の頭の多くありたりし。さりければ人頭(つむり)澤となん、しかいふべきをなとかたれり。むかしの柵のあとは馬手の山に在り。赤神の嶽の兩(ふたつ)の峯も、雲の中にあらはれて高し。この九曲をおりはてて、瀧の末の流れ來(く)といふを九(こゝの)渡りして、めての岨に阿遮羅明王

大瀧と旭櫻

を齋る石室のあり。眞山よりおつ大瀧といふあり。ふりあふぎ見れば、石梁の虹のごとくによこたふなかより落かゝるさま、世にたとへつべうもあらぬあやしう面白の瀧の、弓手馬手には、白き櫻の八重も一重も、やゝ青葉さす木々の中に咲まじりたり。石の梁に旭櫻、あるはいふ朝日八重とて、英もいと大きやかなるが、こと紅に咲し八重櫻のありたりしが、はたとせのむかし、雪消の水かさまさりて、石梁も越へて落來る水にいさなはれて、根こし落て、なごりなうその櫻の枯しもの語りあり。今その彥生たにもあらば、われも人も見ものにし侍らんなどを、翁の瀧見つゝかたるを聞て、

その花のあらはやいかに八重かすみあさひかけろふ虹のたきなみ。

二の女潟
一の女潟

さながら春の心地して、鐶臺山といふ峽を分出て、蓼沼の平の坡より二の女潟をのぞみ、渡鹿の浦囘の根太嶋、鹽戸のはなれ磯に在る宮嶋などを見やり、芝生に時うつるまてありて、ふたゝび大平に來て一の女潟に臨む。水の面のいとひろく、その深さはかりもしらじ。岸に赤石ひとつあり、八郎太郎の靈を祭るてふ祠のあり。水には鯔魚、あるは世具呂、あるは婆胡ちふ魚のいと多しとなん。未はかり水口村に皈る。

北浦村

十四日。空はれて北の浦にいたり、このごろものかたりしつる、くすし林宗哲のすめる松菊舍をとふらひ、うちもの語りて暮たり。

山王社

紀丹後正

五社の緣起（小鹿の介物語）

十五日。雨晴て日吉の神にぬさとる。此みやしろは、斐陀の工が墨繩うちたるよしを傳ふ。としふりたる社の萱葺る内に、康永の棟札あり。大蛇(をろち)射たるといふ鏃ひとつ、城介實季の法樂とて、三十六歌仙の畫あり。歌は實季のかけりといふ、板にかけり。又、伏屋の軒に秋ふかき木の實の梢を、鷦鷯(さゝき)のつたふを探雪の畫(かけ)る一まきあり。その上なる處に、「おもへたゝたのめぬたにもまたなくにこよひといひし心つくしは。」といふ色紙形あり。此一まきの裏に、「秋田二斛邑金野長左衞門淸久寄進之　寬保元年」とそありける。別當紀丹後正は、遠つおやより十三代になりぬ。家は、紀貫之の後たるよしもいへり。上祖は、山代の國山埼といふ處よりさすらへし君にて、小鹿卿賴宗といひしとか。天正元年癸酉の二月、秋田染川村神主、武內伊賀卿禰宜紀朝臣康法の書る、からふみになすらへし一まきの册子(ふみ)あり。あやしのすぢ〳〵さたかにも聞へねど、あらましによみとき見れば、このうら〳〵に漁りしたる金野小鹿介(をかのすけ)といふ男あり。ある日涌出山に分のほりぬ、今いふ眞山也。山の神出ませり。神のたまはく、いまし吾を此山の巓に齋ひまつらは、うみの子のやそつき、やそつゞきもいや榮へを守む。まづ此嶋にすむ蝦夷(えみしら)等をむけ平げ、こゝの島のあるしともなるへし。又汝(いまし)しが都に居らは、吾も亦都に在らん。この嶋に栖家せば、我又此嶼を守りあとを垂なんと、峯の雲を分て、眼の光はかくやくとして身の色赤く、はなつ光は涌出山(はきでやま)照して去り

ぬ。さりければ朱髪が嶽ともいふか。小鹿介恐みかしこみ、溪水に手あらひ滌去し、木の皮を剝ぎてしら幣とし山草を採りて青幣とし、又藤の花を折て手酬奉る。その處を花採山、古柵山の近きに在り。今の世かけて、日吉の神の宮うつりのときは、藤の花をもて祭る、これがもと也。小鹿ノ介、神の敎のまに〳〵蝦夷をせめ戰へど、毒箭たはさみ、弓とりさはにむれて力いやまし集ふ。小鹿介もあやうかりしをりしも、俄に空のかきくれて雷電し、鳴りひらめきて、とゞろ〳〵にかんときしぬれば、たむろせしゑみしら、あまたうちほろひしかば空のたちまちに晴れぬ。こは神のおほんたすけと、小鹿介、もゝたびちたび峯を拜し奉りて、のちに染河村構屋宿の大守、赤髮大明神のみやところをみたつ。としふり星かさなりてのちなん、藤原本久卿、この前山の嶺にひとつの社を建給ふ。今いふ本山の峯、これにこそあらめ。時世を經て、將軍安倍朝臣貞任いくさいたせりしとき、金野小鹿介敵退散のいのりをなし、のりとことを奉る。その詞に、「謹請幸幸敬白。抑當社大明神者。自舊代之昔。當家中興之靈神也。自然以來。靈驗之新月者。懸萬古末世之天。垂跡外融之光明。雖擁護生民。聿未非禮之奠垂慈。雖利生偏斯宿正直之頭。偉哉爲其德矣。」しか〳〵。かくて君は、康平五年十二月三日、よもつ人となりおましましかば、いかゝせんと小鹿介、若君と母君とをいさなひ泣〳〵屋戸に皈り來て、その女を嬬として、はにふの宿の栖居してとしくれ春の至れば、

「闢の戸を又もや明て治むへし世に會坂の春を待得て。」となかめありて、若君の病おもりかにおこりしかば、泰山府君の法の行ひありつれど、そのしるしつゆもあらで、十二月の卅日にかくれ給ふ。小鹿介は、くらき夜にもたる灯をけちたるおもひして、康平六年癸卯正月六日、若君の一七日の法の會ありて、貞任の靈と若君のみたまとを、赤神の社にあはせ齋ひ祭り奉る。この小鹿介、二君の亡あとをとふらふ。十とせあまりを歷て、累代の守護安倍朝臣小鹿介、承曆元年七月朔日身まかれり。小鹿介に三人の子あり。太郎を小鹿卿、次郎を彌五郎、三郎を鹿治郎といふ。次郎なる彌五郎は地頭河埼殿に仕へまつり、三郎たる鹿治郎は出家して前山に居けり。一とせ川崎殿と領分のあらがひ、すでに戰ひに及べり。文治元年のころとか、あやしの船の嶋の郡に搒至る。小鹿卿見てそのよしをとへり。ふなの君、今はなにをかもてつゝみさふらはん。吾は、孝謙の帝のみまごにして武内宿禰の四男、木角宿禰の二男眞咋の末子にて、徤内伊賀卿紀眞清といふもの也。安德帝の御味方たりしか、平氏の運つたなうしてこゝにのかれたゝよへり、といへり。とし月を歷て、正治二年庚申三月此君みまかれり。亡からを深山にかくしまつる、了心信士とのりの名あり。そのゝち三王の神わさあり。三王の社は、康平の亂のとき、地頭阿倍季治いのりのため齋ふ。その三はしらの神は、ひめたる事にしてあらはにもいはし。三王を今は山王と祭るにや、三たりの君のみたま

に、赤神と小鹿卿をあはしまつりて、五社とやいへらんものか。さりければ、紀丹後は赤神山の別當たりしか、近きころいさゝかのあらがひありつれば、長應院のうはそこともに、山王の社に仕へ奉るとなん。

五倫野

此北の浦はいと舊し處にして、むかしは嶋の郡といひき。誰かなかめたるとはしらねど、「東より南をかけて北の浦夕日入り西小鹿の嶋山。」浦のはしに五倫野といふ、路の片岨に櫻、こと木も茂りて多く墓誌石もあれど、梵形のみにして、こと文字はけちはてたり。浦にあるてふ寺は靈鷲山常在院、北浦山雲昌寺、鳳祥山瑞光寺。この瑞光寺は、五倫埜よりやうつしたらん舊にし寺たるよし。菊理比賣の社あり。菅大臣の社、内外のかみ社などぬさとり奉り、海へたになりては、鳩崎のあたりまて浦つたひして、

旅ころも分(西)にし袖のはやひかし(東)みなみ(南)にかけて北のうら浪。

やはら、松菊舍撫琴のもとに來宿(きやど)る。

古碑三基

十六日。空のいとよけきとて、松菊舍のあるしにいさなはれて、ふるき碑(いしぶみ)のあるちふもの話を聞て、いでとて、染河の浦も過てやはら至る。館てふ處は、安陪の兼季康永のころ籠れる柵の跡とて、海に臨て高し。北鶴田の浦なる橋のつめに碑あり。五倫の形をきだみ、空風火水地の梵字を彫たり。町田といふ村も經て山田村のこなた、十文字野といふに碑二ツま

安善寺村

寐地藏の碑

野村

てたてり。その高さなゝさかにや過なん。弓手の碑は文字消へて見へず、馬手の、六さかはかりなるいしふみの面に、康永のとしの號あり。兼季の時世をしのふ。眞山の麓近う來て安善寺といふ村に至る。櫻の眞盛にして、おもしろき山館也。山深ういらば、三の瀧てふ尙おもしろき處もあるてふ、など語るを聞てたゝすめば、ゆくりなう時鳥の鳴たるに、

　　花の雲分入るかたのはつこゑはおもひもかけし山ほとゝきす。

松菊舍のぬし、「寥寥人境外、閒坐聽春禽」といふくしをすしけるを聞て、

　　しつけさようき世の外と汝れもさそこゝろ長閑くあそふはな鳥。

十七日。松菊舍を出て、鹿子田を經て寐地藏といふ碑あり、梵字をきだむ。こは、雨丐のとき立て田の泥をぬるてふ。そのけがれきよめんとて、雨のふるてふいはれあり。

十八日。埜村といふ處の、小林なにかしがもとにしはしとてありて、村君細井、あるは嶋宮なと語りもて、ひるつかた出て、溫泉の後の崎見にいたらんと、櫟木野といふを分るに鹿梨の花咲たり。

　　なれもしかなしの花さく山陰にすむてふしまの名こそありけれ。

夕近う、おなしあるしのもとに皈る。

十九日。埜村なる觀音庵のあるし了應師は、陸奥の國本吉の郡淸水河の村に生れて、見なれ

湯元溫泉

湯元村の妙見堂

晩翠堂桂葉

常樂院

し松嶋のものかたりをつばらにせり。

廿二日。きのふけふと、この三日斗ふりにし雨もひるより晴れて、風はいやふけと、近きあたりに、溫泉源とて溫濤の館舍のあるにいなんと、野村を出て山路ゆく。弓手の苗代もゆる岨に、その咒の梵字なからは消へて、地藏大士をきたみたる下に、後圓融院の、永和のはしめのとしのなかいたる碑のありき。さるゆへにや、地藏坂の名にしおへり。溫湯のもとになりぬ。湯の味ひ滷して緑礬の氣あり。このゆふべ、村長平賀のもとに宿つく。

廿三日。太上神仙の祠に詣ぬ。奥に觀世音菩薩をひめたりといへり。此堂は、大同をはしめ坂上將軍田村麿の齋ひ給ひて、いとふりたるみやところなから元祿のとしかんごけして、宮のうちに納めたりし、なにくれのみたからも灰となりぬれば、すへなう慶安五年にいとなみ建つれと、ちかき享和二とせにふたゝび雷の火にやかれて、城介實季の法樂したまひし、來光定の太刀なともなこりなう失はててなどうれへ、別當龜尾山長福寺常樂院の、乙峯の話り聞へたりき。（天註　淳代の護國山般若寺大光院の尊爲法印前晩翠堂桂葉、其子里鶯ともろとも北村季吟の門弟也。この尊爲法印は此常樂院もと出て能代の住吉の神の別當たり。晩翠堂の號は三寶院より賜りしといふ。桂葉はちとり足、能代紙を作り、里鶯世にしはしはゝかる事ありて此雄鹿に在りて日隆艸、埋れ水を編り。世にその名聞へたりし人々也。元祿のころ桂葉いまはに毫をとりて　玉ゆらのつゆにやとれる月とても此世の外のものとかは見ん。）此寺の開基は常樂院尊壽、二世は寛永の尊盛、三世は慶安の尊龍也。「新編鎌倉誌」にいふ、「さかみの國江の嶋の三の社に仕へまつる三防のそのひとつ、巖本院に馬の玉、九穴

蛇の角

羽子豆の花

がざ食、百合餅

の貝なさいふくさ〳〵の寶のうちに、蛇の角ちふものあり。こは慶長九年閏八月十九日、羽州秋田常樂院尊龍といふ僧伊勢詣てして、內宮の山路にて、蛇の角落たるを拾ひしといふ狀のあり」つと、その角の形をもしるせり。此乙峯よりは七世のむかし、慶安に寂りといふ尊龍師にこそありつらめ。（天註 世に蛇の角とて人のめでもたるを見るに、凡兜虫の角もとも多し。此虫の角のひとつあるから名を獨角仙といひ、二ッある角をさして天牛といふとなん。鳥の背に啄はれていと堅實ければ、あさりわづらひて頭のみ刺落したるもの也。ところ〳〵の山に在り。此角を蛇の兜、あるは蛇の面、蛇の角とて守りなとにせりける事、わきていては、陸奥に多し。）此龜尾山の二王はとしへて朽木のごとにしてたてり。樓の鐘に寬文十三年としるし、御代官澁江宇右衞門源朝臣隆光と彫たり。むかしの洪鐘はやけたるよし。ふるき五倫石あり。ふるき碑あれど文字さらに見へ分ず。坂の弓手馬手に、倒季子の花のやゝ咲ぬ。いはゆる胡鬼子、みちのおくの方言とおなじう羽子豆の花といふもおかし。このころの汻に、海は起し網ちふ事して鰤の漁りをし、田殖るとては山田のひたに人むれり。野山には金帶花といふものをこきたれ、あるは手折て一とせの糧とせり。これなん、美濃、近江路のあたりにて令法とて、黃連茶をつみてたうひけるにひとしかりき。はた、山に生ふる蝦夷百合てふものを人みな掘りて、此しら根を餅とし、あるは粳米の粉をませ蒸して蝦夷百合飯といひ、あるは蕨と烹てくらふにやよけん。蝦夷のくにうごは、此名を奴弊とよぶ草にこそあらめ。けふも、おなしやとに飯り來て浴してけり。

北浦村

五月朔。ふたゝひ喜多の浦に來つゝ、松菊舍のあるしとともにかたらひ、磯山の藤のひしひしと咲たるを見渡して、

山路ゆき磯ゆく袖もかゝるらし花のふちなみ北の浦浪。

岩谷なにかしと語りて、とうたせる一まきのふみを見れば、

孝子新四郎

嵓谷孝子傳

岩谷孝子。羽之雄鹿嶋。北浦村人也。名新四郎。幼而喪㆑父。兄弟僅。有㆑姉。家貧賃舂養㆑母。奉事能恭。有㆑事必謀。出入必告。鄕里蚤稱㆓其孝㆒。母甚嗜㆑酒而不㆑能㆑供。孝子憂㆑之。慨然而嘆曰。養㆑親而不㆑能㆑優。可㆑謂㆓人子㆒乎。於㆑是手作極㆓日力㆒。日能備㆑飮焉。年十八。族某憫而資㆑之。畜㆑馬馬肥美價三倍。賣以買㆑田。秋收常過㆑人。親戚鄕里異㆑之爲㆓孝報㆒矣。壯益力耕。生理稍饒。資奉遂得㆓少優㆒矣。母性粗直不㆑類㆓婦人㆒。醉言觸㆑人。雖㆓吏長㆒無㆓畏避㆒。然孝子常在㆑間彌縫。不㆑至㆑得㆓過責㆒矣。或醉倒臥。兄弟視㆓溫涼㆒。驅㆓蚊蠅㆒侍而待㆑醒。島之小民馱㆑魚營㆑生。秋冬爲㆑最。孝子雖㆓風雪㆒百里必還。未㆔嘗宿㆓於外㆒。年三十二。有㆓村長之命㆒。辭以㆔親老無㆓人代養㆒。乃聽㆑之。令㆑不㆑奔㆓走外事㆒。官知㆓其孝㆒也。姉嫁孝子取㆑婦。亦事㆑姑能順。母病殆不㆑起。既瘉而手痿癈。後又病失㆑明。不㆑欲㆑飮兀兀不㆑樂。然夫妻左右扶持。常先㆑意而執㆑事。使㆔坐起行步忘㆓失便之憂㆒矣。孝子生㆑女。稍長人稱㆓其美㆒。母聞㆑之甚喜而不㆑能㆑視。摩抄不㆑解㆑手。夫

妻憂レ之。日夜泣禱二之於鬼神一。明遂得レ復レ故。手復能運。復能飮。時年八十。失レ明十三年矣。親戚鄕里益異レ之。載レ尊爭嘉。爲二鬼神孝感所一レ致矣。後數歳漸復盲。嘗年檢官禁レ釀。適會二需レ酒之賈舶漂到一。竟得二供不一レ乏焉。重陽嘗見孫奉レ觴。母歡飮如二平日一。命二孝子一出。拜二節於親舊一。孝子心動。不二肯出一。旣而母言笑啞然而死。享レ年九十。實天明八戊申矣。孝子哀悼過レ人。死後有レ事輒往レ墓必拜告。尙若二在時一。孝子天錫二其類一。一家孝順爲レ風。子孫事二尊長一。一皆範二其祖德一云。

武藤氏曰。河北凡潮上人。初住二北浦一。知二孝子一。恨下彼其孝而不上レ得二顯賞一。爲レ余詳言二孝子之子某具一レ狀。請下爲二傳記一永視中子孫上之意歟。余嘗浴レ病數過レ島。親聞下里人稱中其孝上。又觀二其習俗部陋一。講議無レ聞固勿レ論。益喜下岩谷氏之孝出二乎天性一。而情之所レ在而行。頗有中合二于禮一者上也。遂記以予。寬政十一己未年孟春　明道館敎授　武藤達撰。

時ならぬ鹿聲

五月上弦（さつきかみのゆみはり）のころ由母刀より來て、湯の尻の浦に一夜ふしぬ。湯の山のこなたに鹿のいと多しとて、田每にやきしめさし渡し、暮て尙追ひ、貝吹てめくるにいとなしなと語るをりしも、戊のときや近からん、由乃志利山に二三聲（ふたこゑみこゑ）牡鹿鳴たり。こはいかに、時ならぬ鹿（しゝ）の叫ふ事よとて、浦人あきれたり。いつのころならん、春日山に元三（としのはじめ）の日鹿の鳴たることあり。そのころ大裡山の守護（やまもり）として南部大膳太夫重俱の君傳へ聞て、「春霞秋の霧としまかはね

とおもひ忘れて鹿や鳴らん。」　となかめ給ひし事もありしか、秋ならて鹿の鳴ことやはある。よきさとしにや、あしきためしにやといへり。うちもねられぬ枕をもたけて、

穂に出る秋まちわひてぬる鹿や夢にやま田のひたに鳴らし。

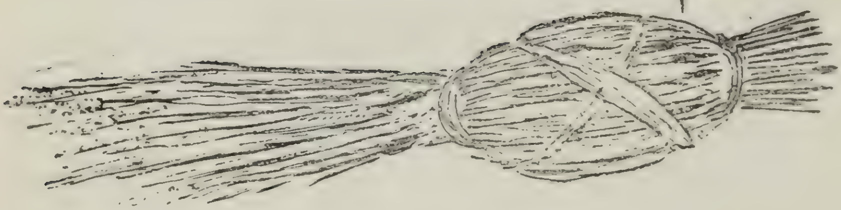
このとし螢いとまれに、さばへさらになし。

甲 表通鐍

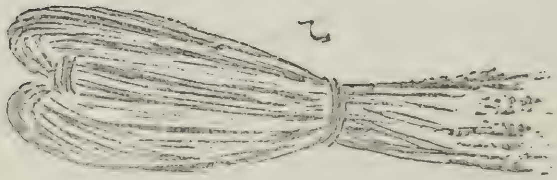
乙 咩都斗

女苞ころもつと　セつく
由きへ作りしぞ御埼の
浦の作りとかん

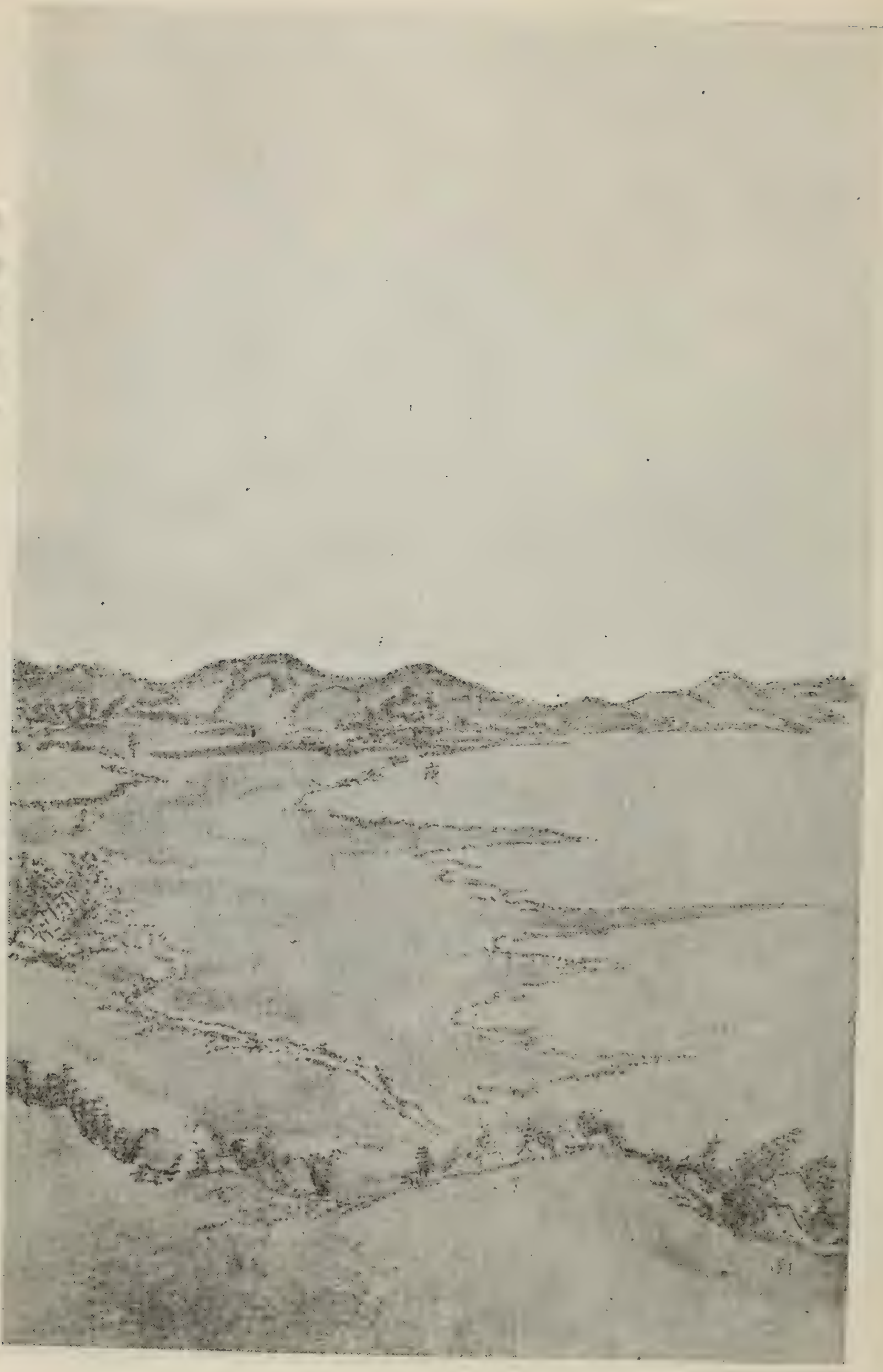
甲



乙





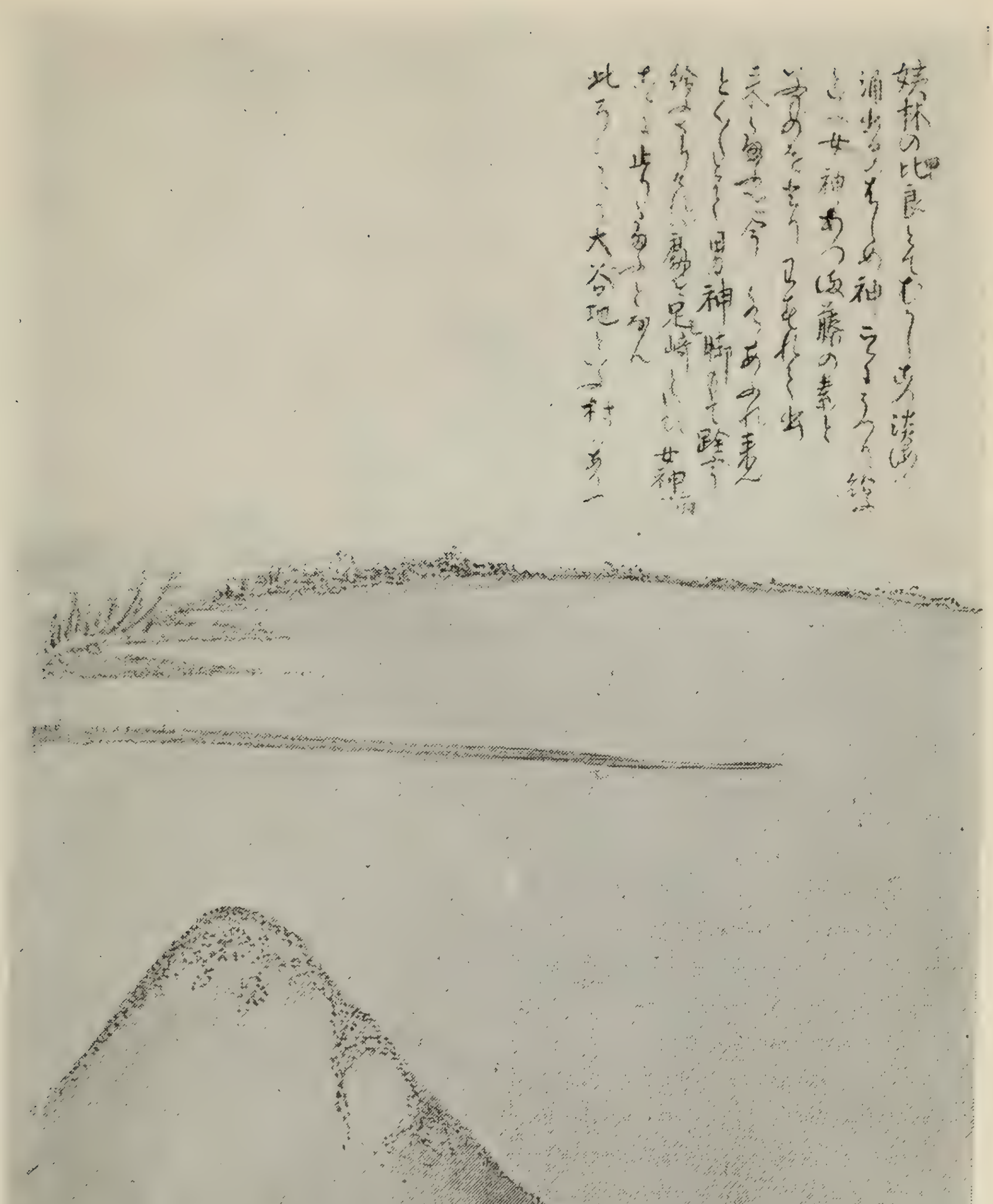


恩荷能春風



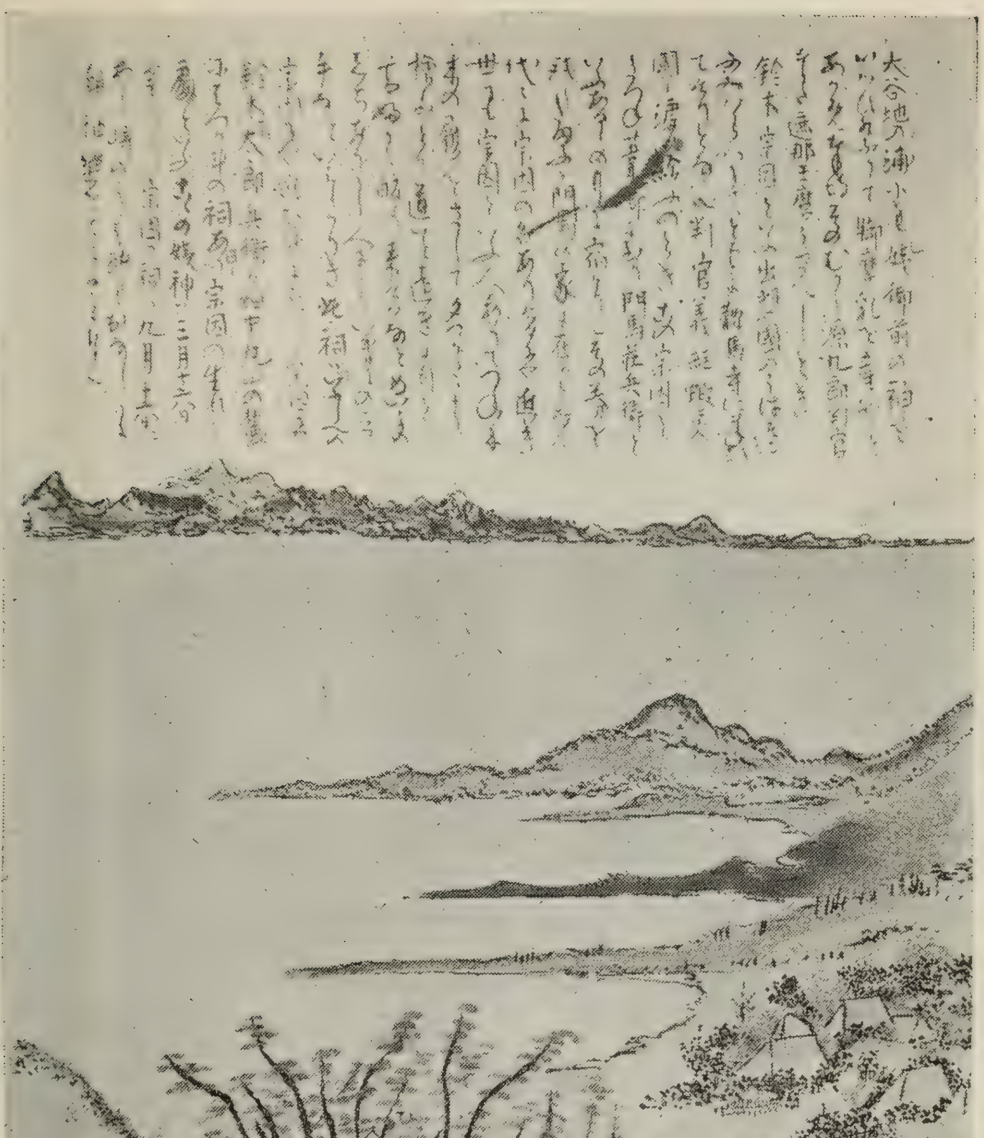


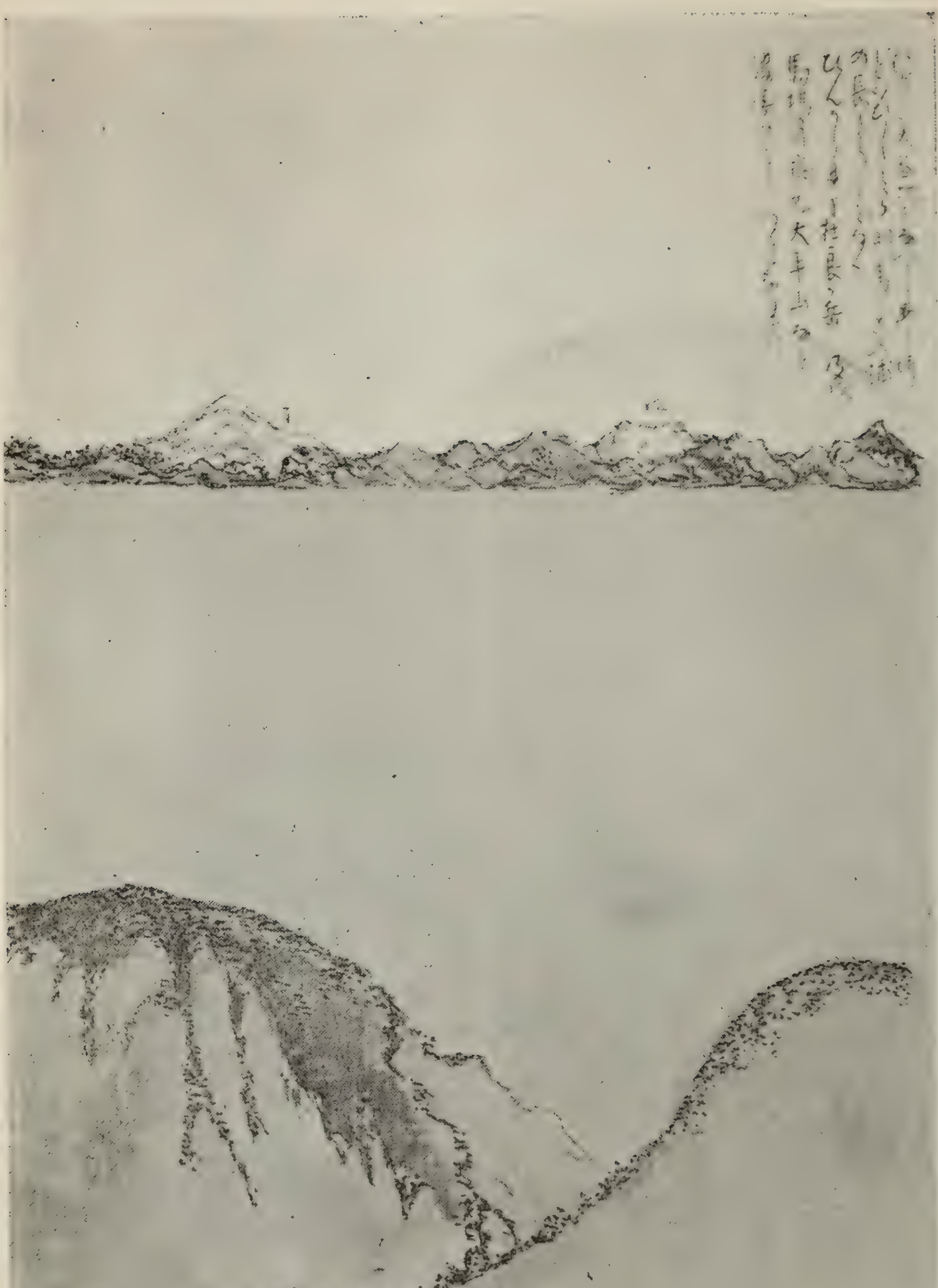
恩術能春風





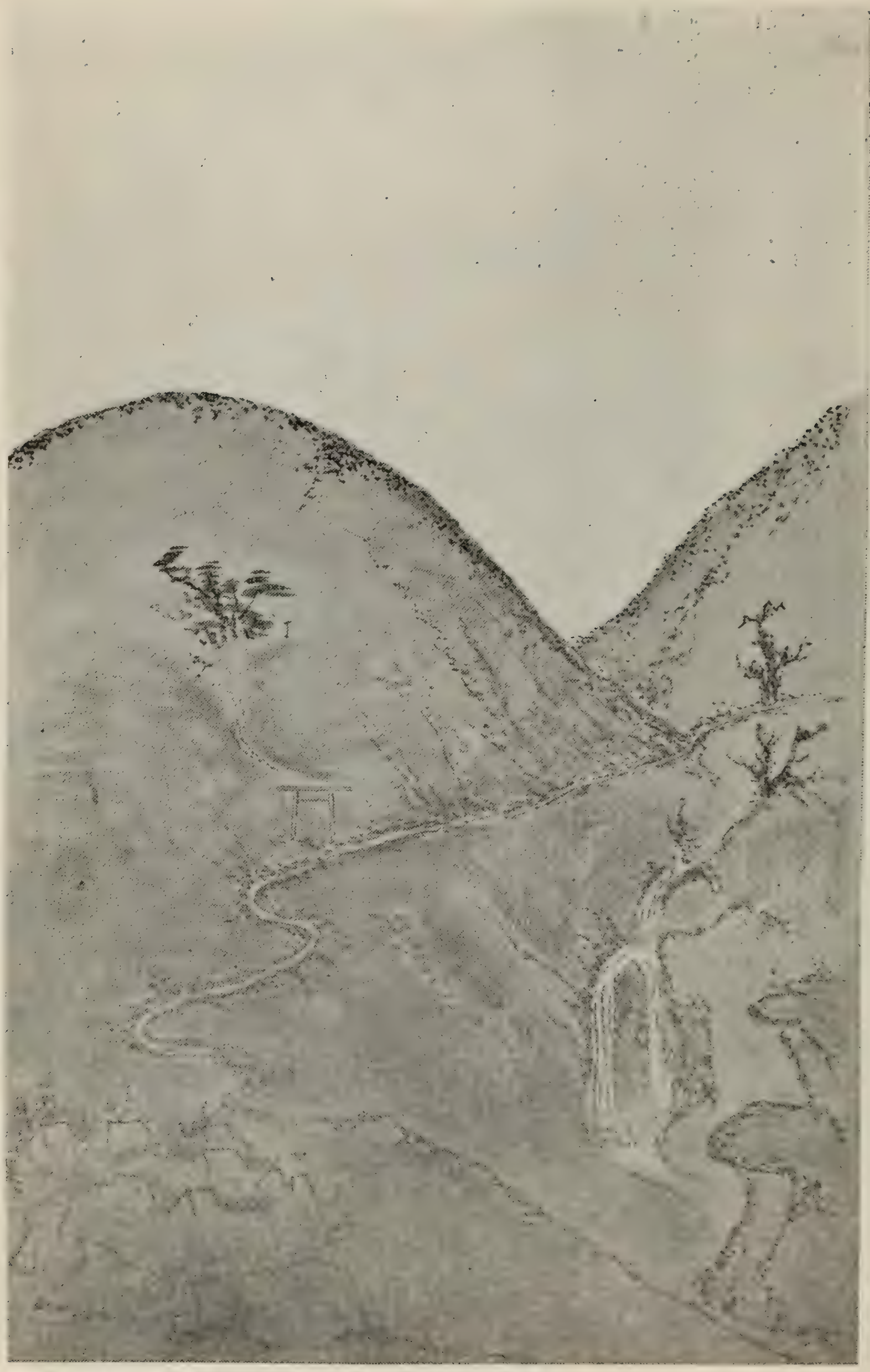
恩荷能春風

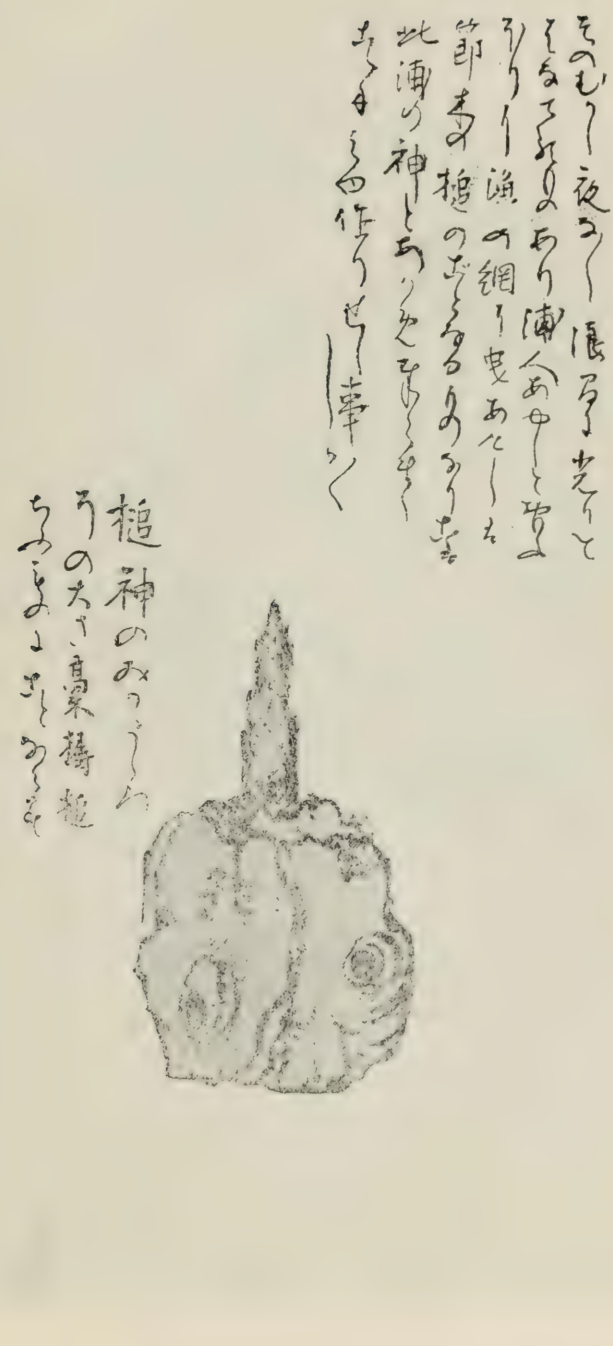






恩荷能春風





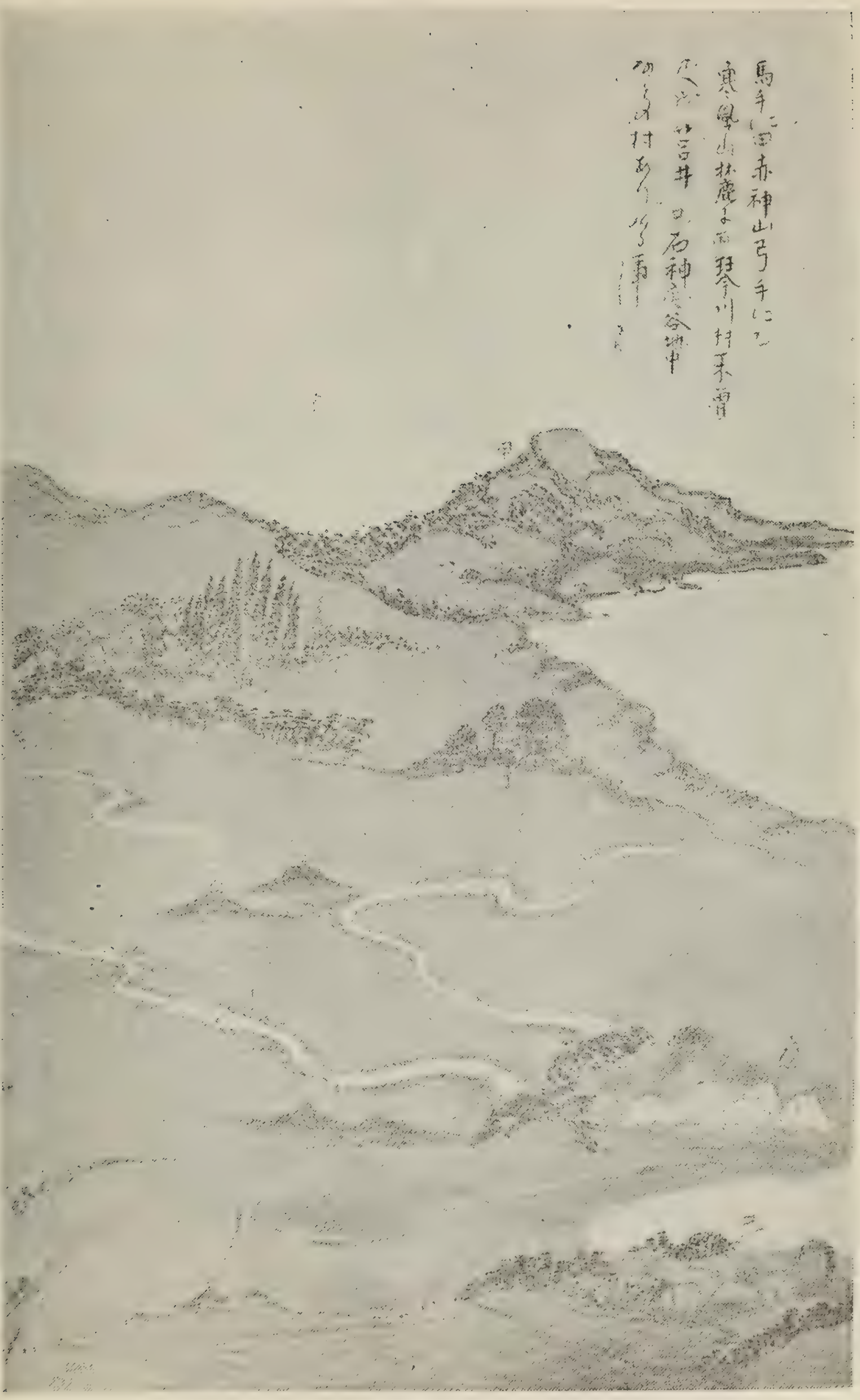







此村の川水ハ鮪河の瀧の頭より
丘ありて飯形乃神の社あり

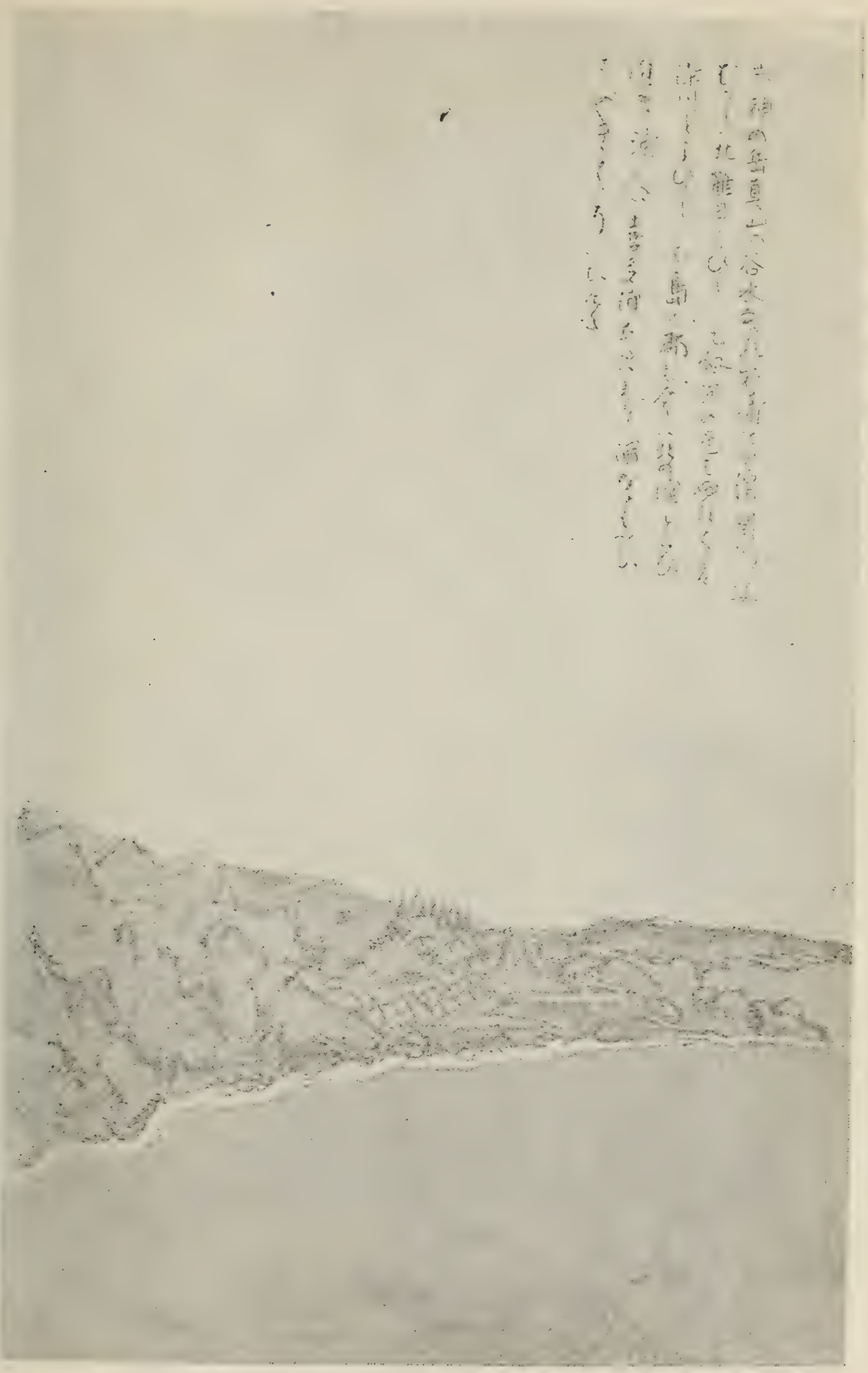




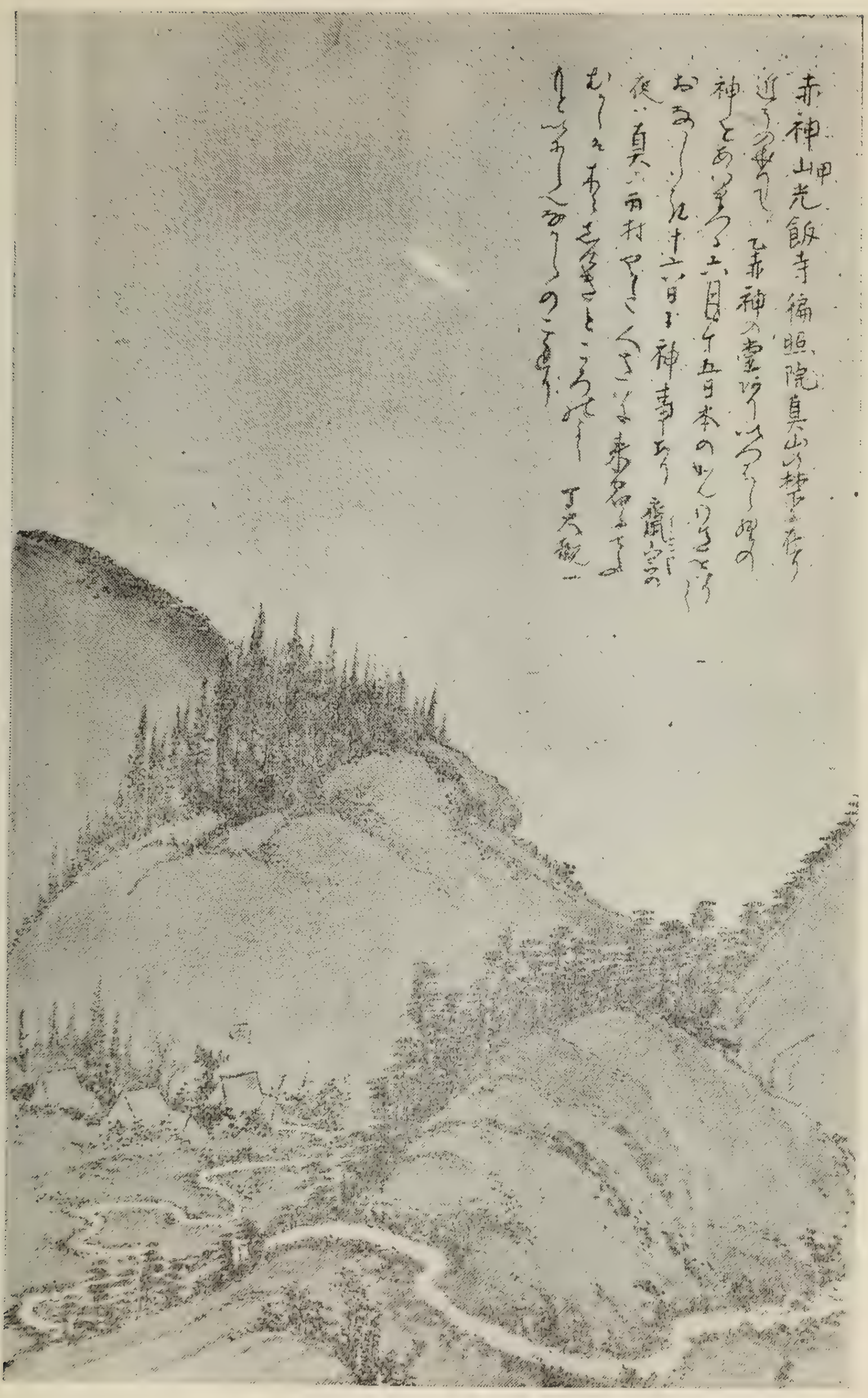


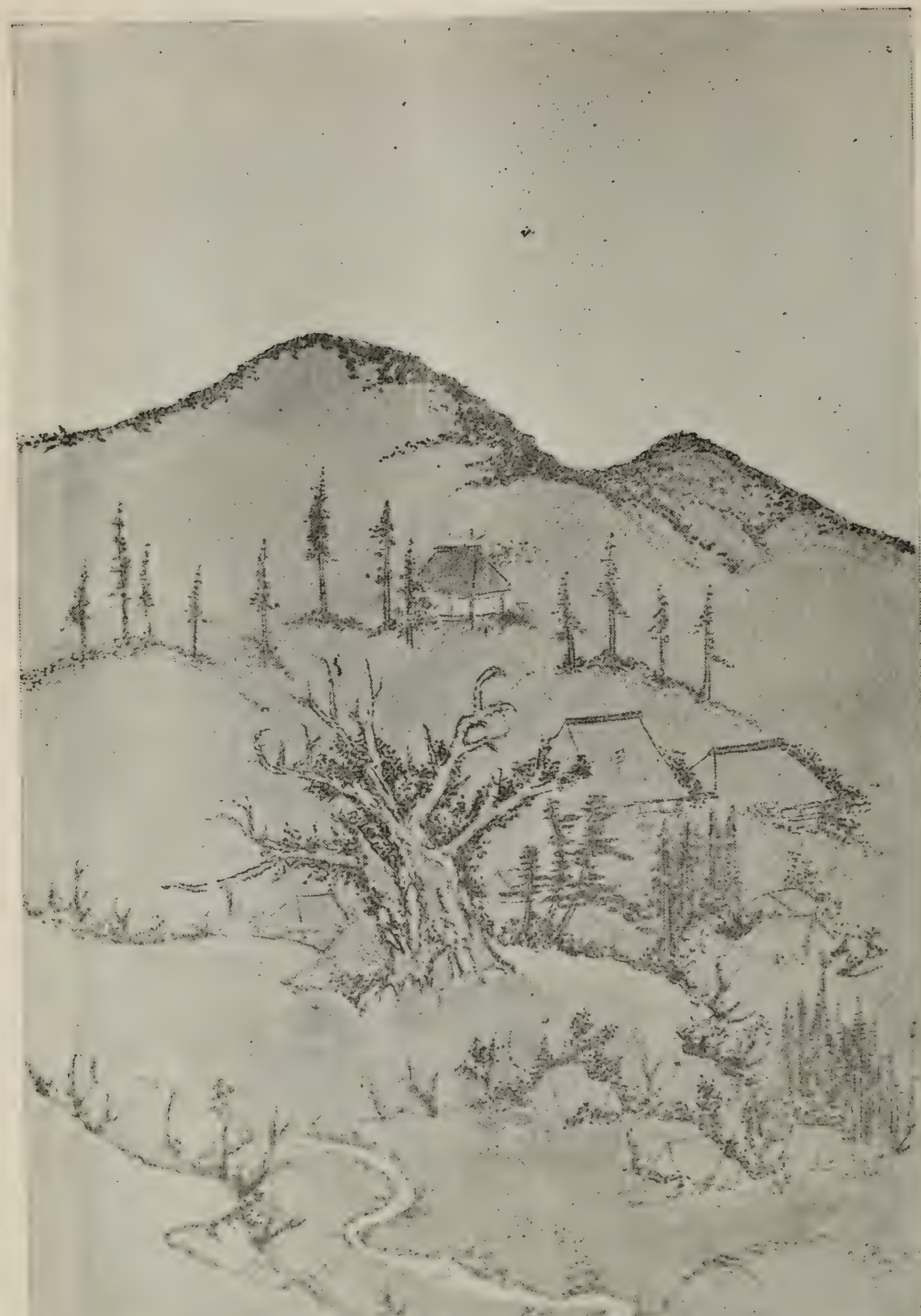

谷地中の浦より安田濱間口



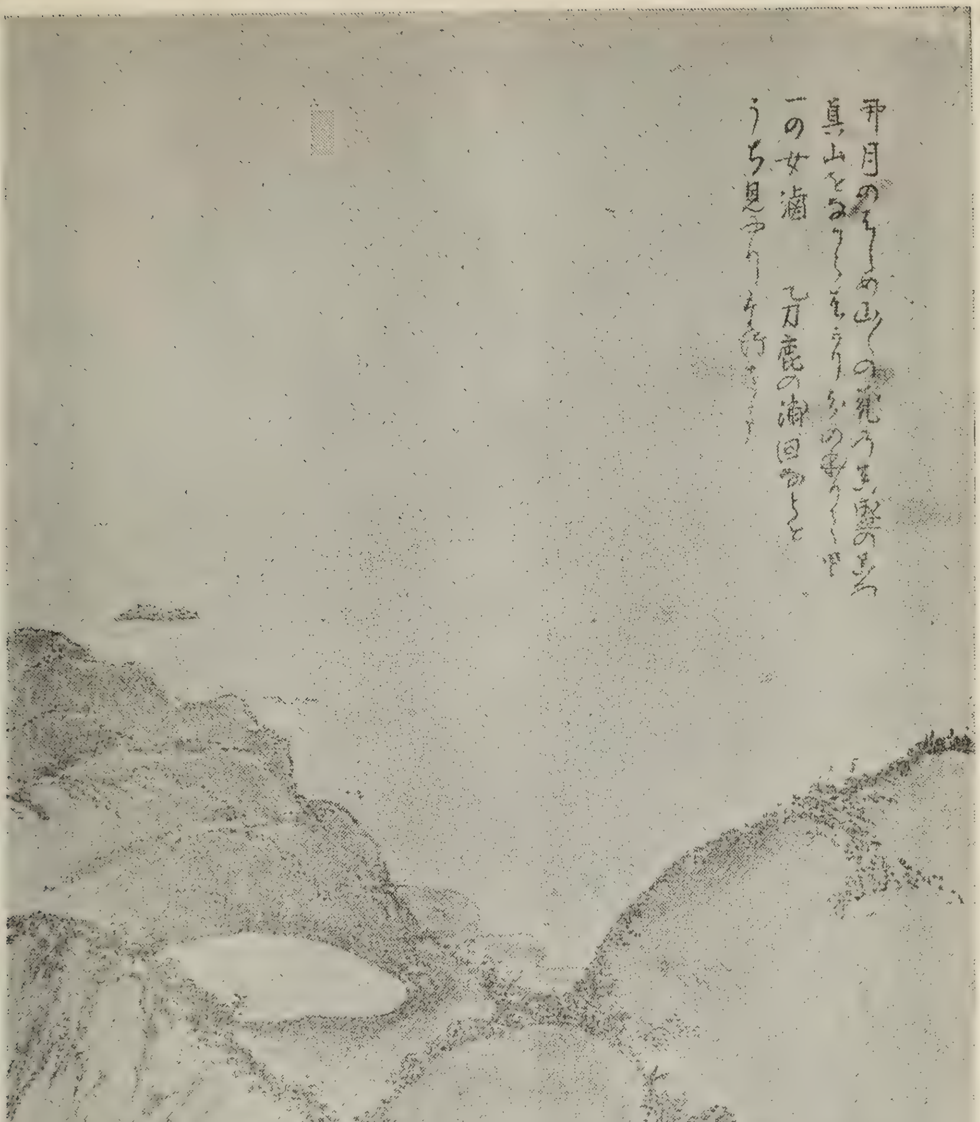








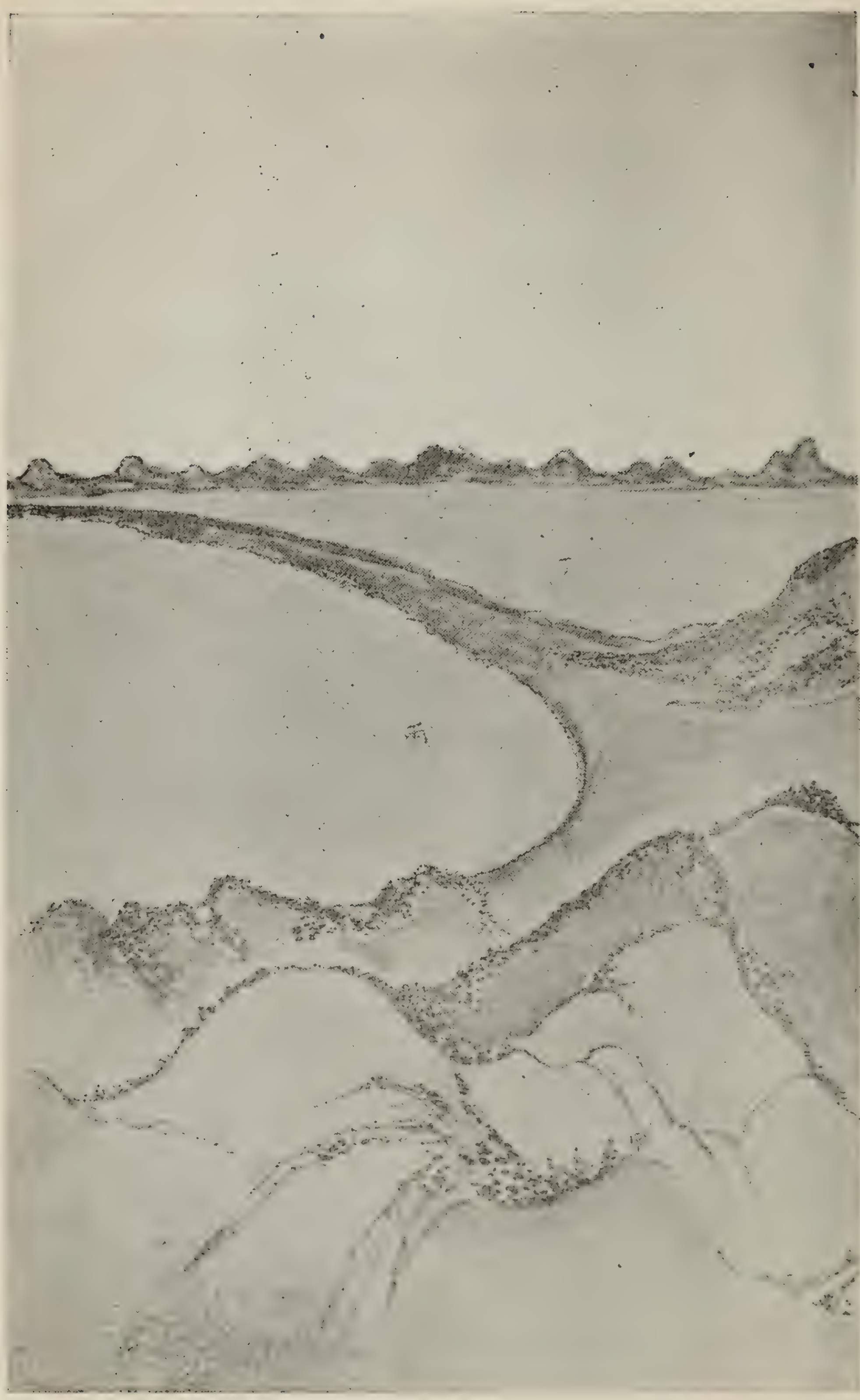
恩荷能春風





恩術能春風

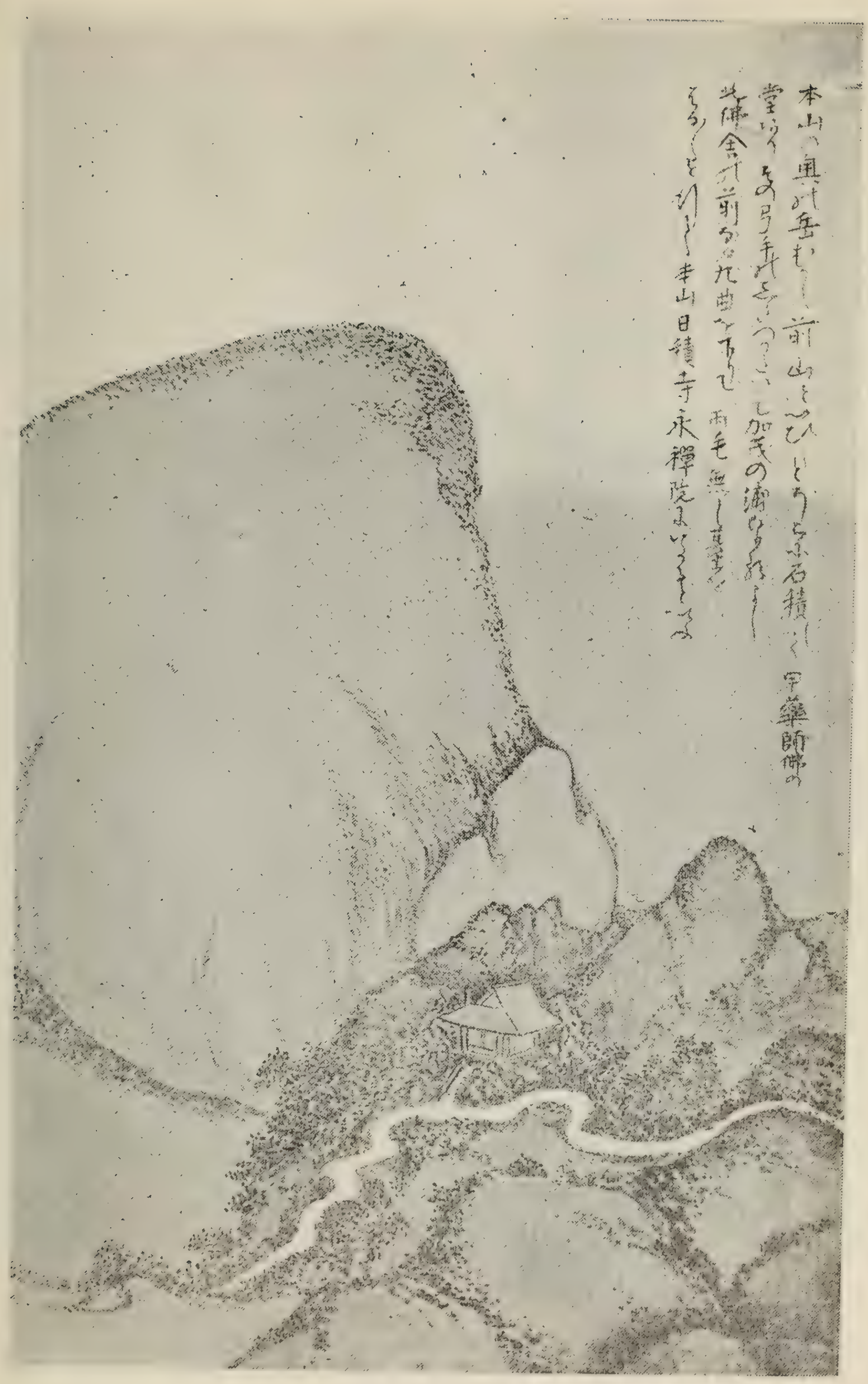


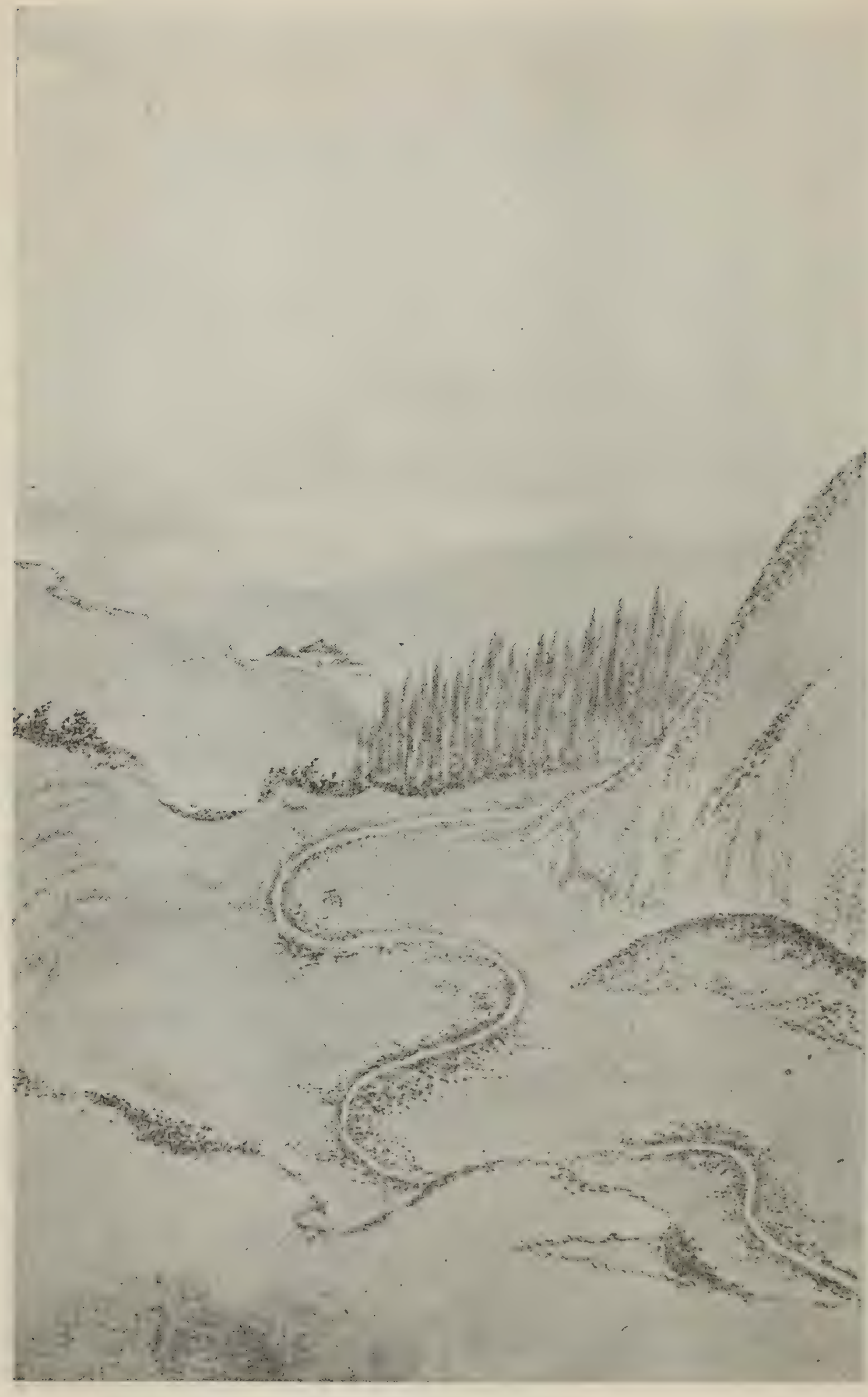


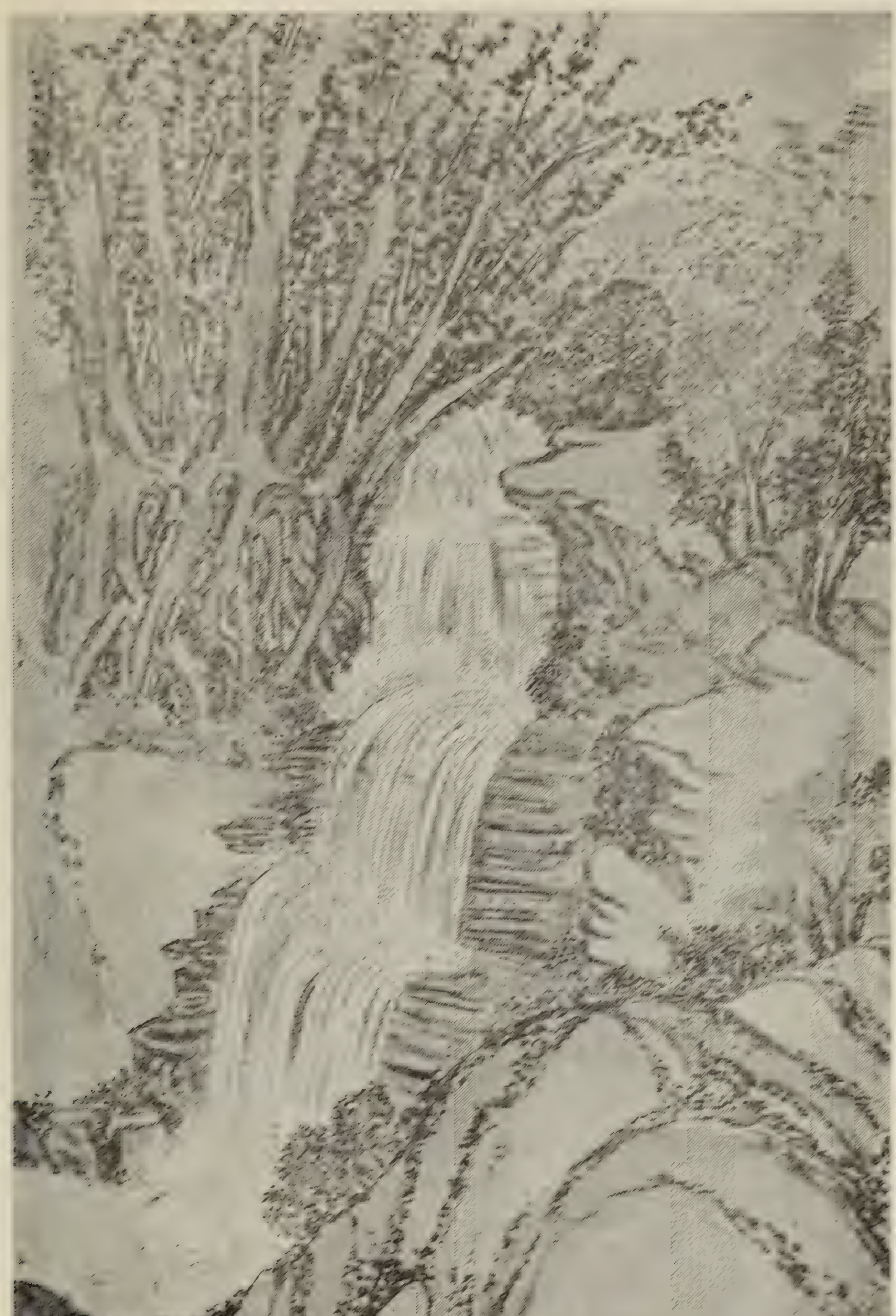


恩荷能善風

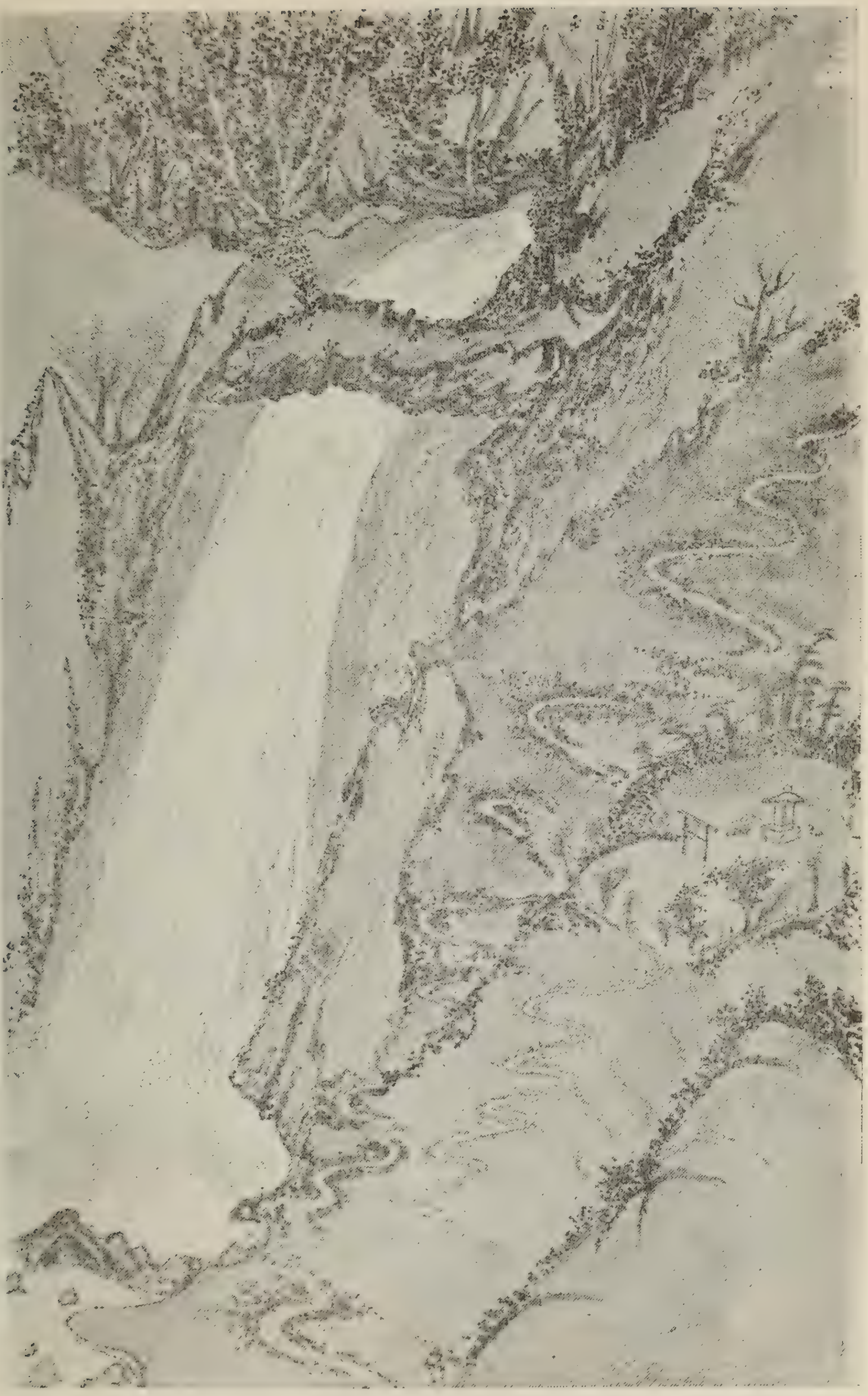




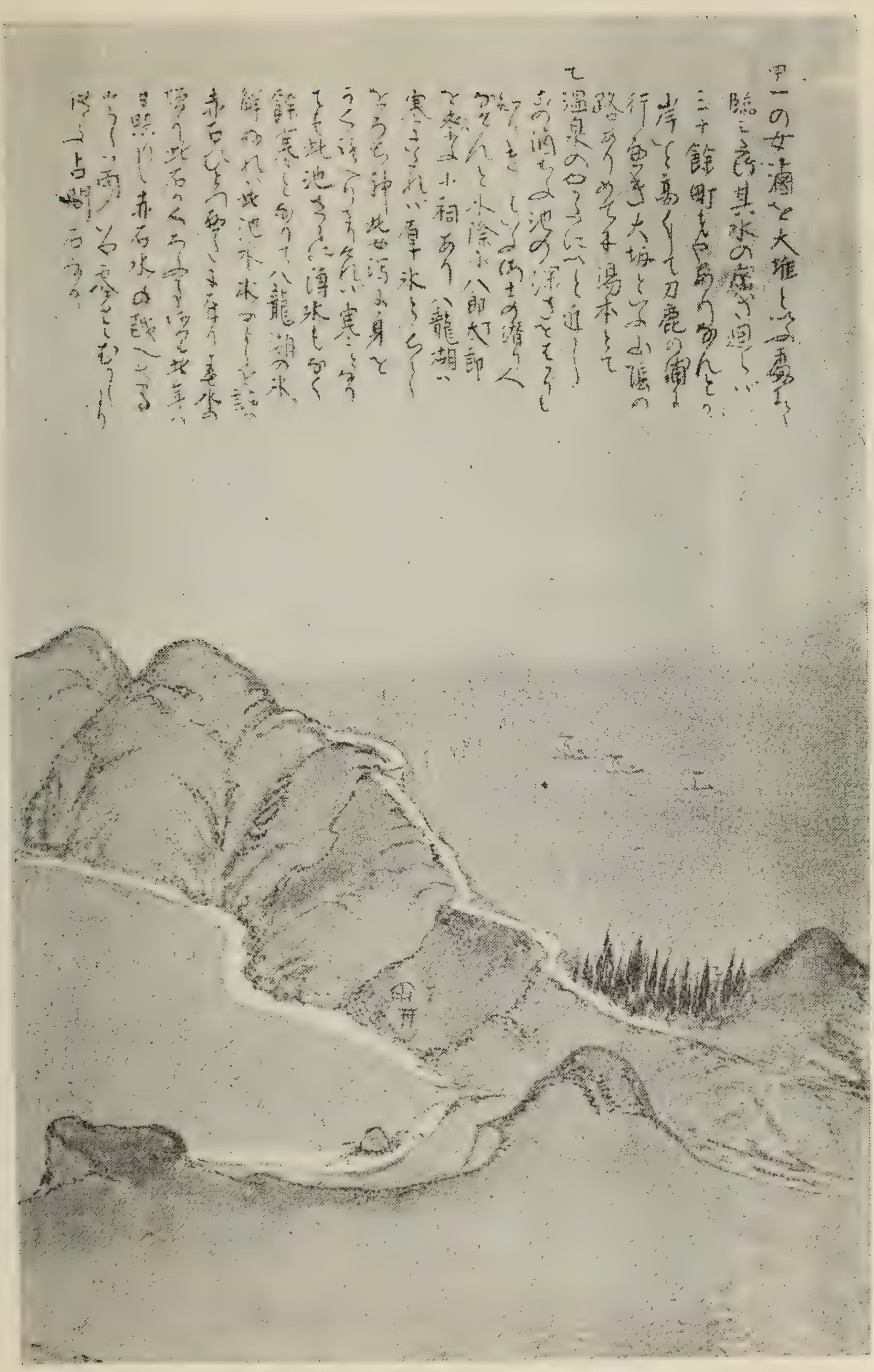


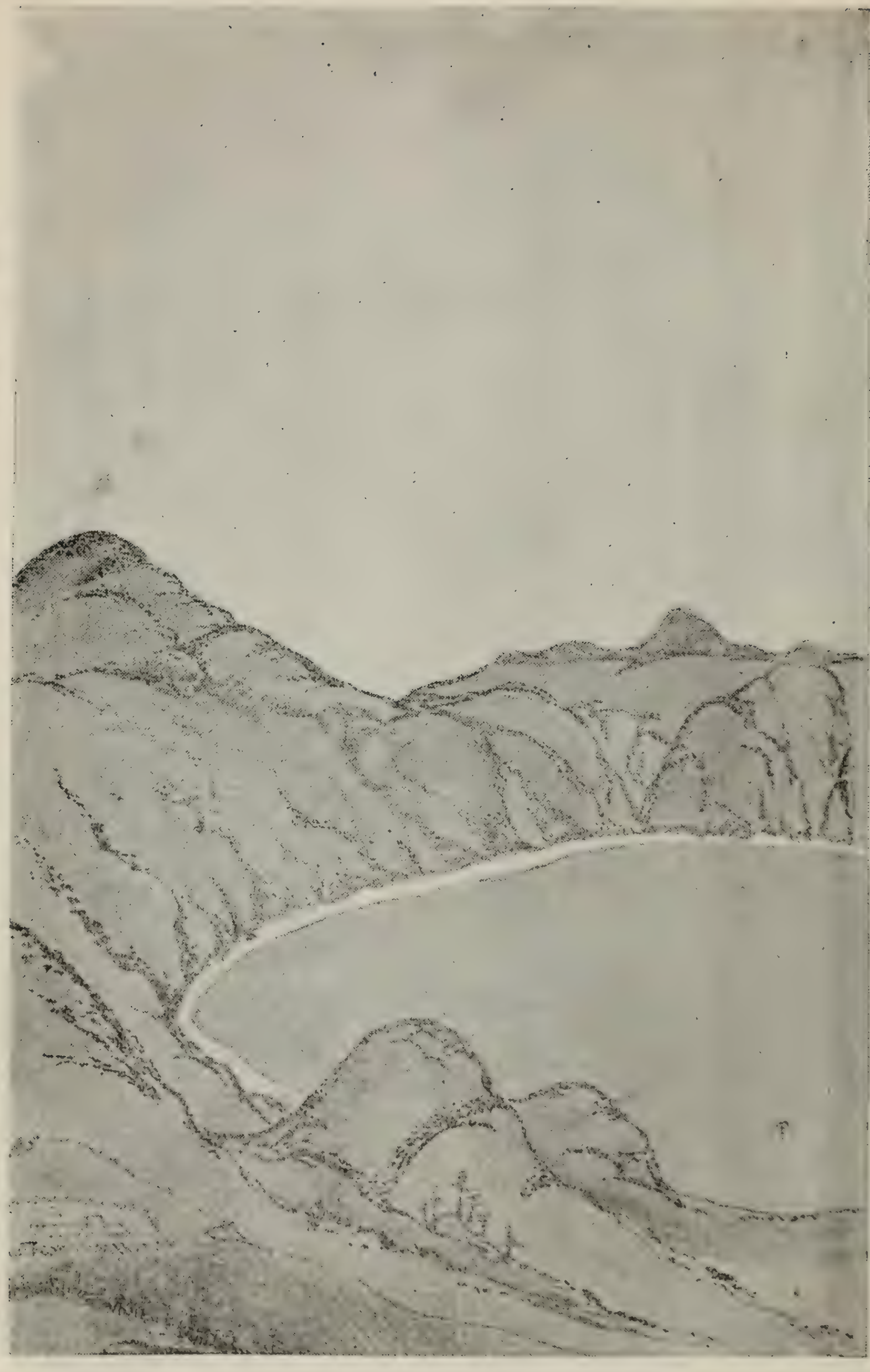


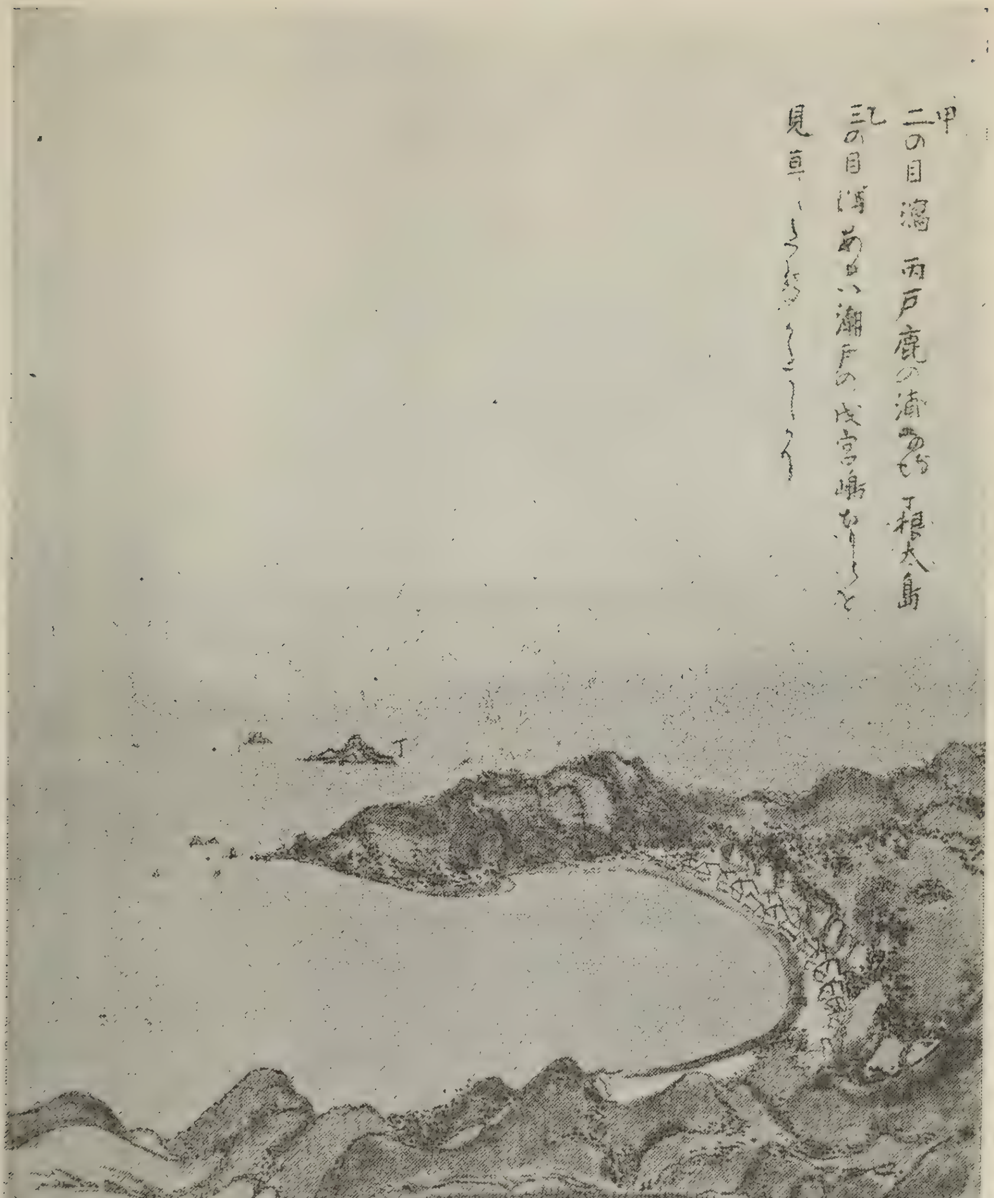











甲 二の目潟 丙 戸鹿の浦あり 丁 根太島
乙 三の目潟 あるは瀬戸の 戊 宮崎 ありと
丁
甲

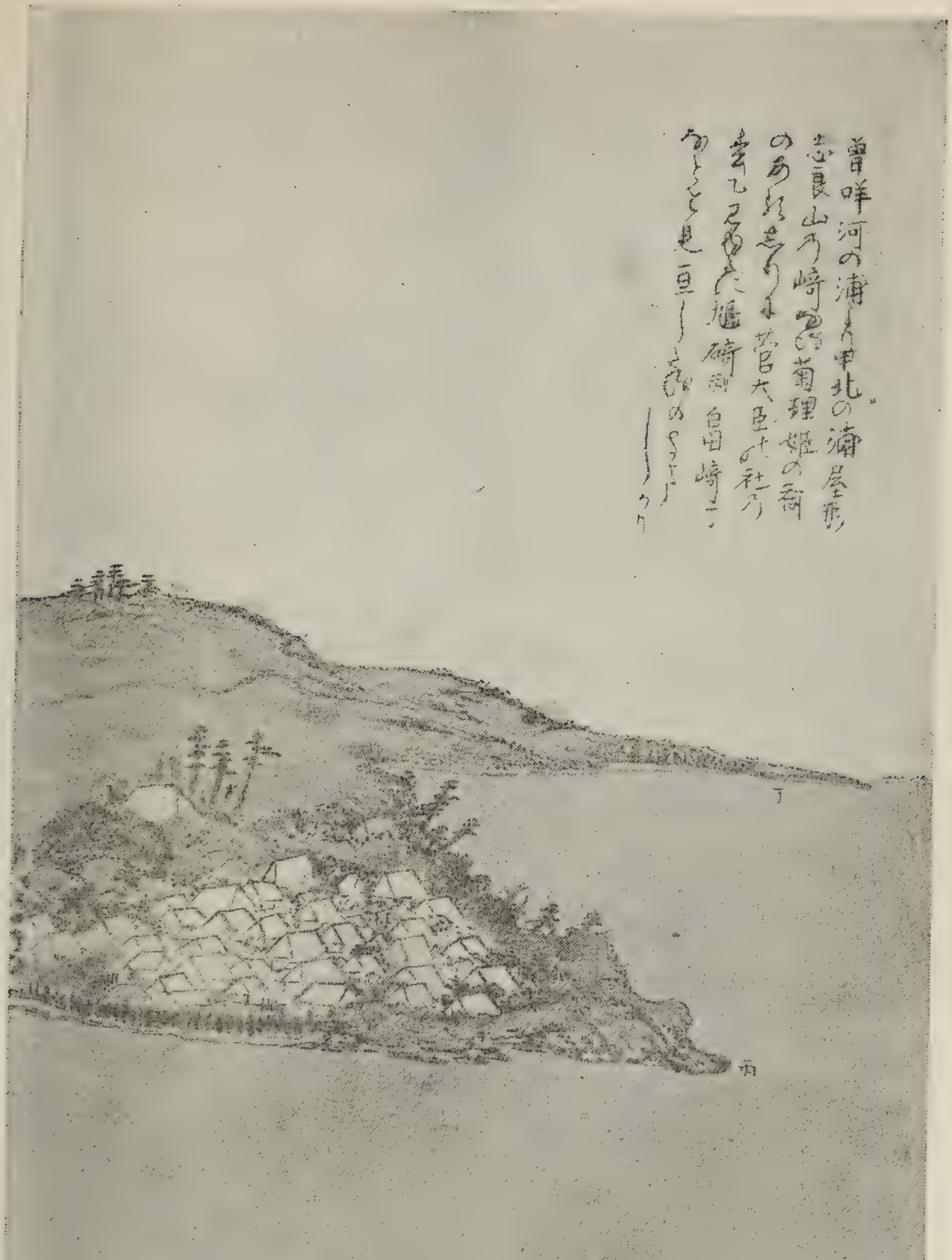


恩術能春風





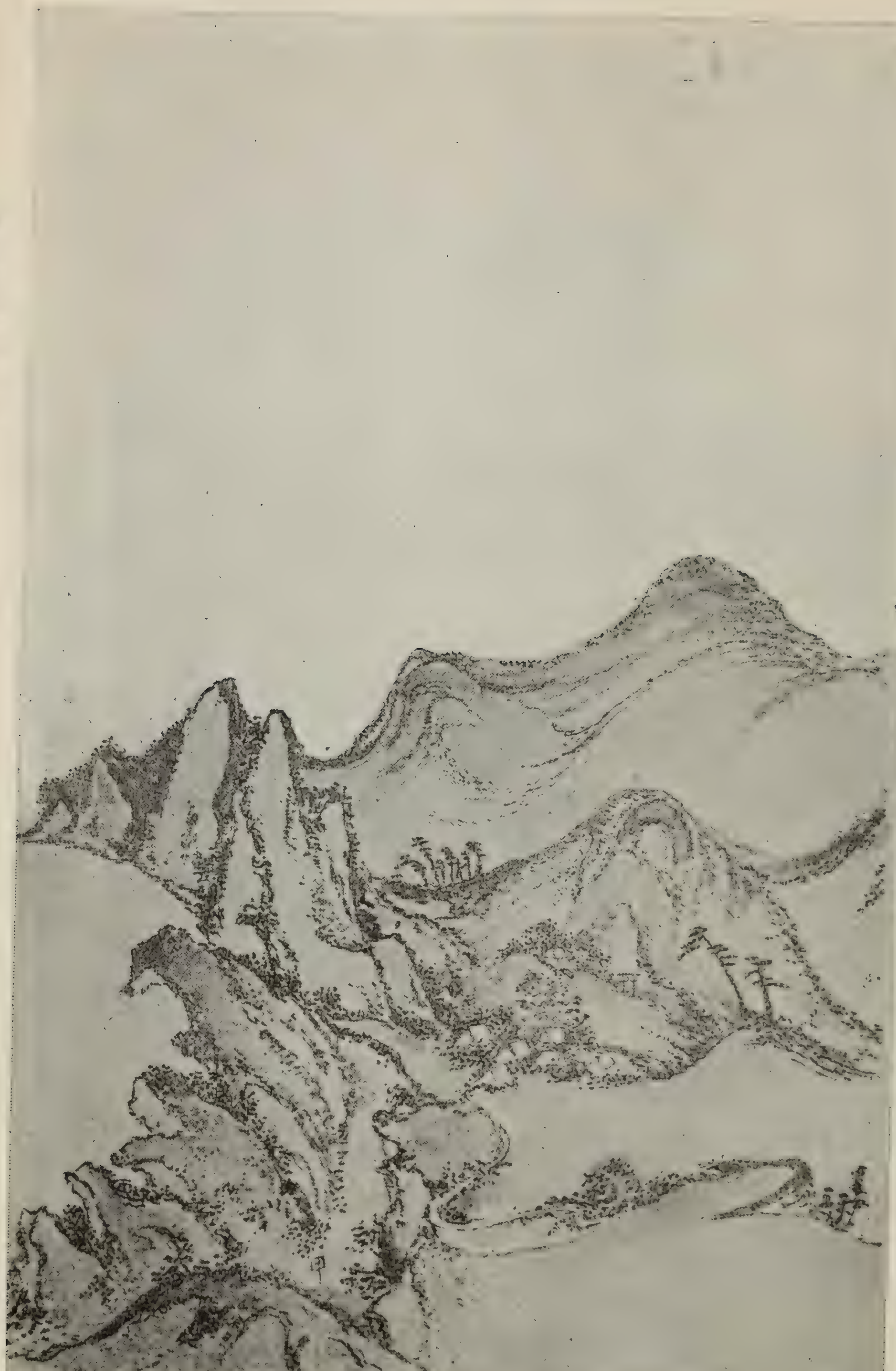
思出荷能春風





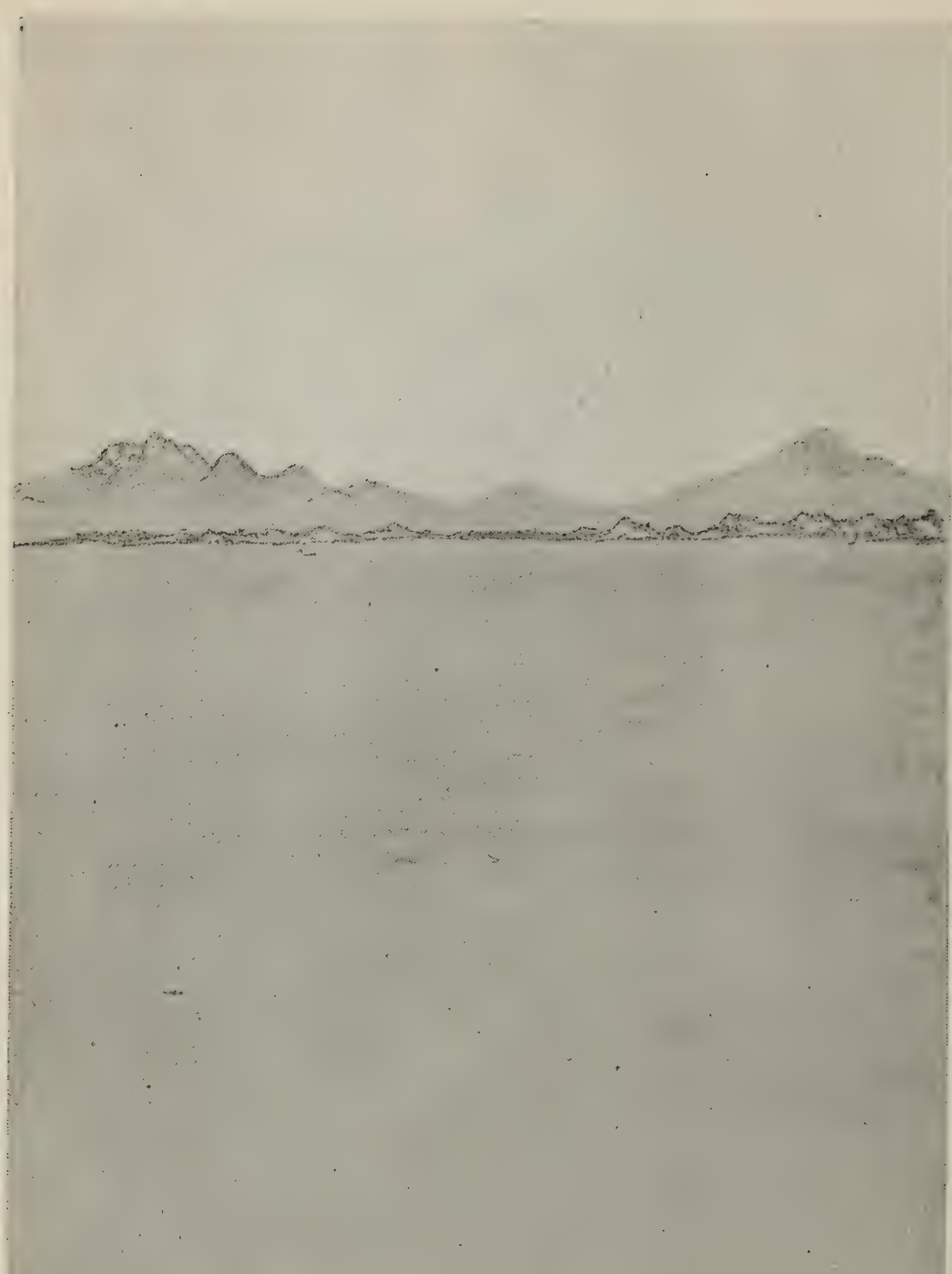
惠衍能春風



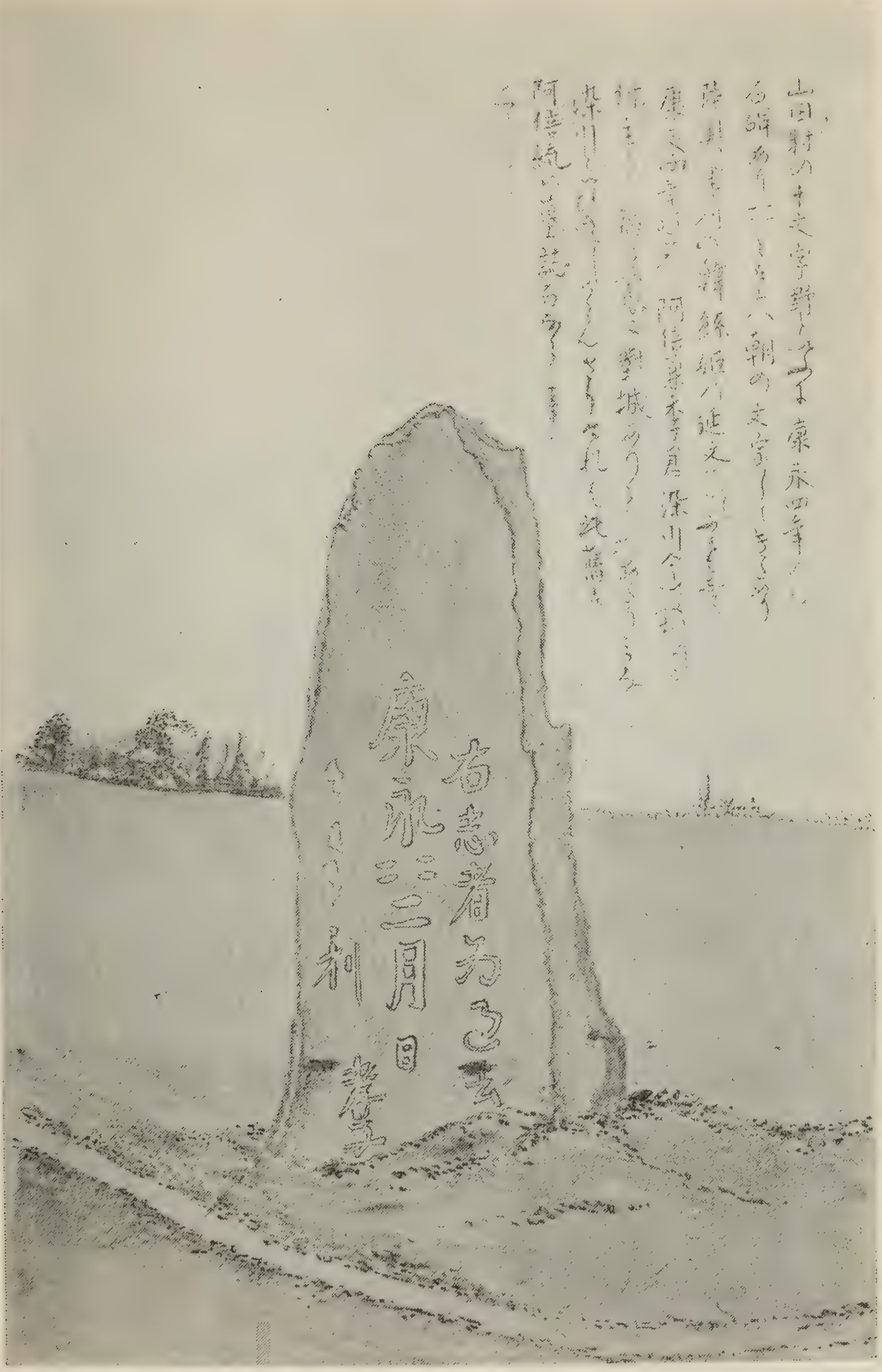


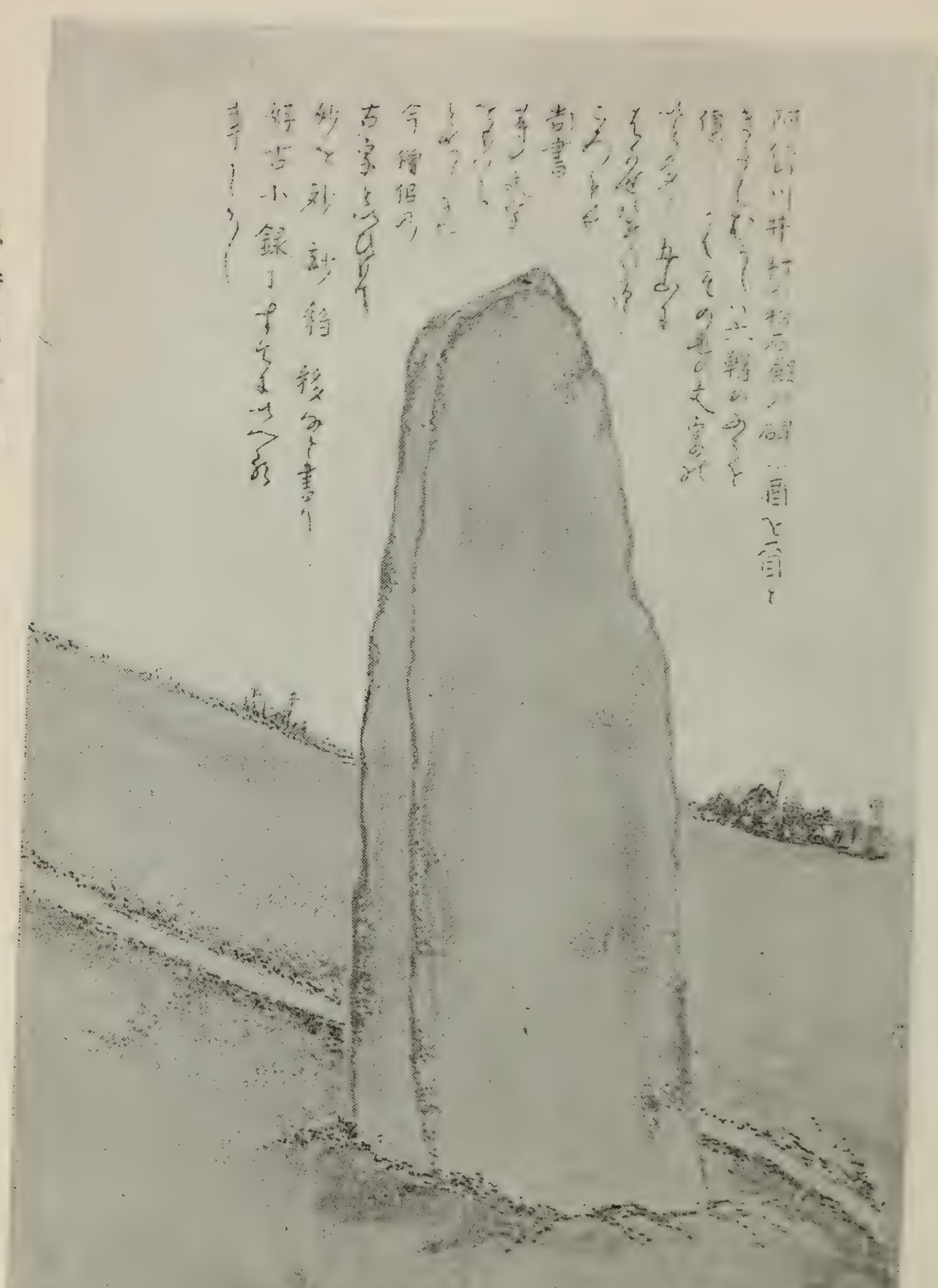
恩荷能春風





恩納能春風









恩荷能春風



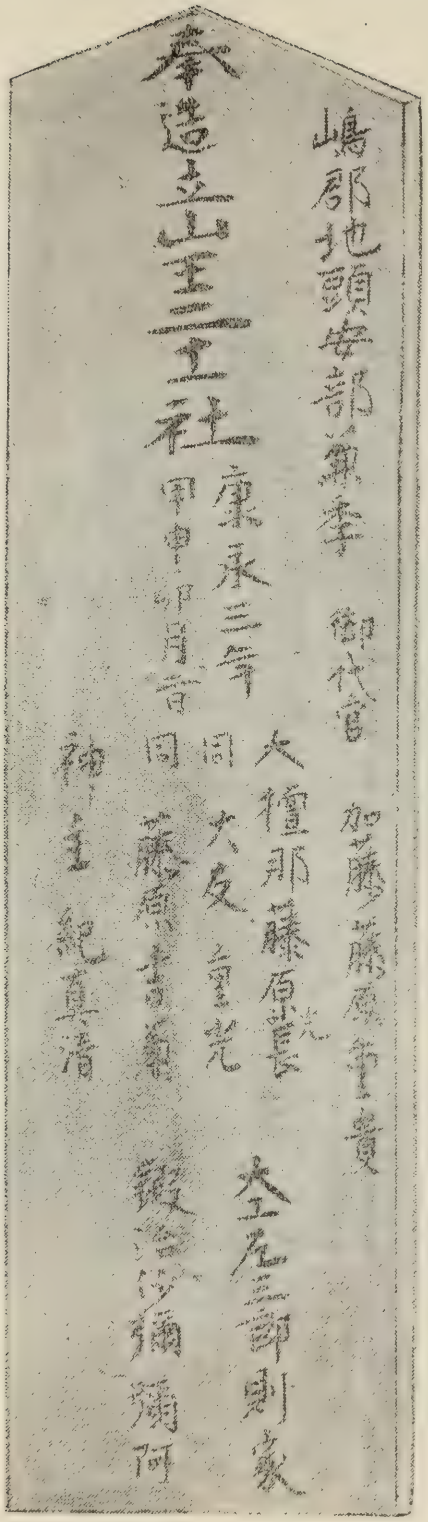
島郡北浦山王の社司紀丹後が上祖ハ名高き弓とりなりけるか八郎太郎といふ蛇神乃妻池の女瀬にすむをりちるに通りけるとの強弓引しほりてなやまさせ蛇を射けるしかバ空すさあちまり元気をやら吹類ヘ霹靂雷電せりかくて其の箭を投返し射ける男の眼にあたりそれよりしるしく以後一代ことの代々片眼なりしとぞ今に人片眼なりうし八郎太郎の霊を神と一のあがめの岸にまつり其の墓とぞ丹後の家にその鏃ぞとく尚あり鏃ハ出ぬとあれども あり



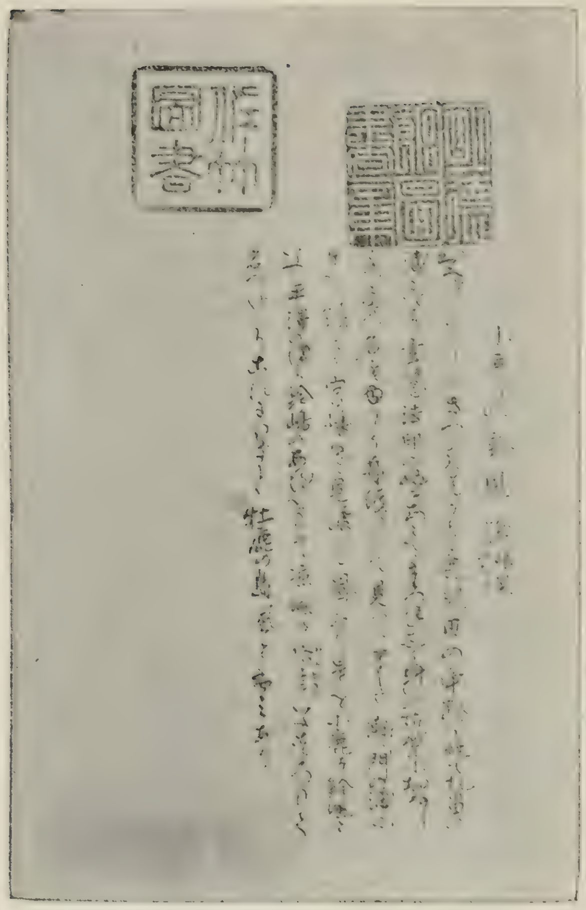
甲 此自一 二寸五分

乙 此自二九寸二分

喜多乃宇良日吉社棟札



小鹿の鈴風



小鹿の鈴風 鈴嶋風をいふなり

おなしとしのさつきばかり、鹿兒田の中路を經て北畠の浦にいたり、玄慧法印のふるあとをたつね、しらぬひの筑紫におなし、水島の名もゆかしう舟渡りして見つゝ。また潮門の浦に日を經て、宮嶋なンど見渡りし圖あり。是を小鹿の鈴風といふは、平澤の浦に鈴嶋のあるをもて、凉風と俗言いふこゝろもて名つけたり。これにつぎて牡鹿の島風とふみあり。

北浦村

湯の尻村

鬼節が鳴る

瑳都企のなかからはかり、北の浦やかたを立て鹿子田といふ田つらを來れば、ひごろ田ちふ苗はやゝ殖をへれど、堅田は此ころかき渡り植る、なと話る。

をりたちて涼しくもあるか早苗とるたもとに通ふ雄鹿の嶋風。

馬艸に刈りませて、象山貝母、蝦夷百合の花の朝露ふかし。ふたゝひ野邑にそ來る。觀音菩薩の森、菅大臣の社、內外の玉籬もみな、丹塗て朱なる鷄栖の、青葉しげき中に見へたり。こたひは濱路よりして見やり、いとおもしろき浦つたひ也。一ッ石を經て溫泉尻の浦に至る。此あたりの田佃も、泉郎の宿も、さゝやかなる栖家は板戸はあらで、萱戸とて荻芒なとをあめるに鳴子を附たり。若き男等の、たはれもの語りを聞つゝ行く〳〵、

風もなき夜半にはいかて通はなんかや戶のなる子音たつなゆめ。

遠う雷のひゝきて凞いとくらし。こは白雨のしてんとおもふに、しりより來ける人のいふ、鬼節が鳴るにこそあらめと。越の浦の胴鳴と、陸奥の津輕濱に御扉が鳴るてふ音にひとし。

中里の濱

黒崎の白蕨

平澤の鈴島

槻の木の碕を過て、中里の濱に壺石とて、世にいふ水吹石、青巖寺石にことならぬ石のいと多し。人とりて、これに木くさを植てもてあそひとせり。（天註――むかし中里とて坡に五六も家のありたりしが、二とせ鮫網の漁に出て海あれて、舟くつかへりて死うせて村ほろひ、畑となりて今も陶なと出るといふ。なかさとの名のみありき。）黒埼の近付て、磯山に菖蒲澤長根といふあり。そこに黒碕の白蕨とて、ことなるわらびの生るありき。そのよしは、むかし法師に宿かしてける女、あれてわかめとらじ、何を汁種(しるぐさ)としてか旅のお僧には參らせんとうちはぶれは、僧のいふ。過來し山路に蕨いと多かりし。いて折來てこれを、と。女うちわらひて、灰蕨(あくはらび)てふ事せでは苦くして、とみには、さらにたうびさふらはざるものにこそさふらへ。いな、さることのあらさなるとて、山に行てひとつかはかり採り來て、此蕨にゆめ灰なさしそ。いさ烹てといひつゝ鍋にふたりとうち入て、やかて飯を進めけるに、蕨のいとよけく、味もことなりしとか。こは、空海の世に出て示し給ふにこそあらめと、人もはらいへり。今の世かけて汁茱(しるくさ)とすべきほとは、灰蕨せぬわらひの萠へづるとなん。黒埼になりて、大明神の崎に社あり。經津主の神を齋ふ。近となりの浦なる比良澤に來て、鷗岩の姿こゝに、鈴嶋は、浪のうちふる音あるにや。夏は納涼嶼(すずしま)の名にこそおはめと見やれば、童の群れたち戯れたるを、

風渡る磯の鈴島すゞしくてぬれつゝなみにあそふあまの子。

この浦なる、石垣なにかしのもとにやとつきたり。

堅田の面は水無月近つきても殖るは、雨のふらされば引水もあらてなど、うちわひぬ。「あれ見ろちやよめごたち、沖の浪かはたをる、いその波か經たり、巻たり、沖の浪かはたをる。」と唄ふは、秋田の郡にて、「岸の浪かへたり、まいたりとうたふにひとし。殖をへたる村〳〵にては、手遊び、あるはさなぶりとて五六日もみな休らひ、五月飯といふ事ありき。いづらの村にても手ごとに小豆飯を炊き、烹味といふ物をとり〳〵にして濁酒をたつさへ、そのれ〳〵が寺にいたり、亡靈の牌の前、おきつきに手酬てのちは、飲み、唄ひ、舞して阿那手伸と、ひねもすあそびて飯りく、なとかたる。此あたりは北の海邊にていと寒く、田の實もよからす。高濱田は、いつも水かれてはか〳〵しからず、十把一束ゝ二手内なりといふ。こは、ふたつかつゝ十なる束稲なりけり。それにて豐なるとしは、ふた升のよねをとるてふ辭なり。殖田も鹿のはめば、暮れば畔火とて、わら、柴なとを焼しめのごとに、火を焚捨てくなとも語る。此あたりにて佃りし中昔の禾の名は、大迫、總助、吉見稲、大黒、母躰なとありしかと、近き世となりては近江早禾、青柄、薬廣、孫總、善松、豐後、牛豐後、雑穀、短、德稲又の名を六部といふ。むかし國めぐりのすぎやう者は、阿波の國德嶋の田面より採り來りしをくれたり。さりけれは、とくしまなかくよこなはりてはふきいふ辭也となん。　餅禾は石割、黒髭、五三連まろうと來れ見しつゝ蒸しぬる也しかり。

かくて、こゝになかめ、かしこに在りて日を經て、はやみな月とはなりつ。本山のかみわざ、

獅子まひ

眞山の祭りも近ければ、此兩山(ふたつ)の獅子頭をまはしつゝ神ぬしらか、たかぬさをふりさゝげ、笛皷にとよめき、神唄をうたひありくを見てんと、さはに人群れり。

土毛筍

五月(さつき)の卯の花咲ば六(みな)月(つき)の麥秋のありて、篠竹ちふしぬの子は、やよひの末に山より採り、はた四月(うつき)のなから、蕨とともに地竹ちふすゞのたかうなをとり、此みな月となりては、竹の林あるやかには、大竹のたかうなをとりてまさなごとさせり。

六月諸祭禮

いにし七日は船腰、天王の浦の牛祭、十四日には北の浦の山王祭、十五日は本山の逆柴祭、十六日は眞山の花幣(はなぬさ)祀なり。このごろ風のこゝち重く、かゝる神事(かんはぎ)にも會得ず日を經つゝ、やゝこゝちもよげなれば、畠崎(はたけざき)見にいなんとて北比良澤を出て、

小濱の眞砂

小濱とて、小石塔層(く)むいと清き眞砂地(まさごぢ)あり。みな杉の化石やうのものにて、世にいふ伽羅眞砂子、津刈路の濱にも見しにまさりてめづらし。小坂といふに分のほれば、玉くしげ二子山ありて、うべも箱根路を行にことならず。松長根を過て一本木とて、いたやちふ楓の木と、榎木と、ひともとに生ひ立るよりの名あり。

大楯風景

大楯といふ山のあたりの馬手は、海に岸高く臨(のぞん)て白崎、しら濱とて、うち見なんもあやうけれど、水蒼りに砂眞白(ましろく)、峙たつ巖の末には木くさ、葛(かつら)の生ひかゝりて風情ことなり。

塔澤

かね山、鎌の澤、荒田を經て塔澤といふあり。何の塔やあらん。なへて、さかしうこゝらの立岩ありて、見るへきところなり。

畠崎

弓手に櫻をひし〳〵と植て、かのへさるのいしふみをたつ。春のなかめいかならん。畠碕につ

きぬ。泉郎（あま）の栖家は、いやたつ巖の上にかさなり作りて木々茂りたり。門の柱、板戸の札は逆かちにおし、あるは裏返りたるなどにましりて、亡靈號（なきたまのな）をおしたるは、ならはしにやととへは、もとも得しらで張りしとて、めら〳〵と法名（のりのな）はやりとりつ。人はみなそば〳〵しう物語、人呼すら、物あらかひにやと聞おどろきぬ。つねに、はきものもふまず男女はせありく事多く、あさ夕萱のみ焚ば家（やか）はすゝたれて、いふせき事おもひやるべし。髮の末を叉ひとところ結（ゆひ）たる男あり、鰒（あはび）の潛（かつき）のみするをわざにて、潮に髻（もとゞり）の亂れざるためとか。女は山畑佃（つくり）て、小田のひとひらもなけん。かゝるなげなる處から、北平澤（ひらさは）の浦におしならひて、北畠といふがいとふりたる名なり。こゝにいひ傳ふ、玄慧法印はこの北畠の浦に生れしと。」おもふに、さすらへの君などの子にてやあらんか。家は藤原たり。ふみはらはのむかしは本山日積寺にまねびて、のち都に至り比叡山にまねひぬ。文保元亨のころ、うゐまなひする兒のために書（ふみ）を作れり。もんじやうことさらめてたければ、後醍醐の帝叡感のありて、此ふみの名を庭訓（にはのをしえ）とたまふ。亦熊谷狀をもかけりとか。光明院の建武のとしならん、二條の馬場殿にして御遊ありて、義貞にみことのりありて日を經てのちに、萬里小路藤房卿勅を承りて、北畠の玄惠に叡慮のおもむきをのべられければ、玄惠、義貞にかたらひて鎌倉の滅亡（ほろび）の事をしるし、つぎに尊氏、直義等に會て、隱謀、ならびに六波羅のほろひたる事ともをしるさ

れたり。主上叡感のあまり、玄恵に三品をたまひて僧都になしたまひしとなん。」（天註ある書にいふ、北島玄恵法師は、元亨釋書をあらはしける東福寺の虎關禪師のはらからにして、皇都に生れし人たり。太平記の三四五六七八九十の卷を編り。後醍醐帝の御代の人なり。姓は藤原にして、そのころ比叡山に三上綱ありし、玄恵はそかなかのひとりなりき。資朝卿、ひめとひめたるあかむれをあかさんかため美濃の國士岐伯耆十郎賴貞、多治見治郎國長なと集居て無禮講を催れたり。此とき玄慧法印にその文談をかゝせられたるよし、昌黎赴潮州といふ長篇のくしそ有ける。大和の多武峯の壽永法師は玄恵法印の弟子にて、是も太平記のもれたるを書そふ。六人の作者のひとりなり。元弘三年癸酉正月二十一日八宗の僧侶蒙勅定清涼殿に候す。紫埜大德寺妙超侍者拂杖を取て簾前に進て三拜し、向龍顔謹て奏して曰、今日の宗論以一言理すへし、負る者は下部たるへし。直奏急也。叡聞まし〳〵て八宗に制示を加へたまへは、三千の僧侶白洲に蹲て各禮諸す。先天台と禪宗と可宗論旨勅下あり。于時玄恵法印殿中に進出問曰、如何是教外別傳。ときに超侍者答曰、八角磨盤空裡に走る。玄恵法印此語を不會疑擬す。超侍者擧拂子その座を追立爲下部、其名を宗叡と呼たり。玄恵法印亦面して座に跪く。次に三井寺の僧正箱を携來て面前に置、語未發超侍者問曰、是何者そ。僧正曰、是乾坤の箱。侍者拄杖を以撃碎して云、乾坤打破の時如何。不及答話口啡々として僧正去ぬ。即下部として其名を宗園と號す。帝前に約諾せし上は辭するに不及、二人輿を舁き紫野に行ける。そのありさまを見る人哀を促しける。此日即大德寺草創の勅下あり。後醍醐天皇の勅願寺也。」玄恵法印太平記を編せり。されと此一行を不書には宗論に負たるより其恥辱はなはた重し。久しく大德寺に擒となりて白袴を着て磬を打て住雖、然世の智人文者なれは尊氏卿の舍弟直義朝臣の寵に仍て、紫野を出て洛中に徘徊す。このとき太平記を編綴すといへり。）

北島村點景

玄恵法印こゝの生れしいはれこそしらね、舊にし浦とおほゆ。村に一字一石にほくゑ經をかい埋み、七文字の碑の、なゝさか斗なるたてり。とし月はけちたれど、いとふりたり。茂る岨に、朱（あけ）の雞居の見へたるは山祇のみやところなり。弓手にたかく岩の上の栖家なれば、たへて地震（なへ）ふることなけんとか。蚊のほそ聲に名のれど、さらにすたく事もあらで夏は住よげなれど、蚤のいと多、ふしもつかれず此夜あけたり。

割舟にて

水無月廿三日。水島に渡り見まく、つとめて立木（たちぎ）ちふ山ひとつをめぐり、背海（うしろうみ）といふ濱邊

水島

鹿落し

に下りて赤狹間といふ處より、衣具利舟とて、丸木の小舟に足なげて乘りぬ。水嶋にこかん、浪たつなゆめとて、小福浦の濱もやゝ經て、長手、小立待なとの岩のこゝら立ておもしろし。禰多以祁といふ大に高き巖の岸を、波のゆりもてうち渡れば、こゝの岩、かしこの離れ磯に女の童の、したゝみひろふとて歌唄ふ。かくて岩のあはひ〳〵を縫ふやうに、舟さしめぐらして水嶼につきぬ。いと廣き嶋回の、水とひとしう、平礒のごとし。いさゝかしほ風の吹ても、此島の、波の下にうちかくれぬれば水嶋の名はありける也。築紫の海にもおなし名のありけるにや、「神さひをるかこれの水嶌」なと、萬葉集にながめあり。かしこのきしにも集ひよせて女のあまた、したみこのやうなるものもて、海索麪、凝海藻を採りぬ。男は腰に魚刺てふ、その重さ二百五十泉零あまりの鐵の、鑿の如なるものをさして浪に潜り、鰒、榮螺をかづきあげたり。南北にながやかに、岬は菅生の崎をさして子に中り、艮には岩木山、卯辰に杜良の岳、巽に寒風山、赤神の嶽なとの、朝ひらき行雲の中より生み出るさま、ことによけん。角榮螺、あまさゞゐ、高したゞみ、青毛したゞみ、眞したゞみ、礒辛螺、沖辛螺なと舟に取り入て、濤の出來ぬに、いさ飯りなんとてみな撈つれて、子持黑、入道岩、鹿落しとて、つるぎを植へたるがごとき高岩どもの、岸に重り立り。鹿狩のとき此崎の野にかり集め、かゝる岩の上より追落しけるとなん。こたひは弓手に渡り來つゝ、畠崎の磯になりぬ。

朝汗に沖の水嶋舟よせて見るめ涼しく海士のかるらし。

やはらにおなし泉郎のあるしのもとに來は、雨のさゝふり來ぬ。やかて晴れぬれど、日はしたなれはとて出たゝず。

廿四日。小雨そほふれど畠崎をたちて、きのふの磯山にのぼり粟畑のなか路を分て、西は海東は赤神の岳也。赤狹間をめてにして、丸山、小丸山のあはひに、大島といふ離磯の見へたり。躍(はね)、潜(くゞり)なとおもしろき處も馬手の海べたに在るてふ、岸高くして見へず。みやさかといふはげしき處を駒なん先に進ませ、かちよりして戸鹿の浦になりぬ。

戸鹿の浦

ことくにはしらす、あが父母のくにべ三河路にも戸鹿の岳ありて、刀鹿(とが)の神の御坐(みまし)あり。うなと山とはたがへど、おなし名もありけるものか。此戸鹿の浦には、大船小舟の集ひ入て泊する浦屋形なれば、くゞつのひとりふたりはありつ。

こもかぶり

あまたの舟の入來るころは、老たる、わかきのけちめもなう問麿(とひまろ)、海防(ふなやど)に入來て、泊する船客(ふなびと)等か丸寐して待に、家にありとある燈をけちてみなしちまに、うば玉のやみのうつゝにさぐりより、やがて男のふつくろに身をまかせぬれど、男も女もさらに顔見る事のあたはねば、舟人ともは、たゝ酌子果報とて一夜のかたらひぞせりける。雞(とり)のかげろといへばみなひそ〱と別れて、友の處女(をとめ)も誰といふ事はしらず、知れるは屋戸の刀自(とじ)斗にこそあなれ。是を薦被(こもかぶり)といふとなん。濱鹽屋(はまのしほや)、或いふ濱砂(はまさ)、濱中の館も經

白神不動尊
鹽戸の浦
沖漁の舟
産聲の祈り

て、三ッの女滷の水潜り出る涼き細流のあるに、いくばくの數の鳥居を立て無動尊を祭る。名はしら神とそいふなる。（天註 紀の國の白神の磯の名をはしめ、しら神といふ名は奥陸の松前の白神か崎てふあら潮あり。津輕の深浦に近く白神か嶽の名あり。しら神とは白鳥をさして、日本武尊なと雷神なと祭り、はたしら山をまつりて菊理姫なと齋ひたり。しら神とは蠶の神なと齋ひまつれり。白神といふ處の名いと多し。）しばし行て路の邊の艸の中に、寒泉の清く涌づるあり。

草ふかきなかにかくろひくむ人もいさしらかみの磯のまし水。

やはら鹽戸の浦につきたり。戸鹿の浦屋戸にうちむかひたる海越しのなかめ、このも、かのもの立臥たる岩群の姿どもなへてならず。宮嶋とて、嚴島姫の祠を岩の上に居たるあたりに、波のさと打上たるなど、いとおもしろと見やるほとに、雨のいよゝふりまさりてければ、此浦の泉郎の宿に泊りて、尙零り頻る雨の夕まぐれ、ことにあはれふかき海つら也。あら浪を凌て小舟のとぶやうに來るは、このごろ沖に泊りのみしつる、安良てふ魚の漁り人の五人が、汝かい立てとくこぎ寄ぬ。波かけ衣ぬぎやり、餌箱、飯笥、洋筥なとをかゝへもて家に入ぬ。うへも海士の仕業とて、からきめをおもふべし。沖箱てふものは横は一尺あまりにして、烟草、ほぐす、附竹、鈎なとを入れて、これを夜るは枕として、つゆも身をはなたぬものとなんいへり。浪のうちなごむころ、更てしとしてんとてとに出れば、かなつゝみをうつやうに音の聞へたるは、いかにと入りてとへば、隣の嫁の、今うみつる子のいまだ産聲立ぬとて、

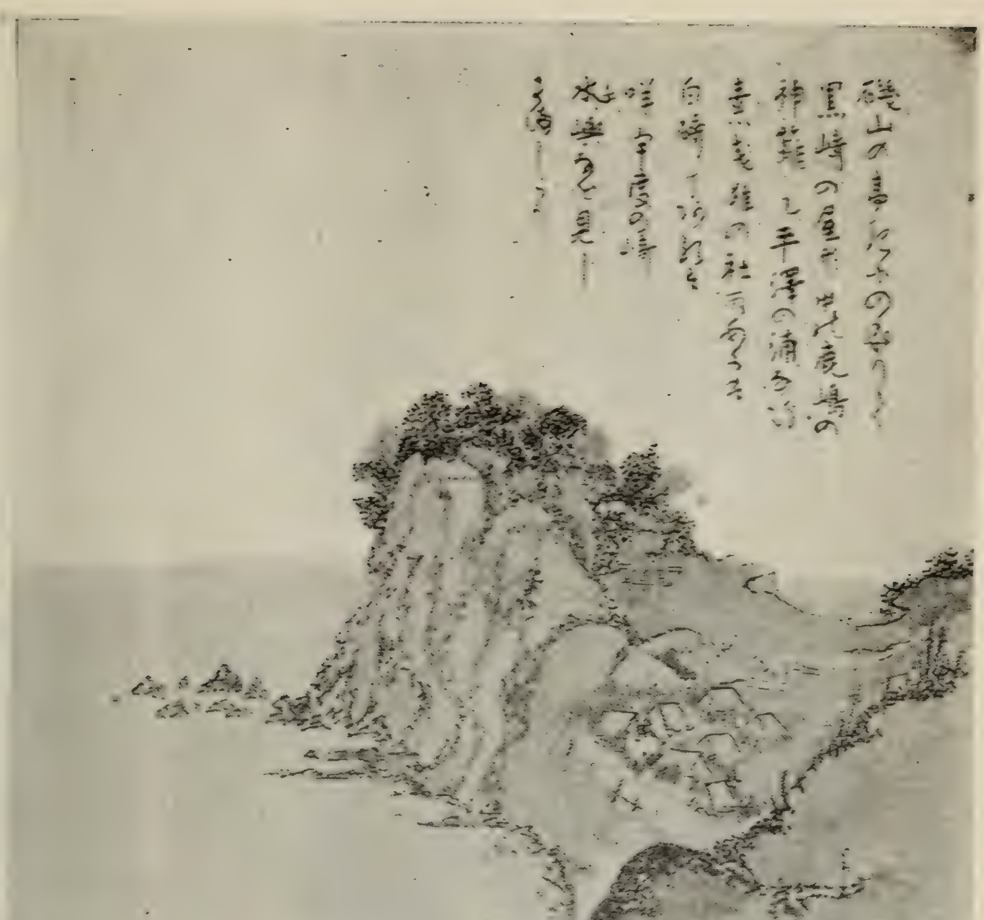
うふやに入て、鎌なん火筋にてそうつめる。さりけれは、うめる子のなきてけるためしとそいへる。

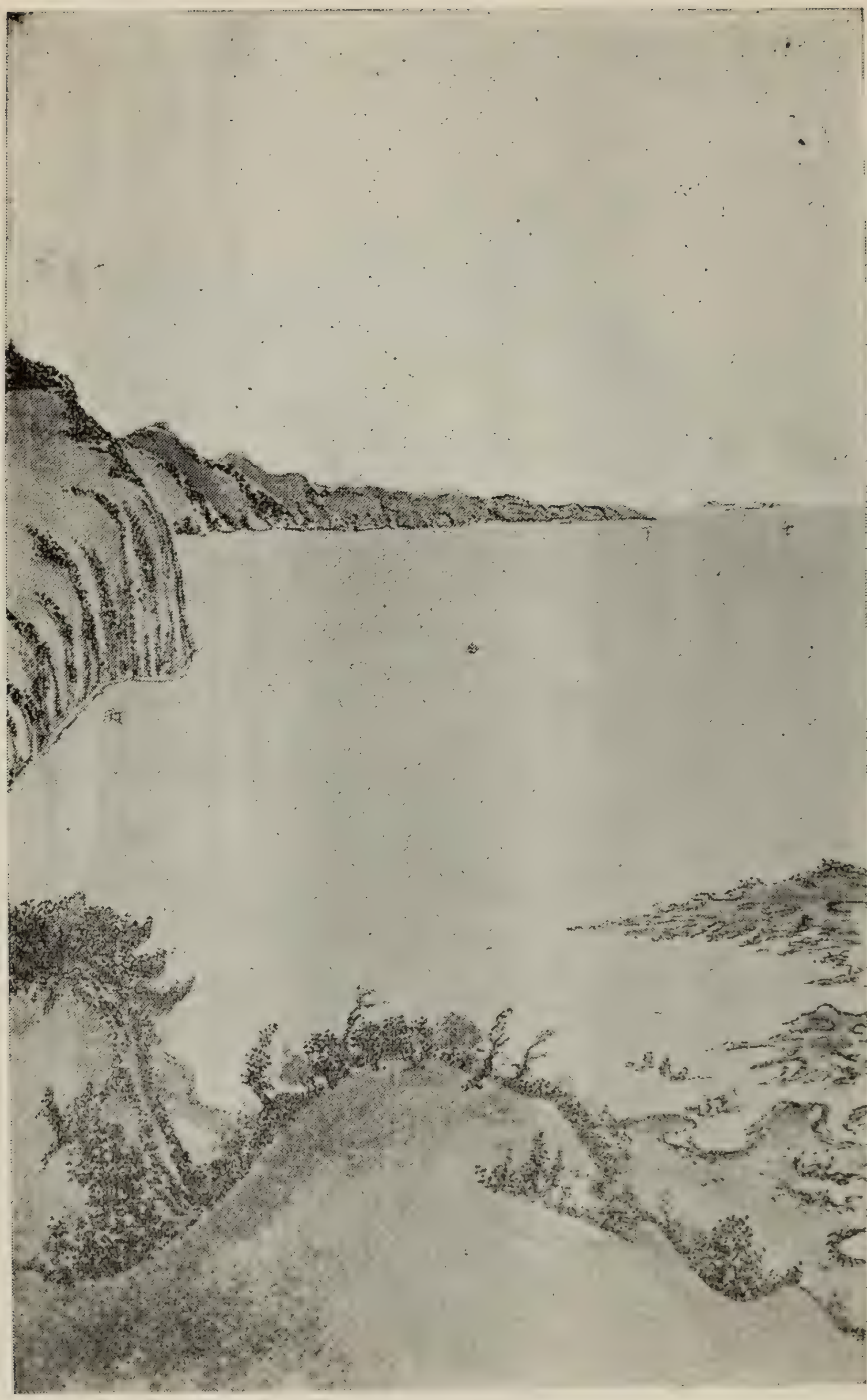






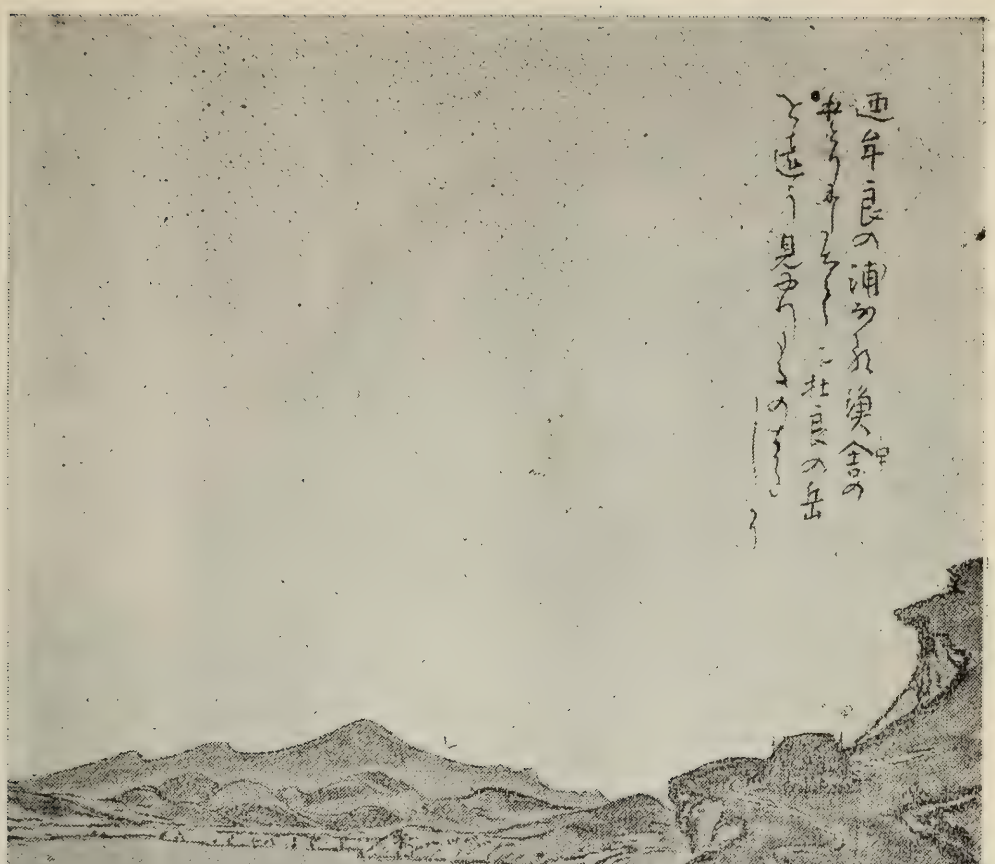
小鹿の鈴風

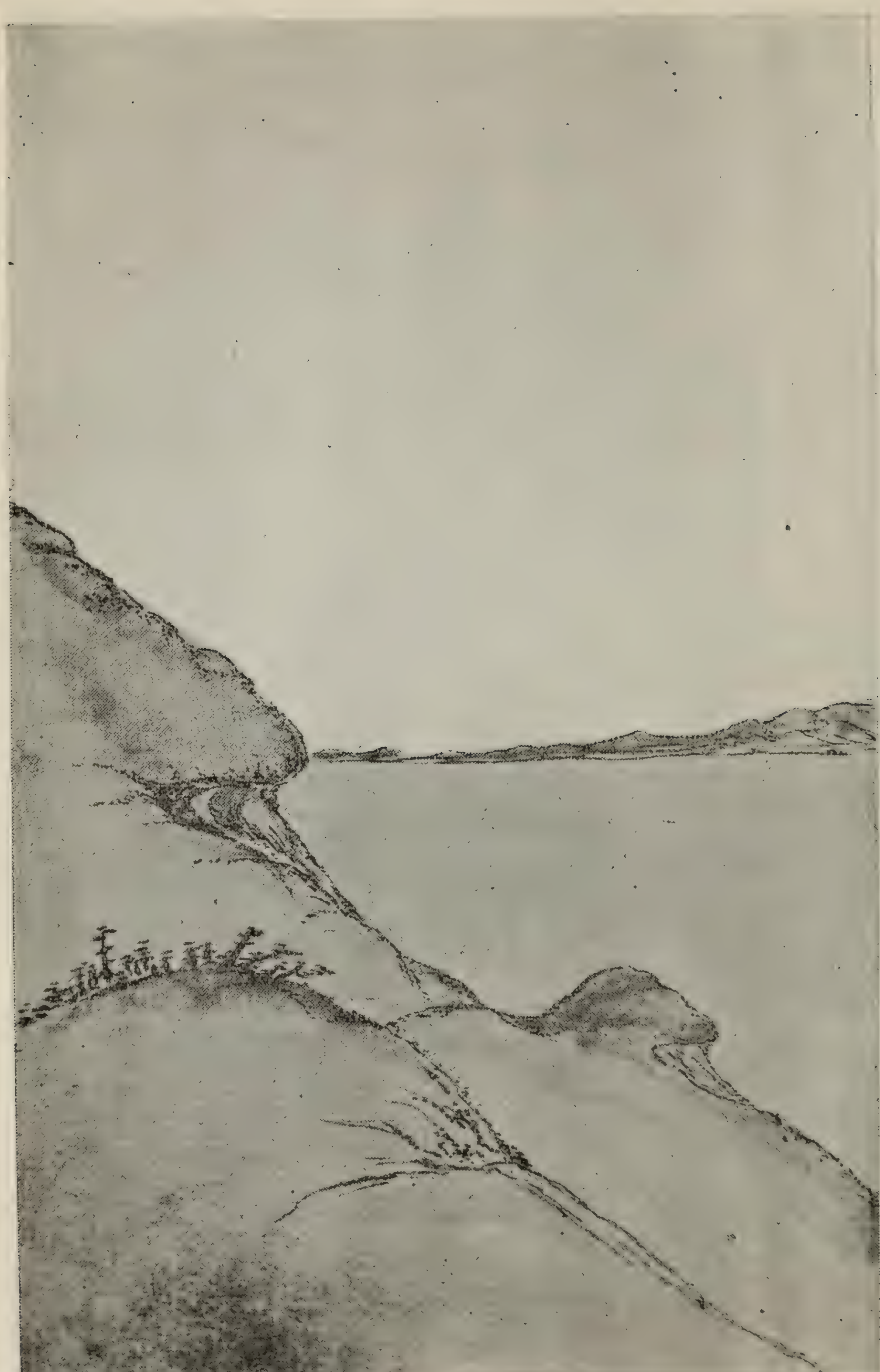










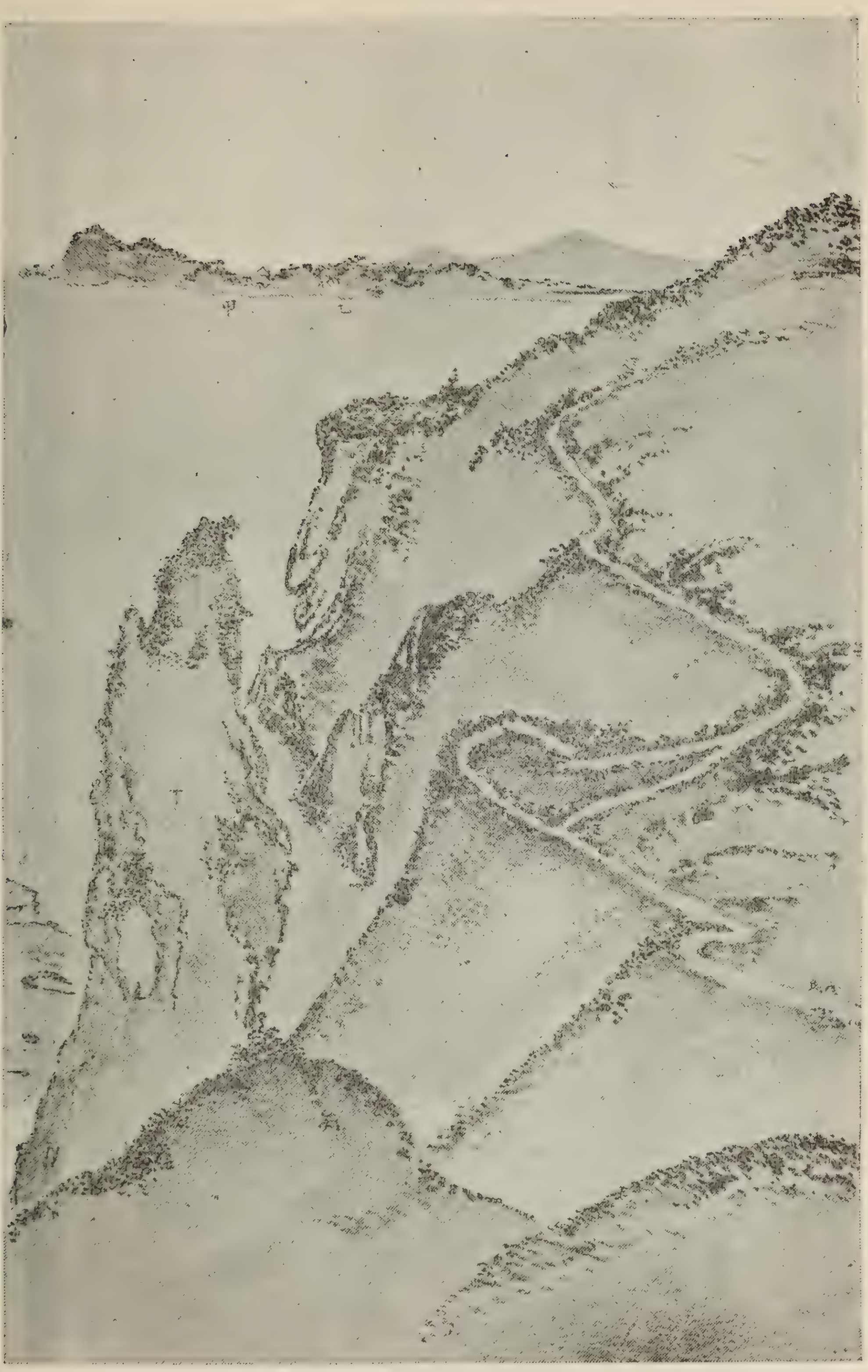




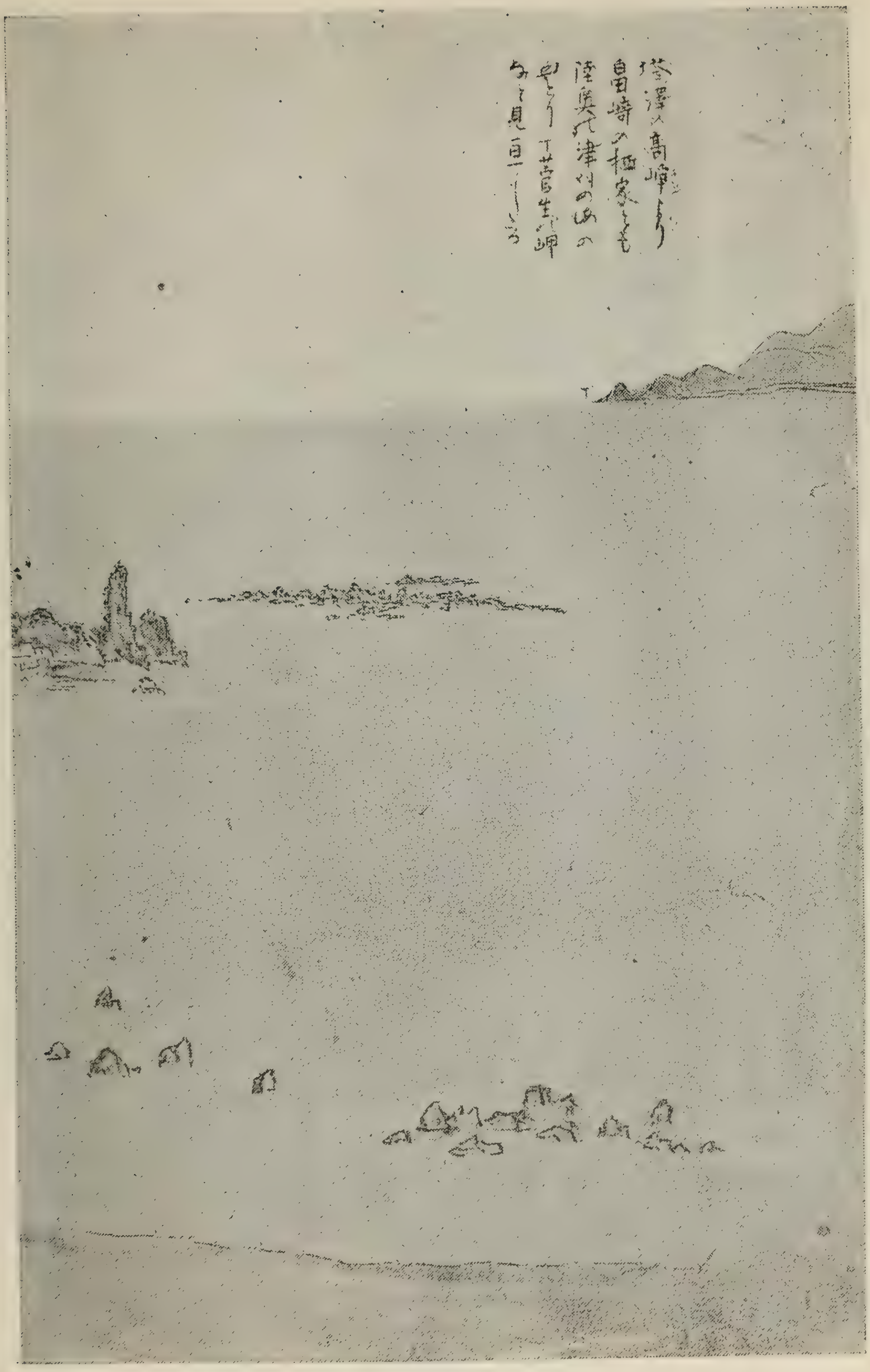




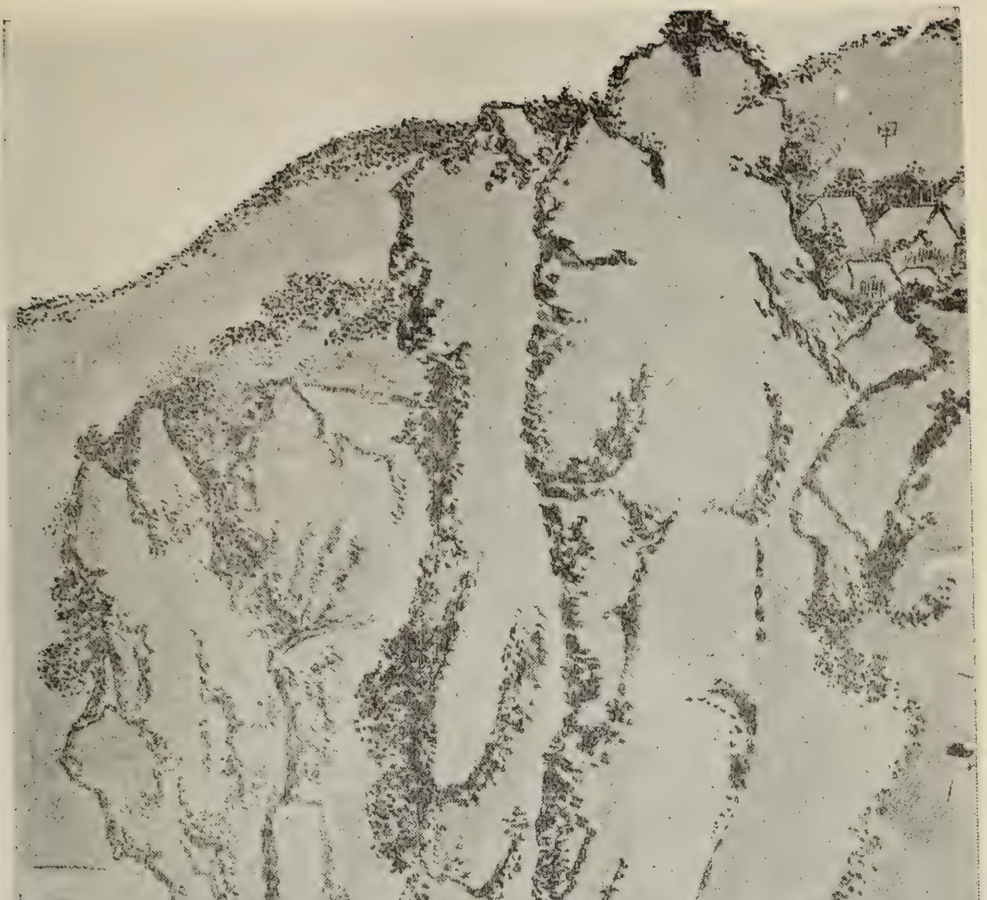



甲
丁

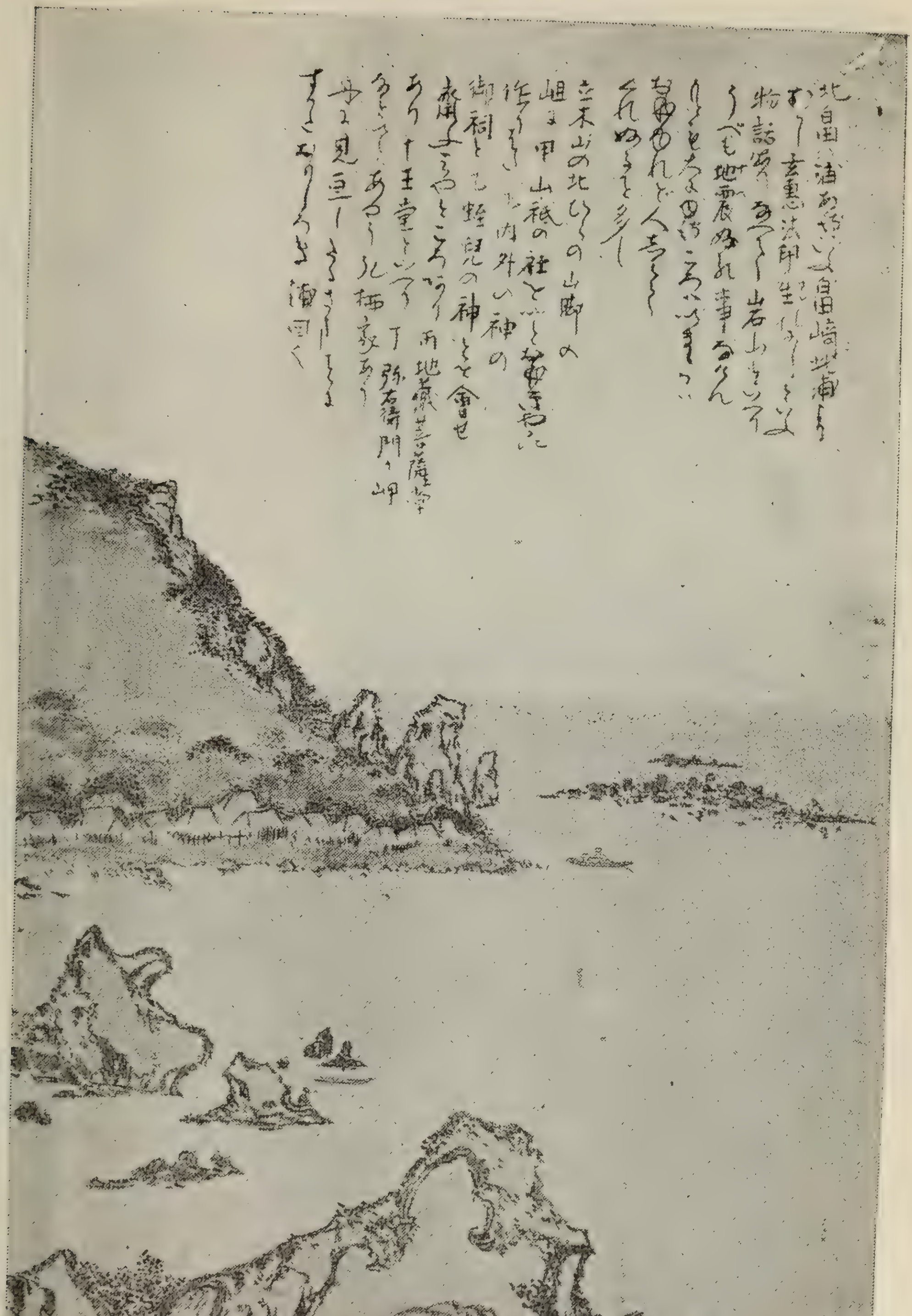


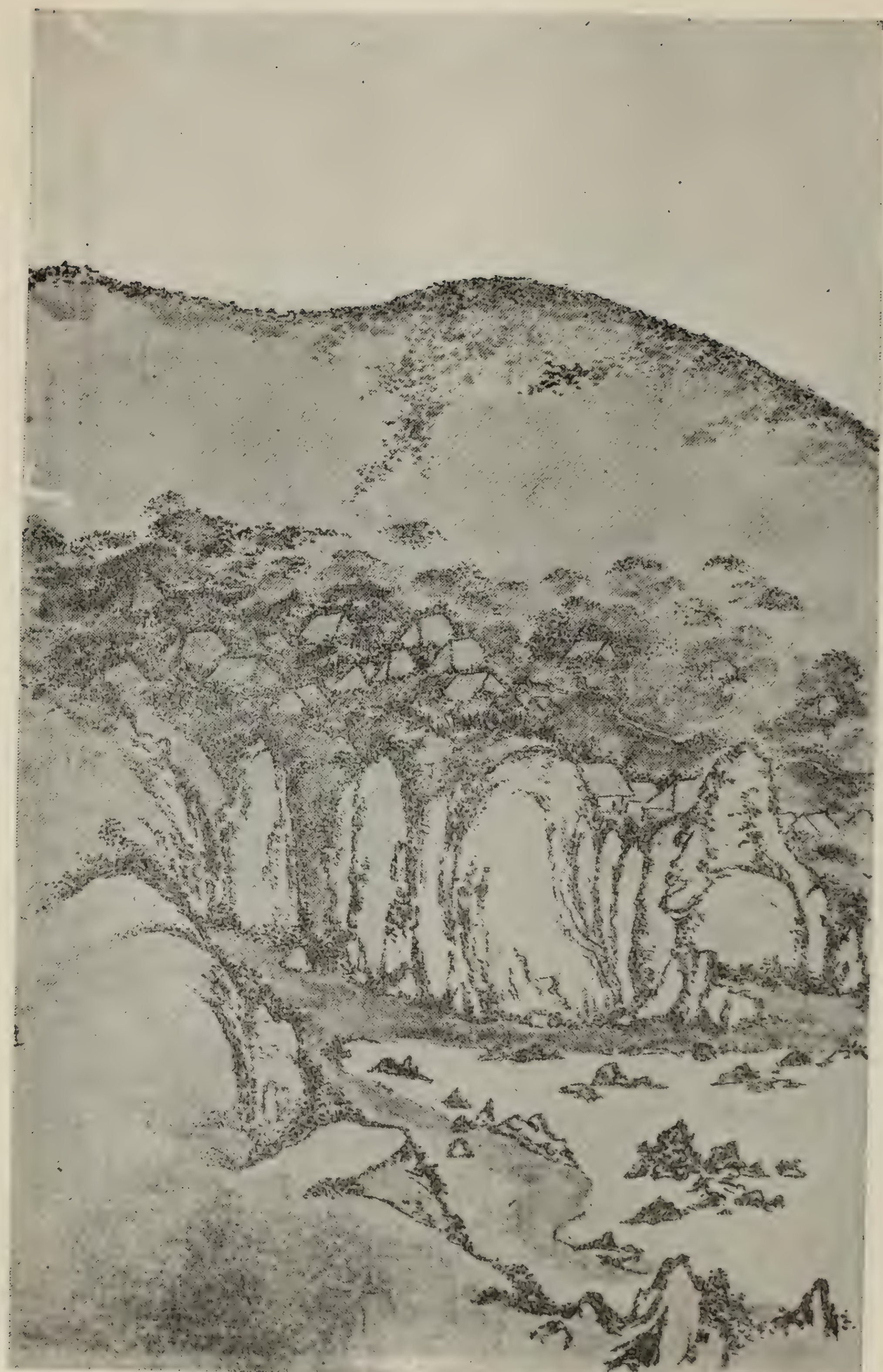




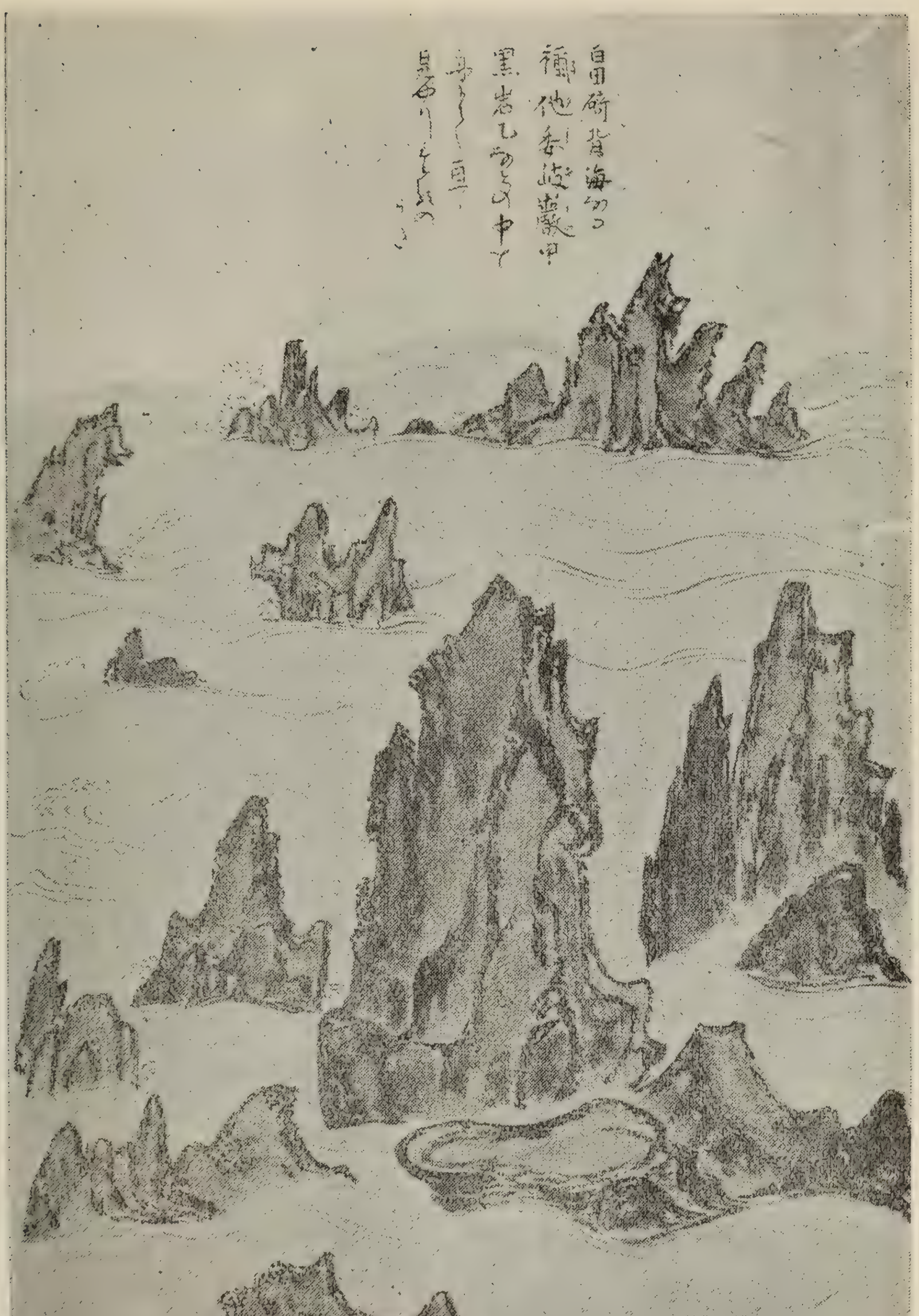








小鹿の鈴風






長田王被遣筑紫渡水嶋之時二首

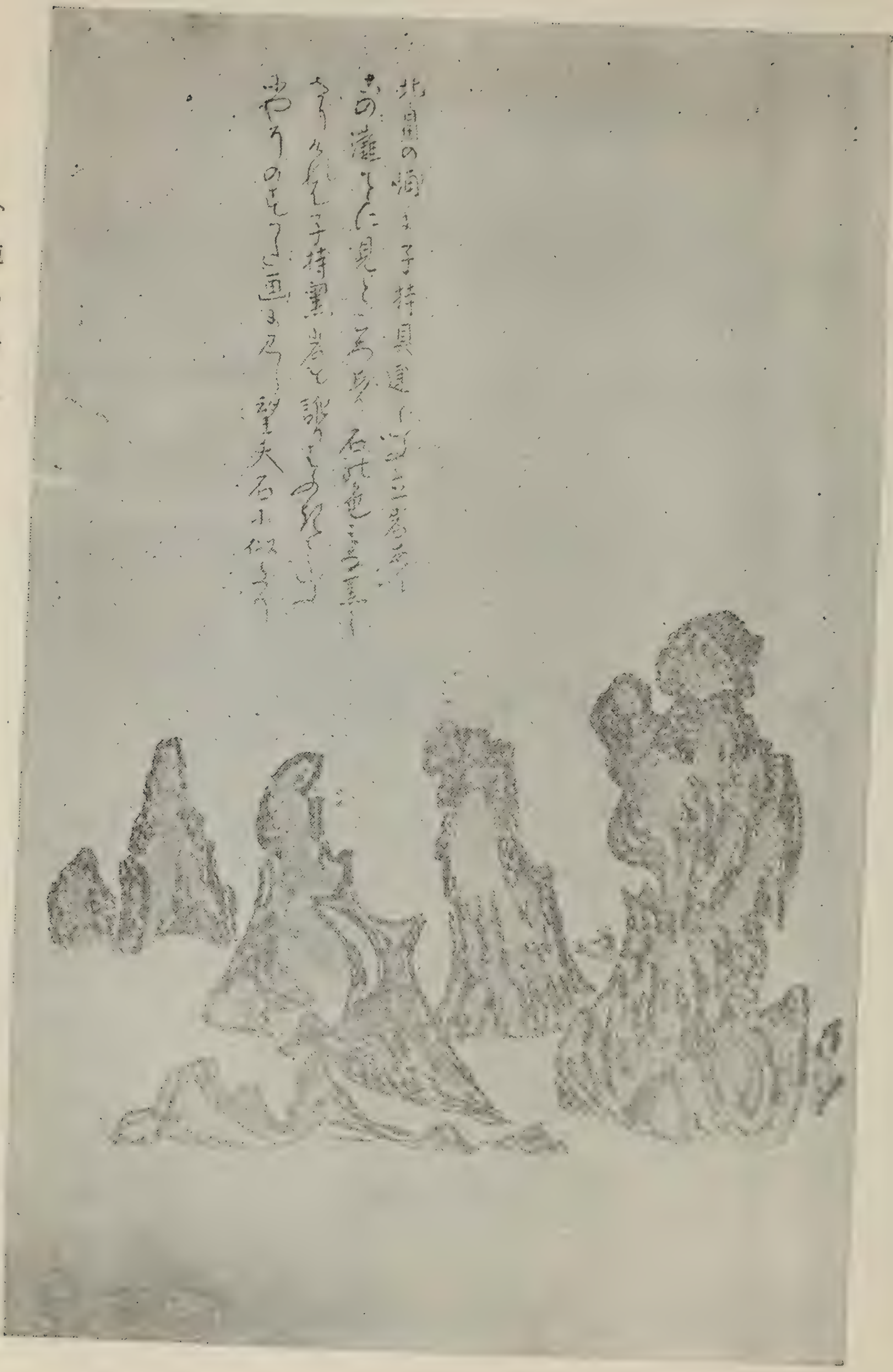


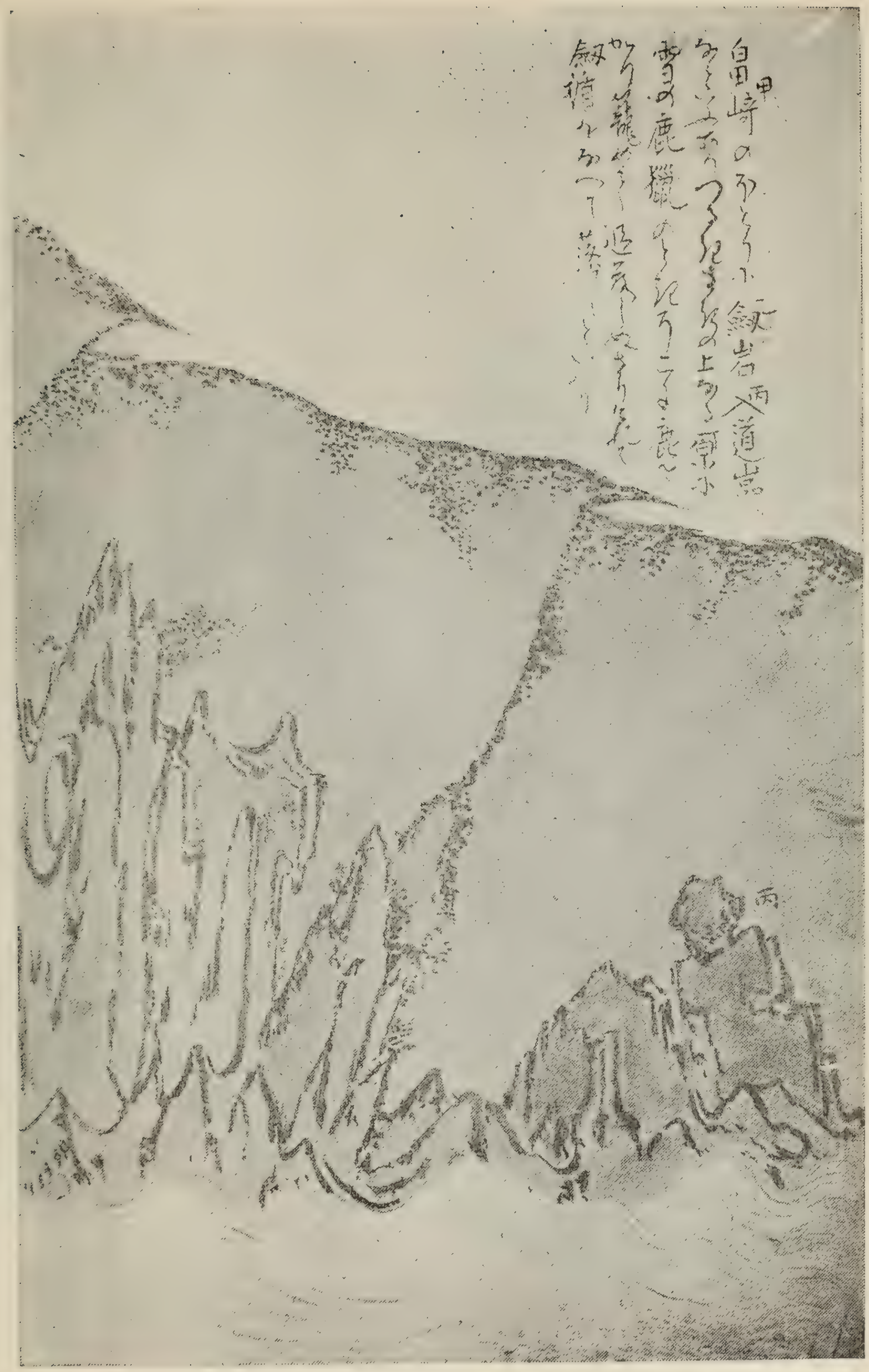


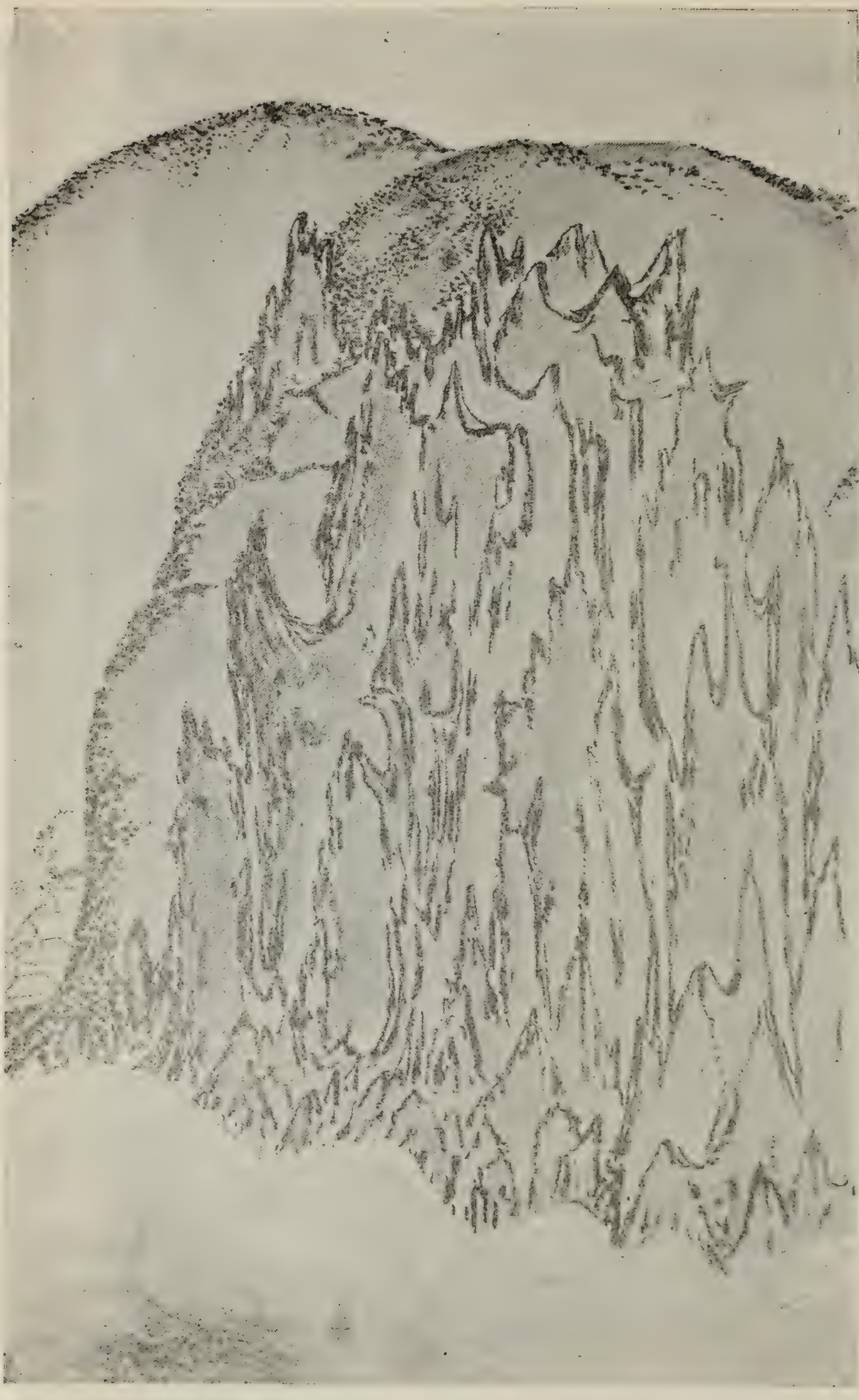
小鹿の鈴風







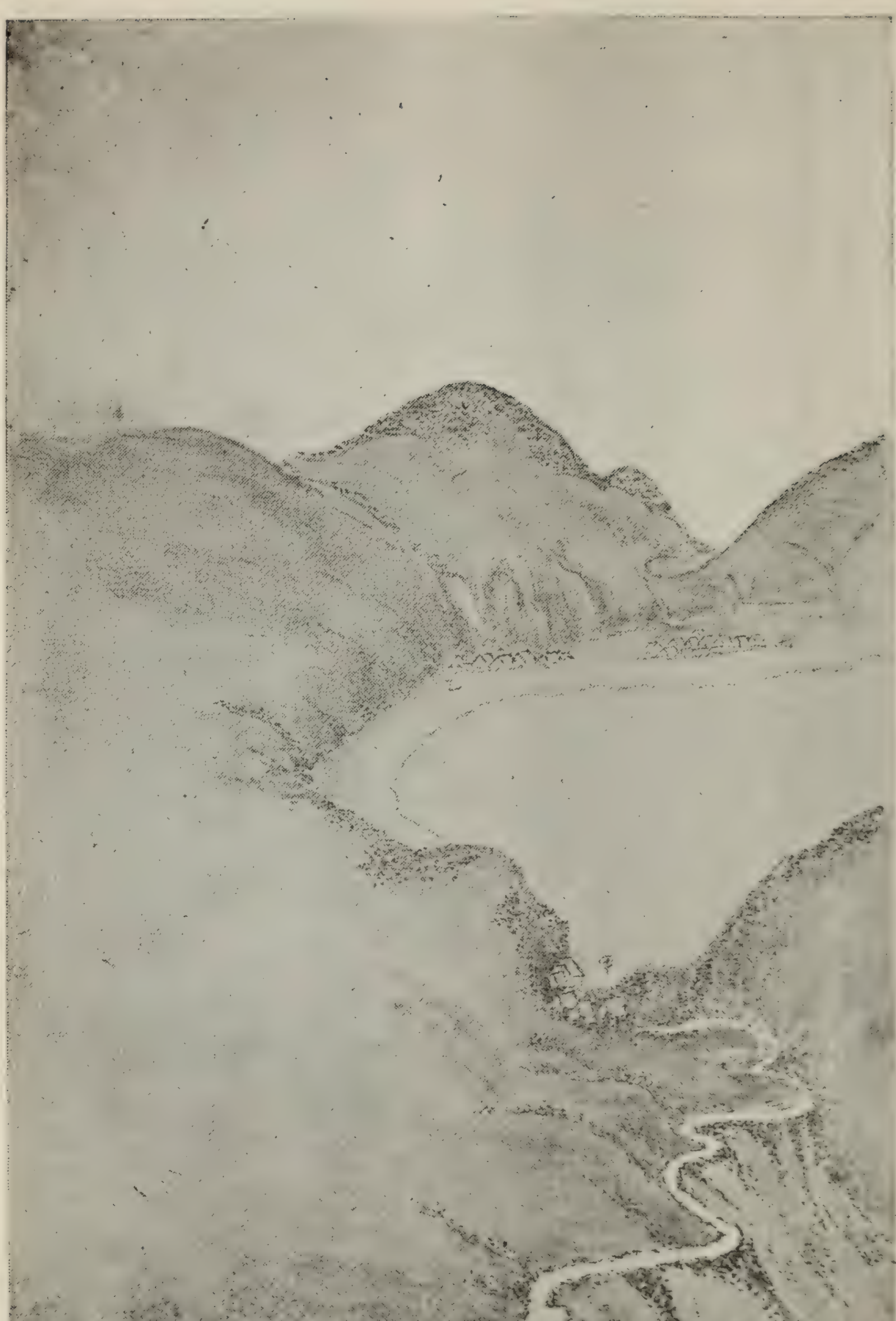


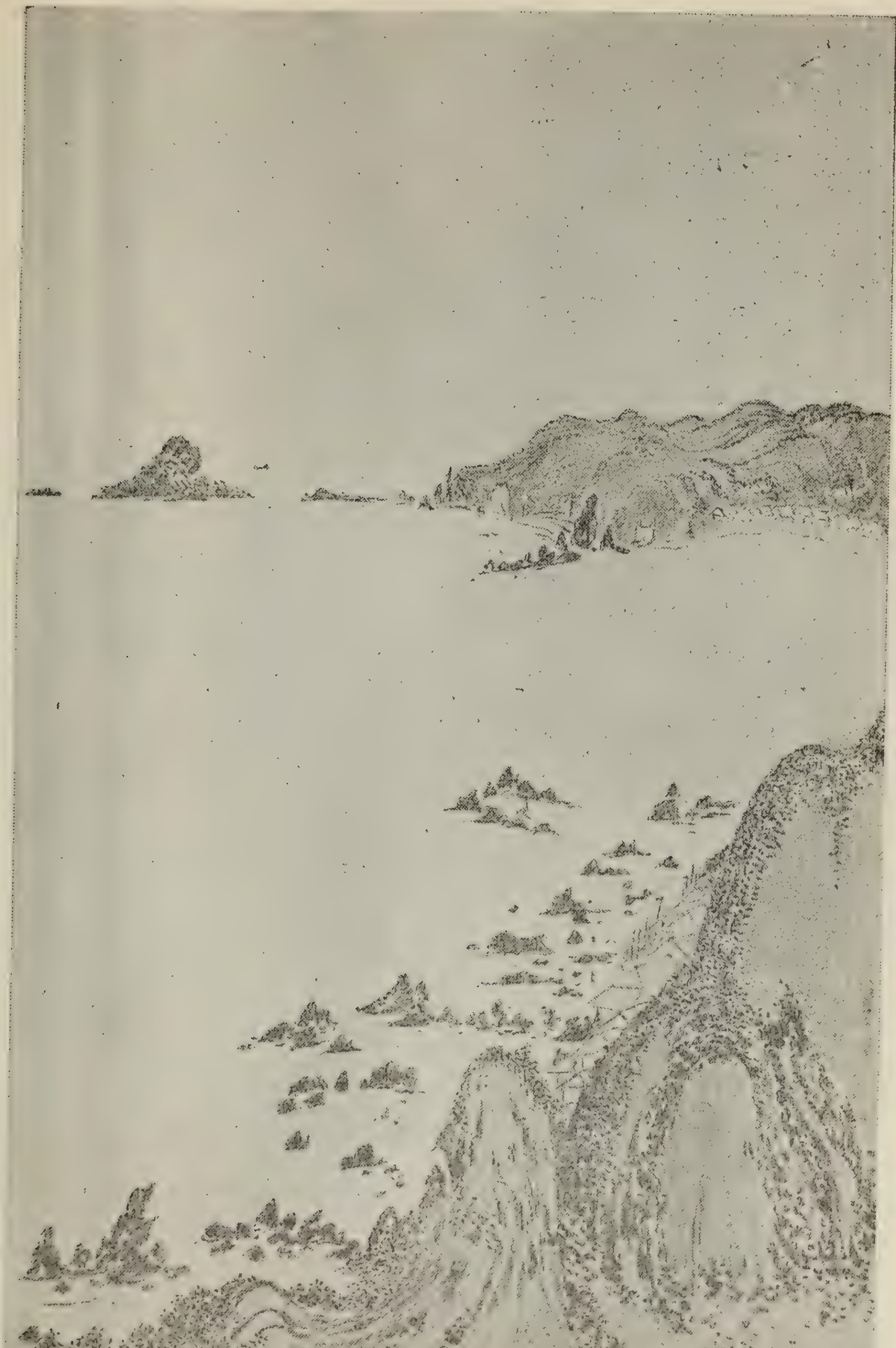



畠崎より渡鹿の湖に行に
大磨山 小丸山といふあり
かうめハ大嶋といふあり
彼の渚路にゆかて躍




甲
渡鹿の浦
乙
濱ノ鹽屋
白神の不動堂

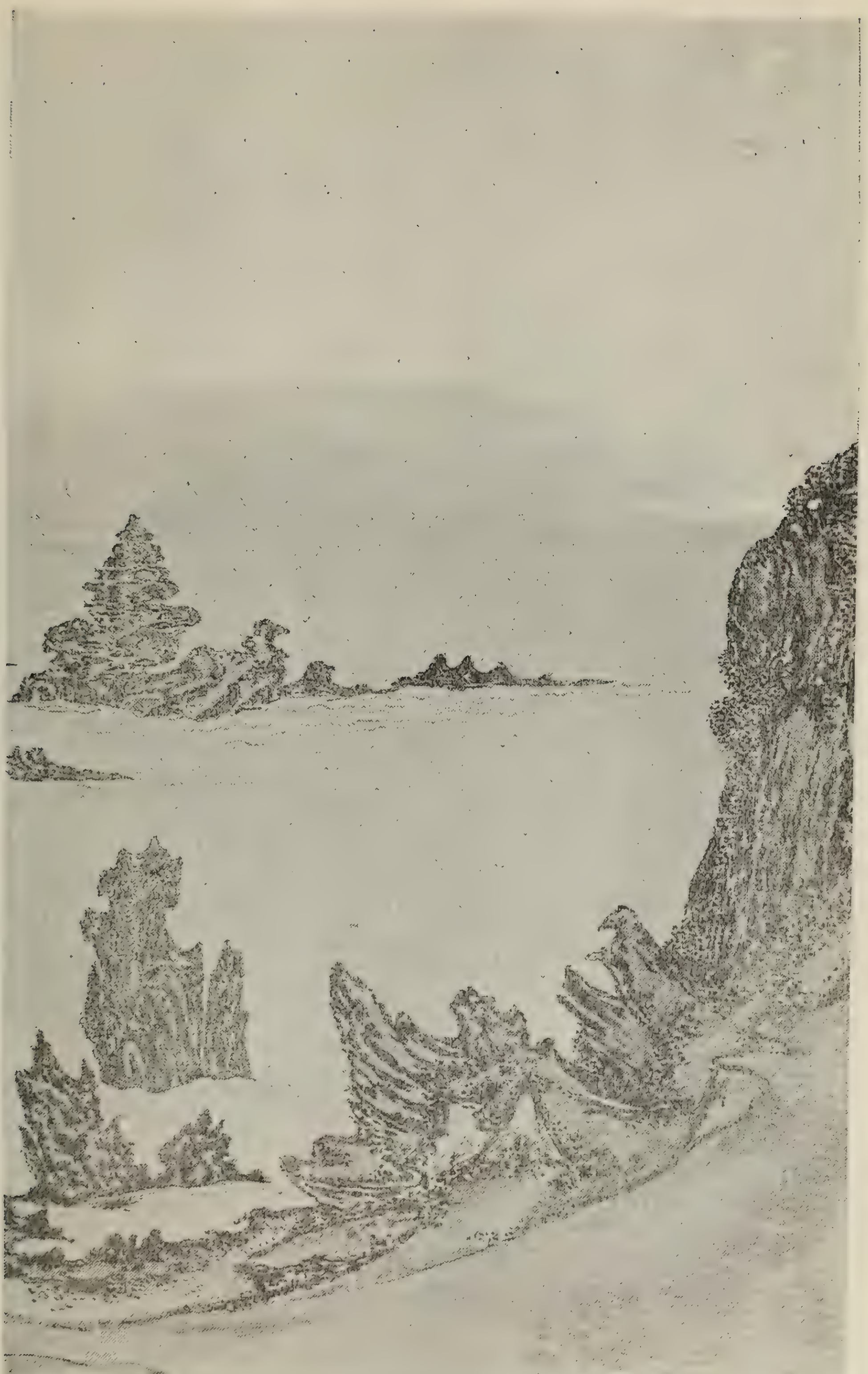






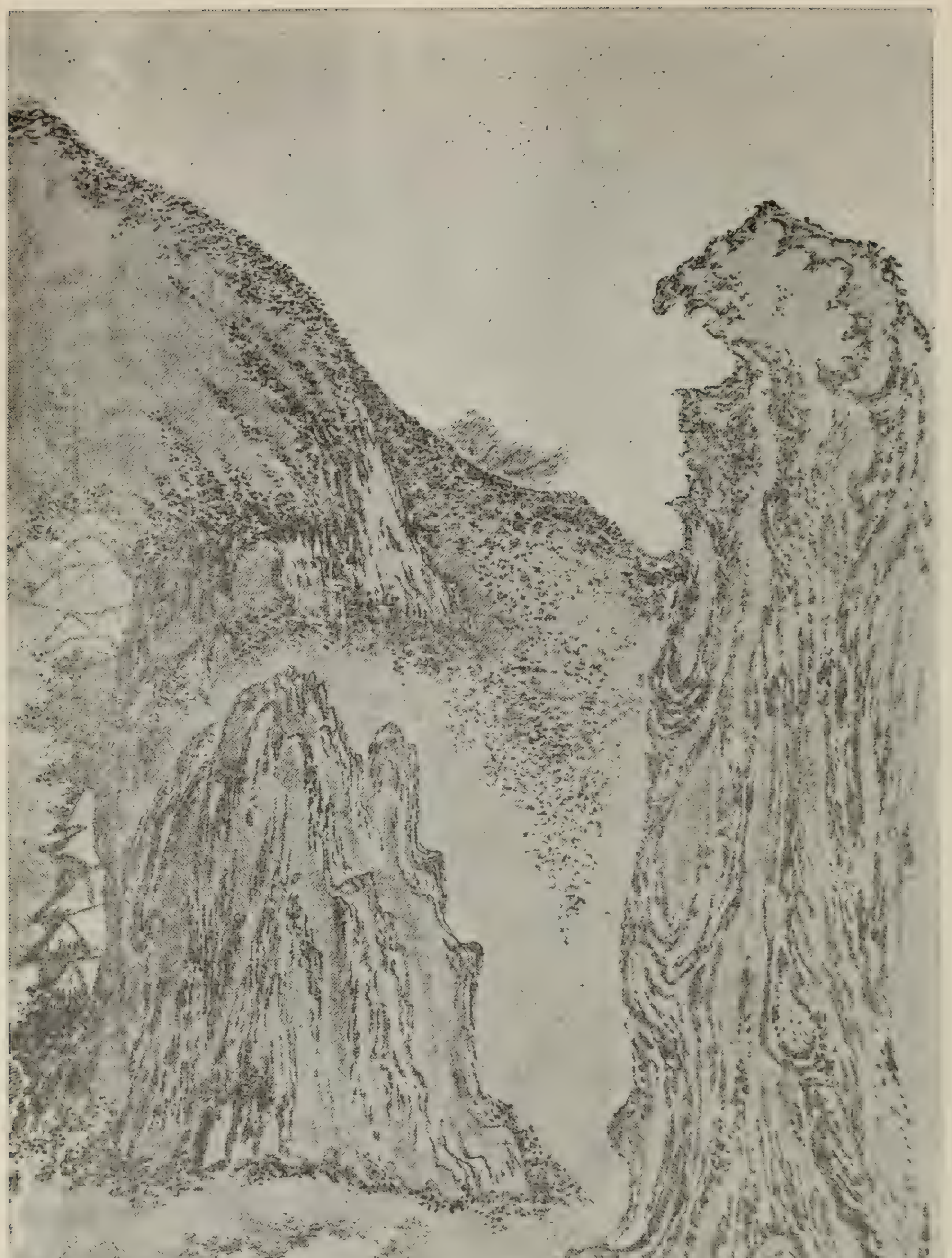

鹽戸の浦



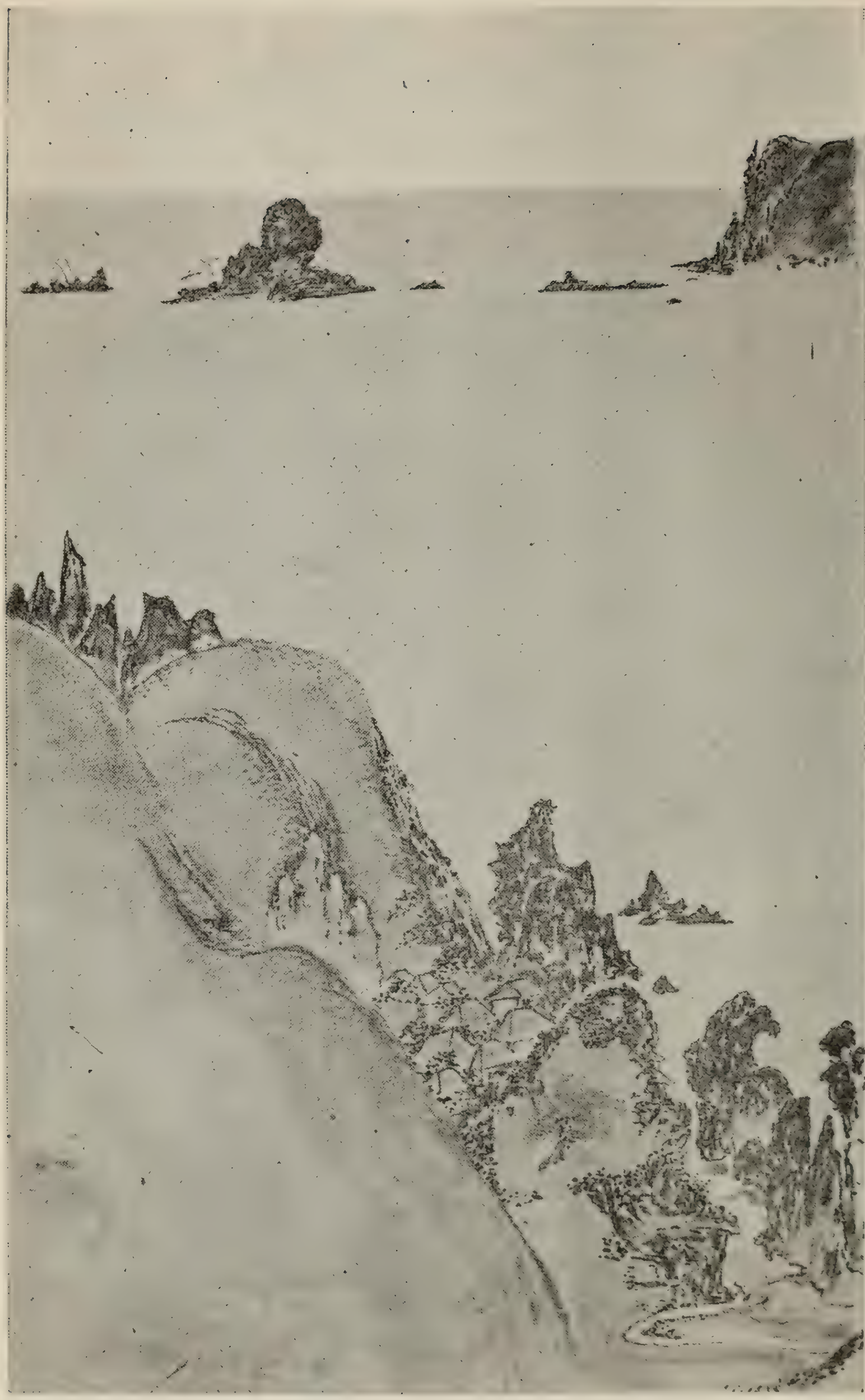












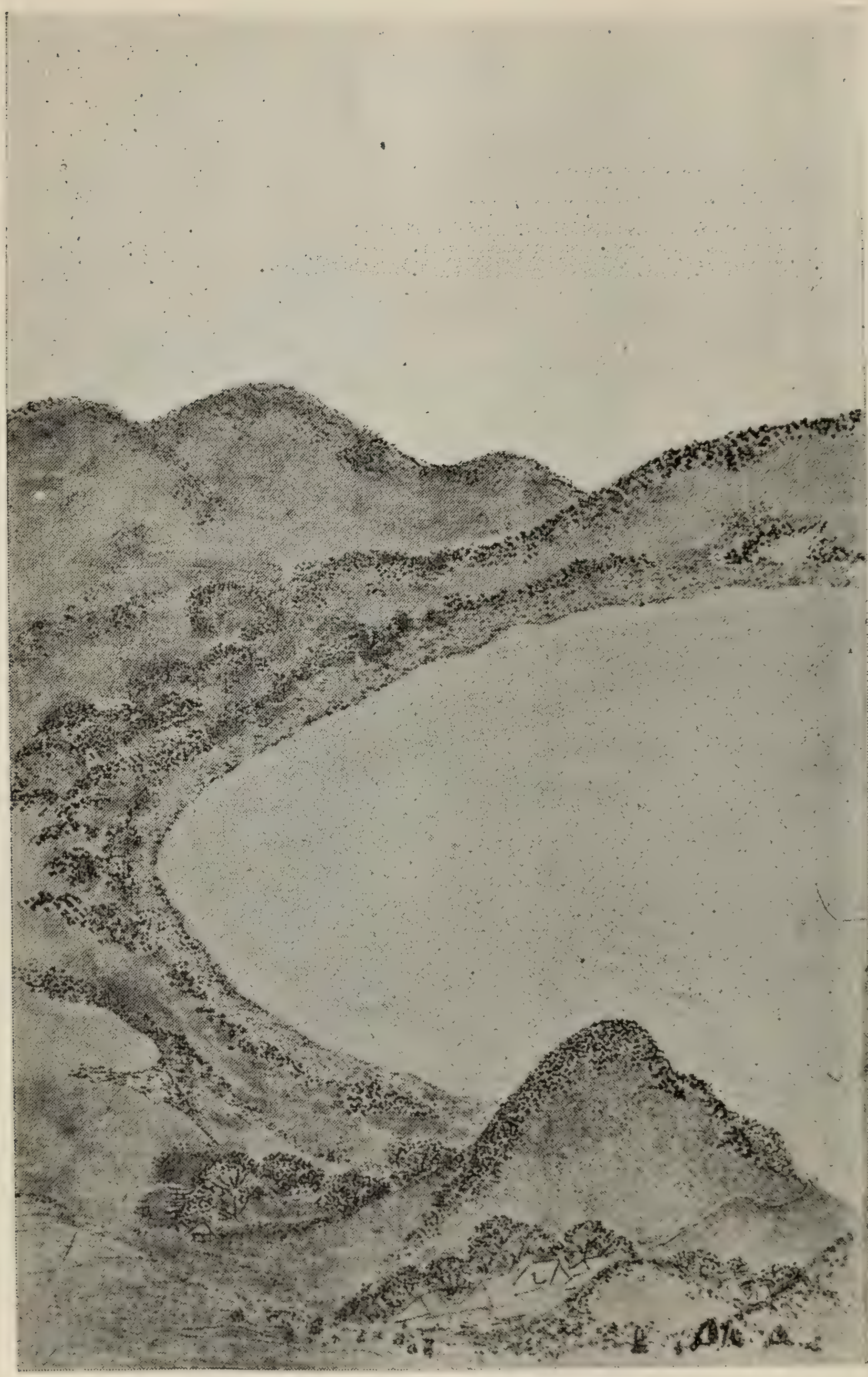

宮嶋小嚴杵嶋姫ノ神ヲ齋ひ
潮戸ノ南ニ近し

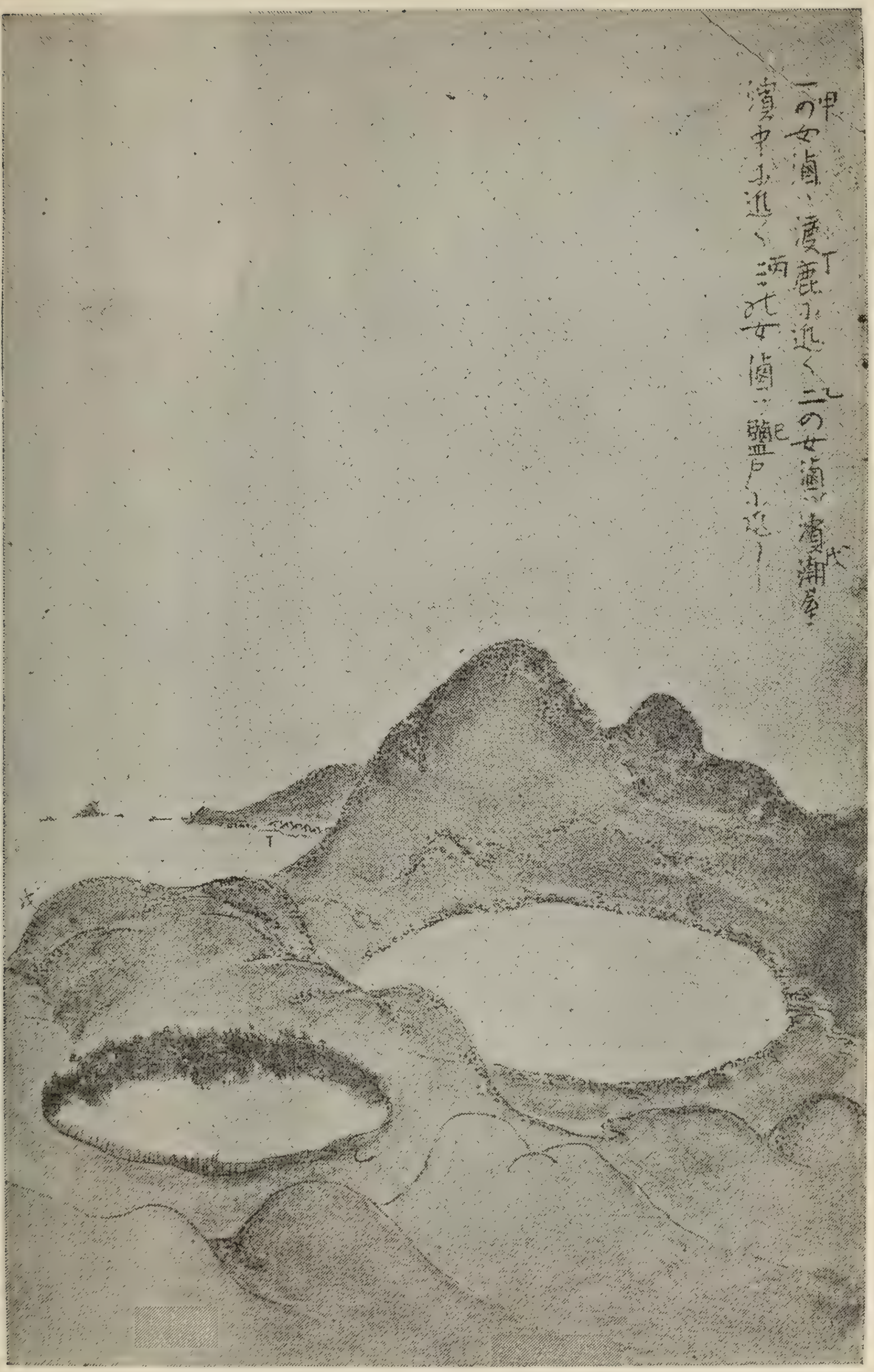


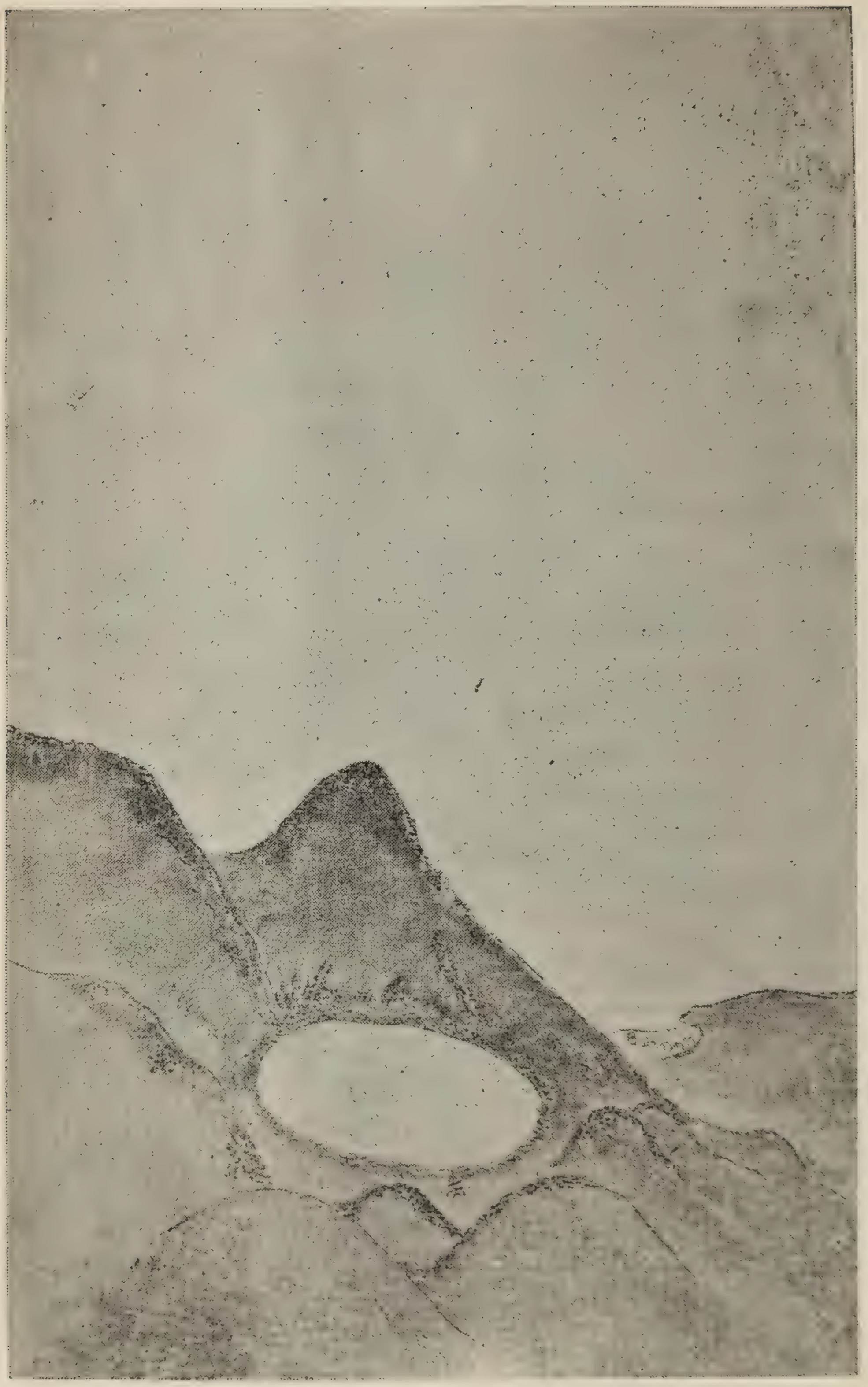

宮嶋
鹽戸の南
浦の潮屋
濱中



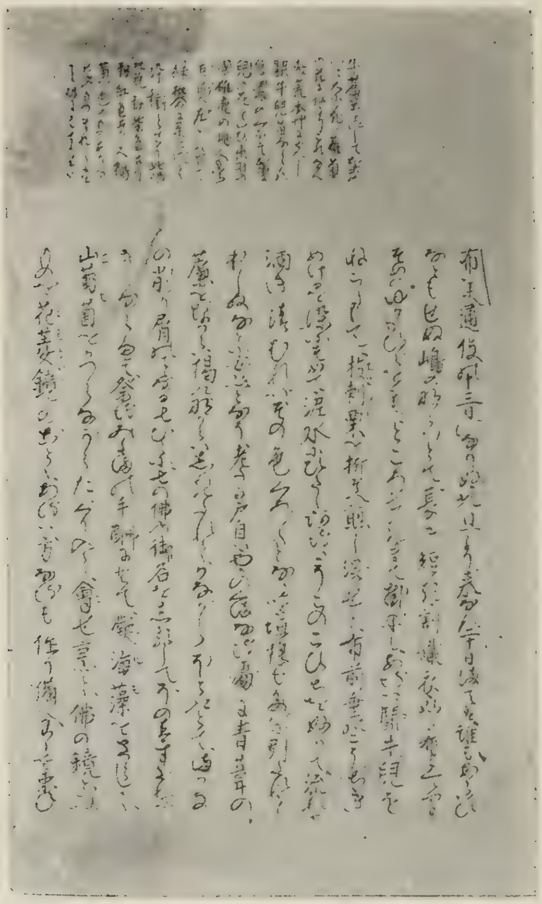








牡鹿の嶋風



牡鹿の嶋風

おなしふみ月のなかからはかり、鹽戸の海を捞れ出て、いと面白の島〳〵を見めくり、加茂の浦につきて、しはしはそこのてふりをも見つゝ、島めくりして潮瀬の崎に至り、旅ねして赤神、赤城の神垣にぬさとりぬ。島風とは、嶋の風俗をこそいふなれ。其次は男鹿の寒風といふ也。

鹽戸の浦

染料ごぐさ

精靈祭

布美通伎の十三日になりぬ。此旦より、來なん二十日までは、誰もあらはひなともせぬ嶋のならはしとて、長き短き割織衣、ふた布、くゝりそめのゆかたびらをも、ところせきまで掛ほし、あるは鬪牛兒（天註 ― 牛蒡のことにして葉のいと大に、花は蘿蔔の花に似たり。これなん救荒本艸に聞へし鬪牛兒苗ならん。信濃のくに言葉に兒（ちご）の花といひ、出羽の國雄鹿の嶋人もはら巨具左（ごぐさ）といひもて、絲綮に是を代て染種（そめくさ）とせり。此嶋に此花粉紫色あり、粉紅色あり、又鵝黄色のものあり、白花のものまれ／＼に在こと處に見ざりき。）をねこしもて、枝刺栗を折そへ煎し混せて、布前垂のこうちぎめけるを染にそめて泥水にひたし、あるはそこのこひちをぬりて流れに洒き清むれば、その色くろ／＼となるを垣根もたはに引たれてほしぬなとに、女はいとなう。老たる戸自は、やかのくまなる處に青葦の簾を、なからは掲げ、なからはしきたれて、かながらほとけとて、まがなの削り屑のことなる七ひらに七の佛の御名をしるして、その青すだれにさしならべて、祭るみたまの手酬にとて凝海藻をさらして、山葡萄をかづらながらたぐり入て會せ烹て、佛の鏡といふものを花菱鏡のごとく、あるは方なるも作り備へ、わらを束ね棚のめぐりに居て、萩をひし／＼とさして青ふし垣のごとし。玫瑰、ひろ

め、むぎなは、皷菓子、五色の小幡などかけだるさま、こと處にひとしかりき。男の童は、しろうしを手ごとに作りもてわたる。ゆくりなう人の來て、幸(さち)なる舟あり、これにたぐへてんとく／＼とて、潮のひるつかた鹽戸の浦を出るに、なさけ／＼しう聞へて、鷹木舟(えぐりふね)にのりてこぎはなれぬ。けふを始に、廿日をかきるといふ多巨婆太(たこはた)てふ、いかのぼりの、戸鹿の屋形、濱の鹽屋のやかた、濱中のやかたなどに、浦／＼の泉郎(あま)の子等(こら)が舟にうちのり、網苧(あそ)にとりつなぎたるが、しほ風にしふかれて、鵆、鷗の群れ飛かと遠かたに見さく、一とせ久保田に在りて、としの市路の雪ふみしたき、みちもせにひさく小松なにくれの中に、絲曳渡るをあやしとさへ見しにいやまさりて、秋風の空にうちなひくたくひやはある。

紙鳶揚げ

おもふに、うるまの國に神な月のころ、紙鳶をもてあそふのためしあるちふ。（天註――琉球談云、五月、稻のみのり蓮の花開、桃、石榴熟す。七月、龍眼肉實をむすふ。十月、蛇穴に蟄し虹藏て見へす、小兒紙鳶をあく。）舟はこゝらの岩のはさま／＼をせめて、右に宮嶋、左に與加知などを經たり。

鹽戸と加茂の島々

此あたりまでは見しところ／＼也。衣美秀嶋とて、蛭兒の神の釣したまふみかたしろの、おのづからなれる巖のわたなかに在り。鷗嶋、舟島、いぬの木嶋、千躰繰、翦(それ)の濱、下尉、上尉、くしらはま、阿万九の濱、とし高き人は、安麻美久ともいひしといふ處となん。瑠虬(うるま)ものかたりに阿摩美久といふあり、天皇(あまみこ)ならんと。さりければ、こゝもあまみこのよしの名にてもやありつらんか、いぶかし。舊山(もとやま)の濱は、むかしに坑場(かなやま)のありし物語せり。長崎、穴の

濱の荒言葉

濱の夕涼み

餅、はての濱、井貝繰、刺球栗てふ事をしかいふにや。苗代島、琵琶嶋といふあたりに艘貝の潜して、丸木舟を木の葉のやうによせて、あかはたかの泉郎あまた居たり。行舟近うよせて、むつかたりせり。

海士もさそひわの島かけすゝしくて寄る波の緒に舟つなくらし。

あら潮の波もたかしのはまひさしかけて涼しく寄るすたれ貝。

尾黑嶋、赤坂の濱、馬の蹄、長者屋布、緒形櫃、中の嶋、高師の濱といふ名のこゝにもありき。みさご嶋、みじやこしま、をいろの濱、此高岨に、雪獵のときの鹿落しといふあり。源六松、羽子なとをへて磯橋の濱、貝崎、鮪戸濱、小赤嶋、青岩、大赤島、赤岩、割岩、閪嶋、紅の舌を漕て貂か碕といふあり。かゝるなかめに、舟のとき事をねたしと見渡りて、水鳥の鴨の浦回につく。加茂、青沙と屋形の軒をおしならべて、地藏堂ひとつにさかふ。ある宿に入れば、うら若女の留主居して、入りさふらへ、けふはみな御墓詣にいかれしちふ。向面、肛門、癩疾、茶吡、位牌、病なと、つねに人をいやしめのろふあらき辭にひきかへて、しかいふ事もをりとしては聞へたり。夕くれては蚊の集くを恐れて、みな濱邊のあら砂の上に、男女、童までもぐして、襑袍といふあつ〳〵と織たる衣、あるは、胴襤褸といふなるいろ〳〵衣を被てうち寐るさま、蝦夷の嶋人の、蚤蚤をいとひて濱に出て、木絲の衣をかづき、浪を枕にふし明す

おもの奉る

盆踊り

産土神詣で

白絲の瀧

のふりに似たり。うへも、蚤蚊の多くてふしもつかれぬと、老人の聲のまくらかみに聞へたるに、濱邊の凉しからん事のしのびやられて、窻もる月を見つゝ、ぬるとなく明たり。

十四日のあした、小豆の燃飯、魚、山ふゞき、なにくれと烹て、みあかしを照らし、佛の前近う此かしはでふたそなへして、しばし經て、むし飯を濁醪につぎかへ盈らして、しぞきぬかづきたうとみて、「しづかに召れ。」と女のいふ。これなんとしのはしめと、ふみ月の十三日より十五日まて、しか神におもの奉るといふか、生らん人をいやまひ仕ふがごとし。夕くれては、加茂と青沙の女男入まじりて、かの地藏堂の前にうち群れて踊る。笛鼓のほうし聲、浪の音にみたれあひて濱風の吹ぬ。

十五日。産土詣りとて、手ごとに蒸飯、醴酒のおしものを手酬ありく。菅原なにかしが齋る菅大臣は、その遠つおやよりいはひ奉る事よしありとか。あしたより零る雨晴て、不動明王の瀧見なんと出つ。この皈るさに、青沙の濱つたひして雁金の窟に入て、尙奥く行むも、内くらければよしなう。夕つかた、月見がてらに皈り來て青沙にやとかりぬ。

十七日。賀茂の譽市といふか屋戸より、麿木小舟に捞れいでたり。象の尻、南蠻色、穴の口、比多良岩、兜嶋、白絲の瀑布おつ。夏の木艸ちふ日記に、人見多地美といふ人のなかめとて「夏引の手も絕へ〳〵に山姬のあつさにうめる瀧のしらいと。」此瀧なん、夜る面白と聞へ

大産橋

玄眞曉齋

紅雀か窟

舞臺嶋

たりし。最上河におつるとは、いつらや、をとりまさりはいさしら糸と戯れて、

風あらき磯のしらいと瀧たかみなみのよるひるかけてみたれん。

千疊布(しき)、あるはたゝみ岩、潮曳穴、五徳、犬戻、比留禰、多天委志、辨財（大舶といふ名也）大産橋といふあり。その形石梁のごとく、山橋ともいふとか。さんきやうは、石橋(しやくきやう)をよこなはりていふにや、世にあやしう面白ところ也けり。帆莚掛ながらはせ入る舟もありき。此石梁の上を、一(ひと)片歯(つは)の足駄をふみて渡りし盲人(めしゐ)のありと話り、あるは、こと人なりともいふは建武のむかし、赤神山日積寺に在りし玄眞曉齋といふ僧あり。女川の浦人景盛か弟にして、ふみはらはのころよりこゝろさしことにして、何の願たらん潮に垢離し、食物(くひもの)を斷こと三十日ばかりにして、あら海に入て身まかれり。のち此僧(ひと)、浦人と生れし物語あり。小産橋とてさゝやかなる石梁あり。こは、舟のおもふまゝにこぎ入る事あたはず。鳥屋瀧、あるはいふ大瀧、紅雀か窟とて魑魅(あやしきもの)すむちふ。此いはやどの事は、人々の日記にしるしたるにやゝ似たり大阿字か嶋、小鯵島、舞臺嶋といふあり、これや武帝嶋ならん。そのかみ、武帝の靈魂(みたま)あまくだりましゝところは、こゝをはしめといふ。此嶋を北よりむかひ見れば、龍(たつ)に猿(ましら)の乘(のれ)るか、夜(や)叉(しや)あすらの姿をきざみ、丹(そほ)ぬりたらんかごとし。このなれる巖の形(かたち)もて、赤神とは聞へたるにや。赤間の埼、福立嶋、此嶋鉾立をしかいふにや。夕陽(ゆふひ)の窟(いはや)、魚鷹(みさご)嶋(しま)、垢離かき島、此嶋

蝙蝠が窟

御幣島

門前村

本山日積寺永禪院

にて曉齋や滌去したりけん。鋒島、蝙蝠が窟にこぎよせて、梶もてふなばたをならせば、むら〳〵と出ぬ。こは、五色のかはぶりあるちふ。仁田忠常か不二の人竅に入にしときも、火にまよひて、白き蝙蝠もいて來しといふに似たり。さりければ、五色のかはぼり、五頭の鬼となるてふものかたりをせり。烏帽子嶋、甕の檀、室師が窟、あるはいふもろこしかいはや。幕嶋、龍が島、あるはいふ、龍藏か嶋とて近つ沖邊にたてり。油嶋といふ岩の、ちいさやかにしてたてり。此岩の上には、夜ごとに粦のもゆてふ。大立繰、小立繰、御幣嶋といふあり、まほは帶嶋也。冬になれば、此嶋より女の帶のごとき、廣海苔を土毛としてたいまつるとか。霧幡山の阿久呂王か投石、あるは鬼の取上石とて、夜に落ればひる上るといふは、あやしのもの話なり。あれに本山の寺の見ゆなど舟人のかたりつゝ、扉の崎はあしこにといひもて、こぐよせて門前の濱に至る。このあたりまでは見しところながら、ふたゝび本山日積寺永禪院に入る。豐御食炊屋姬天皇の御宇に山はもはらひらけて、嘉祥、仁壽のころほひ、圓仁大師の法を行ひたまふといへど、赤神はいと遠きむかしに、もろこし人や齋ひたりけん。中興の二十八世までは天台の法を行ひ、廿九世の賴賢法印より眞言にうつれり。天台のむかしは四十八箇坊、寺は大寺をはしめ九箇寺ありたりし。その寺の名は泉光院、印象院、照光院、圓月院、仙壽院、自寂院、長樂寺、吉祥院、永禪院なとありつる。六の寺はほろひて、たゞお

四社、五社

日積寺寶物

や寺は永禪院、小寺は長樂寺、吉祥院のみそはつかに殘れり。そのむかしは七百三十石のよねをよせられしか、今は百七十石をたまふとなん。洪鐘は、明應二年にあらため鑄つ。山に四社、五社といふあり。四社は日吉、住吉、伊勢、八幡のおほん神を齋ひ奉り、五社には、むかふ弓手の始に十善子、その次は赤木明神、馬手のはしめは八王子、次に二の宮、中に漢武帝を阿伽神と祭ひ、奥に藥師佛をひめたり。長堂といふあり。もろ〳〵の神達をこめて、「染紙をちゝに手向る聲聞はいかにうれしと神もうくらん。」と、朝夕みときやうして奉れり。寺に傳ふ御寶とてあるを、むしはらはんとて、藥師如來堂を開て小法師の居たるに、あないして入ぬ。菩提形なと懸重ねたるに、風の吹わたりて涼し。漢武帝の壽像はもろこし人や畫しけん。としふりたれば、近きとし、こと人おなしさまにうつしたる也。繪のさま雲車を鹿にひかれ、いつくさに彩たる仙鼠あり。蝠鹿のころにしたがひ、福と祿とをたふとめる、もろこし人のつねたり。西王母の、桃なんさゝくるかた也。このことは、「恩荷の金風」にもしるしぬ。空海のかいたまふ金臺の曼陀羅、あるは法曼荼羅、又圓仁大師の大日兩部の曼陀羅、その外に手澤、筆精多かる中に、漢智證禪師の筆跡あり。あるは後醍醐天皇の御手にて、「たのむかひなきにつけても契りてし勝手の神の名こそをしけれ。」といふ色紙形一ひら、權僧正に任せらるゝ綸旨ひとひらに、天喜五年五月二十日　右中辨光忠」とあり。南岳悅山

尊藏法師

の額ともいと多し。弘法大師の、榎の嶋にて百日護摩のをこなひありて、その灰をもて、塔婆のかたちを煉り吉利久字をきだめり。はた、みつからの筆にて、みづからのみかたしろをうつし給ふあり。讃岐の國、善導寺にあるちふものにやたぐふ。五社にあるかなばちは康安のとしの名あり。藥師堂にも紫銅鉢(かなはち)あり、天正十七年圓行の世に鑄たり。泉光院の重寶(たから)とて、あかす箱といふものあり。世々の住僧これをあらためてふんじけるが、その寺絶てより、日積寺の佛の前に此筥を置たり。長樂寺の釜の神と祭るは、漢武帝のおばせの劔(みつるぎ)なるよし。いとひめて、ゆめ見なん事かたしとなん。はた、くさ〳〵のたから多かれとこゝにもらしつ。正月三日、油餅を鬼に手酬の行ひの堂いとまひろし。六月十五日逆柴祭とて、烏臼(こはぜ)の柴を陰陽(めを)の蛇(をろち)にたぐへて、もみぬかをうちまき、此柴を曳(ひく)などのためしあり。天台のむかしに、羽黑山に尊藏といふ名譽の法師あり、此小鹿の嶋の神をもかね祭れり。とし毎の水無月の十五日、羽黑山の神事の行ひはつるやいなや出て、此男鹿の嶋に至りてかんわざに會(あへ)り。その道へだゝること四十餘里となん、あやしの事也。羽黑山の五重の塔は、承平のころ平將門の建りと。額の面に、法報應化とあるは小野道風の手也と。應永五年、前駿河守藤原朝臣氏家のすりを加へられたり。その六月、入佛供養のときの導師は、天台の沙門觀覺院の尊藏にてありつとなん。さりければ、尊藏は應永のころの人とそしられたる。なにくれと此

雄鹿の圖と紀行詩歌

山上處々

山の事は、「雄鹿のあき風」、「牡鹿乃秋風」にも記しぬ。嶋の勝れたること、松嶋、象潟とことにして、あやしきまでめをさゞめつ。鰐田人の編る「夏の木艸」といふふみに、「雄鹿を圖せしは定信をはしめとす。そのゝち、女院の進獻には竹田棠球齋の筆也ければ、法眼に叙せられ狩野の姓を下したまはり、仙臺侯より此嶋の風景を御懇望ありしときも、この圖によりしとなん。その謝禮として、松嶋の圖の屏風一雙を御贈りありき。東都の入江南溟、雄鹿の名跡碑銘あり。近きころ津村默之も雄鹿の記あり。橘東市か東遊記にもしるせり。蒲人の記せりしものは、箕山翁雄鹿百首、修驗北楊なるもの廿五首の七律に、田翠陰の冠晃あり。今宮義遠の記行も、おなしく田翠陰の序跋に、玉津嶋神職藤原章尹か一首の和歌あり。「詞枕られし吾妻の遠かたを見るこゝちする玉のことの葉。」薄州先生の記（篠崎子明に贈られしもの也）嚶鳴集に、土屋遊鷗翁この邊の詩あり。滄州翁の、鹿の細道の記あり。近きころは、知足齋主人もこゝに遊ひて精細を記し、五明老人も記行あり。元祿のころ、里鶯かあらはせる埋れ水に、東鑑に見へし志賀の渡はこの邊といふ。湖水湊の地名と記せり。」となんかい聞へたり。むかしは山に天眞穴やあらん。葦倉泉元（あしくらせんけん／あしのくら）とて、かねほりしといふ谷あり。うべも、ところ〳〵に在る岩窟（いわやと）を見てもしるべし。蓮花臺より、西北の細路をさしてたどる〳〵行ば、古き塚はらとおぼしくて、苔むす五倫石、無縫塔ふしまろひ、あるは碎けたるなかに、あたらしきいし

ふみも、茂りたる草の中にこゝら立　らひたり。こゝを高野とて、紀の高野の山になずらへて、弘法大師の堂を作れり。此したつ方に浄き泉あり、強清水といふ。こゝより泉光坊の名は流れけるものか。徐福か壟とて、はつかに埋れ殘りたる處あり。なへて此山のいはれ、あらましに「恩荷の金風」に記したれば、こゝには委しからじ。

方言ちがね

門前の浦に下りて一夜を宿る。老翁を、ちがね〳〵と呼ぶ。こは、むこがねなとにたぐへいふ辭ならん、もともおかしと聞に、世にすたれたるかなものを舊金といふ。このあたりにては地金といふにたぐへて、もはや世にたゝぬものといふこゝろをもて、祖父をばしかいふ。祖父がねてふことにはあらしと語るを聞て、はと笑ふ。

方言びき

眦岐やと呼ば、十あまりの女の童も來、二十あまりの男も來り。こは、名といふものをもはらとはせで兄、弟なとよぶこと、出羽、陸奥のならはし也。みちのおく田名部あたりにて、產子を五十日子なといふを、とし長るまで呼ぶ女の童もありき。此島によらず、生兒を蟇になすらふ事よりおこれり。

なまはぎ

此嶋にて小兒の泣ば、なまはぎが來といひてをびやかしぬ。これや、平城の元興寺に鬼ありしとて、がごじ、又ぐはんごなといひもてすかし、はた東路にてもゝくわ、みちのおくにてもつことといふは、蒙古國の襲ひ來るを懼れしがもとゝすとなん。奈万半者は、正月十五日の夜に、身の毛いやだつ斗丹塗の假面を被き、螻蓑らふものを着て、手に疾刀を持て小筥を負て、その箱

の内に物ありてから〱と鳴らし、しはぶき、家ごとに入る。これをなまはぎといふ。冬籠りして男女柴火にあたるに、肱、脛、みな赤斑に火形のつきぬ。それをなまみ、なもみ、あるはなごみなといふところありき。なごみはぎちふ事をしかいふにや、生肉剝ちふことにや。浦山里の若背とて、人の奴僕等、あるは、わかきあるしの弟なとも出まじらひて、かの脛の火文ある皮を、春は鬼の來つゝ剝ちふ事にたぐへて、そのまねひなれば、童、としたかき女どもも、おちて逃かくろふなとかたる。



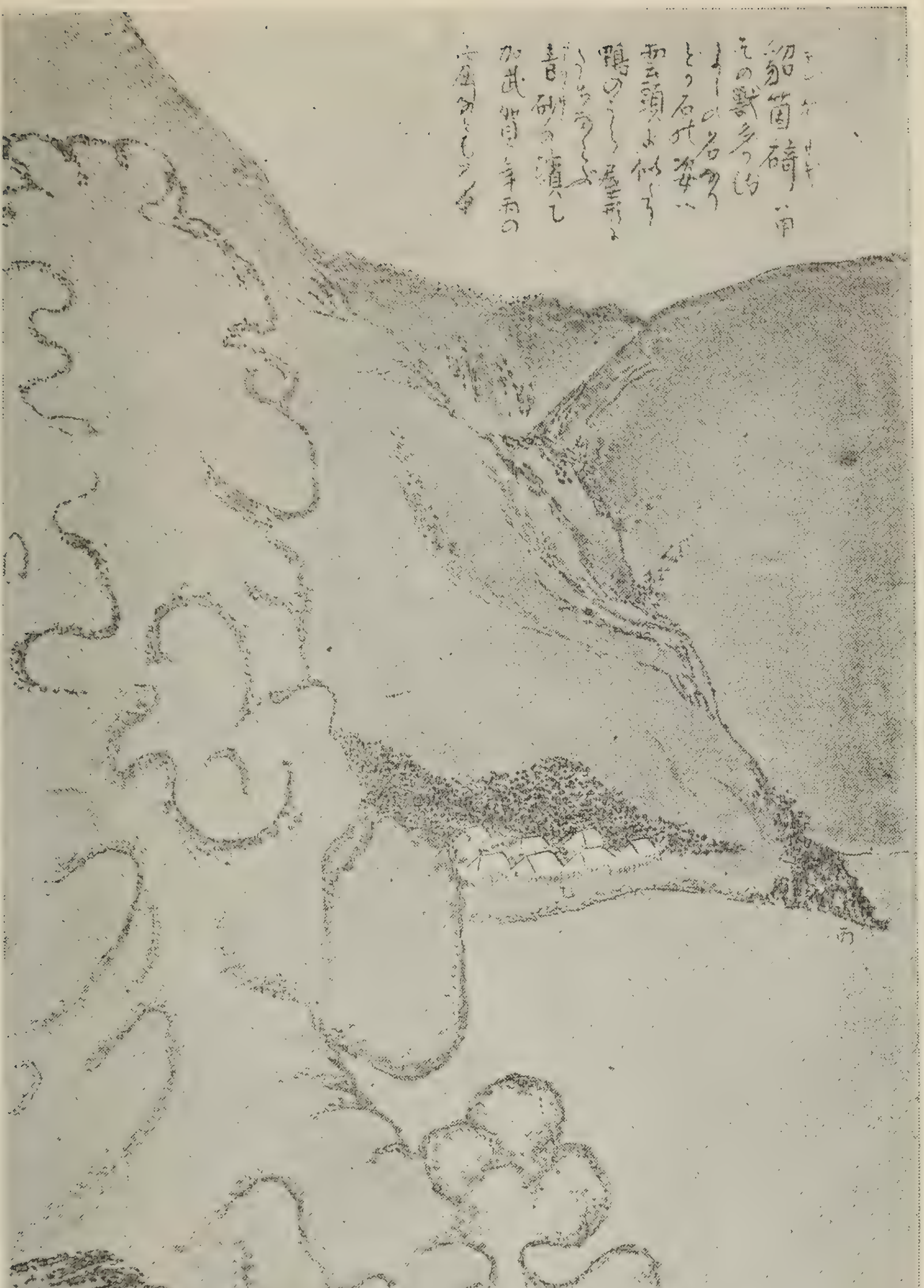


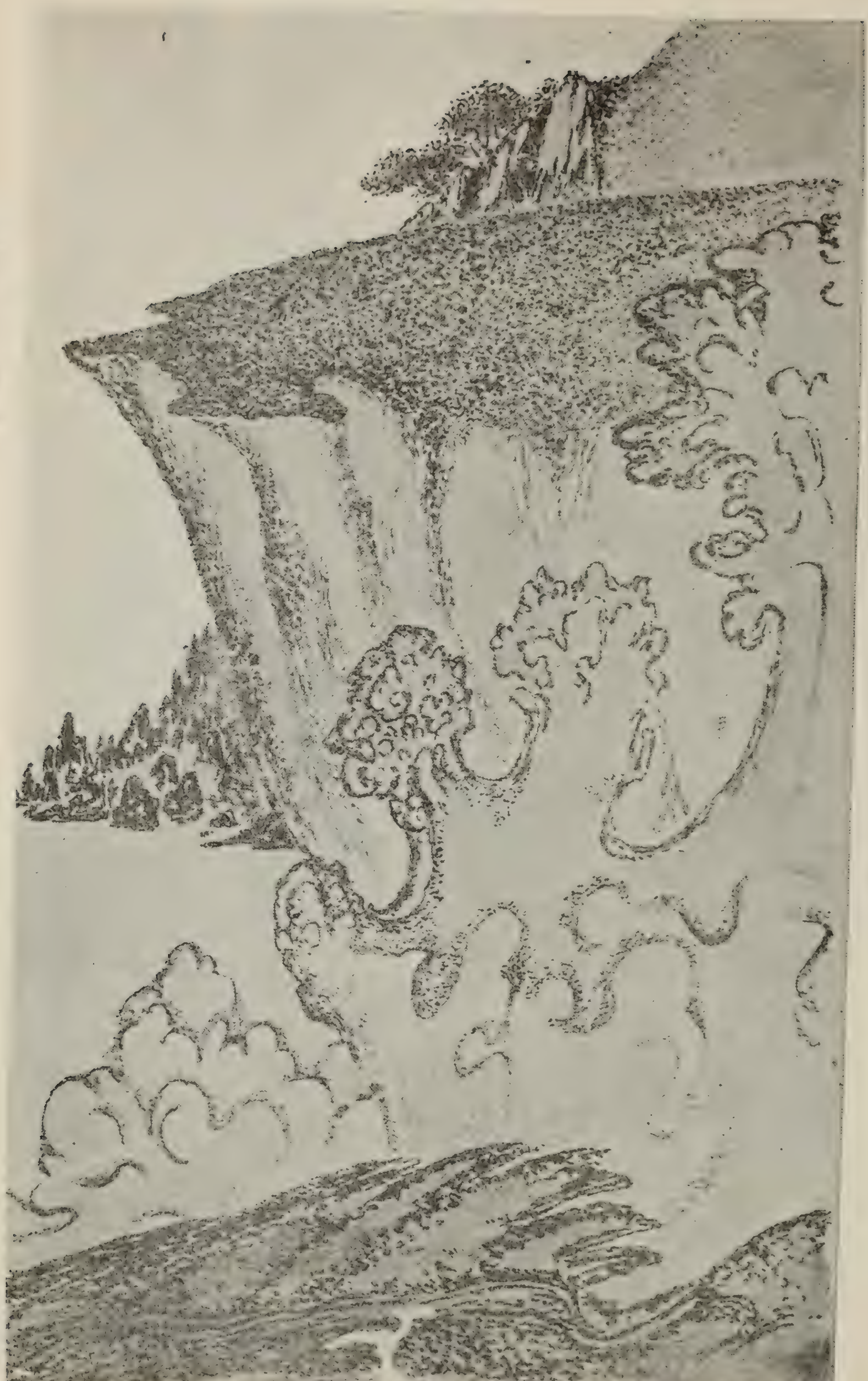


牡鹿の嶋風

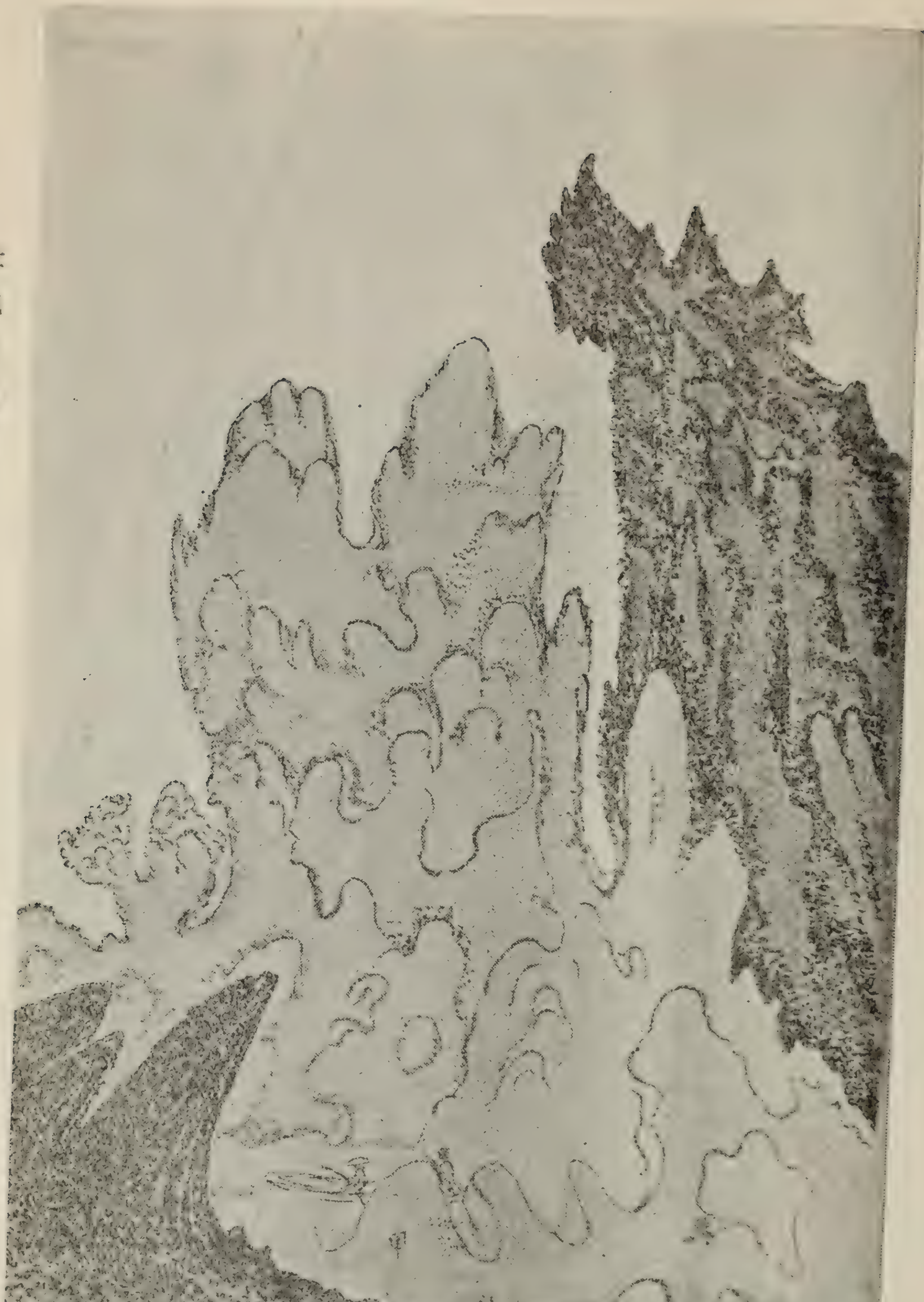


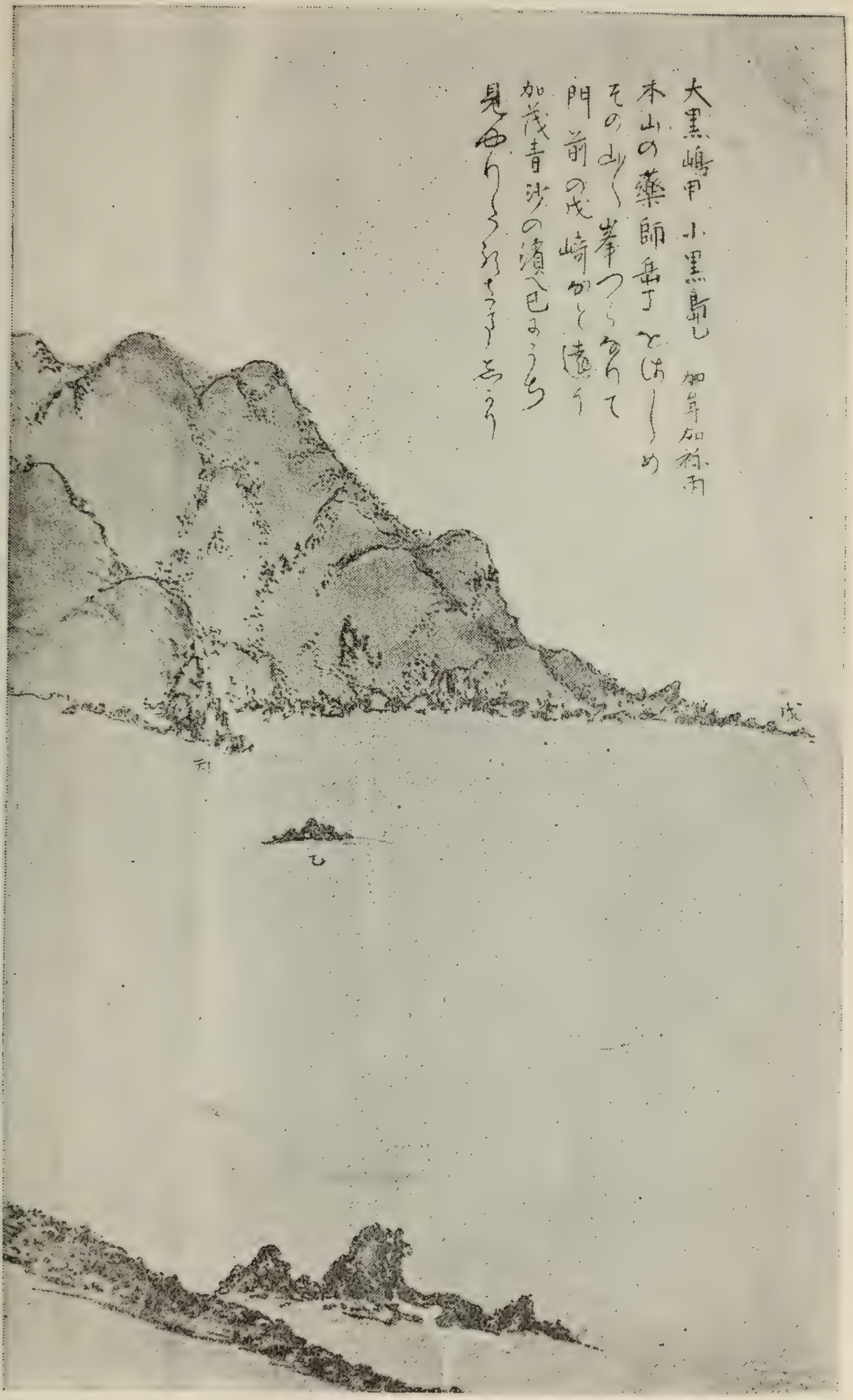




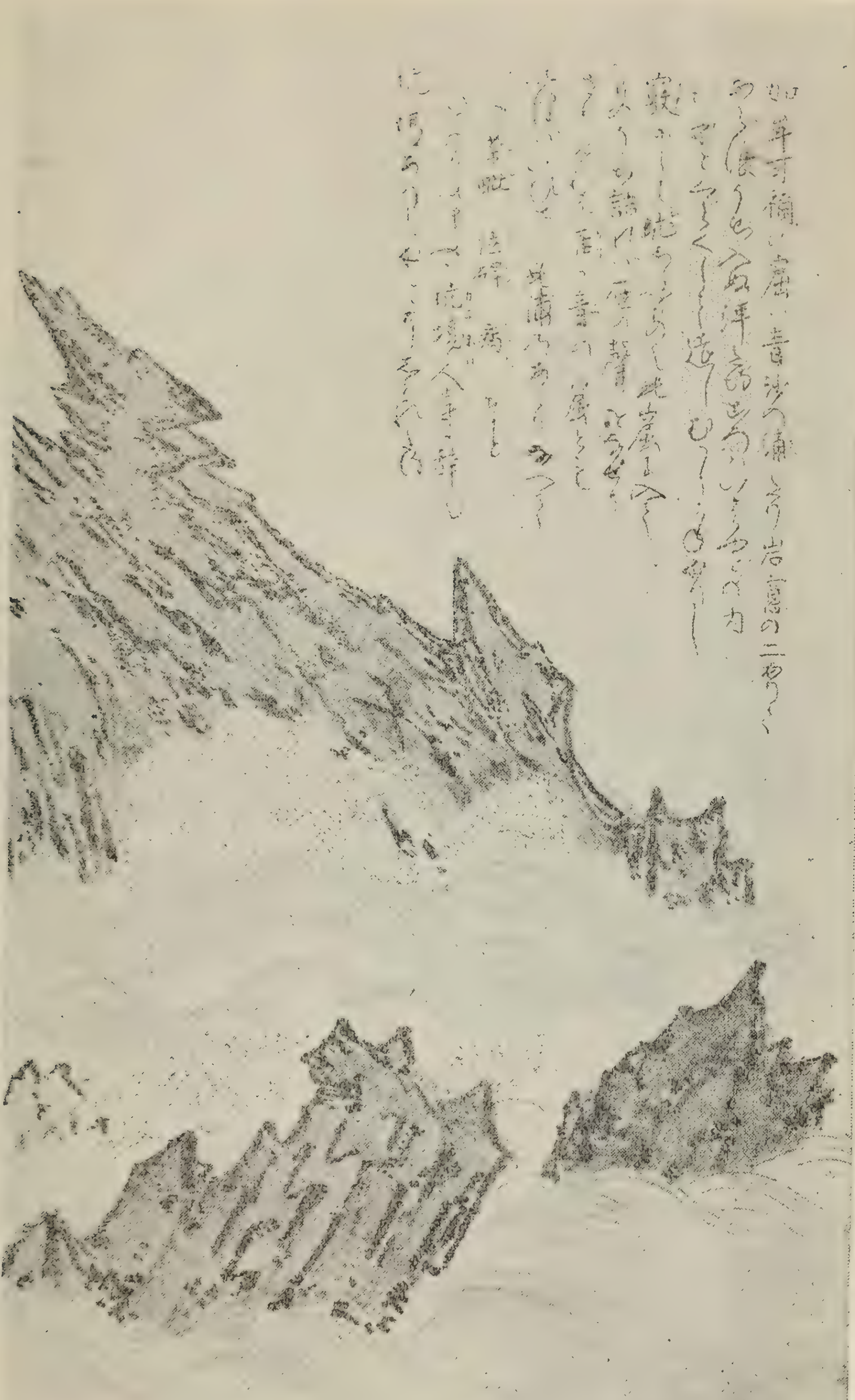







大黒嶋甲 小黒島乙 加牟加祢丙
本山の薬師岳丁とはしめ
その山々峯つらなりて
門前の戊崎かと遠く
加茂青沙の濱辺己



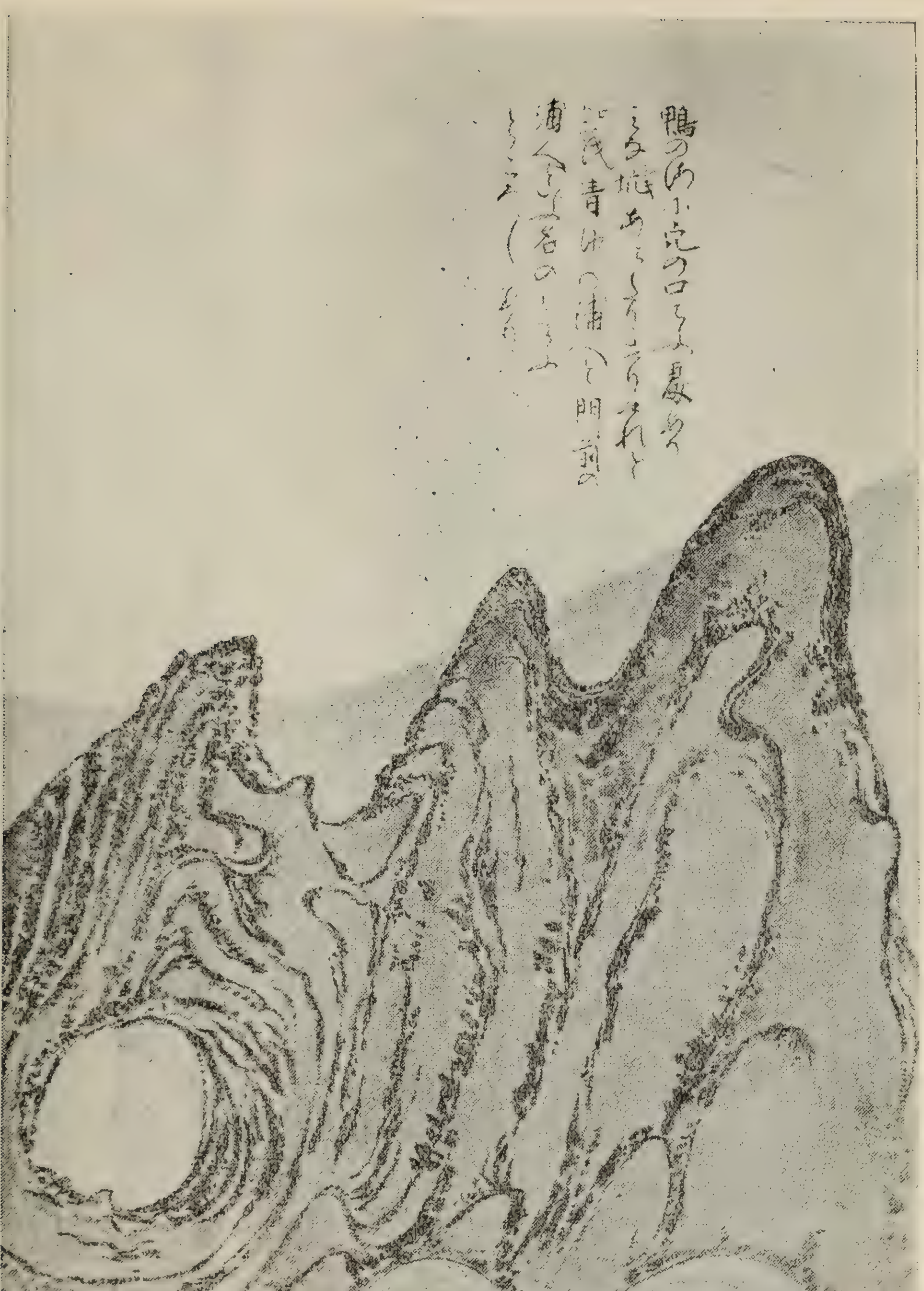




牡鹿の嶋風




不動の瀧ハ戸鹿の浦より加茂ニ到る山路の
弓手此谷ニ在り其水高く



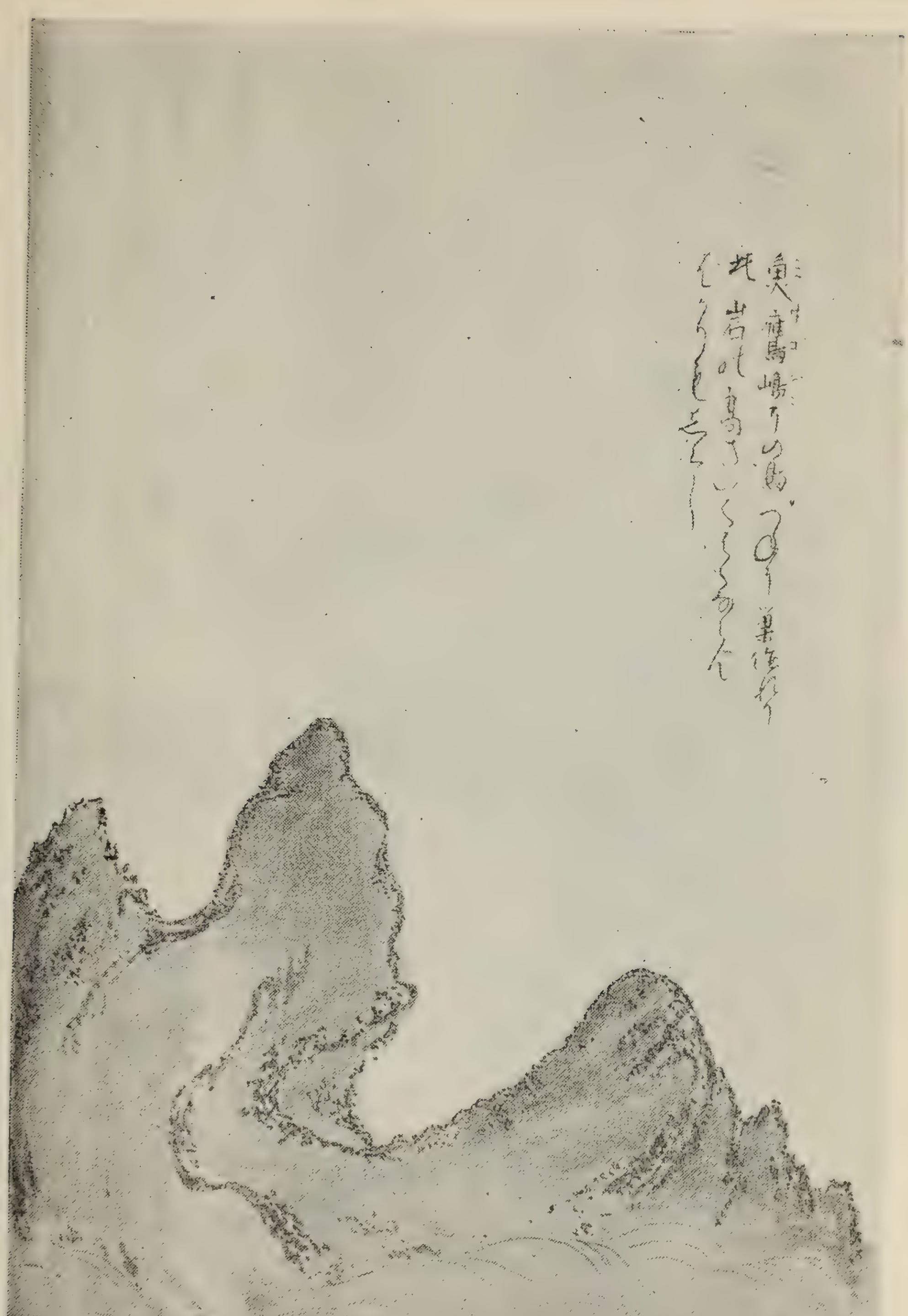




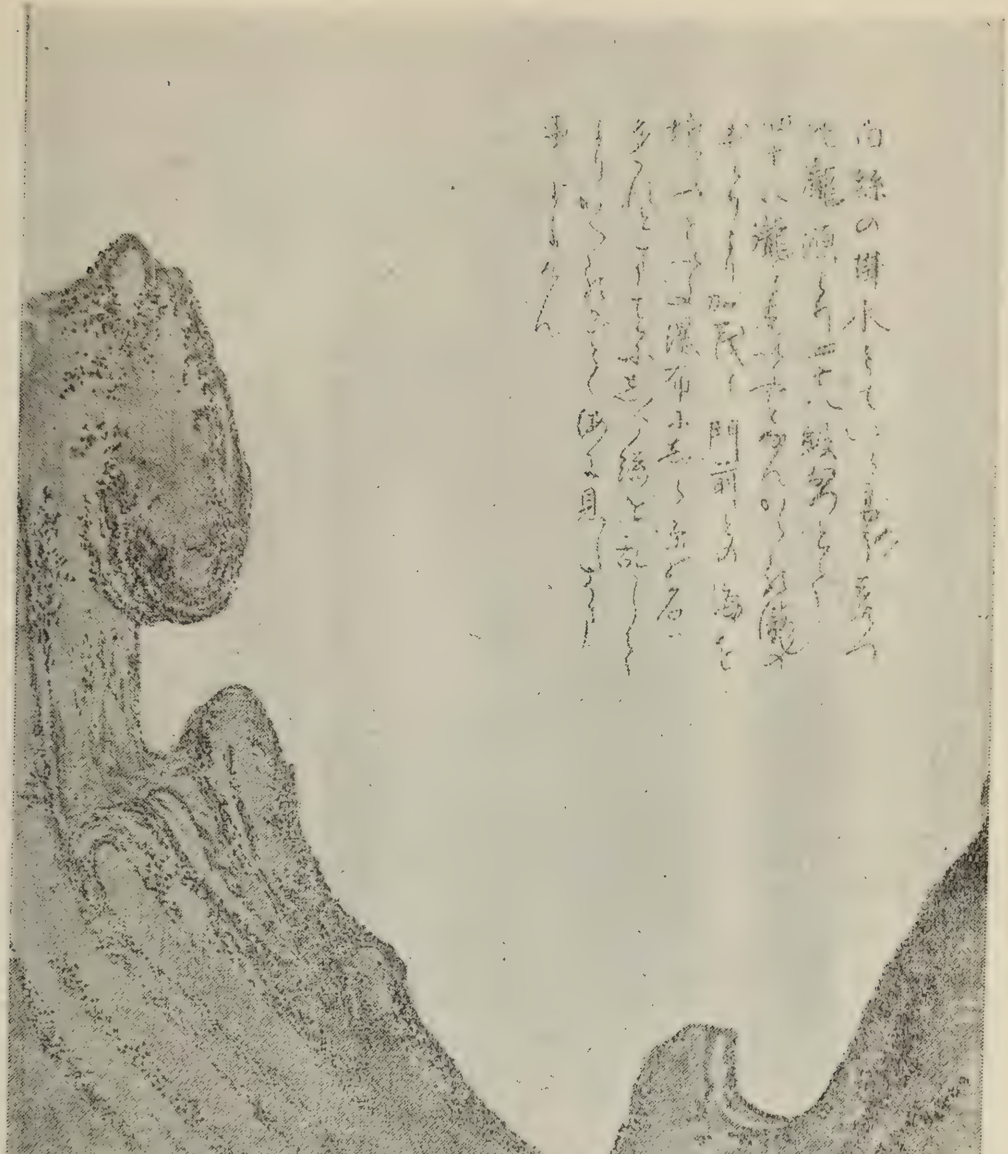




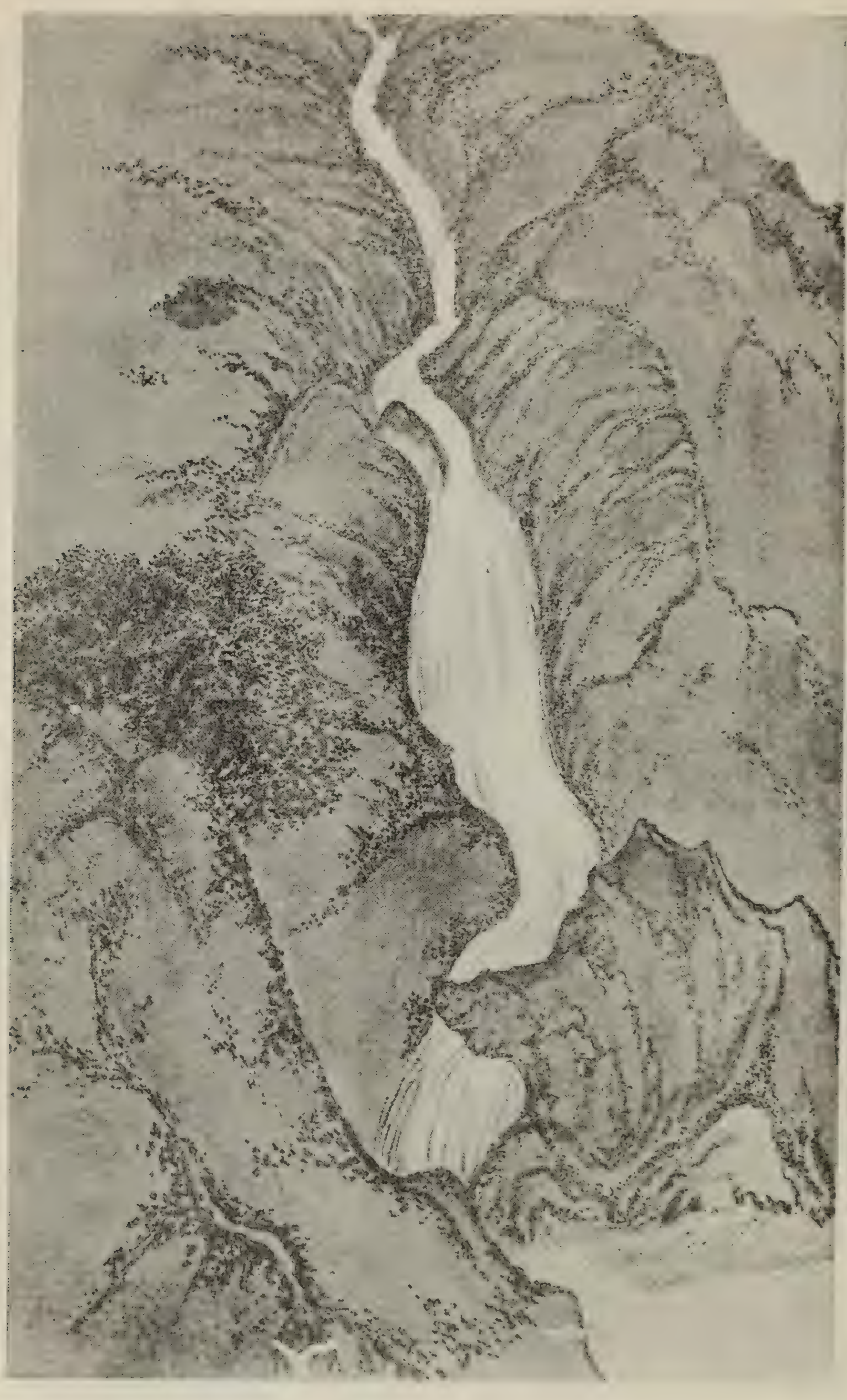


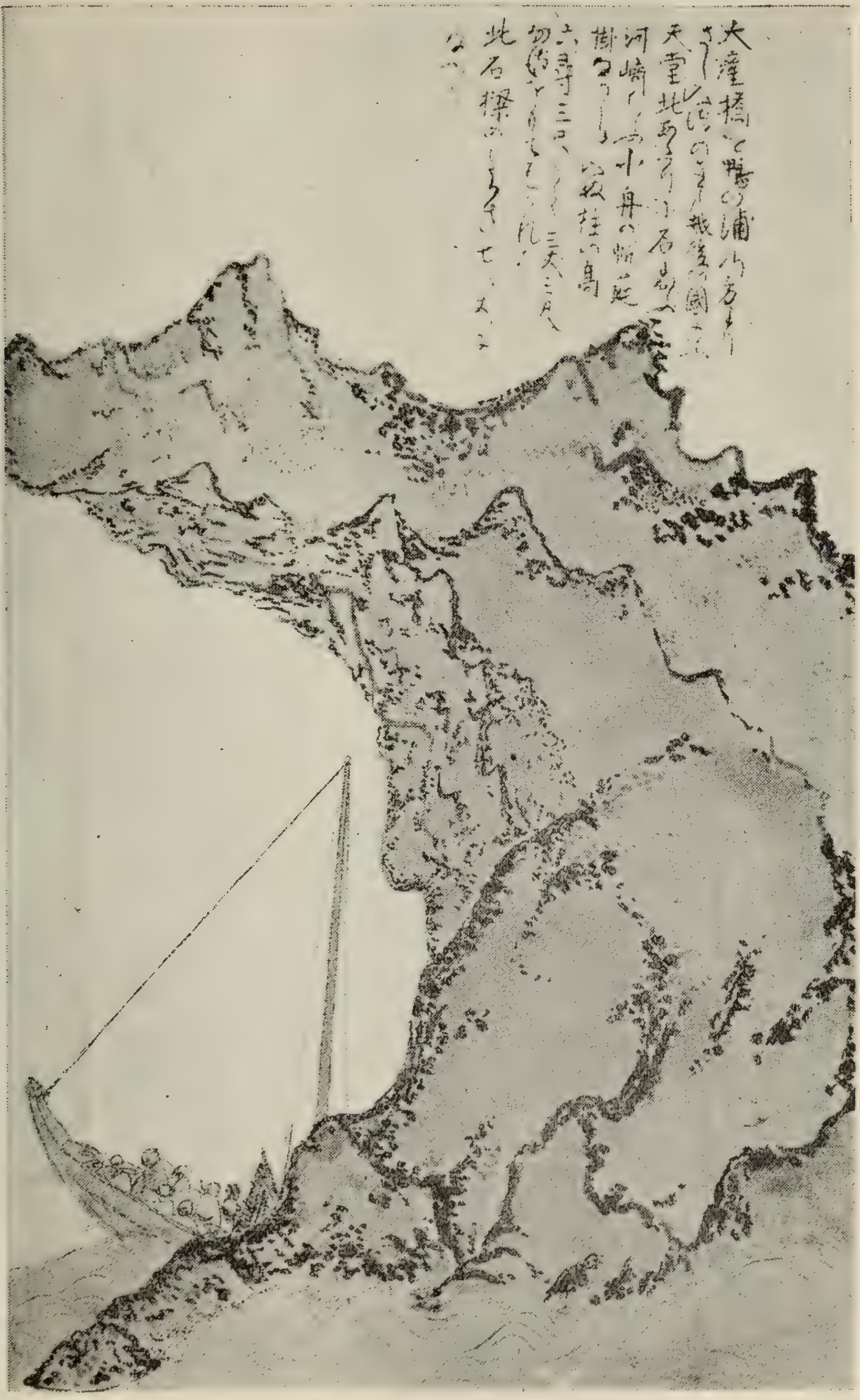


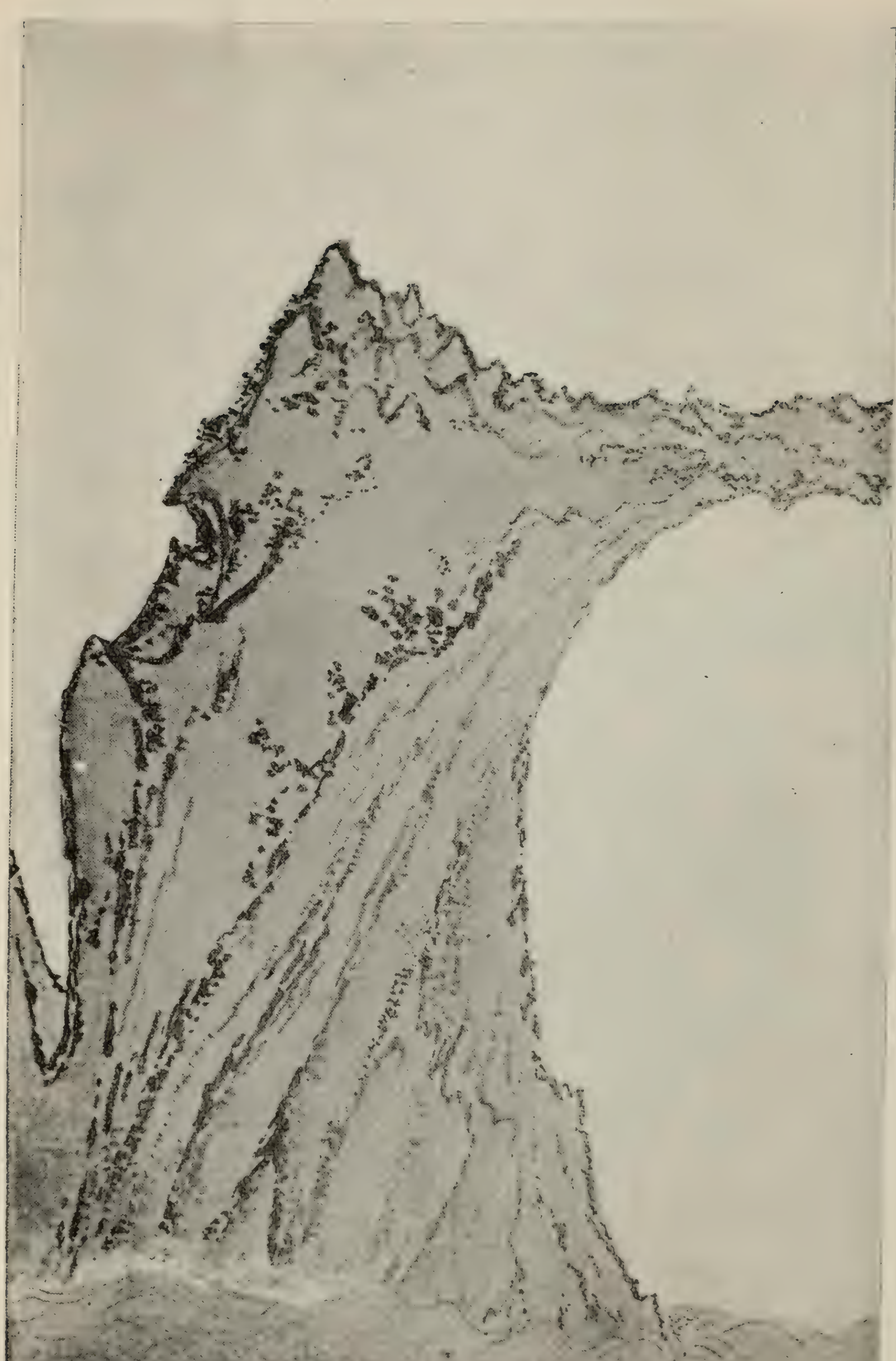




牡鹿の嶋風










小夜庵 五明

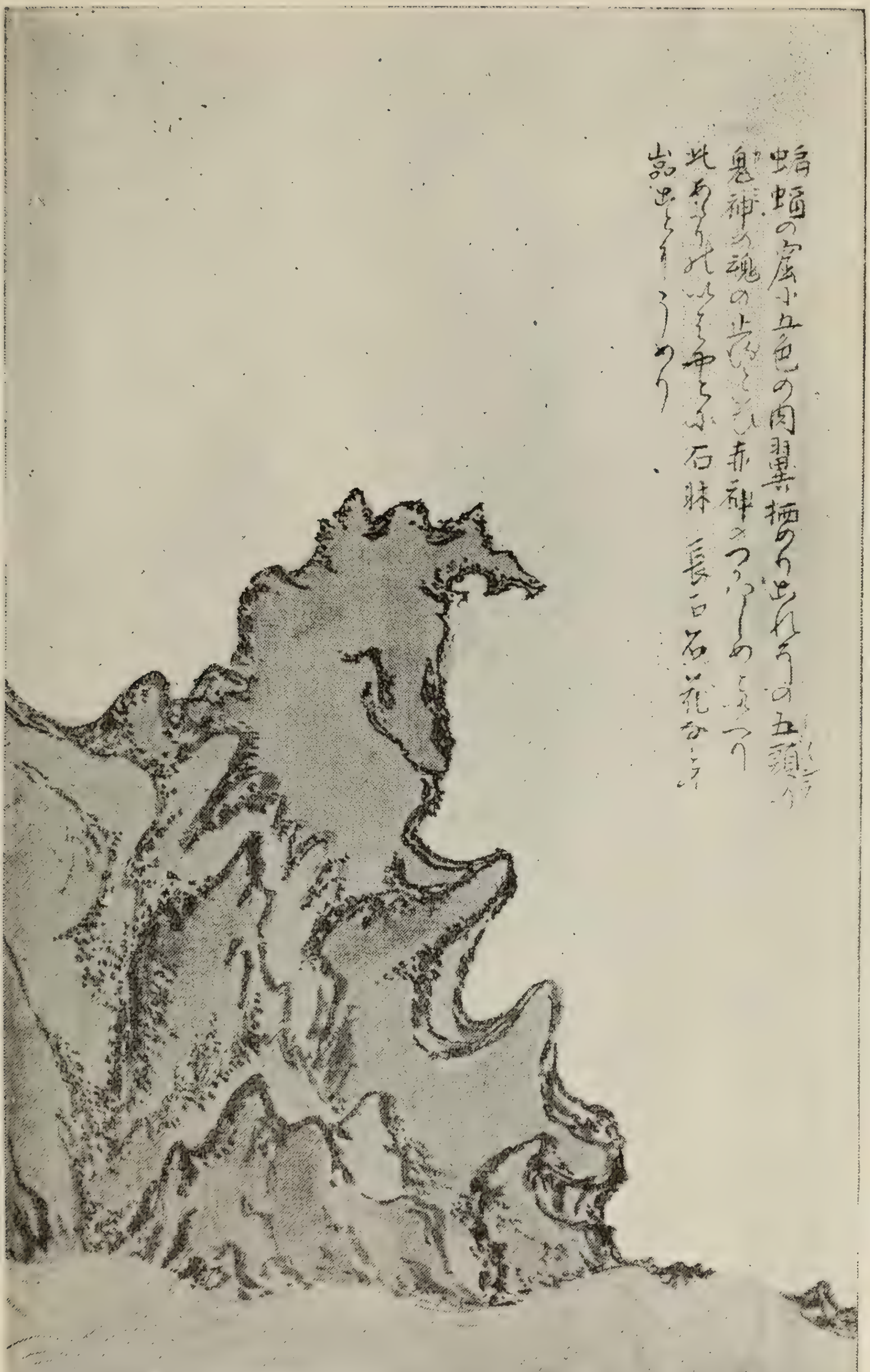


牡鹿の嶋風



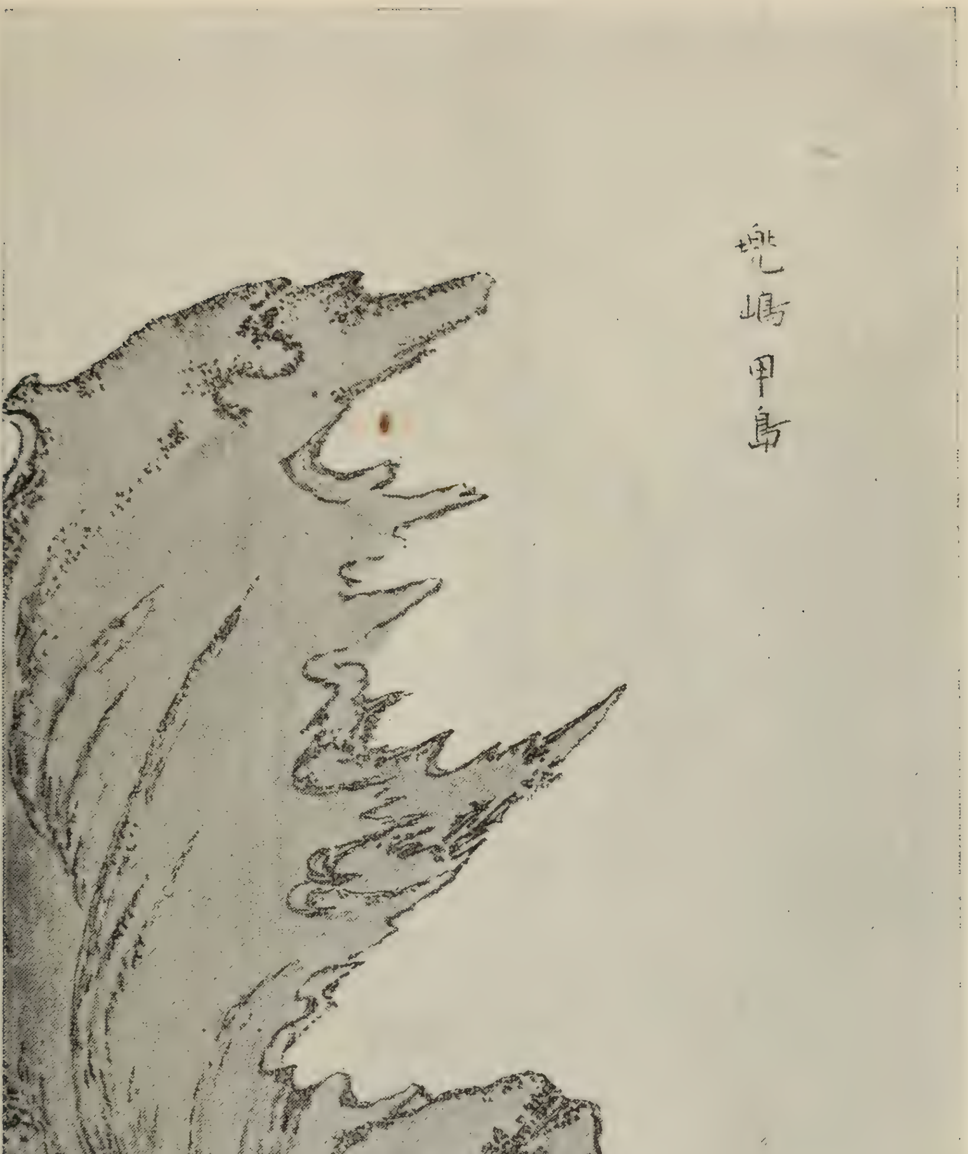

紅雀箇窟ハ、鵜鶘、蒿雀、
孔石、強石、神石、



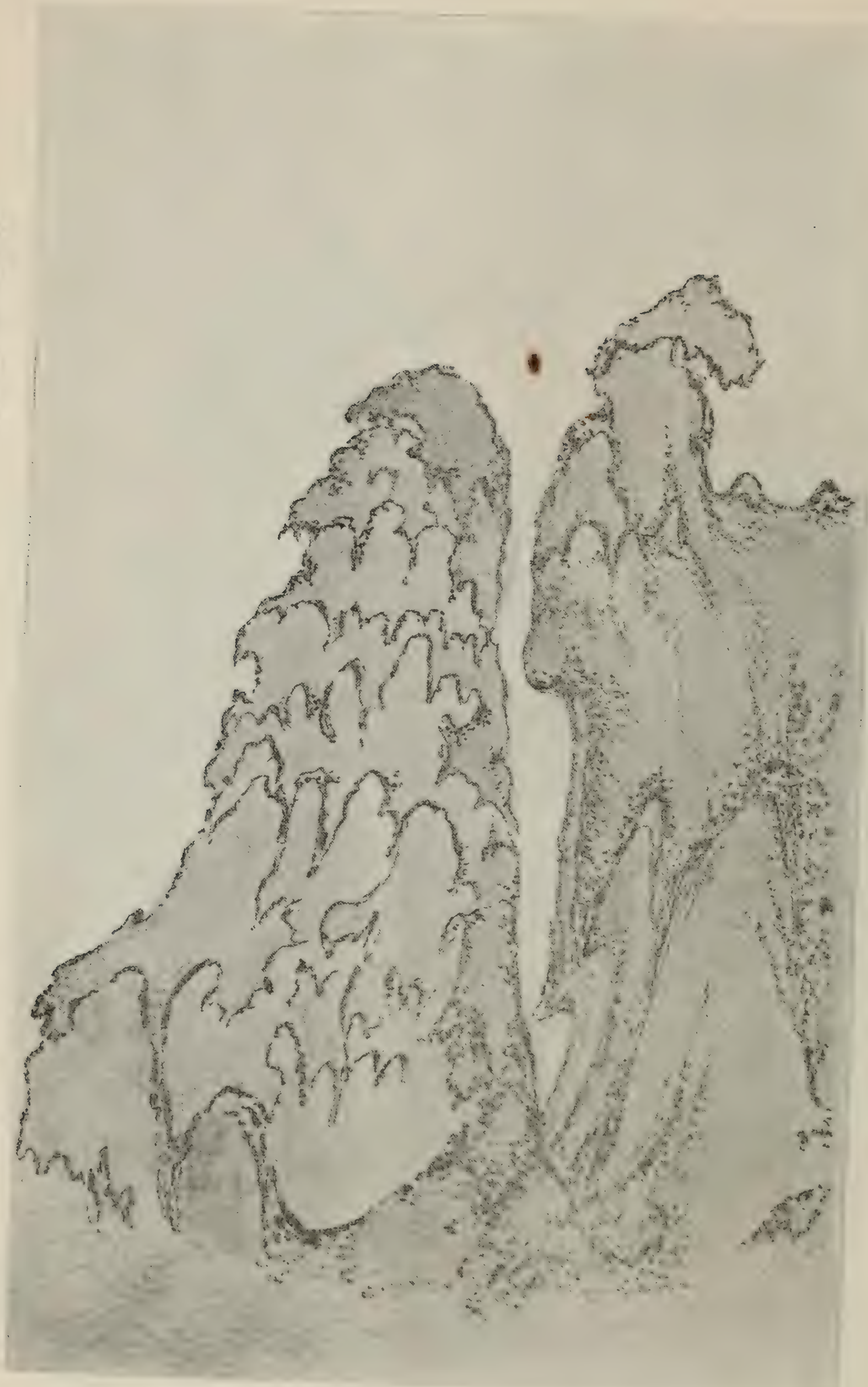


牡鹿の嶋風

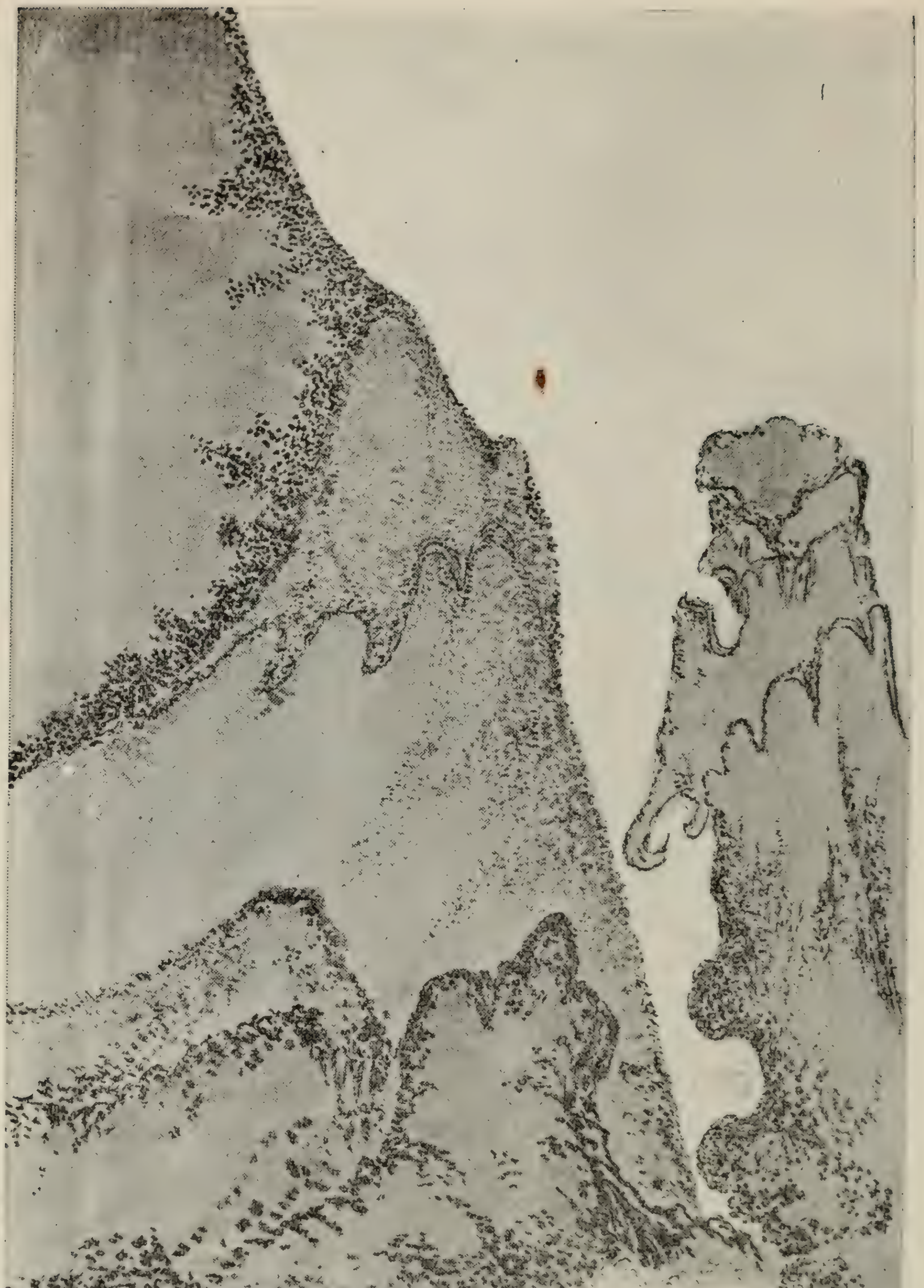




塊嶋
甲島




舞臺嶋



牡鹿の嶋風

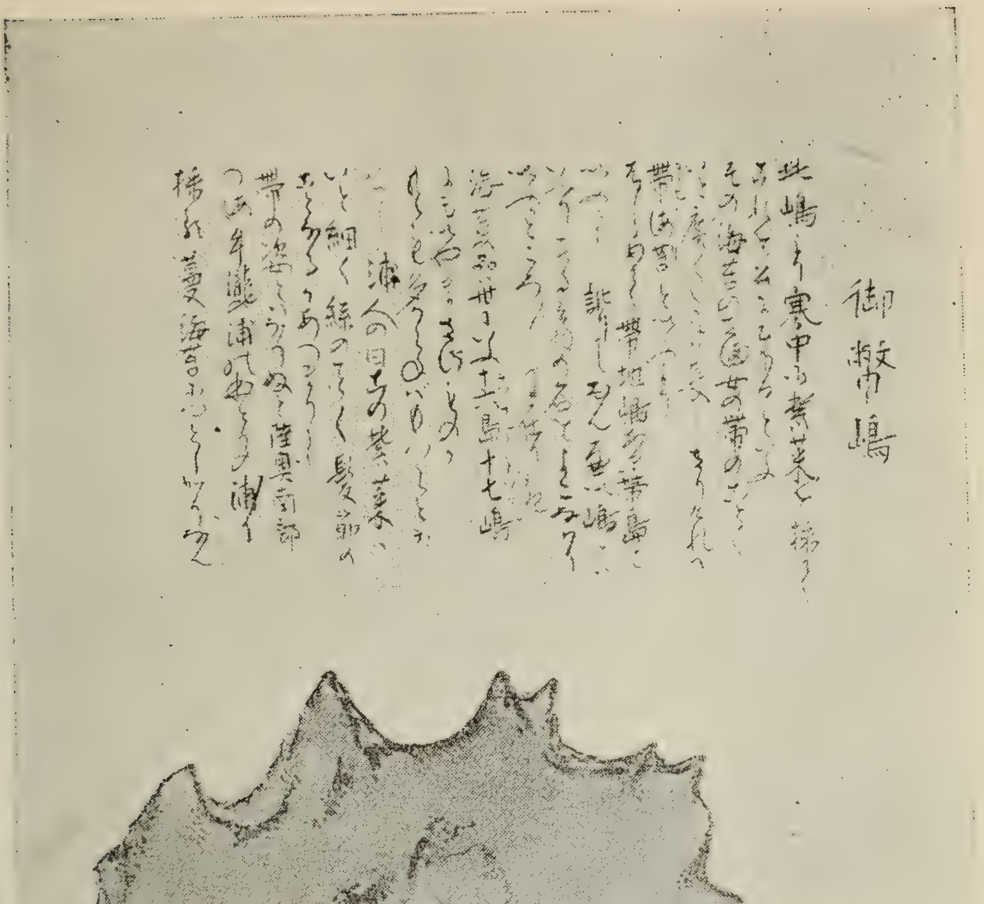





烏帽子嶋 或云冠島

牡鹿の嶋風



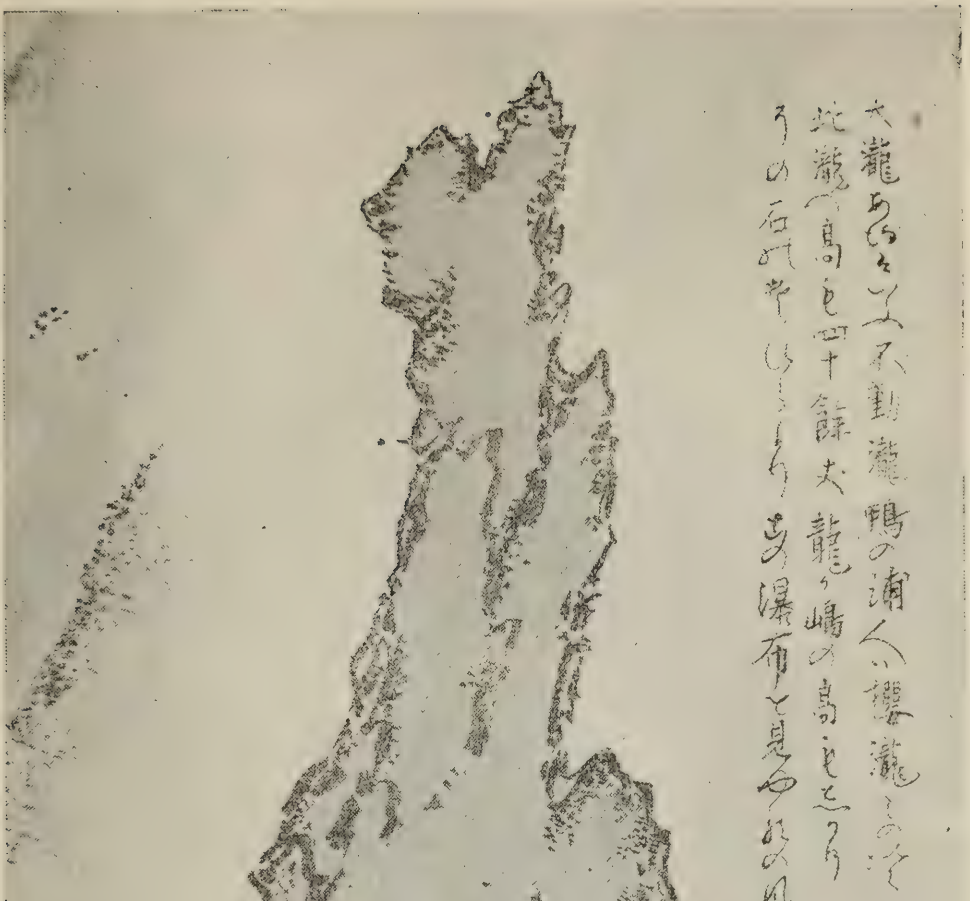

御幣嶋




加茂人龍藪か嶋といひ門前の浦人龍ヶ嶋とよぶ
其高四十餘丈

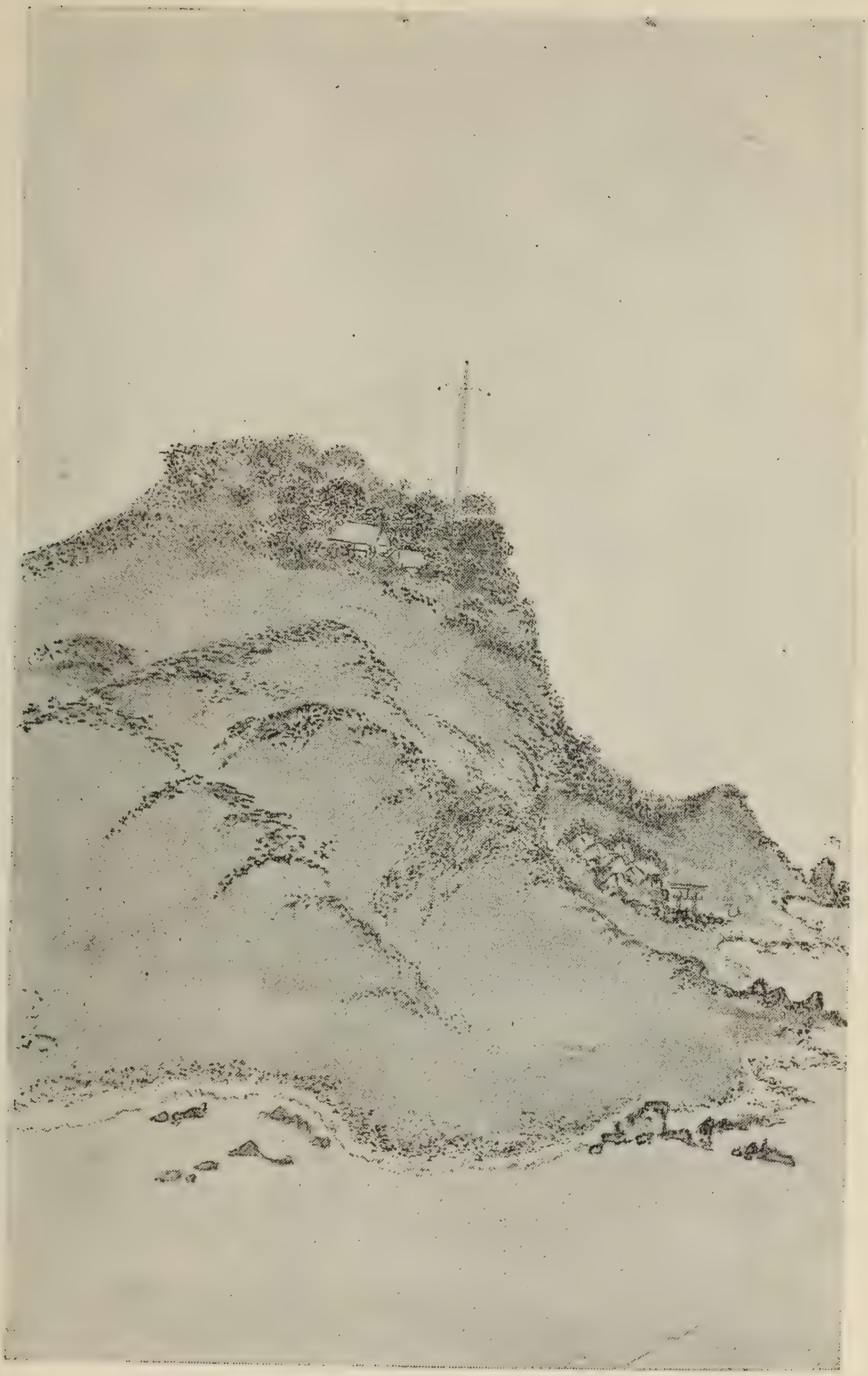


牡鹿の嶋風



牡鹿の嶋風







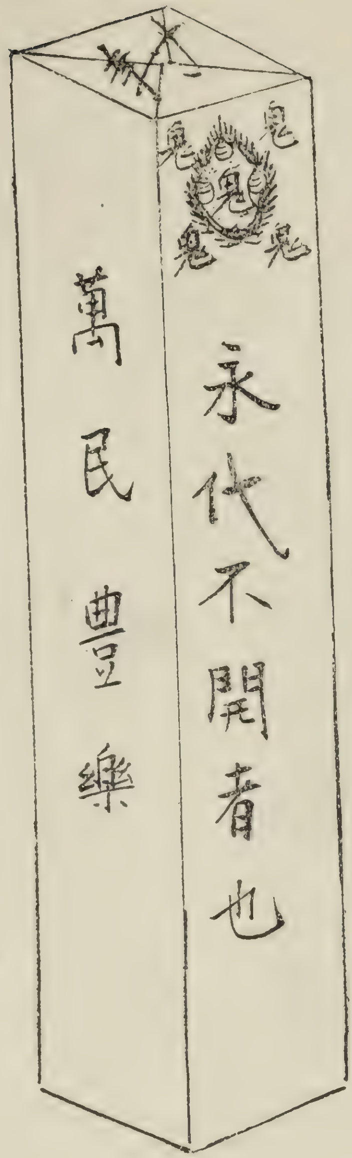





甲



不披之匱



不開の笥ハ泉光院の重寶貝なりしハその寺あれてのちハ此笥
今本山永禪院の本尊の前ニ居ゑて
左ニ万民豊樂 右ニ天下泰平 裏ニ年月その時世の住僧
の名を記し封し印しゝゆめひらく事あらし
あけなん鬼の祟ありしなど傳ふるものあれと言せり



蓮華臺の額ハ蓮池の面に
なりし斗仕掛雨下の如かりしが
食堂の軒に掲ぐ
赤神山及日積寺の額も同
筆跡なり阿仁の七倉山の天神宮
久保田の手よりなれる招福庵の觀音
の聯など南岳禪師の書多し

赤神山大權現緣起

それ以て、天地未分以前より道といふものあり。ある人のいはく、道とは何ぞや。いはく衆妙の門也。衆妙の門はいかん。いはく衆妙の理也、俗聞を以て言難し。淵たり滲たり、冥に現し無聲にきく。冥々の中に獨見曉なり。無聲の中に獨り聞和す。故深して亦深し、神にして亦神也。言玄珠也。于玆羽州秋田郡、金城の乾坤にあたりて大嶋あり。號て男鹿の嶋といふ。其嶋の禿兀たる絕頂に靈神あり、赤神山日積寺大權現と號し奉る。彼權現の由來をくわしく尋ね奉れば、前漢高祖皇帝より六代武帝と名附奉る。忝も威强叡德にして長生延命也。方士を遣し神仙をもとむ。親しく蹇を祠り、太一の叢祠を長安城の東南郊に立、太一とは天神貴きもの也。元鼎六年、春正月より夏五月に到るまで途に海上に東巡し、神仙を求て船を海上に浮め、周廻する事一萬八千里なり。群臣諫れども皈り給はす、東方朔帝を諫て皈り給ひぬ。大淸四年三月、帝泰山に幸して王母に會して、靈を求て仙を得たり。そもそも、我朝人王第十二代景行天皇と申奉るは、文武兩道に達し給ふ賢王にしておはします。御長一丈、御力量も世にたくひなし。第二の皇子をは日本武尊と名奉る。東夷征罰の爲に、草薙の劍を帶して東方に發して、終に東夷を退治し上洛のとき、伊吹大明神大蛇に化して路上

に横ふ。尊飛越給ひしとき、大蛇の鱗の劍にて尊の御足をやぶ〻。是によつて惱痛あり、駿河の國千本の松原にて薨給ふ。時御年三十歳。劍は尾張の國熱田に納る。則熱田の大明神と成り給ふ也。御魂は白鳥に乘て天にのほりて、漢朝に飛渡りて赤神權現を迎來り、小鹿の嶋に影向し御座す。人いまた是をしらす。時に景行帝、武内大臣を以て北陸道を察しけるに、宿禰、此山を窺ひ見るに武帝飛車に乘り、白鳥に駕し赤旗に車をかざり、五色の蝙蝠御車の左右の前後を圍繞す。五鬼を伴ひて嶺に御座す。宿禰皈り來りて此由を奏聞す。景行帝叡聞ましまして、則皇女をもつて妃に備ふ也。赤木大明神是也。始め行基菩薩、捨身菩薩、知安菩薩、手つから自ら造立供養し赤神大權現と號し奉る。漢朝は大德にして赤帝なるか故なり。山を名附て赤神山といふ。寺號は日積寺、本坊は永禪坊といふなり。五社は則赤神山本地藥師如來、赤木大明神は不動明王、眼光鬼は普賢菩薩、首人鬼は文珠師利菩薩、押領鬼は阿彌陀如來也。所謂五鬼とは眉間、逆頰は夫婦、眼光鬼、首人鬼、押領鬼は兄弟三子也。眉間、逆頰は死亡して得道す。三鬼は今に死せすして、男神か嶺、女神が岩屋、海邊の岩屋に住す。其後能閑大師、滿願聖人、十二神建立せられ、凡靈驗ならひなく利益きはまりなし。海上渡船の輩、陸地運行のやから、聊も無禮なす則は忽罸を蒙り、信心なるときは速に利生を得。神明不測妙德无量なり。人王五十代桓武天皇の御宇、延暦三年三月に、證道菩薩、赤

神權現を下野の國日光山へ勸請し奉る。同七年㝡澄和尚、叡山へうつし奉り根本中堂に安置せらる。叡山遷宮の趣意は、㝡澄和尚は三津氏にて、近江の國志賀郡にして誕生せらる。後漢の獻帝の後裔也。因爲則氏神、是を崇敬して叡山に勸請せらるゝと云云。あるとき權現の御託宣に曰、御身は叡山にましますといへとも、御心は小鹿の嶋鳥鼠が窟に在せりと云々。同二十三年㝡澄入唐、同廿四年皈朝、大同二年二月八日、秋田湖水一夜に涌出。亦託宣に曰、吾御手洗なりと。人王五十六代清和天皇御宇貞觀二年、圓仁和尚勅宣をうけたまはつて小鹿本山に下向し、知人聖人の髑髏をもつて、御長一寸二分の藥師如來の像を造立供養し、瑠璃の箱に入來り、石の寶藏に深く納て今の御殿に安置し奉る。いはやの口にて幣帛を捧て神樂を奏す、是によりて御幣帛嶋と號なり。其時權現、窟の中より出現ありて託宣曰、善哉善哉和尚、吾和光同塵の利物を顯し、靈神となつて扶桑國の內を守護べし。請和尚、秘密の神道を以て吾に附せよ。圓仁、則神道內傳の秘密を以て勸請し奉る。當山的々相承の大事也。同五年造營畢圓仁歸山。同六年正月十四日、叡山前唐院にて入滅。棺より飛出、東方に飛行して草鞋を東方に落す。其日そのとき、出羽の國最上郡立石寺にて入滅。同八年㝡澄に傳敎大師、ともに圓仁に慈覺大師の號を謚り給ひ、慈叡和尚、慈覺大師の的傳をついで、代々師々相承やまず。前に所謂道ありといふは、これ此謂也。㝡澄和尚は、天台大師五代の的

傳道遷和尙の受法なり。赤神山は慈覺大師をもつて初祖となし、慈叡大師を二祖となす。圓仁和尙は承和五年入唐、同十四年に皈朝。赤神山我朝に飛來の年數、景行天皇より正中二年迄凡一千二百二十九年也。人皇八十四代順德院の御宇、建保二年藥師堂造營。同四年、山主圓轉居住の時如來託宣曰、我昔同居の座に交りしより以來、緣を天台の佛法に結ひ、利生を圓頓止觀の嶺に照す。三世和光の影をあらはし、我山の鎭守となさん。よつて圓轉、相州鎌倉に到り、因幡守前司廣元をもつて武將實朝公に以聞せられ、同年七月廿三日杜立權與たり。悉く天台四明の洞を移し、一山三塔のかたちをあらはし、本尊は慈覺大師の御筆、山王七社權現の尊像たり。其外廿四社は、鎌倉の佛師靈雲の作也。是より、本山の佛法を分て日吉山延命寺无量壽院と號す、淸海大僧正をもつて別當職に任せらる。同五年二王堂再興、大檀那は安部咸季。後醍醐天皇元德三年多寶塔を建立、安倍高季これを勤。後圓融院永和元年大堂營復す、尾名河寂藏建立。同院應安五年、安倍高季五社を修復、舟越の賴季、觀音堂を建立して三十三躰の尊影を營し奉る。後奈良院天文十六年大堂修復、石塚治郎左衞門、安倍季滿是を勤。弘治元年十二月廿五日の夜永禪坊炎上、同三年女川基季大堂を修復す。正親町院元龜元年八月、圓堯法印拜殿を修復畢。於是管見前世□□(マヽ)權現の靈驗壽妙、凡扶桑國の內に於て可無爭威を、神其山岳海岸の絕景、大湖三萬里の佳景も亦及へからす。但恨らく

は貴介、公子、騒人、韵士品題せさる事、うへなるかな帝城をさることこ一萬里なり。不幸にして華擭廣庱、丹漆爋堊の美いたらさる事を、神それ意なけんか。天運修環、往として復らすといふことなし。神の徳、煕々としてあらはれすといふ事なし。其固陋をわすれて、萬か一をあくるものなり。

其詞曰

避震旦兮赴神州　祠王母兮得仙遊　廬而徳兮人焉庱

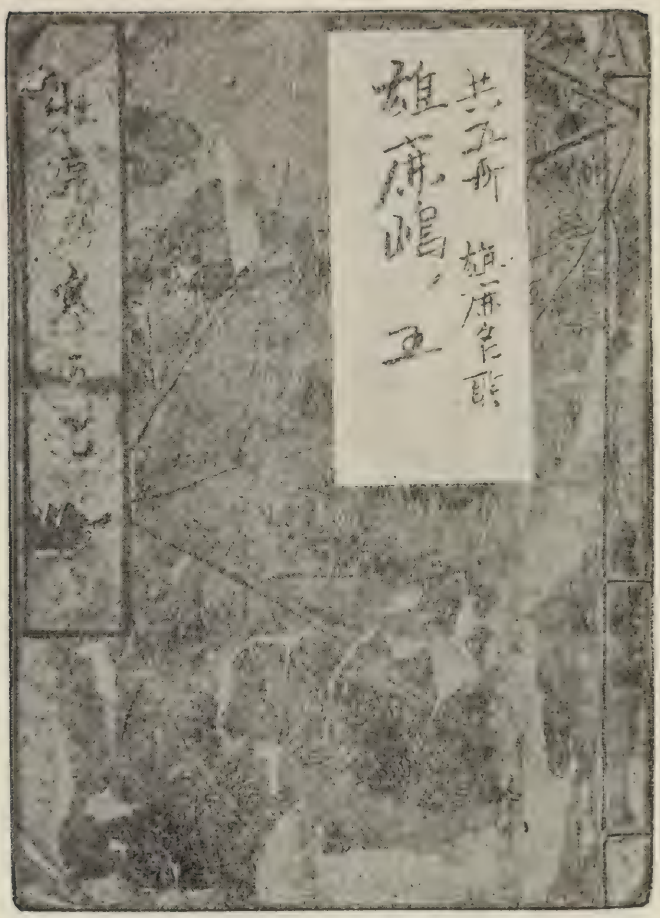
伴五鬼兮坐山丘　日積輝兮度幾秋。

縁起ノ年數、正中二年ヨリ享保十一丙午ノ年マテ凡一千六百二十九年也。

于時享保第十一丙午年初夏八日書之　吉重（花押）」

右の一巻は、すちく正しからぬところくの多かれと、そのとき世を、かゝなへ知りなんのたよりによけくおもふものから、こゝにのせつ。

牡鹿乃寒かぜ



齶田の恩荷の嶋山に赤縣神を齋ひ、漢武帝をまつり、また蘇武か屍を埋みしといふ處あり。元正天皇の御世養老のとしならむ、渤海の人、鐵利のくにうどなゝど、なべて一千百餘のもろこしの人、あが帝のあまねきみうつくしみを慕ひ來けるを、出羽國におけり。かれに衣糧をたまひて、その國に還したまふとなむ。それらが中に、遠祖としていたゝき祭り、骨もあばき來りしものか、漢武帝、又蘇武の髏どもゝこゝに作りけむ。此嶋に眉間逆頰なゝといふめをの鬼神ありて、黃龍、眼黃、首人といふ三はしらの鬼子を生り。眉間、逆面はかみざりて、三鬼のみ此島にすめりといへり。かの赤眼、黃口のふたつの鬼の大和の膽駒が嶽に在りて、鬼一、鬼次、鬼助、鬼虎、鬼彥の五鬼子をうめり。かくて釋迦箇嶽にうつりすむてふ。阿忙々前鬼唸唸、止吽鬱々後鬼律令伏」と唱ふるたぐひ、いはゆる前鬼、後鬼、あるはいふ五鬼なゝどのさまに似たり。鞍馬山の藍婆、總王、嵩樹が岳の萬字、錫杖、そのもろこしの度索山の鬼にもしか似たり。此事、おのれすでに云へり。此山の神に幣手酬るのをりしも、人々

の詠たる言の葉をも奉らまくおもふあまり、また、名あるところ〳〵をしるし、また、なにくれかにくれともれたるを拾ひ、春は雉子、秋は雄鹿の嬬戀山、冬は寒風の名におふ山路めぐりて、此一卷の名を「牡鹿の寒風」とはいふなり。

文化七とせといふとしの鐘禮零る月

菅江眞澄

門前村

椿の白崎

雄猪鼻

布美都企の十八日。この浦に、玉なす石のあるてふ人のいへれど、磯浪高ければ、拾ひ得ん事かたけん。つとめて、門前の村を馬にて出たちぬ。鹽端(しほぜ)の岬(さき)、琵琶の面(め)、小濱の浦回(は)なンどは、になう面白き處なから、七とせのむかし見しあたりなれば、つはらにはものせし。椿の浦に近つきて、雲たち起る姿せし、はたひろと高き巖あり。きはめて白し。名をさへは、「是は椿の白崎也。」といらへしかは、しはし馬とゝめさせて、

めつらしな秋もつはきのしら咲に波のしら玉かゝるあら磯。

増川の浦に來る。當殿の社といふに詣ぬ。この社のよしある事は、すてにいへれはうちはふきたり。雄猪鼻(をゐのはな)の崎にいたりて馬より下りつ。こゝに坐(おまし)ある、菅大臣の社にぬさとりむけぬ。細葉の海稲茂り、松杉の中に梅櫻のわくらはの、はつしほめけるこゝちせられてかみさひたり。

ひろ前にぬさと手向んうめさくら木末のいろを神のまに〳〵。

伊東なにかしのもとに來て七とせのむかし語りをし、事なしとて別たり。安藤たれとかやいふもとに中宿して、此脇本の後なる、田舍澤ちふ山路はるぐと瀧川の澤路を經つゝ、ふたゝひ山田村の十文字野良を行て鮎川につきたり。かくて、小林なにかしのもとに日を經て、

脇本より相川へ

廿三日。けふは眞山の地藏踊とて、老たる、わかき女ともあまたうちむれ、そこにまうてて踊せりとか。地藏堂建たるむかし、豆の粉めしてふものをして集ひ來し人にくれたりとて、こよひもそのことにして、大豆粉掬餉をしてくれけるをくふためしなり。その踊唄に、「新山本山て護摩たけば、ごまに七箸、油筋。」己れとそなたとかうなる事は、おもひうめ川、緣のはし。」此歌なからは唄へど、今し世の人とらは、またくは唄はざるよしを、老たる刀自の物語りぬ。染川は鮎川にして、相川の昔名也。

眞山地藏踊

葉月となりて、倒季子採りてんと溫泉山にいたりて、雨に日を經て、十五日の月を磯邊に見なんと出ありけば、小舟の渚にさしちかへ、こぎ渡るなと面白さいふへうもあらしかし。

月こよひ樂しと海士も見るめ刈る浪のうきふね夜るとしもなし。

更て宿に皈りく。

山に海に

地震

十七日。埜村といふ處に至るに、ひるつかた地震(なへ)大にふりたり。暮行ころ、又いさゝかのなへふりぬ。

十八日。けふもなへふるこゝちせり。鮎川にいたりてとへば、日毎になへのいさゝかはふらぬ日もなう、箱井の寺なる塔の、ふりこぼれしなと語る。

巨濤來るか

穗酒供へて

九月廿五日。涌本(わきもと)の浦なる菅大臣の祠に詣なん。夜經(よべ)より空のけしきことに、海濁り、星の光くもらはしう。寒風山は、うす霧たちこみたるやうに見ゆ。いはゆる巨濤(つなみ)の寄り來(こ)ん、あやうし、身におふほどのものは負ひつ、人にもほの語りあひて嶋田といふ處に來つゝ、相知りたる人の、一日二日はとゝまりてなとねもころに聞へて、夕つかた、烹粢(にしさぎ)といふもの、あるは、濁れるとよみきをかみして提につぎ入れて、それに稻穗一ふさをひたして、これなん穗酒といひて神に備ふるは、阿仁の山里にて、穗祭(かひほかひ)てふためしあるにひとしう、いにしへぶりもめつらしかりき。けふは刈揚の餅とて、家擧りて、ことしよねのもちなん喰ふめるためし也。

津浪を恐る

廿六日。つとめて風吹、空のうちくもりてこゝろならず。四方は、れいの鬼節(をにぶし)の鳴るてふことに仄に鳴りとよめきぬれば、いよゝ大濤(つなみ)の寄り來(こ)ん、脇本の浦にいなん空もなう、津浪あらば、此山陰の里に避けなんとて暮たり。

大地震に遭ひて

廿七日。あしたより、午未といふ風吹て空は晴れげ也。こゝなる瀧川のみなもとに、三ッの瀧とて、いとおもしろき瀑布あるてふ。そこの初しほもこゝろにかゝれば、よき日にいさなひいなんなど、宿のあるし目黒なにかしの語りぬ。かくて未のくたちならんか、地震の大に動りにふりて、軒、庇かたふき、人々外に逃まどひ泣叫ひ、やまうど、老人の手をとり、市籠の乳子を逆にかゝへ、うち倣れ、家にはかみしたる酒こほれ、瓶子、小鉢の棚より落まろひ、板割け、梁おつる音、たゝすめはふりたをれ、軒端の山のくづれ落るなど、命こゝに死なんと樹にすがり、竹の林にのがれて、やゝふりをさまれば、みな薗 堆の上に、戸板なとをしきわたし假舘作るに、又いくたひとしらすふりぬ。

廿八日。きのふのことに、日にいくたひといふ事なう、たゝふりにふり鳴りとよめきて夜もすから、めもあはて明たり。

死者も夥し

廿九日。尚ふり止事なし。人の來て語るを聞は、村はしの屋はこと〳〵に倣れふし、あるはかたふき、身もそこなひしなど。いかなる事にや、世はこひちの海とやならん。村〳〵は、殘りすくなうみなふしにふしたり。脇本、舟越なとの屋みなひし〳〵とふして、かゝるあたりを、前郷とて南の浦分てつよけん。北べの浦は、地震のふらぬかたありとか。中石、高屋、橋本、谷地、石神なと、ふりこぼれたりなとかたり、この村はわきて動りのつよからず、とこ

うとましき世ぞ

寒風の地質

救恤と供養

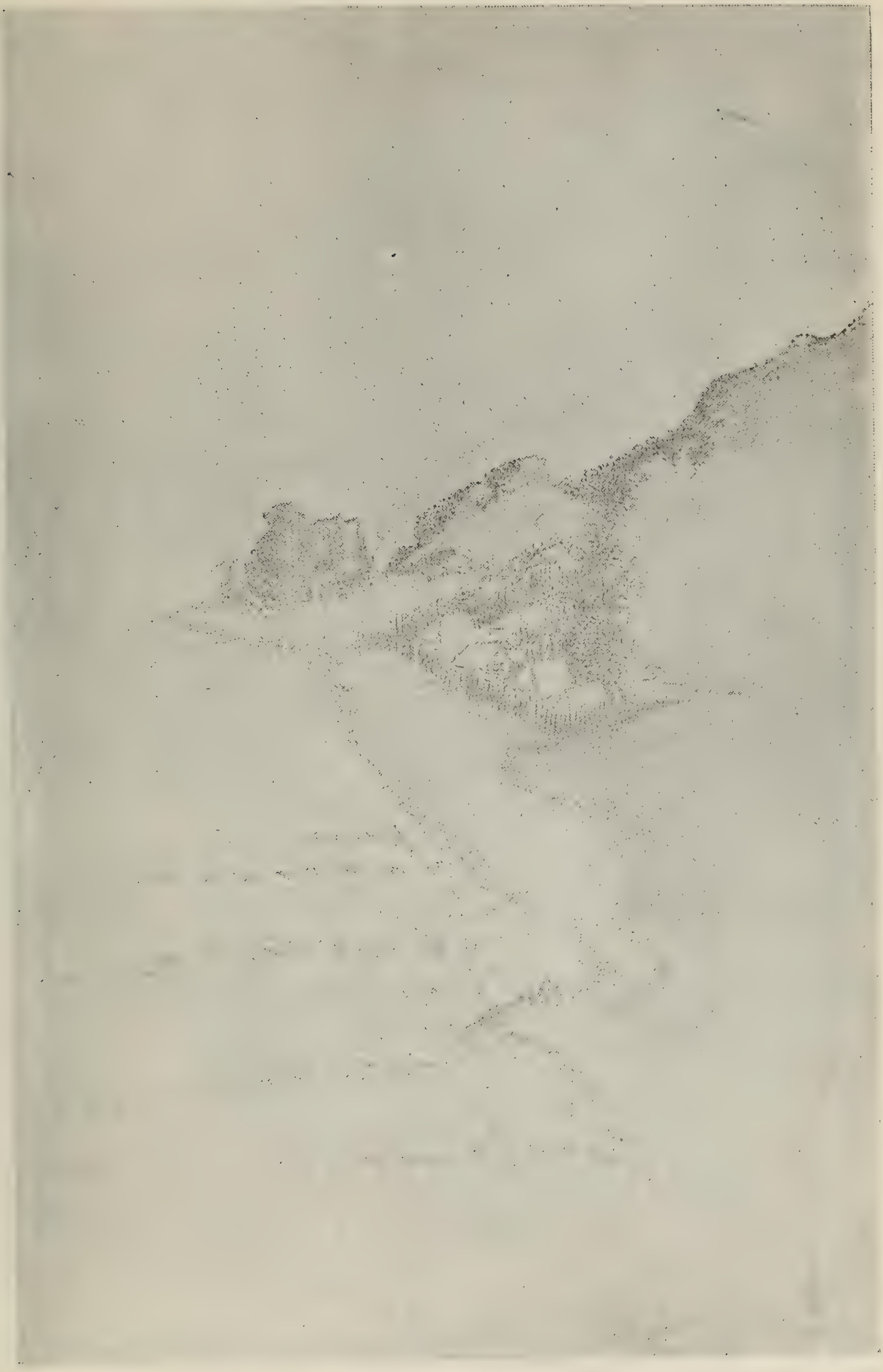
ろ〳〵にて死たる人の數しらす。からくして命いきたるも、あし手そこなひ、馬なとは腹さけ、四支折れて、死たるありさま見るにしのびず。なか〳〵の世のさはき也。傳へ聞、鴨の蓮胤のかいのこせる世のありさまを見るに、文暦の大地震おもひやられて、身の毛もいやだちて見るこゝちするに、出羽の國山本の郡、能代の浦の元祿七年甲戌の地震の事は、里黑の書ける日陰艸を見つゝ、氣も心も消へはつるおもひせしを、それにいやまさりて文化のはしめ六月のころほひ、鳥海の御嶽大に燃へくづれて、名だゝる象潟の浦もふり埋れ、潮越の家居たをれふし、人もあまたそこなひしなと聞つゝ、魂身にそはぬおもひせしを、こたひ目の前に、しかかゝるありさま、人のなけきを見る〳〵、世の中うとましきやうおほへたり。こは寒風は石山にして、その石きはめて青黑の色にして皂礬の氣あり。妙見山の溫泉も味ひ鹹く、綠礬すでに出て、舊溫泉の澤とも、みな青礬の色なる石多し。さりけれは、綠礬つちの中にむし涌なんとほりして、地のゆるぎふりたらんかし。寒風の塔の峯のあたりはつきしつみ、おちくほになりぬと見ゆ。妙見山の湯泉は止りて、笠矢の崎にいやましに涌づるなと人の語りき。なへていまたふりもをやまず、假館のみな栖居して田畠のわさもよそに、まち人は飢につかれぬるほどに、奈良なにがしといふもの米あまたをほどこし、公のおほんめくみすくなからずして、やゝかんな月にもなりぬれど、いまたなへのふりもをやまさりけり。寒

風の山脚（ふもと）に楚堵婆建て、地震に死たるもの〻なきたま祭りありき。

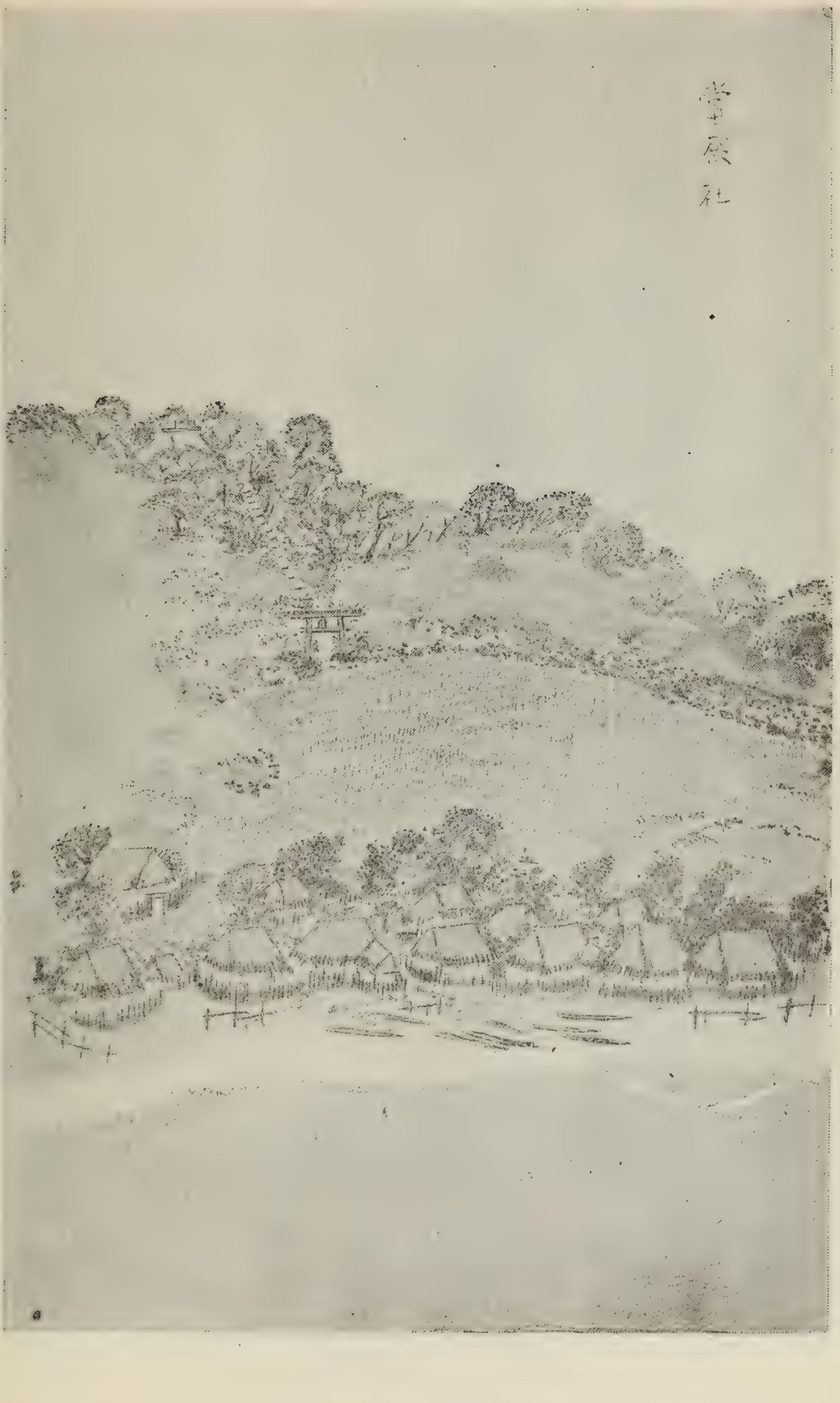








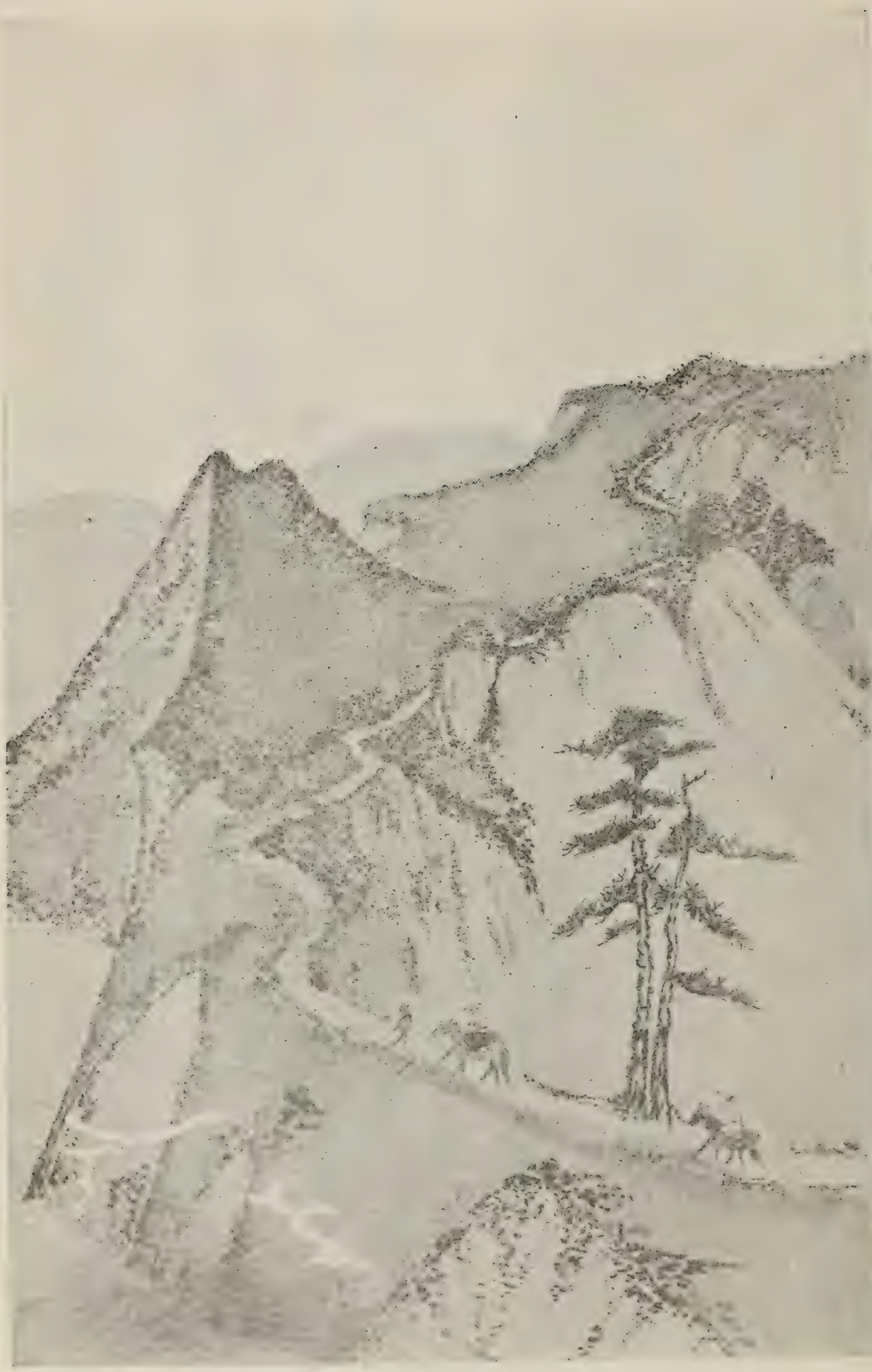



菅原社



牡鹿乃寒かぜ


湯本の浦
菅大臣の
社



牡鹿乃寒かぜ

四一

光飯寺大般若經來由

神無月のはしめ、安善寺村にふたゝひ至る。こゝに御嶽の神あり。圓仁大徳の作りたまふとて、あみたほとけ、觀音ほさち、地藏大士をひめおける堂あり。これを三岳の神とて、赤神山のかひよりこゝにうつせりといふ。照日（てるひ）の神といふ祠の、大杉のもとに在り。皇太神をうつし齋ひ奉るとなん。雷の祉あり。涌出山の鬼平（むけ）たまひてんと、阪上將軍田村麿の、駒つなきたまひしといふ松なんありき。此木を祖神と祭（いは）ひ、馬の神と齋（まつ）りて鳥居たてり。そのいにしへの松にや、いと大きやかにして、四とせ五とせのこなたは、このれかれ〳〵になりぬと。こゝにむかし、安善寺ちふ天台の寺とものありたりしよし。ふるき五倫石なとの、ところ〳〵にまろひあるちふ。こよひは、眞壁なにかしのもとにとふらひて宿つきぬ。あるし、とうだして見せられけるは、眞山光飯寺の大般若經の來由也。そのゆゑは、光明皇后の御眞翰とて、此一卷、紺紙に金泥をもて二百三十三の卷殘れり。これや、安倍愛季の寄せたまふかあり。敎應法印大般若經を書奉らんとほりし、はた、武藏の國のそみかくだ戒淳法印、九十六卷やゝかきつめり。潜龍法印、これにかきつきなんのこゝろさしありしかと、いとはや遷化（みまかれり）となん。以春法印の世に、畠山利右衛門といふ人すけして、法の名を戒蓮といふ。この法師、こゝらの人に進めて大般若經またくなれり。そのよしなん、山本の郡常盤といふ處より來るくすし梅翁、家出（いゑで）して名を禪入といふか記して殘れるを見つゝ、つはらには

三森村目黒氏　白魚と鰰　鮪川の瀧頭　谷地中村　洞昌寺俊山

しりき。手などもつたなからず、よしあるさまにかいなせり。

六日。三森(みつもり)といふ村にいたりて、目黒なにかしのもとに來宿(きやど)る。もとは井上氏にして、上祖(とかつおや)は、淡海公よりはしめて藤原をたうはりし家にて、かの江戸彦五郎清房たり。慶長十年にかいあらためつゐ家牒の尙ありき。こや延文のころほひ、新田義興の君を多摩川にしつめ奉りたりし、江戸遠江守なとの末の孫(こ)にてや。いかゝあらんかし。

九日。琴の湖(うみ)の麪條魚(しろを)いと多けれは、北の浦の神魚(はたはた)いまやあらんといふ。うべも、北の浦、相川の濱に網曳せり。「船越の馬手(まて)のしろいをあるならば北の鰰あるが定(じやう)た。」と、唄ふひとふしもおかし。

廿五日。ふたゝひ澁川今云鮪川の瀧の頭ちふ處見に至る。事は「雄鹿の金風(あきかせ)」にもしるしたれど、こたひの地震(なへ)のさはぎに、水のいと多く涌きまさりてあやしかりき。此水にしたがひて、谷地中(やちなか)の浦に出たり。

廿八日。四方の空うちしぐるゝに、中石(ちうし)てふ村のひんかしなる、岡獅子といふ小山あり。此あたりの人地震(なへ)に怖て、この山に、みなかり宿(や)作りて避れたりといへり。その麓(のか)に在る清宗山洞昌寺のあるし、俊山法樹のもとをとてとふらへは、こたひ此寺もなへにふりこぼされて、砌に、さゝやかなる假庵作りてこれにすめり。師は、たはやきぶりのたかうたをながめ

て、その名を東湖となんいへり。うちもの語りて小夜更行ころ、又時雨音せり。

時雨ふる庵にふし柴折りたきてこゝろあるしとかたるたのしさ。

うち笑みて、あるし東湖。

しくるゝや見よ無一物艸の庵。

となん聞へたまふを聞つゝ、

揚る拳に薫る山茶花。

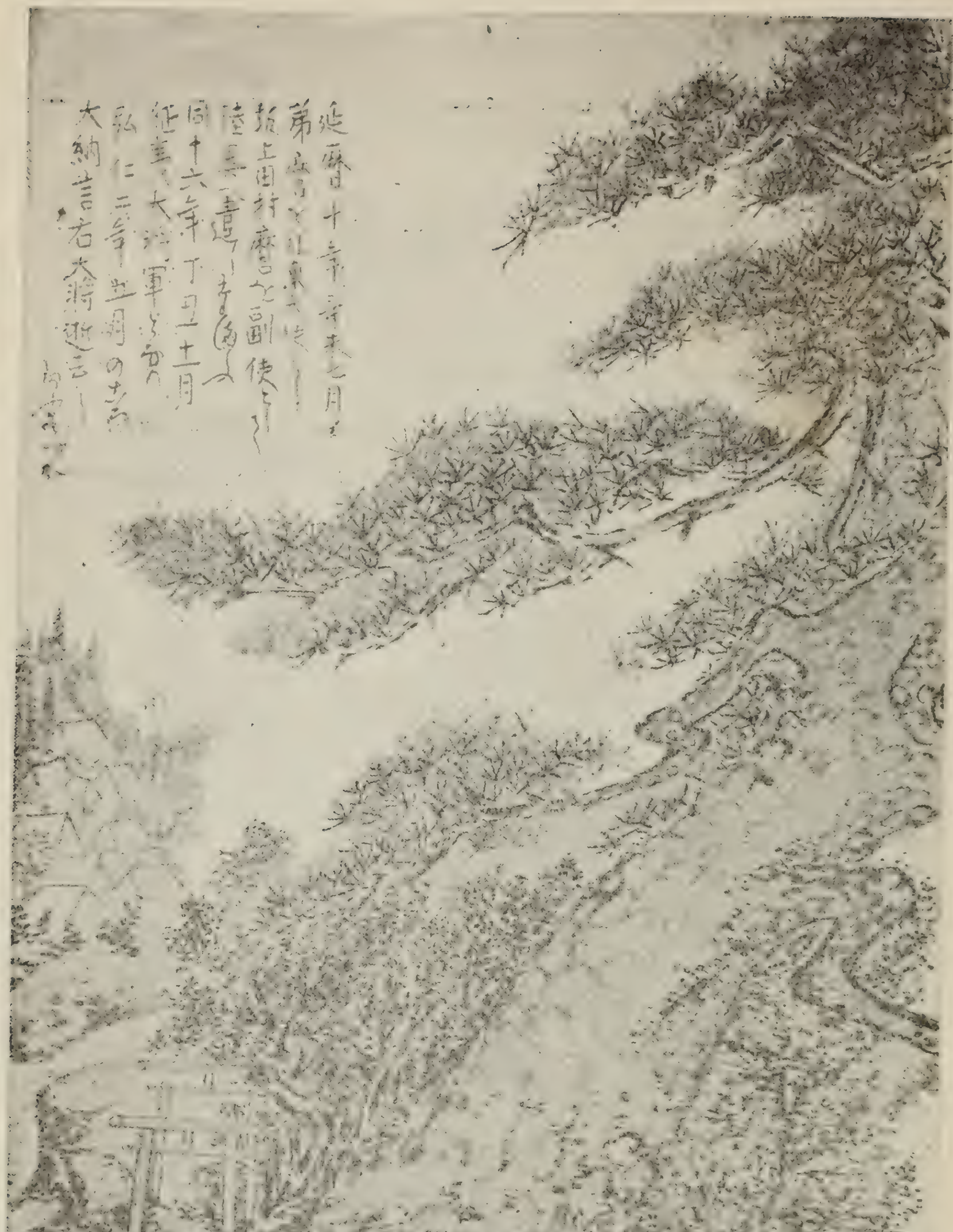
しか和句せり。

あるしの曰、この洞昌寺は、松木澤村なる日向山永源寺の五世徳巖石牛和尚の、寛永五年に開きてける閑居寺也けり。此寺の六代にあたりて洞海本牛和上といふあり。（天註　閑居寺の住僧を一世二世と唱へす、代なもてかぞふとなん。本つ寺とおなしからさるよしな示すとなん。）十六のとしより此寺に在りき。敢て世に出なん事を進まて、八十と身は老ぬるまて黒衣を着けり。あるとし、永源寺和尚、こと里に行けり。福米澤村なる清八といふもの身まかれり。永源和尚にかはりて本牛これを導けり。まつ塵麈をさりけるをりしも、龕の中に音して割て飛ものあり。さゝやかなる龍の形也。たなうらばかりの雲の大空に在りしかは、それに昇りうつりて、空かきくらかりてやかて晴れたり。人龍とて、人の身にも龍は潜みありけるものかとなん。又云、松原村の補陀寺より鹿之丈村なる

長慶庵に閑居しける眠道老和尚、浦田村なる宗泉寺に栖めりしころ、此本牛、つねに示しをうけて當機せり。いさゝか名分利養の心さらになうして、大乘修行の人と見得たりと。かゝるものかたりに、夜は更に更たり。


道祖神乃松ハ陸奥伊達郡

牡鹿乃寒かぜ







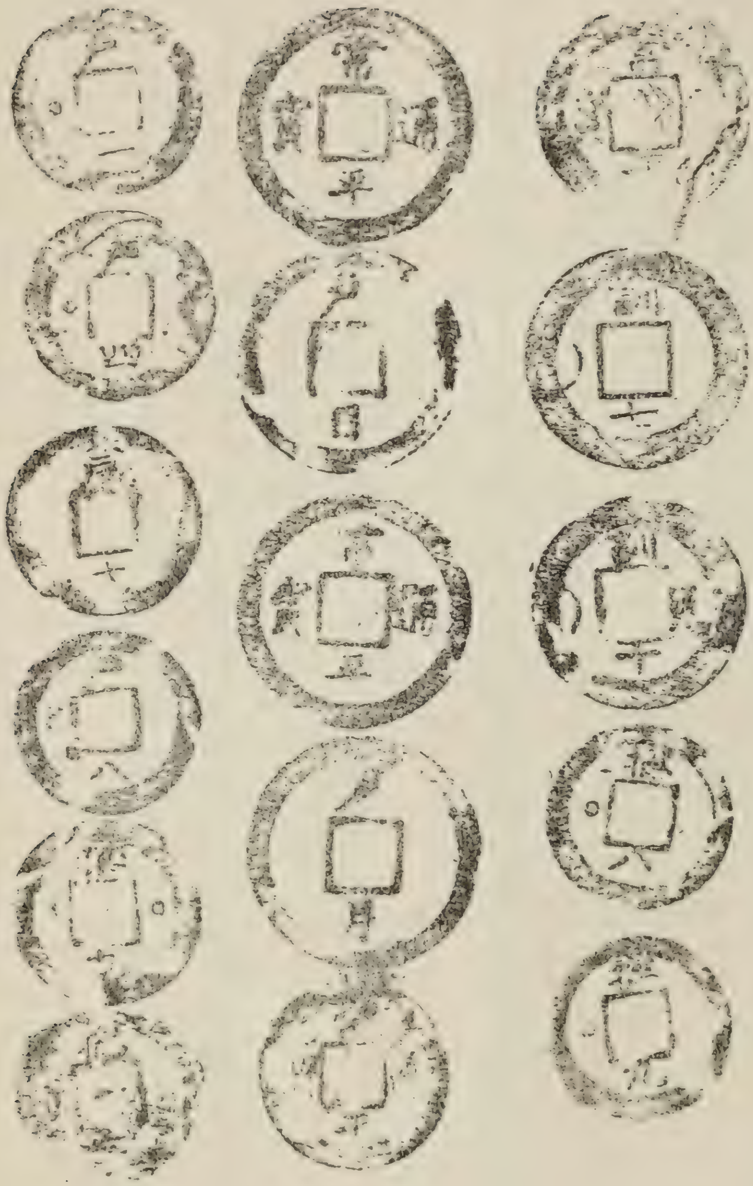




賀都著烏地王とて水蓬（カツミ）の菰で
りて琴の浦ハ瀧湖といへる人の作りにて
みな月ばかし暑きをもしのぎ蚊蠅の
まつはるを追ひやる名を
土サ新（ドカス）おこしとせり、ある舟に
擯榔葉とりて團扇として
ようせるに似たり



これのむかし雄鹿の浦に破れたる小舟のそこより古銭のうちより
常平通寶いとく多くつまれり此泉朝鮮通用の銭なれ
その國の舟なるや



文化八年正月

親神を祭る

嬬丐山のこちなる、琴の湖水と潮海との中なる浦回、美夜差波ちふ泉郎の屋戸に雪のふるさしを經て、文化八といふとしのはしめ辛未とかぞふ。さらぬたにいや高き雪の上に、今はた、みさかはかりもふりそへて、うへも、豐としのくにつものゝすがたをうらとひつ。太雪ふる鹿倉といふ岡邊に、なへて世にいふ鹽竈櫻のいと多く園なすあたりを、寒泉篙澤ちふ水の流れ出るを、畠山なにかしのやかのくまにひき入れて、さはかりの寒さにつゆも氷居ぬ樋のもとに、わか水掬ひとるをむすひわけて、ふみてのうみにかいなかして、

試る筆も硯のことふきもいやとしなかきはしめ也けり。

水湖の氷居ぬかたに、くゝゐあまたうち群れてさはに鳴たつなと、しかすかに長閑きこゝちこそせられたる。

松風の聲かあらぬか琴の海の春をしらふる雪のしら鳥。

雪はいよゝ、こほすかことにふりぬ。

二日。うからやから寄り集ひて、筯さし束ねたる神靈の飯に、蘿蔔、滑藻なととりくして箕のちに入れて、梁高うさゝけたるをとりおろし、佛の前に、祝瓶にこざけを日毎につぎれ手酬て、親神とて、あか親のなきたまをよはふ。宇賀の餅を岡の餅と唱へ、あるは岡戎なともいふめり。あか栖む島の名になすらへて、雄鹿のもちともいはゝいひてん。れいの履形

三熊野宮

男女風俗

油餅の神事

赤城社の箭拔の餅

めけるを、もの丶かけにたいまつる。外は行かふみちもなみ、いやたか雪の中に埋れ殘る神垣に、あらたなるしりくへ繩の見へたるは、

　　ふり埋む雪のうちとのみしめ繩なひくや春のはしめなるらん。

ちかとなりなる、福米澤ちふ村のみつ籬の內に、三熊野の神を齋りて、とし舊りしみやところ也。そこに朔日の旦より採燈をたいて、夜深く、油麻餅を投るの優婆塞の行ひありつ。

三日。去年よりいやふる雪もや丶晴れて、襯袍に袴着たる男、小布たのごひ、あるは吉莫ちふもの冠りたる女も入り集ひ、老たる刀自は、比呂ちふものに身にふる雪を包み、寒さをしのき、雪ふみしたきありく。こよひの亥のときはかり本山、眞山の兩の寺に、あぶらもちのためしとて、三升の米を一まろけの餅とし、柴燈堂にてひめたるのりの行ひをし、その餅をなかくぼにして油をつぎれ、とうしみ、かうよりのたくひを束ね入れて、これに火を放ちかけてめら〳〵と鳴るとき、窻より外に餅を投て法螺を吹立、鐘を鳴らし、板敷、板戶をうち叩て、こ丶らの人、やと聲をあげて叫ぶとき、鬼の來て此油餅をくとなんといへり。餢飳ちふものにたくふにや。しか赤神のためしなれと、むかしは赤城の明神をしか祭りしといふ。今も赤城の社倚在る也。おもふに、下毛の國黑髮山の麓なる神ン御社は、二荒山の神と祭るもとつかんみやところにして、睦月の四日ごとに、武射祭ちふ事のあるよしをいへり。此日

神主、みやつこ集りて、弓をひきまかなひて、箭をかんつけの國にむかひ居てはなつ。その矢の、赤城のあかつかみのかんほぐらの扉に射立つ。そこのくにうご、神ぬしら、みな赤木の社にいたりて祝ひして、箭抜の餅といふを奉りて此矢を抜く事となん。しか、雄鹿の嶋山(しまやま)に赤木の神をうつし齋ひて、かんつけの神社にひとし。其神垣にしてその行ひのありけるは、三日と四日との日こそかはれ、矢抜の餅のかんわさにやゝ似たり。

四日。あした晴れたり。午の貝吹ころ、なへの大にふりたり。

味噌粥

七日。鵠不登樹(たらのき)の芽(もゑ)、海羅(ふくろのり)なとつみ入れて、酥醑粥(みそがゆ)の餅そくふめるけふのためしなりけり。

十一日。いまたくらきにおき出て、若餅舂く杵の音、餅うち叩く手のほうし枕かみにひゞき、はた、あまたの聲して薺擣つ音のとよみわたりて、やかもゆるくはかり。やはら夜もしらくとなれば、錢緡を糾ひ、艤曳の緒といふものをねりなひて、船の具ともをとゝのへて

舟靈祭

綿津海の神にそなへ、祝瓶を奉る。けふを十一日の祝ちふ事は、舟靈(ふなたま)祭にして、泉郎の家とてあるしせぬはなし。

繭玉の餅

十三日。巳のひとつはかり餅つき、れいの璽纏(まゆたま)の餅を柳の絲にさしつらぬいて、まゆにいまたこもれる柳の姿を見るにひとしう、いつもおなし。

十四日。つとめて又餅つきて、人々を祝ふのためしぞありける。雪はきのふよりふりまさ

れり。

十五日の祝

十五日。門の柱に、柳、小松をひとつに高うゆひあげ、多羅の木を割てそれに十二月かいて、家のくま、雪垣なとにひしく〳〵とさしたり。汁種は搗豆、蕨也。杯を人々の前にならべて、さかなは鰰、雷子、あへもの、しほかき鰯、小鰕の鮓、はたかんなぎのすし、鮒膾なとくさ〳〵のもの也。

生身剝

夕くれふかう、灯火とりて爐のもとに圓居してけるをりしも、角高く、丹塗の假面に、海菅といふものを黒く染なして髪とふり亂し、肩蓑といふものを着て、何の入りたらんかから〳〵と鳴る箱ひとつをおひ、手に小刀を持て、あといひてゆくりなう入り來るを、すはや生身剝よとて、童は聲もたてず人にすがり、ものゝ陰ににげかくろふ。これに餅とらせて、あなおかな、泣ななとおとしぬ。

白粥

十六日。つとめて白粥をくらふためし也。去年より酷子とて、ひしひしほのことききものを作りて、是をあふり餅につけて、家毎にぞくふめる。

灸初め

二十日。このあしたには、陶皿をふせて艾をつかねおきて、灸そめとて、あるとある人の頭に是をのせて、あなあつなと戲もありき。

春氣動く

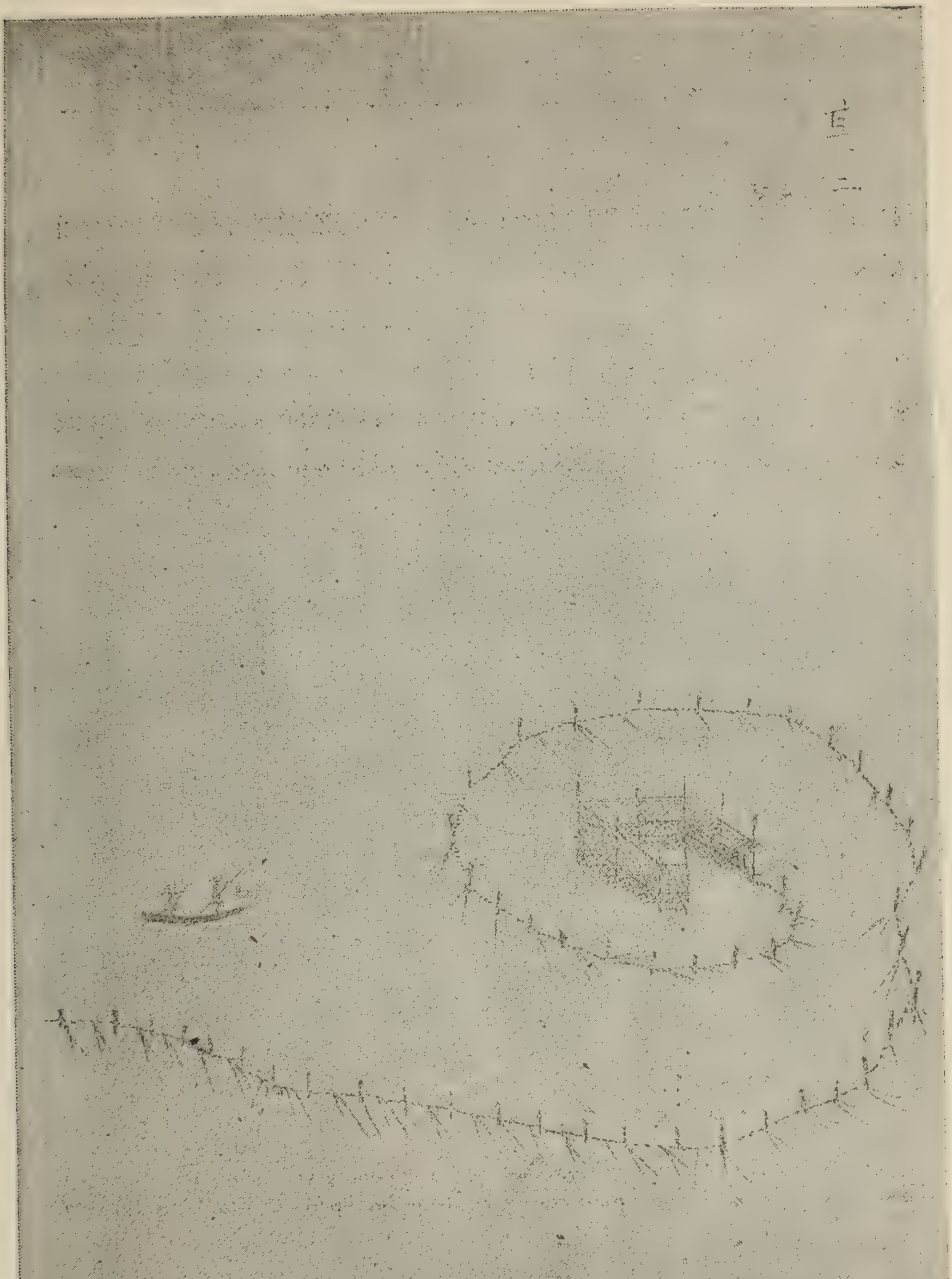
廿四日。夜經より大雪のふりて、湖の面は、氷潜網のひかれじとて行人なけん。更て、犬のなかやかに吼るを矩母加祁留といひ、はた猫のねう〳〵と鳴きもをやまねは、はや猫のをた

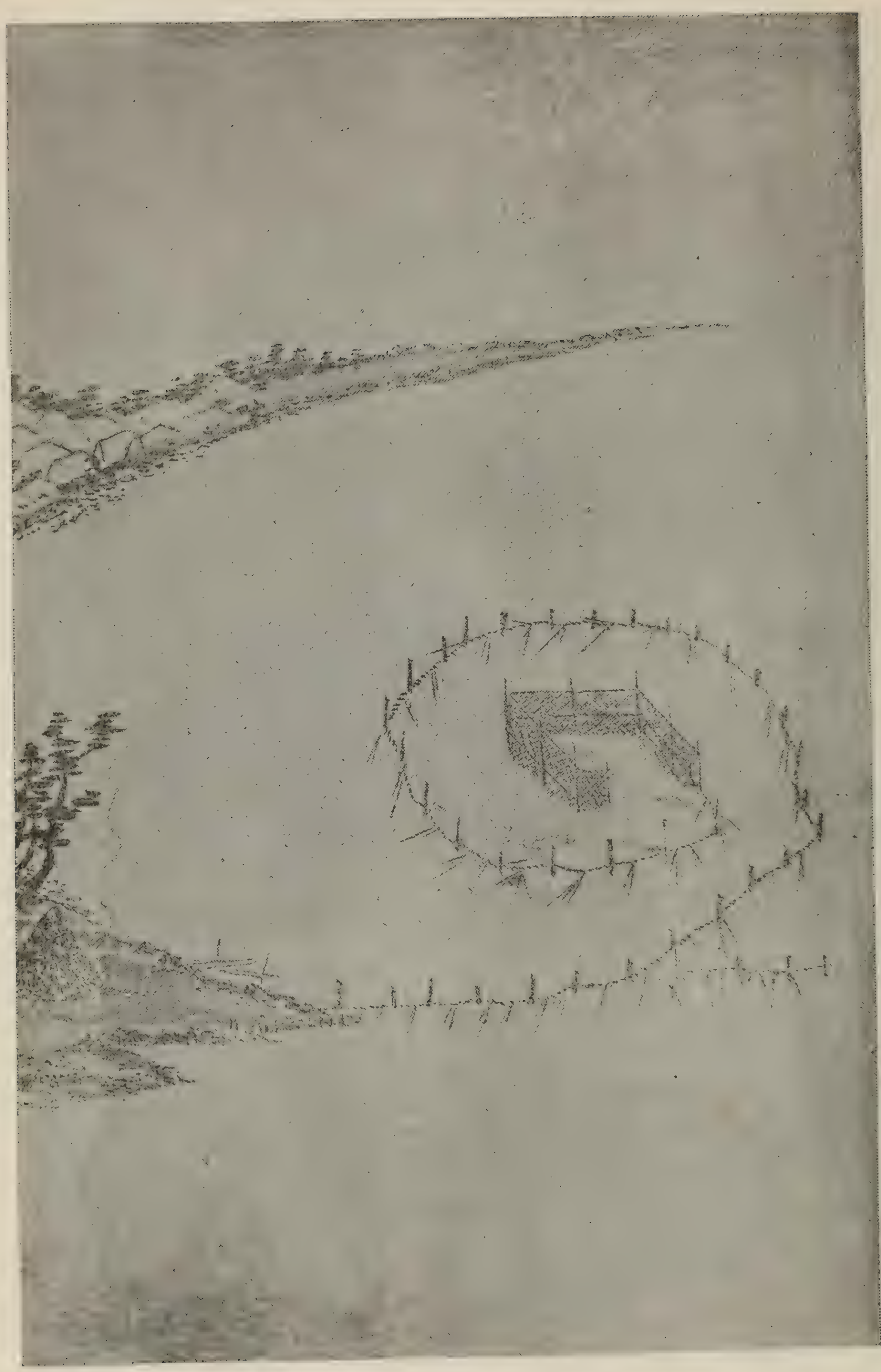
けせり、春にはなりぬ、なといへり。きさらきの朔。きのふに春たる餅ともを神にそなへ、佛に手向、牛王寶印、やまふをのそくの札ともを集ておしに押たり。いさゝか雨のふりたるに、「雪和新雨落風帶舊寒來」といふこゝろを、

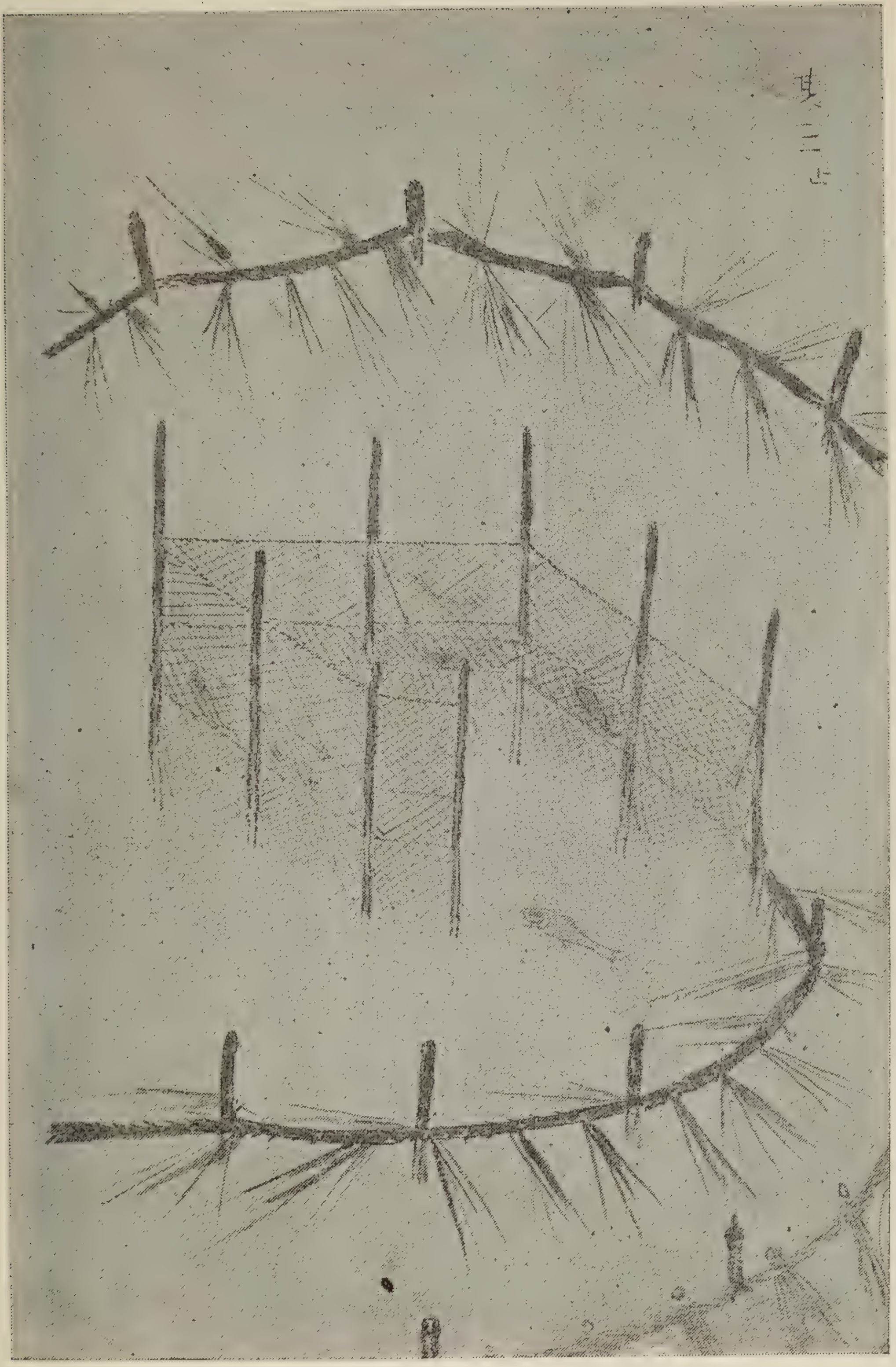
春雨に軒はは雪の解なから又風冴へてむすふ糸水。

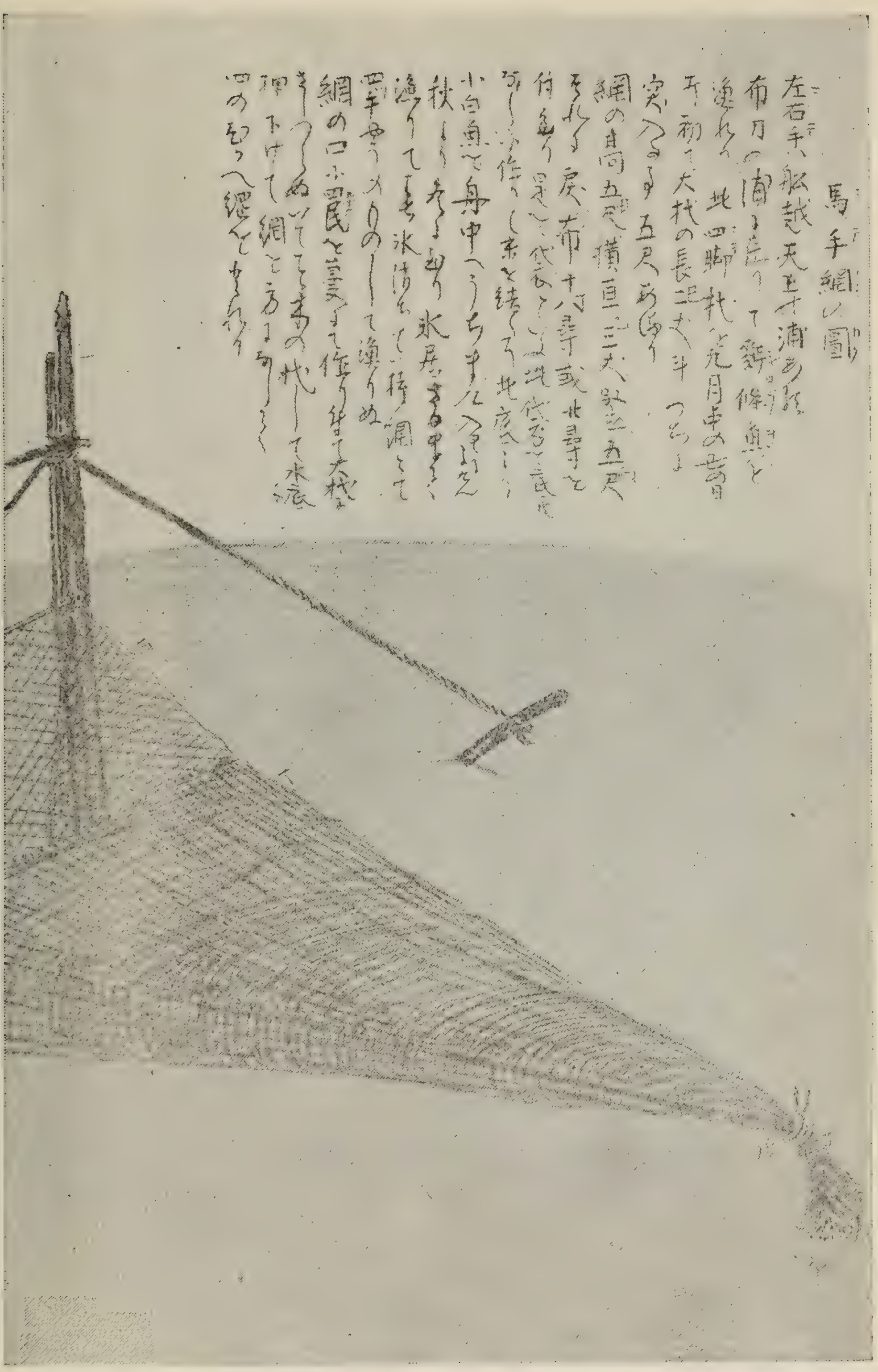
又雪の零り來ていや寒し。人のいふ、諺に二月の釣子落し、三月の梁守とて、薪のつきはつるまで空寒く、だをのすねきりとて、雪のなからはとけて朱鷺の來るころも雪ふり、鷹の目隱しとて、雁の皈るころも雪はいやふるものにこそあなれと。

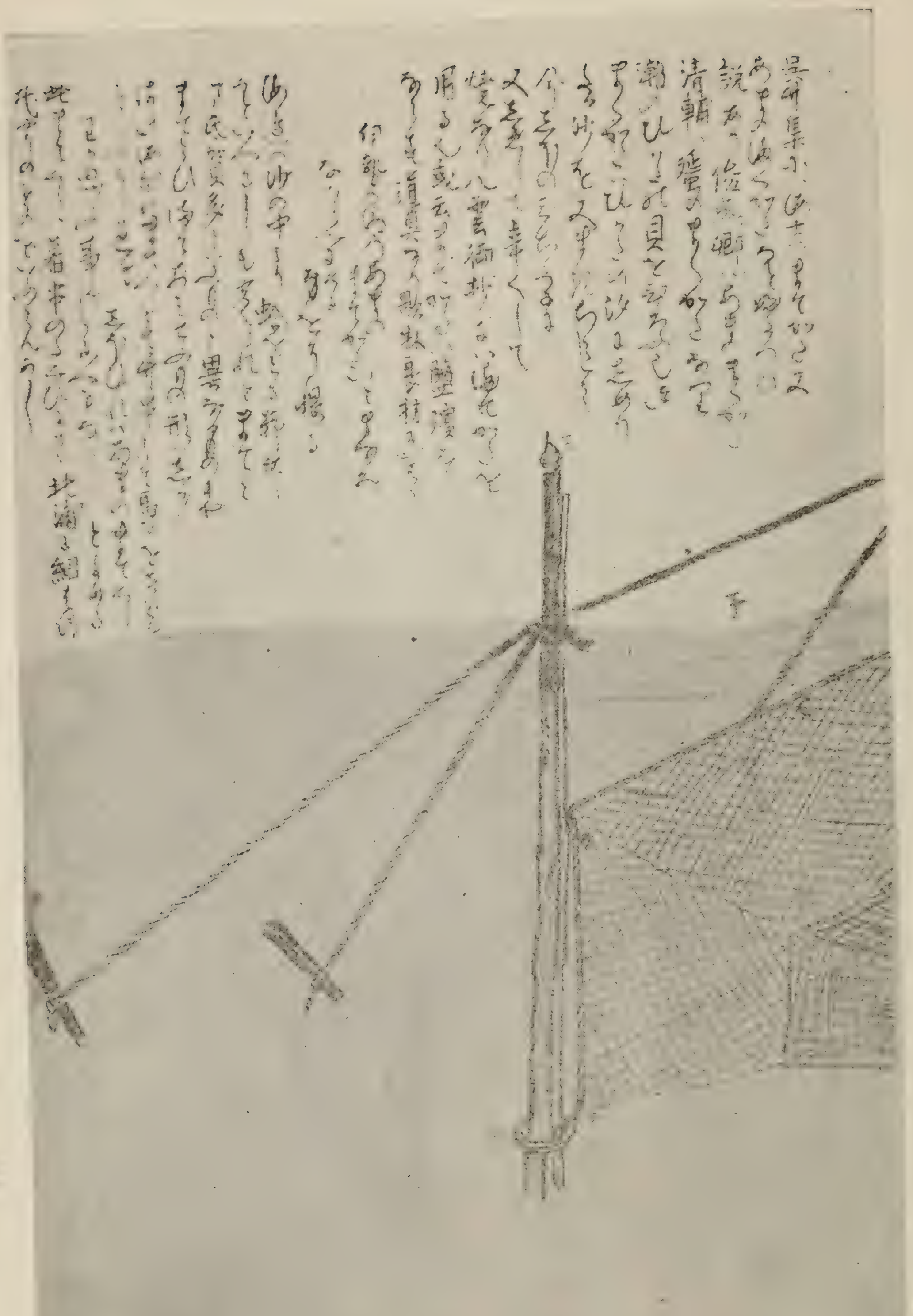









馬手網の圖



昭和五年七月五日印刷
昭和五年七月十日發行

秋田叢書別集 菅江眞澄集第一

不許複製（非賣品）

編纂兼發行人 秋田叢書刊行會
代表者 深澤多市

印刷者 甲田藤太郎
東京市麴町區紀尾井町三番地

印刷所 東京印刷株式會社麴町出張所
東京市麴町區紀尾井町三番地

發行所 秋田縣横手町
秋田叢書刊行會
代表者 深澤多市
振替仙臺八二五二番